香川県農業試験場移転事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

西末則遺跡Ⅱ

2007.3

香川県教育委員会

香川県農業試験場移転事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

西末則遺跡Ⅱ

2007.3

香川県教育委員会

序　　文

香川県綾歌郡綾川町に所在する西末則遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての大規模な集落遺跡であり、県農業試験場の移転に伴い、平成13年度より平成17年度まで４年半をかけて発掘調査を実施いたしました。

このたび刊行いたしますのは、この西末則遺跡の中でも最も西側に位置するｆ地区についてであります。

発掘調査の結果、弥生時代後期の自然河川のほか、古代末期から中世前半にかけての大規模な集落跡が見つかりました。特に方形の溝状遺構で囲まれた小規模な掘立柱建物跡は村落内祭祀を行う祠であったと考えられ、また、集落内を流れる溝状遺構から出土した須恵器の椀に「九字」の線刻が認められ、呪(まじな)いによって災厄からの忌避を行っていたこともわかりました。そのほかにも井戸跡からは保存状態のよい井戸枠や曲物が出土し、多くの成果を上げることができました。

本報告書が綾川町の歴史および香川県の古代・中世史を研究するための資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係諸機関並びに地元関係各位に多大なご援助とご協力を頂きました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成19年３月

香川県埋蔵文化財センター

所長　　渡　部　明　夫

例　　言

1．本報告書は、香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊で香川県綾歌郡綾川町山田下（旧綾上町）ならびに北（旧綾南町）に所在する西末則遺跡（にしすえのりいせき）Ⅱの報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、平成15年度以前は財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、平成16年度以降は香川県埋蔵文化財センターがそれぞれ、調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、北側のＩ地区を平成15年８月１日から11月30日まで、南側のＫ地区を平成16年４月１日から５月31日、12月１日から平成18年３月31日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

平成15年度　北山健一郎　柏　徹哉（現高松市立木太小学校）　武井　美和
平成16年度　北山健一郎　佐々木和裕　武井　美和

4．調査にあたって、下記の諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県農林水産部農業経営課　中讃土地改良事務所　綾川町経済課　国立歴史民俗博物館
地元自治会　地元水利組合

5．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は北山が担当した。

6．報告書の作成にあたっては、国立歴史民族博物館平川南氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

7．本報告書で用いる方位の北は、世界測地系に基づくものであり、標高はＴ.Ｐを基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。

SA　柵　列　　SB　礎石及び掘立柱建物跡　　SD　溝状遺構　　SE　井戸跡
SK　土　坑　　SP　柱穴跡　　ST　墓　　SR　自然河川
SX　その他の遺構および不明遺構

8．報告遺構名は整理区画と遺構の種類により、「01」から始まる通し番号により再整理を行った。さらに、整理区画を明確にするために、遺構名中に整理区画記号の「ｆ」を記入した。（例：SBf01）

9．挿図の一部に国土地理院発行の１/25,000　地形図『高松北部』『高松南部』を使用した。

本 文 目 次

第1章　調査の経緯

整理作業の経過と体制 …… 1

第2章　調査の成果

第1節　調査・整理の方法と経過 …… 7

第2節　基本土層序 …… 7

第3節　柵列跡・建物跡・柱穴跡 …… 17

第4節　土坑 …… 57

第5節　井戸跡・墓跡 …… 87

第6節　溝状遺構・自然河川・その他の遺構 …… 109

第7節　包含層出土遺物 …… 128

第3章　まとめ

西末則遺跡f地区の変遷 …… 131

挿　図　目　次

第１図　グリッド割図 …… 4
第２図　年度別地区割図 …… 5
第３図　調査区割図 …… 6
第４図　遺跡位置図 …… 7
第５図　Ⅰ地区北壁土層断面図(1/2) …… 8
第６図　Ⅰ地区北壁土層断面図(2/2) …… 9
第７図　Ⅰ地区南壁土層断面図(1/2) …… 10
第８図　Ⅰ地区南壁土層断面図(2/2) …… 11
第９図　Ⅰ地区西壁土層断面図 …… 12
第10図　Ｋ地区北壁土層断面図(1/2) …… 13
第11図　Ｋ地区北壁土層断面図(2/2) …… 14
第12図　Ｋ地区西側部分南壁土層断面図 …… 15
第13図　Ｋ地区西壁土層断面図 …… 16
第14図　SBf01平・断面図 …… 17
第15図　SBf02平・断面図 …… 18
第16図　SBf02出土遺物実測図 …… 18
第17図　SBf03平・断面図 …… 18
第18図　SBf04平・断面図 …… 19
第19図　SBf04出土遺物実測図 …… 19
第20図　SBf05平・断面図 …… 19
第21図　SBf05出土遺物実測図 …… 20
第22図　SBf06平・断面図 …… 20
第23図　SBf06出土遺物実測図 …… 20
第24図　SBf07平・断面図 …… 20
第25図　SBf07出土遺物実測図 …… 21
第26図　SBf08平・断面図 …… 21
第27図　SBf08出土遺物実測図 …… 21
第28図　SBf09平・断面図 …… 22
第29図　SBf10遺物出土状況平面図 …… 23
第30図　SBf09・10平・断面図 …… 24
第31図　SBf09・10出土遺物実測図 …… 25
第32図　SBf11平・断面図 …… 26
第33図　SBf12平・断面図 …… 26
第34図　SBf12出土遺物実測図 …… 26
第35図　SBf13出土遺物実測図 …… 28
第36図　SBf14平・断面図 …… 27
第37図　SBf15出土遺物実測図 …… 28
第38図　SBf13平・断面図 …… 28
第39図　SBf15平・断面図 …… 28
第40図　SBf16・SDf21平・断面図 …… 29
第41図　SDf21出土遺物実測図 …… 30
第42図　SBf17平・断面図 …… 31
第43図　SBf17出土遺物実測図 …… 31
第44図　SBf18出土遺物実測図 …… 31
第45図　SBf18平・断面図 …… 32
第46図　SBf19平・断面図 …… 33
第47図　SBf19出土遺物実測図 …… 33
第48図　SBf20平・断面図 …… 34
第49図　SBf20出土遺物実測図 …… 35
第50図　SBf21平・断面図 …… 35
第51図　SBf21出土遺物実測図 …… 35
第52図　SBf22平・断面図 …… 36
第53図　SBf23平・断面図 …… 37
第54図　SBf23出土遺物実測図 …… 37
第55図　SBf24出土遺物実測図 …… 37
第56図　SBf24平・断面図 …… 38
第57図　SBf25出土遺物実測図 …… 38
第58図　SBf25平・断面図 …… 39
第59図　SBf26平・断面図 …… 40
第60図　SBf27平・断面図 …… 41
第61図　SBf27出土遺物実測図 …… 41
第62図　SBf28平・断面図 …… 42
第63図　SBf28出土遺物実測図 …… 42
第64図　SBf29平・断面図 …… 43
第65図　SBf29出土遺物実測図 …… 43
第66図　SBf30出土遺物実測図 …… 43
第67図　SBf30平・断面図 …… 44
第68図　SBf31出土遺物実測図 …… 44
第69図　SBf31平・断面図 …… 45
第70図　SBf32平・断面図 …… 45
第71図　SBf32出土遺物実測図 …… 45
第72図　SBf33平・断面図 …… 46
第73図　SBf33出土遺物実測図 …… 46
第74図　SBf34平・断面図 …… 47
第75図　SBf34出土遺物実測図 …… 47
第76図　SBf35平・断面図 …… 48
第77図　SBf36平・断面図 …… 48
第78図　SBf37平・断面図 …… 49

第79図　SBf37出土遺物実測図 …… 49
第80図　SBf38平・断面図 …… 50
第81図　SBf38出土遺物実測図 …… 50
第82図　SBf39平・断面図 …… 51
第83図　SAf01平・断面図 …… 53
第84図　SAf02平・断面図 …… 53
第85図　SAf03平・断面図 …… 53
第86図　SAf05平・断面図 …… 53
第87図　SAf06平・断面図 …… 53
第88図　SAf07平・断面図 …… 53
第89図　SAf07出土遺物実測図 …… 53
第90図　SAf02出土遺物実測図 …… 54
第91図　SAf04平・断面図 …… 54
第92図　SAf08平・断面図 …… 54
第93図　I地区柱穴出土遺物実測図 …… 55
第94図　SPf21平・断面図 …… 56
第95図　K地区柱穴出土遺物実測図① …… 56
第96図　K地区柱穴出土遺物実測図② …… 56
第97図　SKf01平・断面図 …… 58
第98図　SKf03平・断面図 …… 58
第99図　SKf04平・断面図 …… 58
第100図　SKf05平・断面図 …… 58
第101図　SKf06平・断面図 …… 58
第102図　SKf07平・断面図 …… 58
第103図　SKf08平・断面図 …… 58
第104図　SKf09平・断面図 …… 58
第105図　SKf10平・断面図 …… 58
第106図　SKf05出土遺物実測図 …… 59
第107図　SKf06出土遺物実測図 …… 59
第108図　SKf09出土遺物実測図 …… 59
第109図　SKf10出土遺物実測図 …… 59
第110図　SKf11平・断面図 …… 61
第111図　SKf12平・断面図 …… 61
第112図　SKf13平・断面図 …… 61
第113図　SKf15平・断面図 …… 61
第114図　SKf17・18平・断面図 …… 61
第115図　SKf19平・断面図 …… 61
第116図　SKf20平・断面図 …… 61
第117図　SKf21平・断面図 …… 61
第118図　SKf22平・断面図 …… 61
第119図　SKf12出土遺物実測図 …… 62
第120図　SKf13出土遺物実測図 …… 62
第121図　SKf15出土遺物実測図 …… 62
第122図　SKf17・18出土遺物実測図 …… 62
第123図　SKf19出土遺物実測図 …… 62
第124図　SKf22出土遺物実測図 …… 62
第125図　SKf20出土遺物実測図 …… 63
第126図　SKf21出土遺物実測図 …… 63
第127図　SKf25平・断面図 …… 65
第128図　SKf26平・断面図 …… 65
第129図　SKf28平・断面図 …… 65
第130図　SKf29平・断面図 …… 65
第131図　SKf31平・断面図 …… 65
第132図　SKf32平・断面図 …… 65
第133図　SKf33平・断面図 …… 65
第134図　SKf34平・断面図 …… 65
第135図　SKf35平・断面図 …… 65
第136図　SKf25出土遺物実測図 …… 66
第137図　SKf26出土遺物実測図 …… 66
第138図　SKf31出土遺物実測図 …… 66
第139図　SKf32出土遺物実測図 …… 66
第140図　SKf33出土遺物実測図 …… 66
第141図　SKf34出土遺物実測図 …… 66
第142図　SKf36平・断面図 …… 66
第143図　SKf37平・断面図 …… 66
第144図　SKf38平・断面図 …… 66
第145図　SKf39平・断面図 …… 68
第146図　SKf40平・断面図 …… 68
第147図　SKf42平・断面図 …… 68
第148図　SKf43平・断面図 …… 68
第149図　SKf44平・断面図 …… 68
第150図　SKf45平・断面図 …… 68
第151図　SKf36出土遺物実測図 …… 68
第152図　SKf37出土遺物実測図 …… 68
第153図　SKf42出土遺物実測図 …… 68
第154図　SKf43出土遺物実測図 …… 69
第155図　SKf44出土遺物実測図 …… 69
第156図　SKf45出土遺物実測図 …… 69
第157図　SKf46平・断面図 …… 71
第158図　SKf48平・断面図 …… 71
第159図　SKf49平・断面図 …… 71
第160図　SKf50平・断面図 …… 71
第161図　SKf51平・断面図 …… 71
第162図　SKf52平・断面図 …… 71

第163図　SKf53平・断面図 …… 71
第164図　SKf54平・断面図 …… 71
第165図　SKf55平・断面図 …… 71
第166図　SKf46出土遺物実測図 …… 72
第167図　SKf48出土遺物実測図 …… 72
第168図　SKf49出土遺物実測図 …… 72
第169図　SKf50出土遺物実測図 …… 72
第170図　SKf52出土遺物実測図 …… 72
第171図　SKf53出土遺物実測図 …… 72
第172図　SKf55出土遺物実測図 …… 72
第173図　SKf56平・断面図 …… 73
第174図　SKf57平・断面図 …… 73
第175図　SKf58平・断面図 …… 73
第176図　SKf59平・断面図 …… 73
第177図　SKf63平・断面図 …… 73
第178図　SKf64平・断面図 …… 73
第179図　SKf65平・断面図 …… 73
第180図　SKf66平・断面図 …… 73
第181図　SKf67平・断面図 …… 73
第182図　SKf63出土遺物実測図 …… 74
第183図　SKf65出土遺物実測図 …… 74
第184図　SKf67出土遺物実測図 …… 74
第185図　SKf68平・断面図 …… 75
第186図　SKf68出土遺物実測図 …… 75
第187図　SKf69平・断面図 …… 75
第188図　SKf69出土遺物実測図 …… 75
第189図　SKf68・69出土遺物実測図 …… 76
第190図　SKf70・71平・断面図 …… 76
第191図　SKf70・71出土遺物実測図 …… 77
第192図　SKf72平・断面図 …… 79
第193図　SKf73平・断面図 …… 79
第194図　SKf74平・断面図 …… 79
第195図　SKf75平・断面図 …… 79
第196図　SKf78平・断面図 …… 79
第197図　SKf86平・断面図 …… 79
第198図　SKf87・SXf06平・断面図 …… 79
第199図　SKf88平・断面図 …… 79
第200図　SKf89平・断面図 …… 79
第201図　SKf73出土遺物実測図 …… 80
第202図　SKf75出土遺物実測図 …… 80
第203図　SKf78出土遺物実測図 …… 80
第204図　SKf88出土遺物実測図 …… 80
第205図　SKf91平・断面図 …… 82
第206図　SKf92平・断面図 …… 82
第207図　SKf94平・断面図 …… 82
第208図　SKf95平・断面図 …… 82
第209図　SKf96平・断面図 …… 82
第210図　SKf97平・断面図 …… 82
第211図　SKf98平・断面図 …… 82
第212図　SKf100平・断面図 …… 82
第213図　SKf101平・断面図 …… 82
第214図　SKf92出土遺物実測図 …… 83
第215図　SKf94出土遺物実測図 …… 83
第216図　SKf98出土遺物実測図 …… 83
第217図　SKf100出土遺物実測図 …… 83
第218図　SKf101出土遺物実測図 …… 83
第219図　SKf102平・断面図 …… 84
第220図　SKf103平・断面図 …… 84
第221図　SKf104平・断面図 …… 84
第222図　SKf105平・断面図 …… 84
第223図　SKf106平・断面図 …… 84
第224図　SKf107平・断面図 …… 84
第225図　SKf102出土遺物実測図 …… 84
第226図　SKf103出土遺物実測図 …… 84
第227図　SKf105出土遺物実測図 …… 84
第228図　SKf107出土遺物実測図 …… 84
第229図　SKf109平・断面図 …… 86
第230図　SKf110平・断面図 …… 86
第231図　SKf111平・断面図 …… 86
第232図　SKf113平・断面図 …… 86
第233図　SKf114平・断面図 …… 86
第234図　SKf111出土遺物実測図 …… 86
第235図　SKf113出土遺物実測図 …… 86
第236図　SEf01平・断面図 …… 87
第237図　SEf01出土遺物実測図 …… 88
第238図　SEf02平・断面図 …… 88
第239図　SEf02立面図 …… 89
第240図　SEf02出土遺物実測図① …… 89
第241図　SEf02出土遺物実測図② …… 90
第242図　SEf02出土遺物実測図③ …… 91
第243図　SEf02出土遺物実測図④ …… 92
第244図　SEf02出土遺物実測図⑤ …… 93
第245図　SEf02出土遺物実測図⑥ …… 94
第246図　SEf02出土遺物実測図⑦ …… 95

第247図　SEf02出土遺物実測図⑧ …… 96
第248図　SEf03平・断面図 …… 97
第249図　SEf03出土遺物実測図 …… 97
第250図　SEf04平・断面図 …… 98
第251図　SEf04出土遺物実測図 …… 99
第252図　SEf05平・断面図 …… 100
第253図　SEf05出土遺物実測図 …… 100
第254図　SEf06平・断面図 …… 101
第255図　SEf07平・断面図 …… 101
第256図　SEf06出土遺物実測図① …… 102
第257図　SEf06出土遺物実測図② …… 103
第258図　SEf06出土遺物実測図③ …… 104
第259図　SEf06出土遺物実測図④ …… 105
第260図　SEf06出土遺物実測図⑤ …… 106
第261図　SEf06出土遺物実測図⑥ …… 107
第262図　SEf07出土遺物実測図 …… 108
第263図　STf01平・断面図 …… 109
第264図　STf01出土遺物実測図 …… 109
第265図　SDf01断面図 …… 110
第266図　SDf02断面図 …… 110
第267図　SDf02出土遺物実測図 …… 111
第268図　SDf05断面図 …… 112
第269図　SDf05出土遺物実測図 …… 112
第270図　SDf06断面図 …… 112
第271図　SDf06出土遺物実測図 …… 112
第272図　SDf11断面図 …… 113
第273図　SDf11出土遺物実測図 …… 113
第274図　SDf13断面図 …… 113
第275図　SDf13出土遺物実測図 …… 113
第276図　SDf14断面図 …… 113
第277図　SDf14出土遺物実測図 …… 114
第278図　SDf15断面図 …… 114
第279図　SDf15出土遺物実測図① …… 115
第280図　SDf15出土遺物実測図② …… 116
第281図　SDf15出土遺物実測図③ …… 117
第282図　SDf15出土遺物実測図④ …… 118
第283図　SDf15出土遺物実測図⑤ …… 119
第284図　SDf16・17断面図 …… 120
第285図　SDf16・17出土遺物実測図 …… 120
第286図　SDf19断面図 …… 120
第287図　SDf19出土遺物実測図 …… 121
第288図　SRf01断面図 …… 122
第289図　SRf01出土遺物実測図 …… 122
第290図　SRf02断面図 …… 123
第291図　SRf03出土遺物実測図 …… 123
第292図　SRf02出土遺物実測図 …… 124
第293図　SRf03断面図 …… 125
第294図　SXf02平・断面図 …… 126
第295図　SXf02出土遺物実測図 …… 126
第296図　SXf05平・断面図 …… 126
第297図　SXf05出土遺物実測図 …… 126
第298図　SXf07平・断面図 …… 127
第299図　SXf07出土遺物実測図 …… 127
第300図　SXf09平・断面図 …… 127
第301図　SXf09出土遺物実測図 …… 127
第302図　Ⅰ地区包含層出土遺物実測図 …… 128
第303図　予備調査出土遺物実測図 …… 129
第304図　K地区包含層出土遺物実測図 …… 130
第305図　第Ⅰ期遺構配置図 …… 132
第306図　第Ⅱ期遺構配置図 …… 133
第307図　第Ⅲ期遺構配置図 …… 134
第308図　第Ⅳ期遺構配置図 …… 135
第309図　西末則遺跡周辺条里型地割復元図 …… 136
第310図　周辺の水利図 …… 137

第１章　調査の経緯

第１節　調査方法と整理方法

１．調査の方法

対象地を調査するにあたり、まず事業予定地全体に南東隅を基点とする20ｍメッシュのグリッドを設定した。グリッド基点Ａ－１は国土座標第Ⅳ系のX=135.820、Y=40.250で、座標北の方向に１，２，３……、西の方向にA，B，C……と付し、各交点をＢ－２、Ｄ－２等のように呼称することにした。また、20ｍメッシュのグリッドの呼称は南東隅の交点名によっている。（第１図）

調査区全体の図化は、遺構密度の高い地域に限り業者に委託して航空測量を実施し、1/100・1/50の縮尺で図化した。また、航空測量の対象外の区域と主要な遺構については、トータルステーションによる測量および手描きの実測等により対応した。対象地内に設置する基準点については、対象地内の数地点に限り測量業者に委託し設置した。

２．調査区の設定

事業予定地は綾川町山田下・北（旧綾上町山田下、綾南町北）の二町に及び綾川の北岸の段丘面上に位置する。県道278号線を北限とし、南限は綾川の氾濫原まで、東限は東辺に所在する南北丘陵（末則丘陵）までで、南北約450ｍ、東西約400ｍを測り、面積は約18haを測る。調査対象地は、予定地の南東部、旧綾上町側に所在する南北丘陵（末則丘陵）の西斜面から旧綾南町に広がる地域と、予定地の北西部、県道278号線の南に広がる飛び地状の地域とに分かれ、総面積は75,787㎡である。

調査区の設定としては、調査対象地の面積がかなり広いため、まず、対象地をＡ～Ｋ地区までの８地区に区分した。さらに県道278号線の南の飛び地部分をＲ地区とした。また、調査を進める都合上、大区画内をさらに小区分し調査区を設定した。調査区名の付け方は、調査区画内の最も代表的なグリッド名を採用して、Ｂ２区、Ａ６区等と呼称することとした。これは、農業試験場用地内の発掘調査が複数年次にまたがり、調査区も全面ではなく局所的に、設定される可能性もあり、調査区名によって大まかな位置が把握できることを目的としたものである。（第２図）

３．整理作業の方法

本遺跡は、広大な調査対象地を数ヶ年にわたり、複数パーティーで調査を実施してきている関係上、相当数の職員が調査に関与し、複雑な小区画割が多数存在することになり、全体像を把握しにくい状況となっている。整理作業に際しては、調査時での区画割のとおりに整理の範囲が確定できない問題と、発掘調査の担当者が必ずしも整理作業まで担当できるとは限らない人事上の問題等があり、整理作業を順調に進めるため、後年次に及ぶ整理計画を作成し作業を進めることとした。

４．整理区画の設定

計画的に整理作業を進め、記載事項の混乱を防ぐ目的で、発掘調査時でのＡ～Ｋ地区までの区画とは別に、新たに整理作業用の区画割を設定した。なお、この区画は次年度以降の状況を考慮して、適宜改変することを前提としたものである。

今年度の整理対象地区は整理区画でいえば「ｆ地区」にあたり、平成15・16年度に調査を実施したＩ地区（P18、L17、M17、N17区）、Ｋ地区（Ｋ１、Ｋ２、Ｋ３区）にあたる。このように西末則遺跡は、発掘調査が複数年度にわたり、調査区も各年度単位で細かく分かれている。そのため、発掘調査と整理作業の担当者が異

なる場合があり、こうした状況から整理作業に混乱が生じる恐れが予測できたため、各調査区をもとにした整理区画を設定し、これに基づいて整理作業を実施することとした。(第3図)

5．報告遺構名の呼称法

現場作業で付された個々の遺構の名称は、各調査区単位に適宜付された遺構名で、異なる遺構に同一名称を与えている事例や、複数の調査区にまたがる同一の遺構に複数の遺構名が与えられている事例などがあり、また、遺構内容と照らし修正すべき遺構名等が含まれている。そのため、報告書刊行時には、数ブロックに分割した整理区画と遺構の種類を単位として、全種類について「01」から始まる通し番号により再整理を行うものとした。さらに、各整理区画を明確にすることと、番号の混乱を防ぐことを目的として、遺構略称中に整理区画記号を記入し報告することにした。(例：SBf01)

第2節　調査体制と整理体制

1．調査体制

平成15年度の調査は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの直営によって実施し、調査員2名、調査技術員1名の3人1班が通年、同様の1班が4ヶ月体制で行った。

平成16年度の調査は財団法人の解散に伴い、香川県埋蔵文化財センターが直営によって実施し、調査員2名、調査技術員1名の3人1班が通年、同様の1班が4・5、12～3月までの半年体制で行った。

なお、調査体制の詳細は『西末則遺跡Ⅰ』に詳述されているので、そちらを参照されたい。

4．整理作業

整理作業は平成17年度に香川県埋蔵文化財センターが実施した。f地区出土遺物は土器・石器・金属器・木器合せて293箱にのぼる。整理期間は平成17年9月から平成18年3月までの7ヶ月間であり、整理作業の体制は第1表のとおりであり、整理工程は第2表の通りである。

なお、発掘・整理作業に携わった方々は、以下のとおりである。(五十音順)

発掘調査

飯間　高子、糸瀬　忠之、稲田　寿子、川田　朋彦、柴垣　俊裕、諏訪　芳美、十河　節子
高尾　司之、高木ミチ子、塚原　　進、土居　　剛、中村　大地、長山キミエ、西崎　文子
西村　和代、藤井サヨ子、松本　悦子、松本　和子、三谷　恵子、宮地恵美子、六車ふみ子
村尾　律子

整理作業

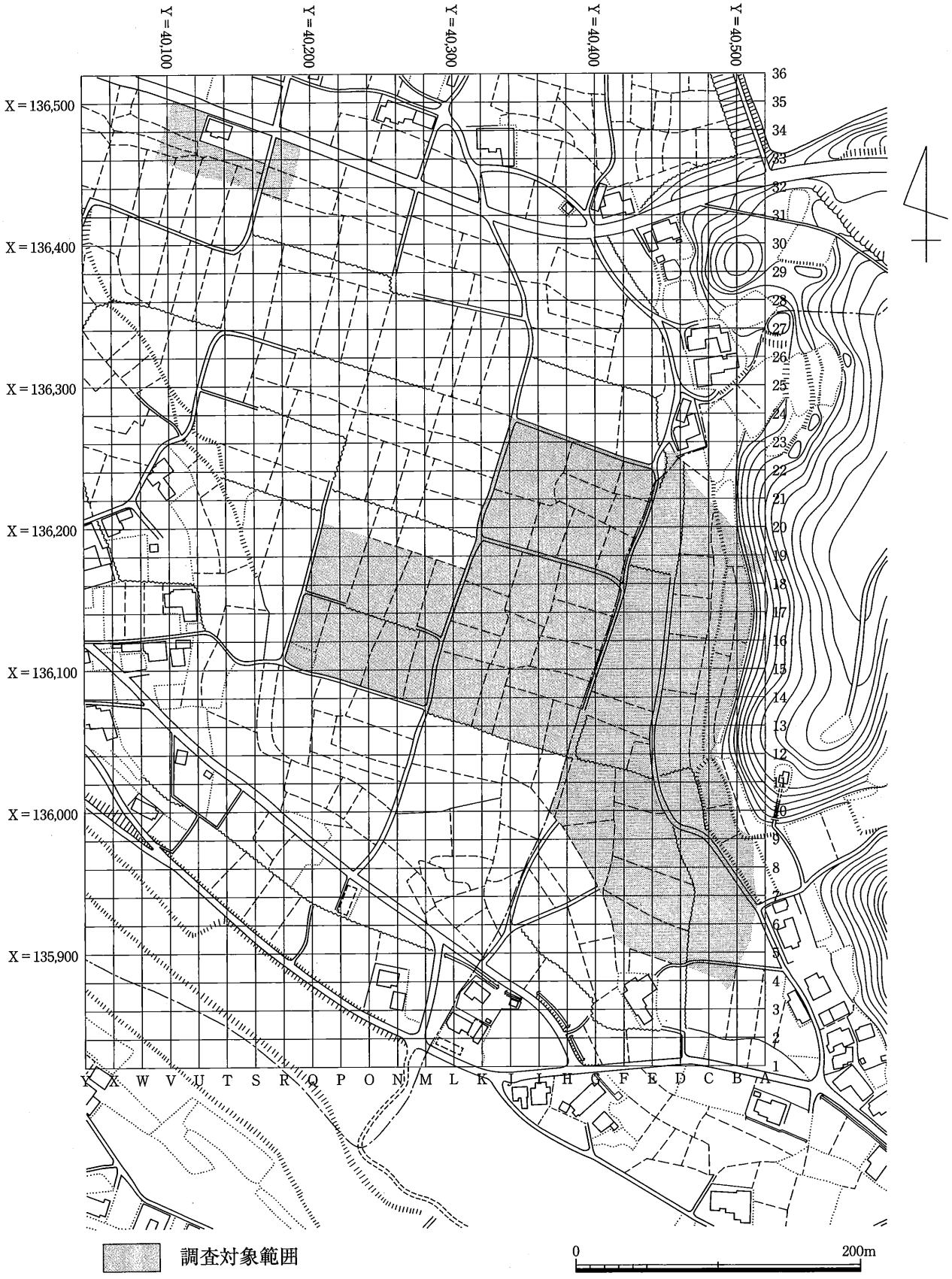
岡野　雅子、久保真由美、馬場　聡子、前田　好美、森川　理恵、矢野ゆかり

第１表　整理体制

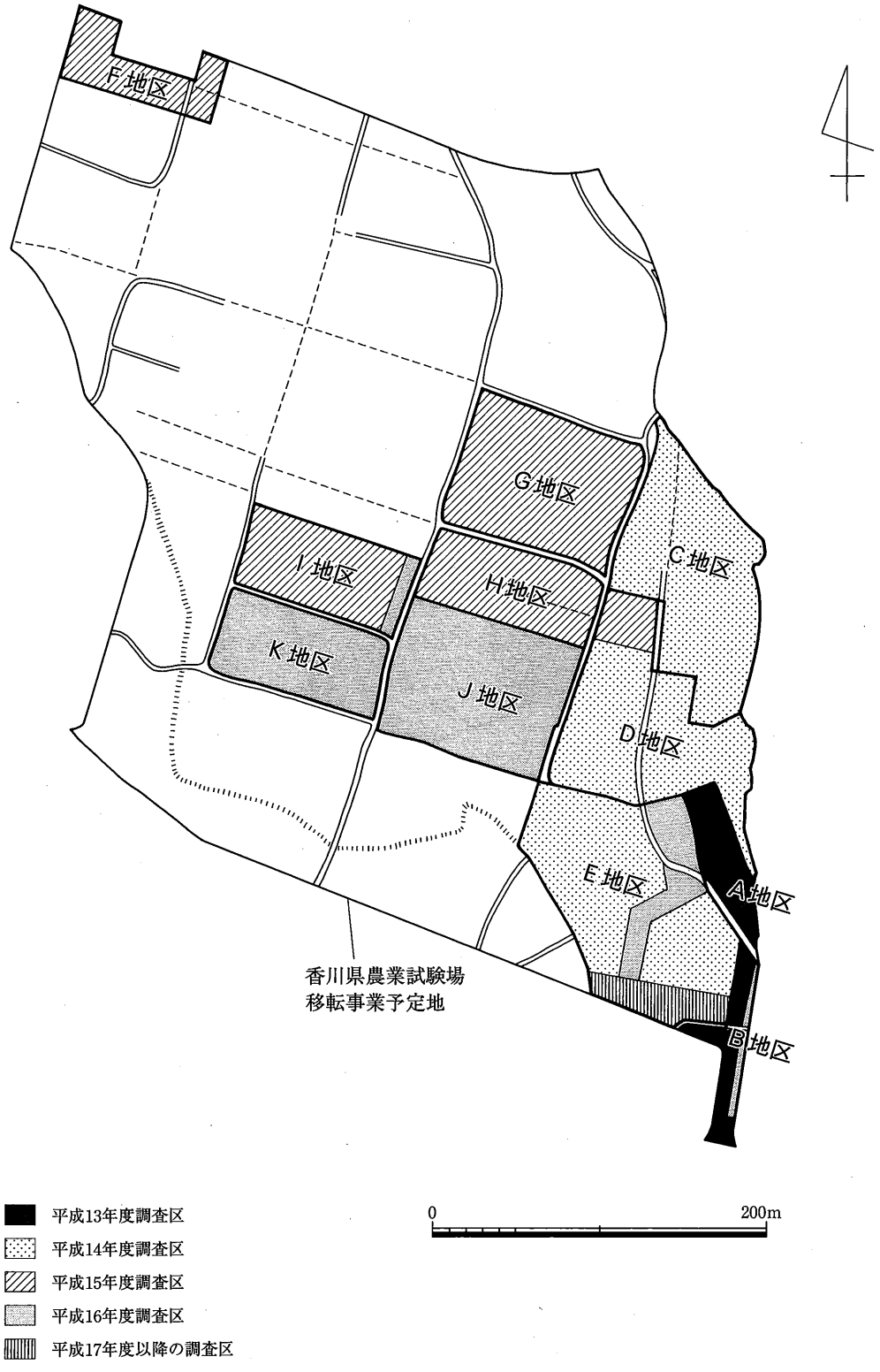
香川県教育委員会　文化行政課		
	平成17年度	
総　　務	課　　長	吉田　光成
	課　長　補　佐	中村　禎伸
総　　務	副　　主　　幹	河内　一裕
	主　　任	堀本　由紀
	主　任　主　事	八木　秀憲
埋蔵文化財	課　長　補　佐	藤好　史郎
	主　　任	山下　平重
	文化財専門員	信里　芳紀
香川県埋蔵文化財センター		
	平成17年度	
総　　務	所　　長	渡部　明夫
	次長兼総務課長	榊原　正人
総　　務	副主幹兼係長	松崎日出穂
	主　　査	塩崎かおり
調　査　課	調査課長兼資料普及課長	廣瀬　常雄
資料普及課	文化財専門員	北山健一郎

第２表　整理作業工程表

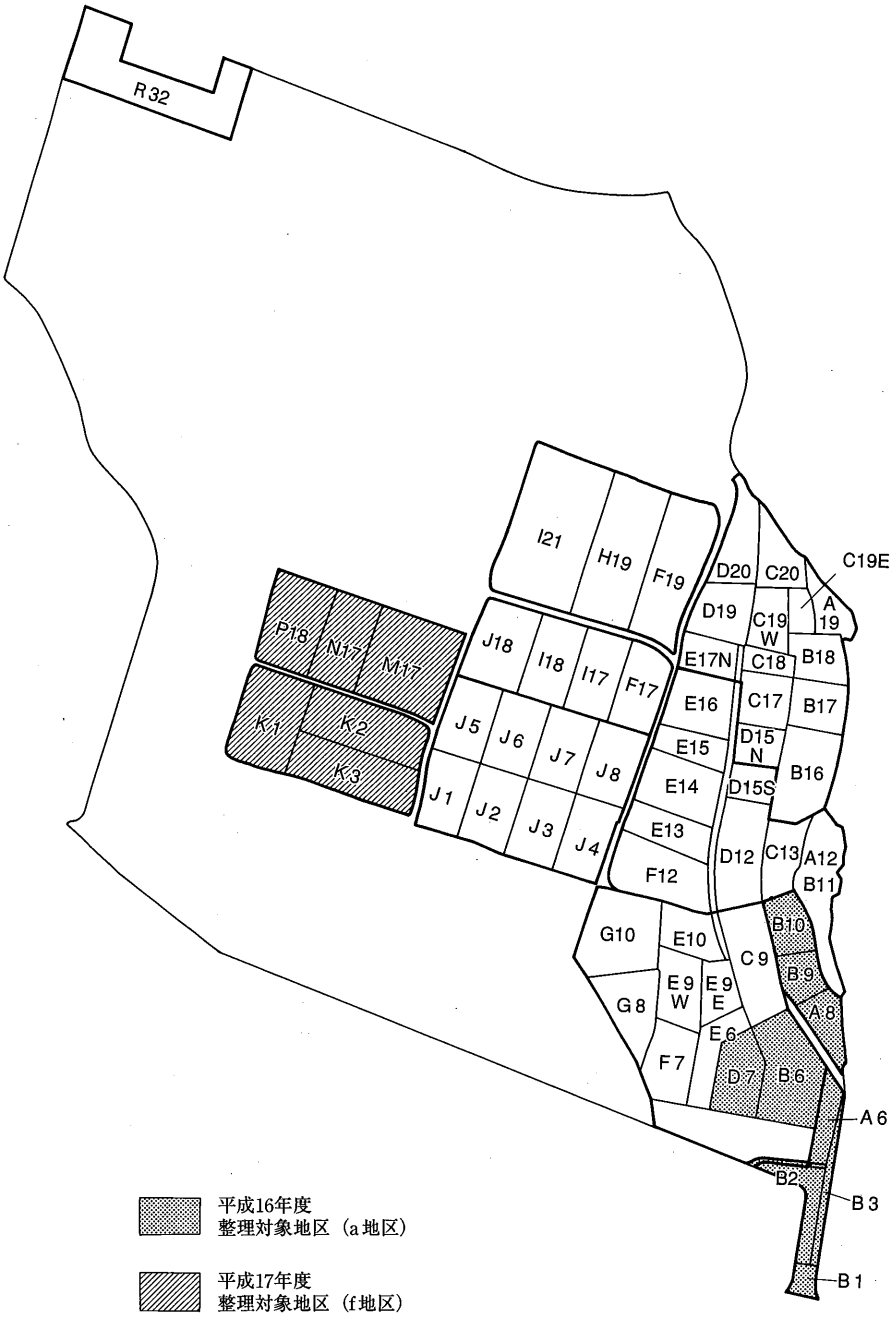
項　　目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
接合・復元						━						
実　　測							━	━	━			
遺構図トレース										━	━	
遺物図トレース										━	━	
写真撮影												━
編　　集											━	━


Y = 40,100
Y = 40,200
Y = 40,300
Y = 40,400
Y = 40,500
X = 136,500
X = 136,400
X = 136,300
X = 136,200
X = 136,100
X = 136,000
X = 135,900
36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 6 5 4 3 2 1
Y X W V U T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
調査対象範囲
0
200m

第１図　グリッド割図


F地区
G地区
I地区
H地区
K地区
J地区
C地区
D地区
E地区
A地区
B地区
香川県農業試験場
移転事業予定地
平成13年度調査区
平成14年度調査区
平成15年度調査区
平成16年度調査区
平成17年度以降の調査区
0
200m

第２図　年度別地区割図


R32
I21
H19
F19
D20
C20
C19E
A
19
D19
C19
W
E17N
C18
B18
P18
N17
M17
J18
I18
I17
F17
E16
C17
B17
K1
K2
K3
J5
J6
J7
J8
E15
D15
N
E14
D15S
B16
J1
J2
J3
J4
E13
D12
C13
A12
F12
B11
B10
G10
E10
C9
B9
E9
W
E9
E
G8
A8
E6
F7
D7
B6
A6
B2
B3
B1
平成16年度
整理対象地区（a地区）
平成17年度
整理対象地区（f地区）

第3図　調査区割図

第２章　調査の成果

第１節　調査の概要

西末則遺跡は香川県綾歌郡綾川町山田下（旧綾上町山田下）・北（旧綾南町北）に位置する（第４図）。本報告は、西末則遺跡の第二冊目にあたり、歴史的環境および地理的環境については、『西末則遺跡Ⅰ』に詳述されているため、ここでは割愛する。詳細は同報告書を参照されたい。

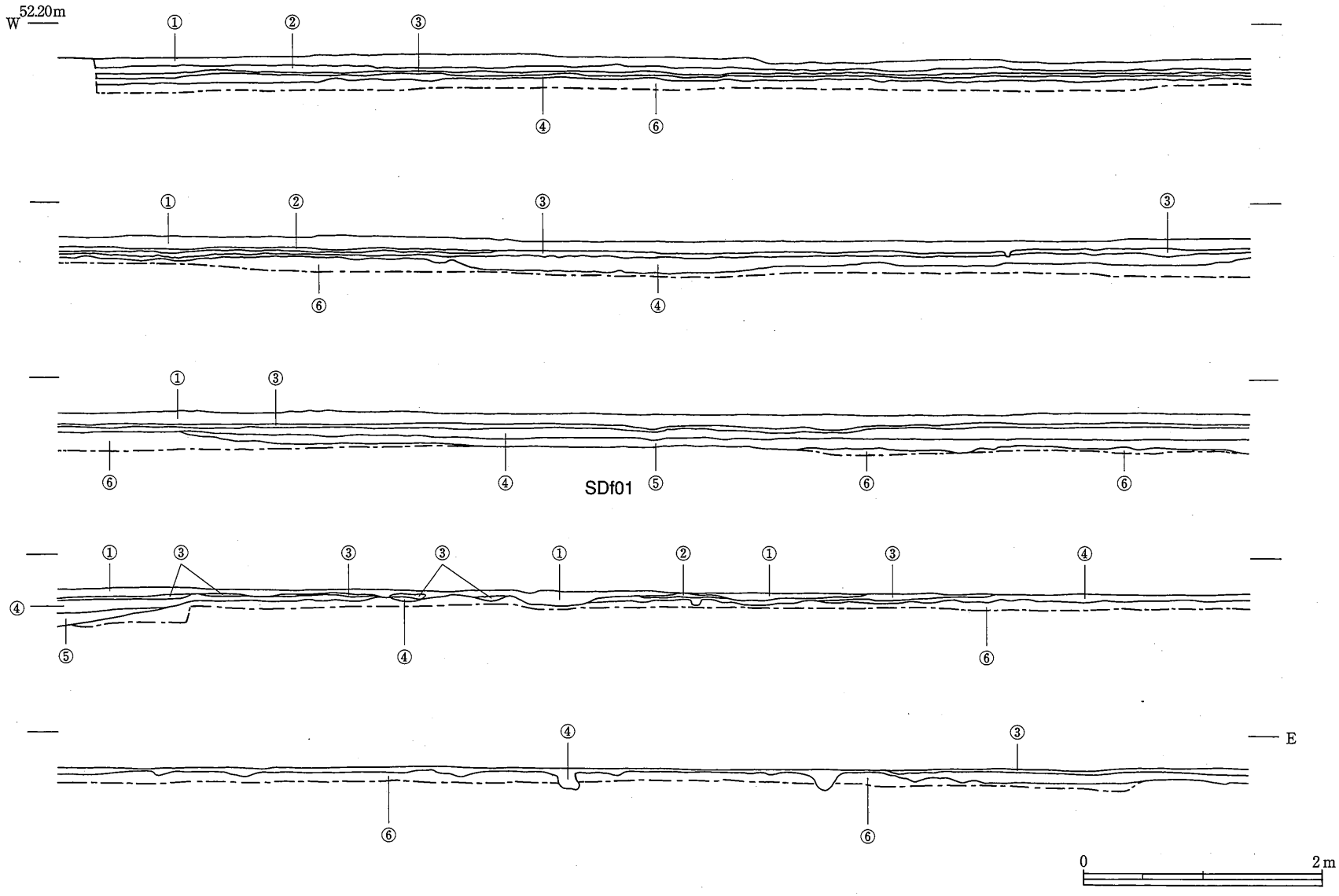
本報告が対象としている地区は調査区割で示せば、平成15年度調査（平成15年８月～11月・４ヶ月）のP18区・L17区・M17区・N17区と平成16年度調査（平成16年４・５月、12月～平成17年３月・６ヶ月）のＫ１区・Ｋ２区・Ｋ３区にあたる（前掲第２図）。また、整理区画でいえば、f区にあたる（前掲第３図）。調査面積はあわせて9,110㎡で、調査期間は10ヶ月である。

第２節　基本土層序

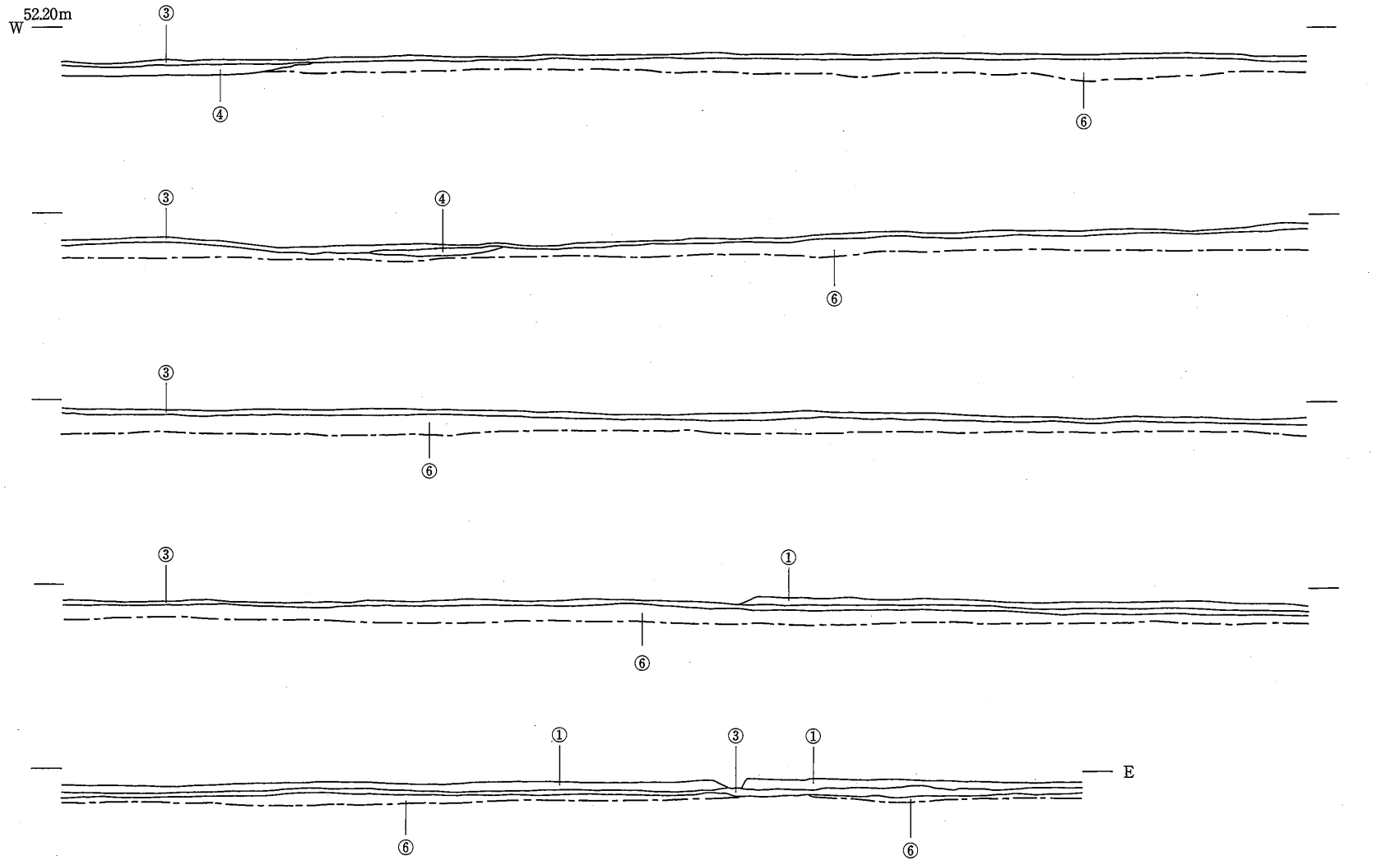
今回の調査対象地における基本土層序については、第５～13図のとおりである。図に示したとおり、耕作土から遺構検出面までは深いところで30cm程度であり、近世以降の耕地化と削平により、部分的には遺構が削られているところも多くみられる。

基本的には耕作土のすぐ下に橙色もしくは明黄色の床土があり、部分的にその下層に茶褐色系統の包含層が認められる。包含層の下層に黄褐色系統の粘質土もしくは粘土の地山が広がっており、この面から遺構が構築されている。

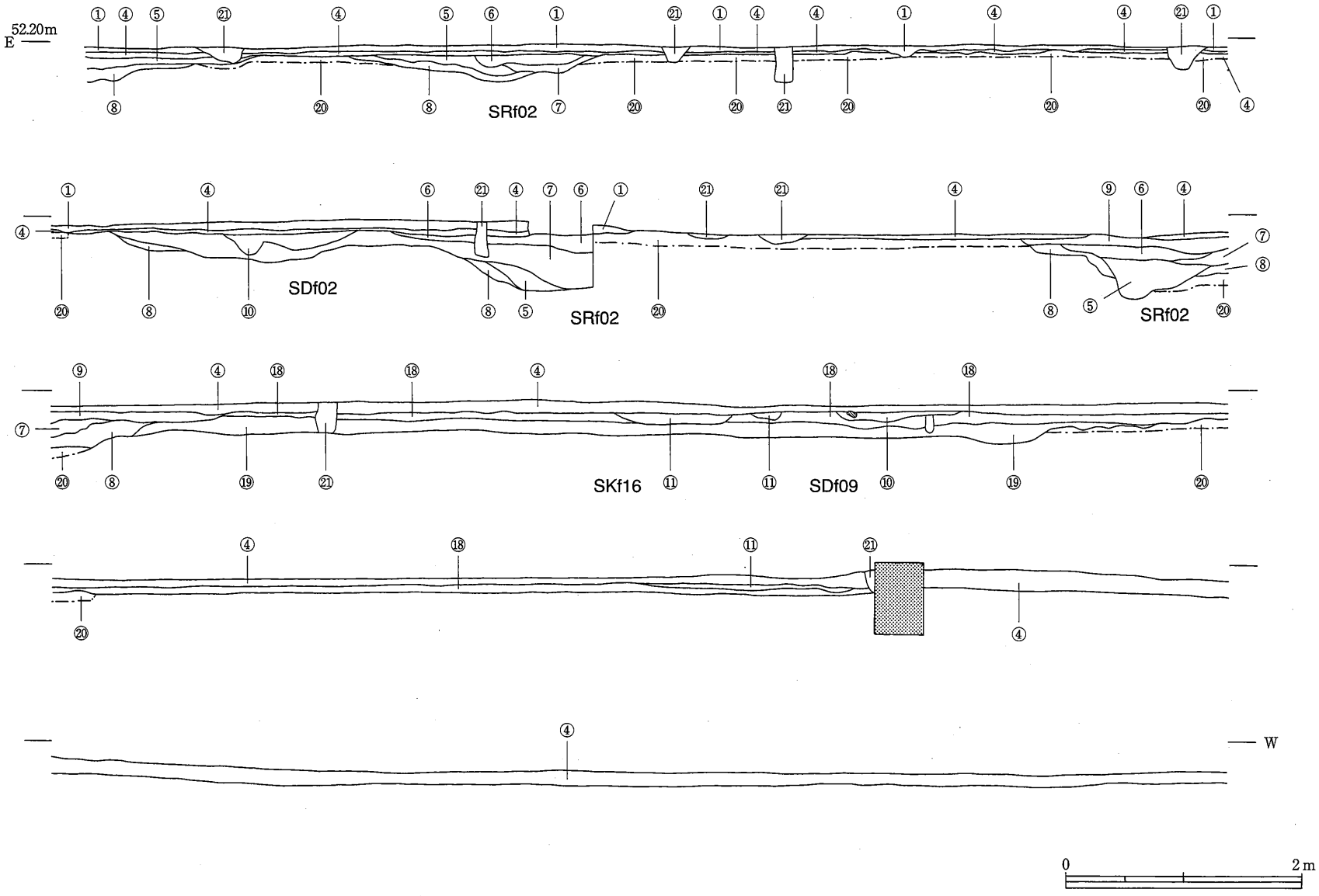
第４図　遺跡位置図



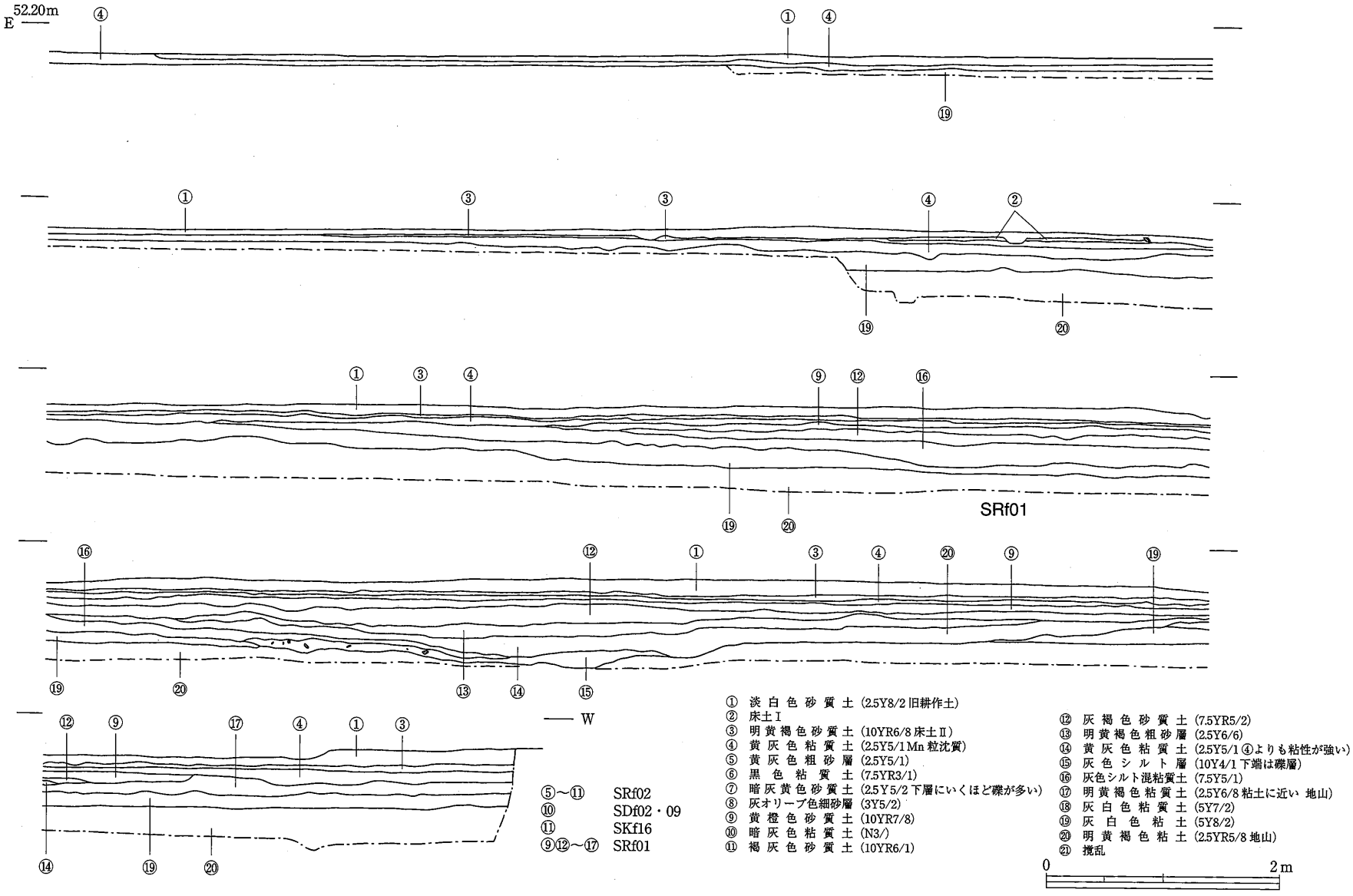
第5図　I地区北壁土層断面図 (1/2)(1/50)



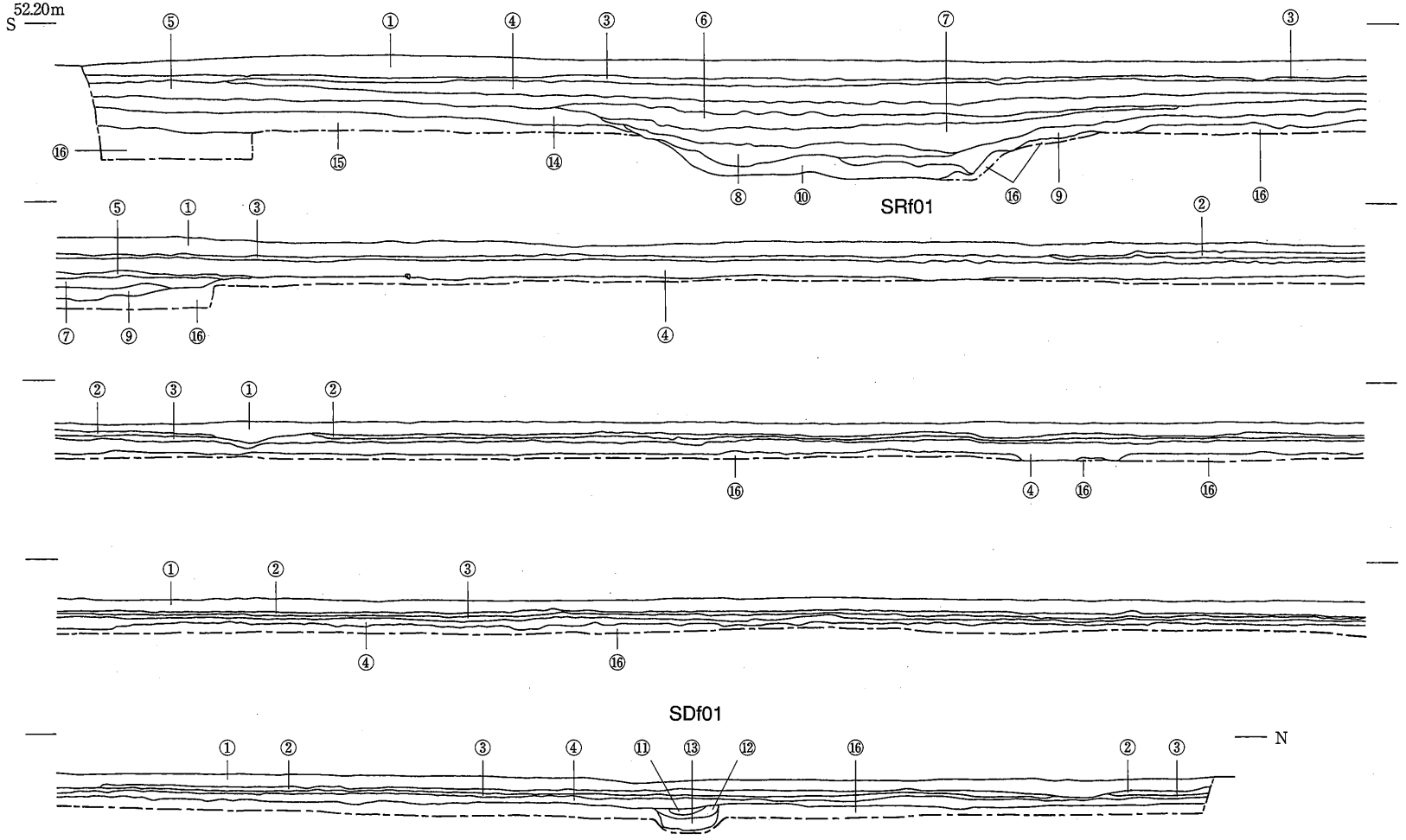
第6図　Ⅰ地区北壁土層断面図（2/2）(1/50)



第7図　I地区南壁土層断面図 (1/2)(1/50)



第8図　Ⅰ地区南壁土層断面図 (2/2) (1/50)

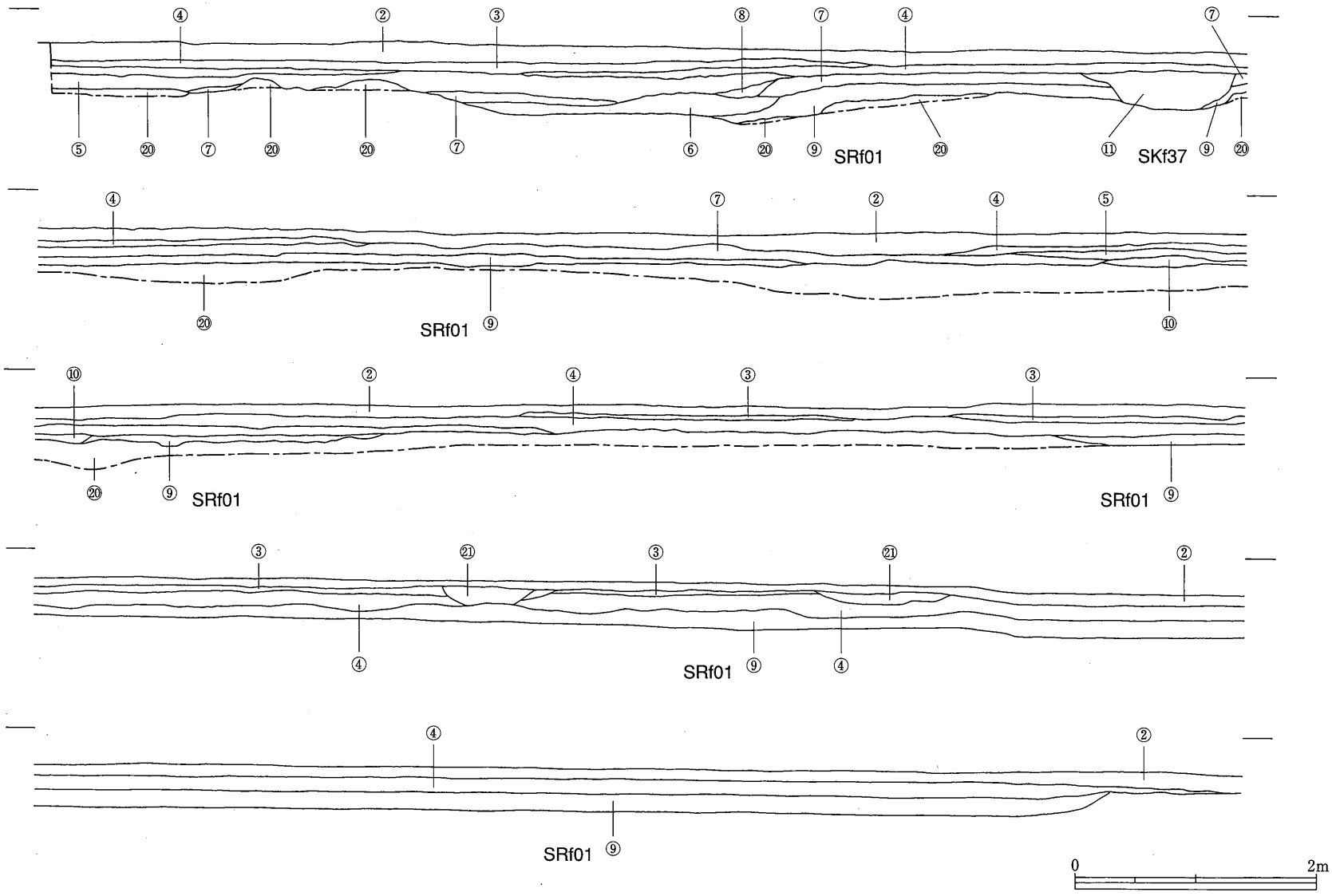


① 淡白色砂質土（2.5Y8/2 旧耕作土）
② 床土Ⅰ
③ 明黄褐色砂質土（10YR6/8 床土Ⅱ）
④ 黄灰色粘質土（2.5Y5/2）
⑤ 黄灰色粘質土（2.5Y5/1 Mn 粒沈質）
⑥ 黄橙色砂質土（10Y R7/8）
⑦ 灰褐色砂質土（7.5YR5/2）
⑧ 明黄褐色粗砂層（2.5Y6/6）
⑨ 黄灰色粘質土（2.5Y5/1 ③よりも粘性が強い）
⑩ 灰色シルト層（10Y4/1 下端は礫層）
⑪ 浅黄橙色砂質土（10YR8/4）
⑫ 灰色細砂混粘質土（7.5Y5/1）
⑬ 黄色細砂層（2.5Y8/6 灰色細砂含む）
⑭ 明黄褐色粘質土（2.5Y6/8 粘土に近い地山）
⑮ 灰白色粘土（5Y8/2 地山）
⑯ 明黄褐色粘土（2.5YR5/8 地山）

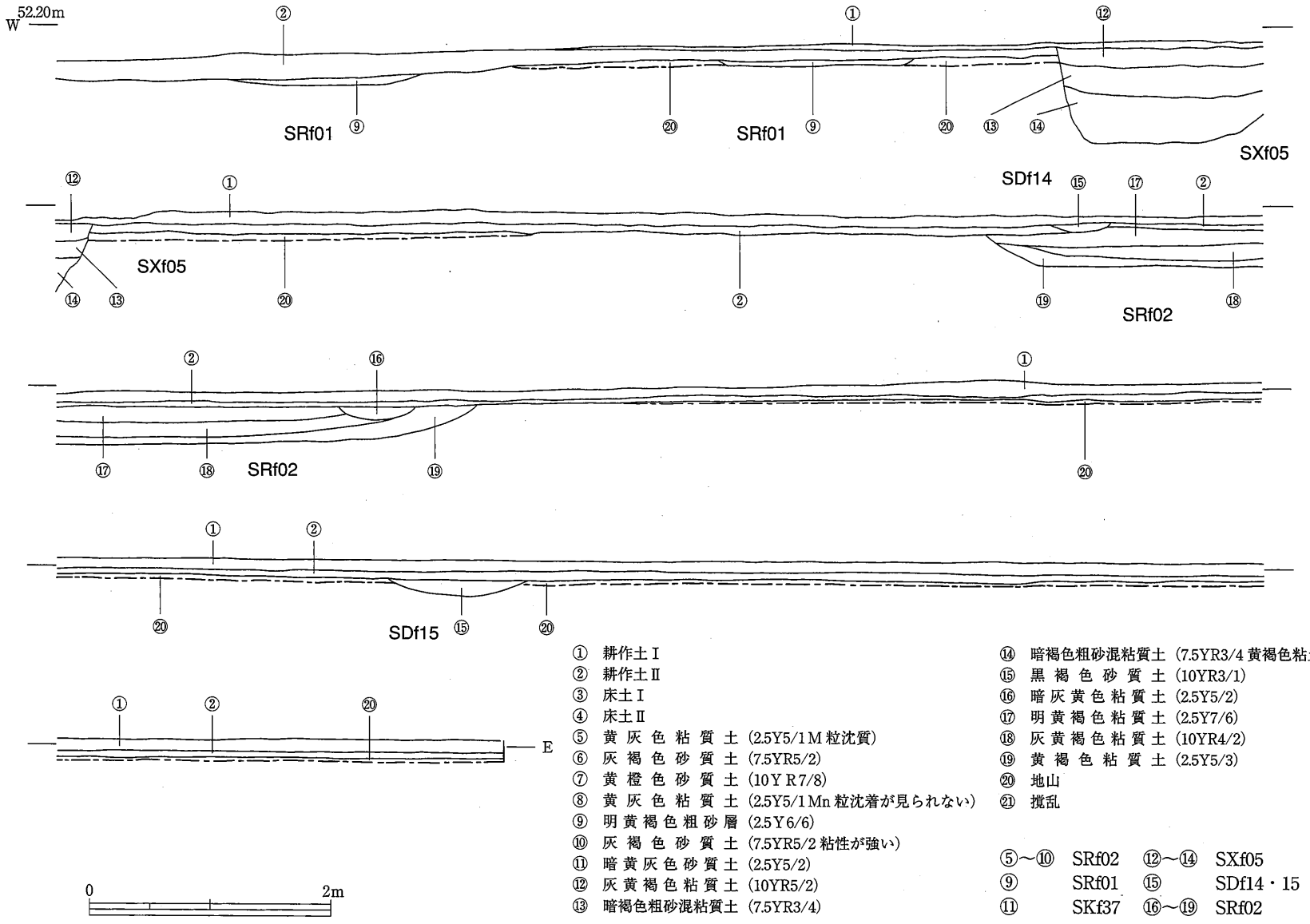
⑤～⑩ SRf01
⑪～⑬ SDf01

0 2m

第9図 Ⅰ地区西壁土層断面図（1/50）



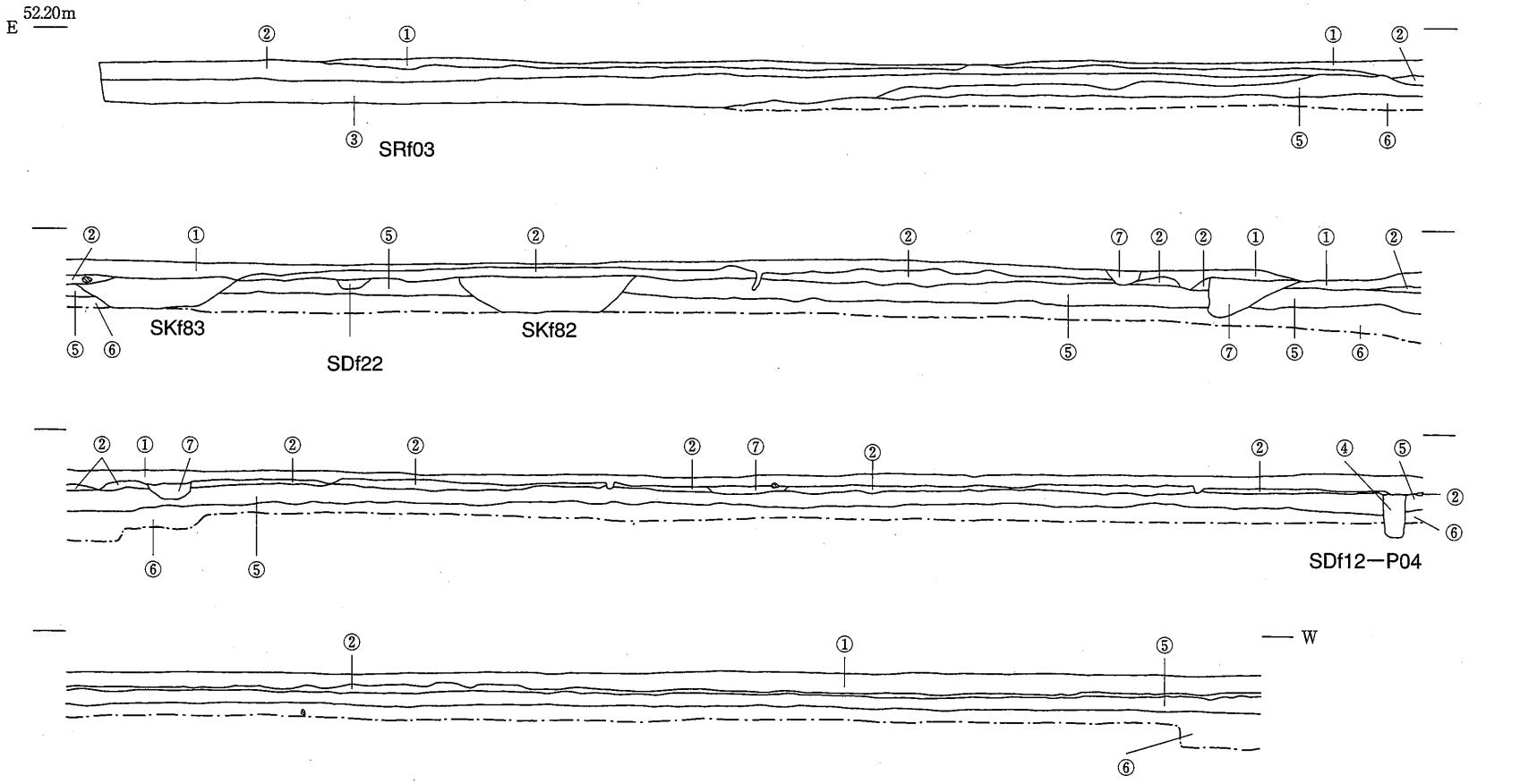
第10図　K地区北壁土層断面図（1/2）(1/50)



① 耕作土Ⅰ
② 耕作土Ⅱ
③ 床土Ⅰ
④ 床土Ⅱ
⑤ 黄灰色粘質土（2.5Y5/1M粒沈質）
⑥ 灰褐色砂質土（7.5YR5/2）
⑦ 黄橙色砂質土（10YR7/8）
⑧ 黄灰色粘質土（2.5Y5/1Mn粒沈着が見られない）
⑨ 明黄褐色粗砂層（2.5Y6/6）
⑩ 灰褐色砂質土（7.5YR5/2粘性が強い）
⑪ 暗黄灰色砂質土（2.5Y5/2）
⑫ 灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
⑬ 暗褐色粗砂混粘質土（7.5YR3/4）
⑭ 暗褐色粗砂混粘質土（7.5YR3/4黄褐色粘土のブロック含む）
⑮ 黒褐色砂質土（10YR3/1）
⑯ 暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
⑰ 明黄褐色粘質土（2.5Y7/6）
⑱ 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
⑲ 黄褐色粘質土（2.5Y5/3）
⑳ 地山
㉑ 撹乱

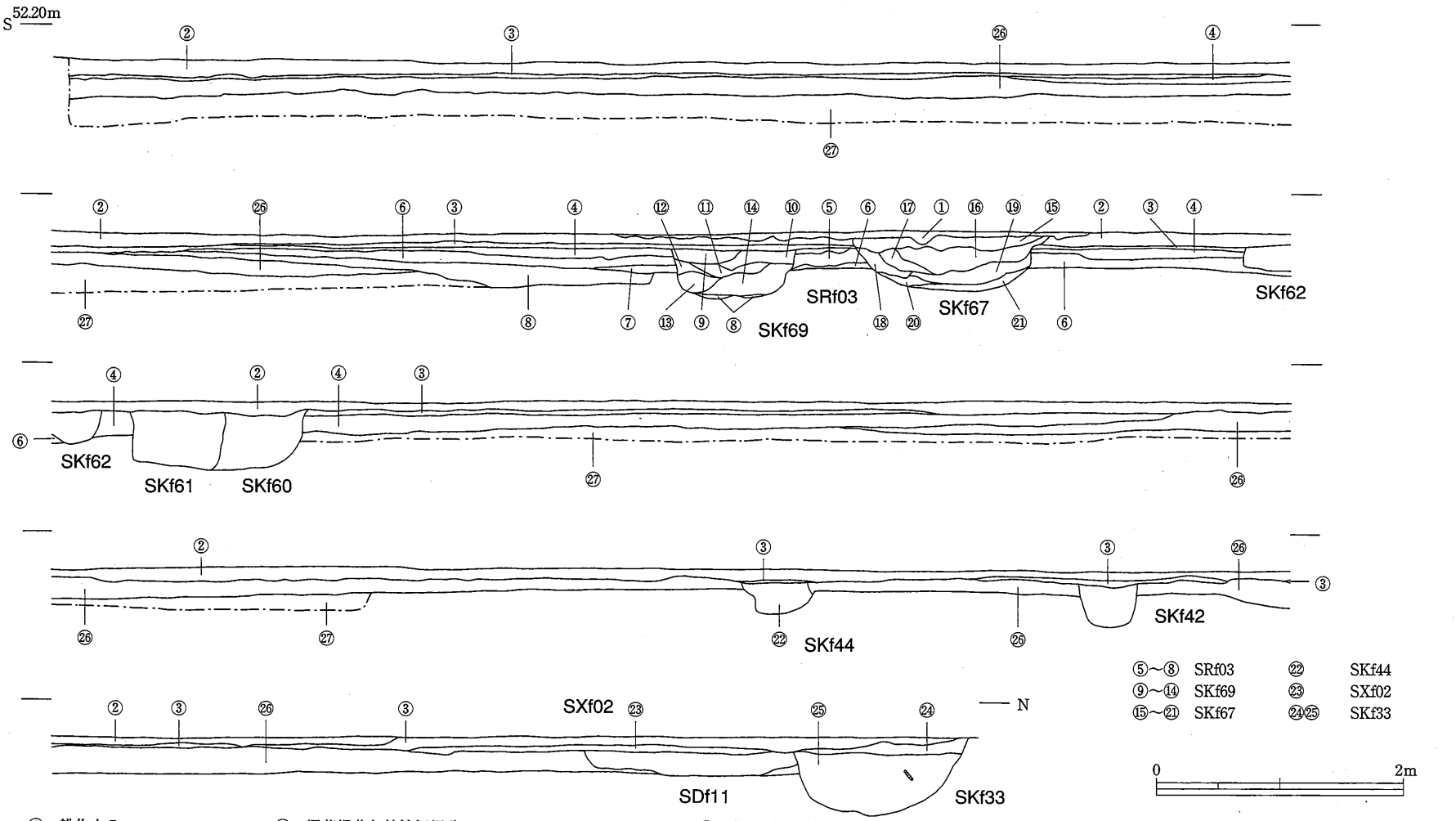
⑤～⑩ SRf02　⑫～⑭ SXf05
⑨ SRf01　⑮ SDf14・15
⑪ SKf37　⑯～⑲ SRf02

第11図　K地区北壁土層断面図（2/2）(1/50)



① 耕作土
② 黄色砂質土（2.5Y7/8 床土）
③ 灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
④ 褐灰色粘質土（10YR5/1 細砂をわずかに含む）SBf12－P04
⑤ 黄色粘質土（5Y7/8 地山）
⑥ 赤褐色粘質土（2.5YR4/8 地山）
⑦ 撹乱

第12図　K地区西側部分南壁土層断面図（1/50）



① 耕作土Ⅰ
② 耕作土Ⅱ
③ 黄色砂質土（2.5Y7/8床土）
④ 灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
⑤ 暗褐灰色粘性極細砂
⑥ 淡灰黄色粘性極細砂
⑦ 淡灰色粘性極細砂
⑧ 濁茶褐黄色粘性極細砂
⑨ 淡茶灰褐色粘性細砂（炭化物をわずかに含む）
⑩ 淡黄灰茶色粘性細砂（炭化物をわずかに含む）
⑪ 濁黄茶灰色粘性極細砂
⑫ 淡黄茶灰色粘性極細砂
⑬ 淡黄茶灰色粘性極細砂（⑤⑧層ブロックを多量に含む）
⑭ 黄茶灰色粘性極細砂
⑮ 茶灰色混粗砂粘性細砂（炭化物をわずかに含む）
⑯ 淡茶灰白色混粗砂粘性細砂（⑥層ブロックを多量に含む）
⑰ 淡茶灰白色混粗砂粘性細砂
⑱ 明茶灰白色混粗砂粘性細砂
⑲ 茶灰白色混粗砂粘性細砂（③⑥⑧層ブロックを多量に含む）
⑳ 茶灰色混粗砂粘性細砂
㉑ 茶灰色混粗砂粘性細砂（㉑層より砂質が強い）
㉒ 暗灰色粘質土（N3/明黄褐色粘土（地山）2.5Y6/6ブロック含む）
㉓ 淡灰茶色混粗砂細砂
㉔ 褐灰色砂質土（10YR4/1）
㉕ 黒褐色砂混粘質土（10YR3/1）
㉖ 黄色粘質土（5Y7/8地山）
㉗ 赤褐色粘質土（2.5YR4/8地山）

第13図　K地区西壁土層断面図（1/50）

第３節　掘立柱建物跡・柵列状遺構・柱穴跡

（１）掘立柱建物跡

SBf01（第14図）

Ｉ地区P18区中央部やや東よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（4.5m）×桁行５間（10.7m）、面積は48㎡、主軸方位はＮ－74°－Ｗを測る。柱間は梁行4.5m、桁行2.1mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径29cm、平均深度28cmを測る。

西から２間目および４間目のみ梁間の中央部に一つずつ柱穴が認められ、間仕切りをしていたものと考えられる。また、西から４間目の南側の柱穴が他の柱穴ラインよりも若干北側へずれていることから、この部分に入口を想定することができる。

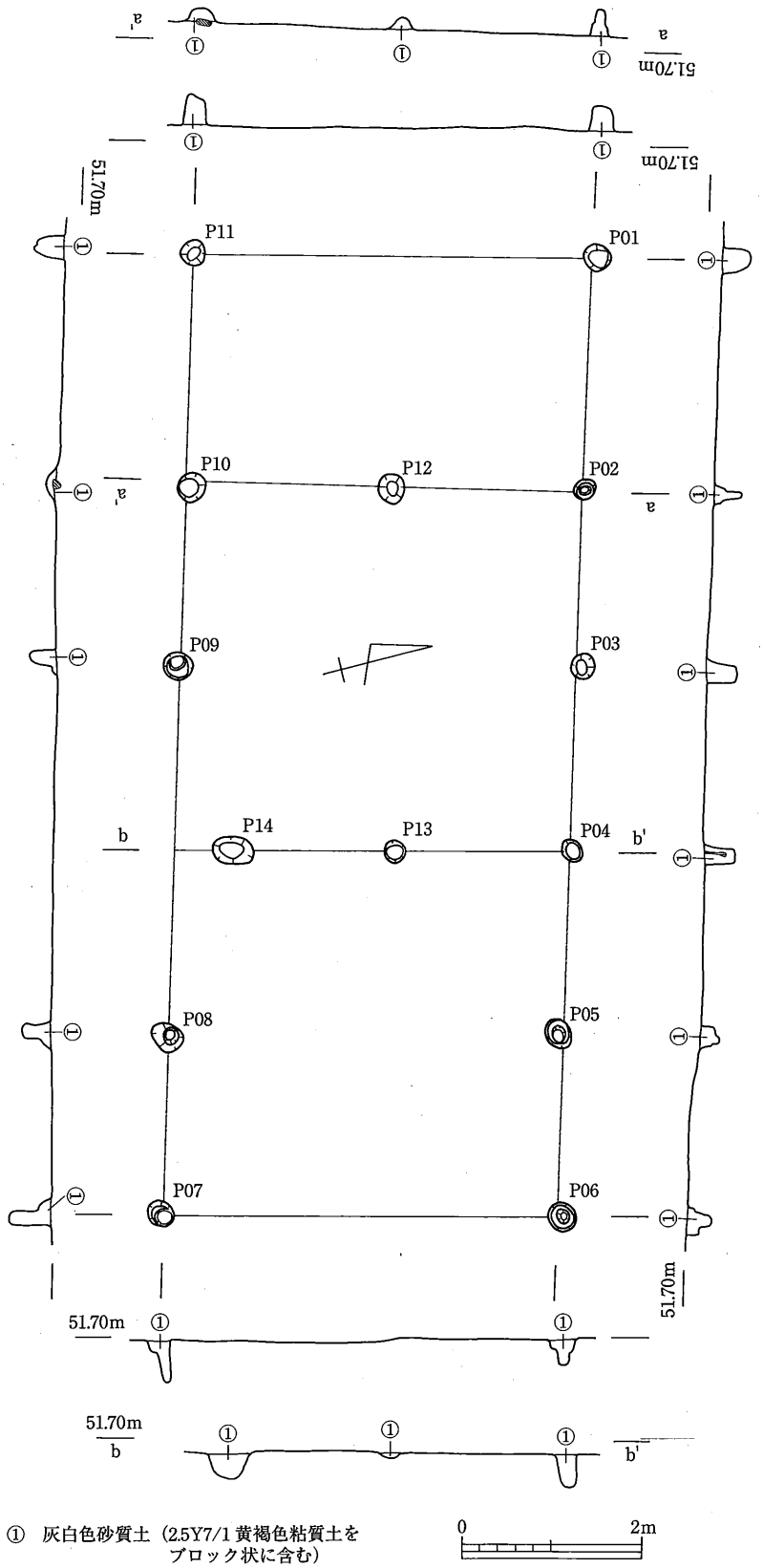
出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf02と同様、12世紀後半から13世紀前半ごろに位置づけられる。

SBf02（第15図）

Ｉ地区P18区SBf01のすぐ南側で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行２間（2.4m）×桁行２間（5.1m）の総柱の建物で、面積は12.3㎡、主軸方位はＮ－20°－Ｅを測る。柱間は梁行2.6m、桁行1.2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径29cm、平均深度26cmを測る。

西側の建物のラインがSBf01の西端のラインのほぼ延長に位置し、２棟の建物がL字状に並んでいることがわかる。

出土遺物は、土器細片が出土したのみである。第16図１はP08から出土した土師器小皿の底部である。底部外面に板ナデの痕跡が認められる。12世紀後半から13世紀前半ごろに位置づけられる。



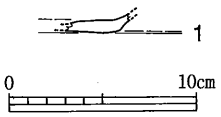
第14図　SBf01平・断面図（1/80）

したがって、SBf02はSBf01と同時期に機能していたもので、総柱であることから、倉庫的な目的の掘立柱建物跡であると考えられる。

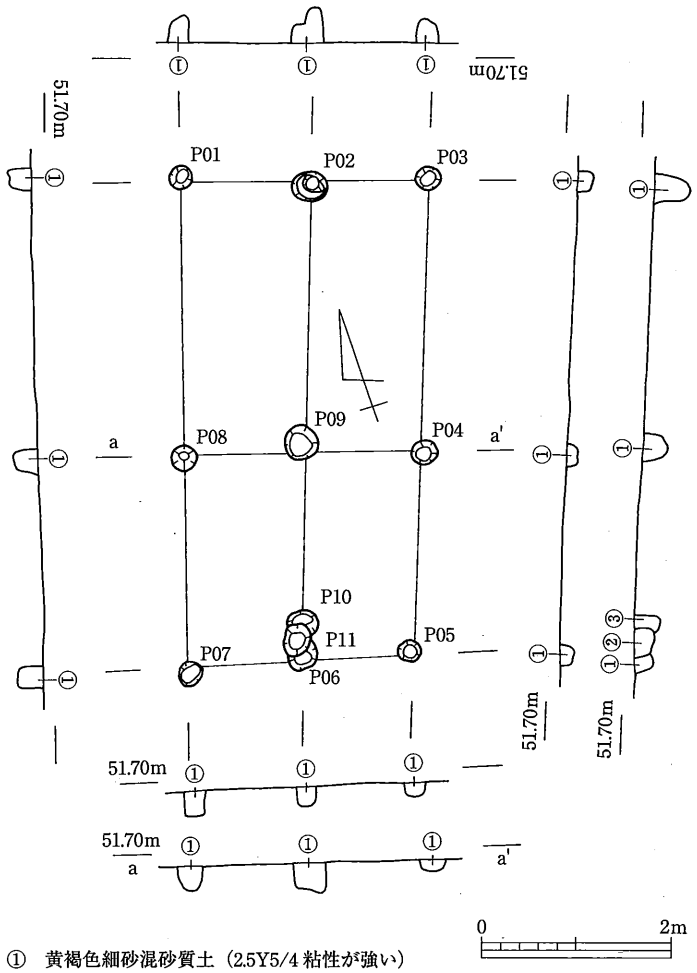
SBf03（第17図）

Ⅰ地区P18区南側中央部、SRf01のすぐ北側で検出した南北棟の小規模の掘立柱建物跡である。梁行１間（1.5m）×桁行２間（3.9m）、面積は６㎡、主軸方位はN－16°－Eを測る。柱間は梁行1.5m、桁行1.9mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径27cm、平均深度16cmを測る。

出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf02と同様、12世紀後半から13世紀前半ごろに位置づけられる。



第16図　SBf02出土遺物実測図



第15図　SBf02平・断面図（1/80）

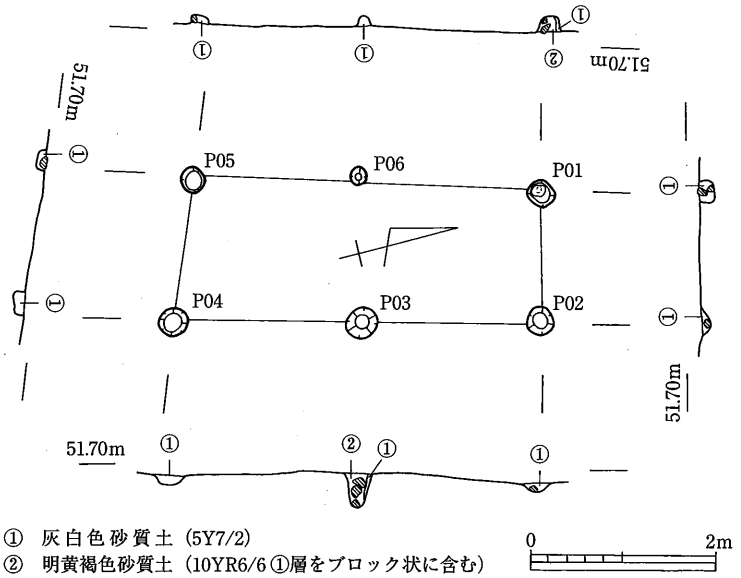
SBf04（第18図）

Ⅰ地区P18区南側中央部、SBf03と東西に並ぶように検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（2.5m）×桁行２間（4.2m）、面積は10.5㎡、主軸方位はN－12°－Eを測る。柱間は梁行2.5m、桁行2.1mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径28cm、平均深度18cmを測る。

第19図はSBf04の柱穴から出土した遺物である。２・３ともに備前の擂鉢である。柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf03と同様、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられよう。

SBf05（第20図）

Ⅰ地区M17区南側中央部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。北東隅の柱穴

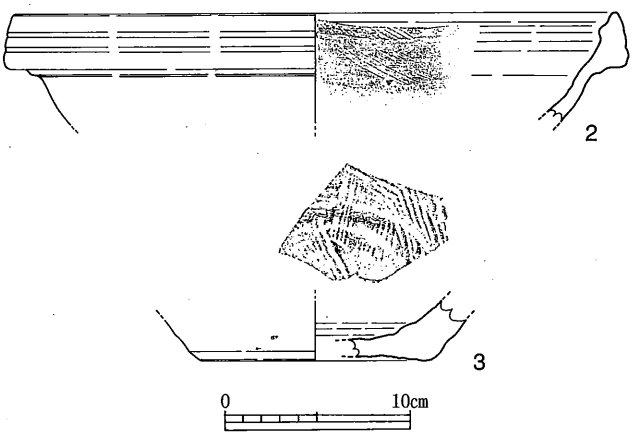


第17図　SBf03平・断面図（1/80）

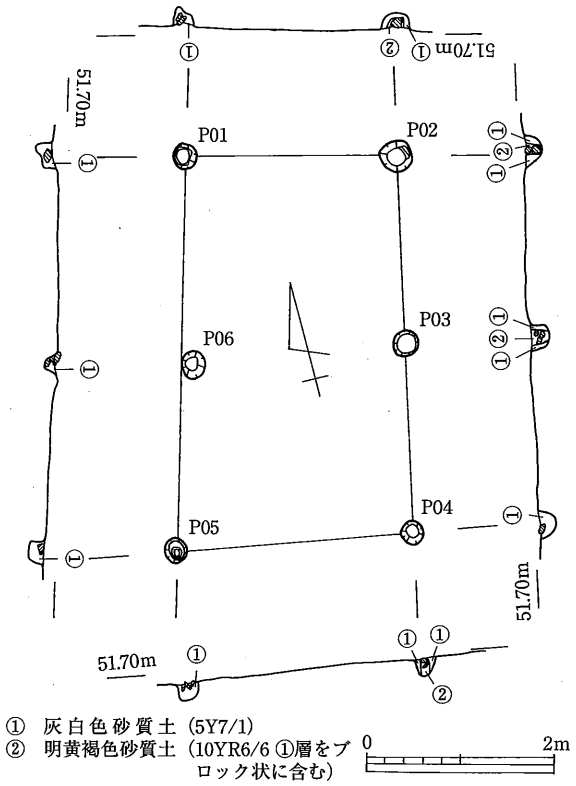
は撹乱によって、上部が破壊されていたため、残りが非常に悪い。

全体の規模は、梁行２間（3.1m）×桁行２間（4.6m）、面積は14.3㎡、主軸方位はＮ－68°－Ｅを測る。柱間は梁行1.6m、桁行2.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径21cm、平均深度22cmを測る。

第21図はSBf05の柱穴から出土した遺物である。４・５は土師器の杯の口縁部である。６・７は土師器小皿である。遺物の特徴、東側の遺構分布状況からみて、12世紀後半に位置づけられよう。



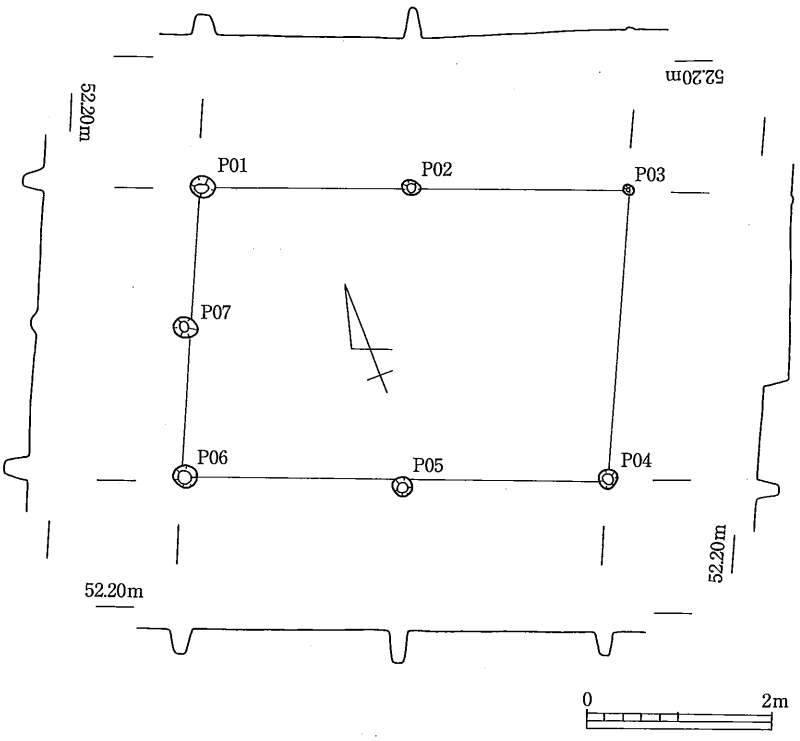
第19図　SBf04出土遺物実測図



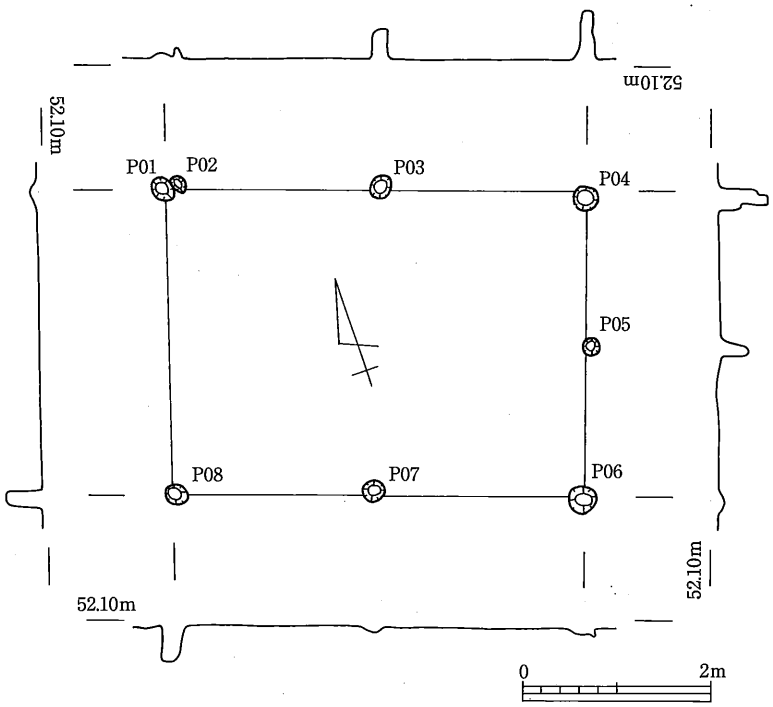
第18図　SBf04平・断面図（1/80）

SBf06（第22図）

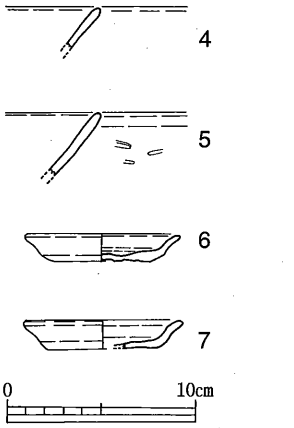
Ⅰ地区L17区南東隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（3.2m）×桁行２間（4.5m）、面積は14.4㎡、主軸方位はＮ－71°－Ｅを測る。柱間は梁行3.2m、桁行2.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径22cm、平均深度22cmを測る。南西隅の柱穴は後述するSBf07の北東隅の柱穴と重なり、建替えにあたって、それまでの柱穴を利用したものと考えられる。第23図はSBf06の柱穴から出土した遺物である。８は須恵器の椀である。型押し成形によって作られた、いわゆる瓦質土器と呼ばれていたもので十瓶山古窯跡群で製作されたものである。12世紀後半ごろの所産と考えられる。



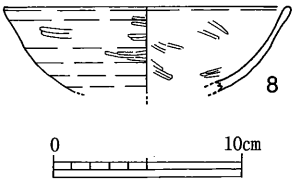
第20図　SBf05平・断面図（1/80）



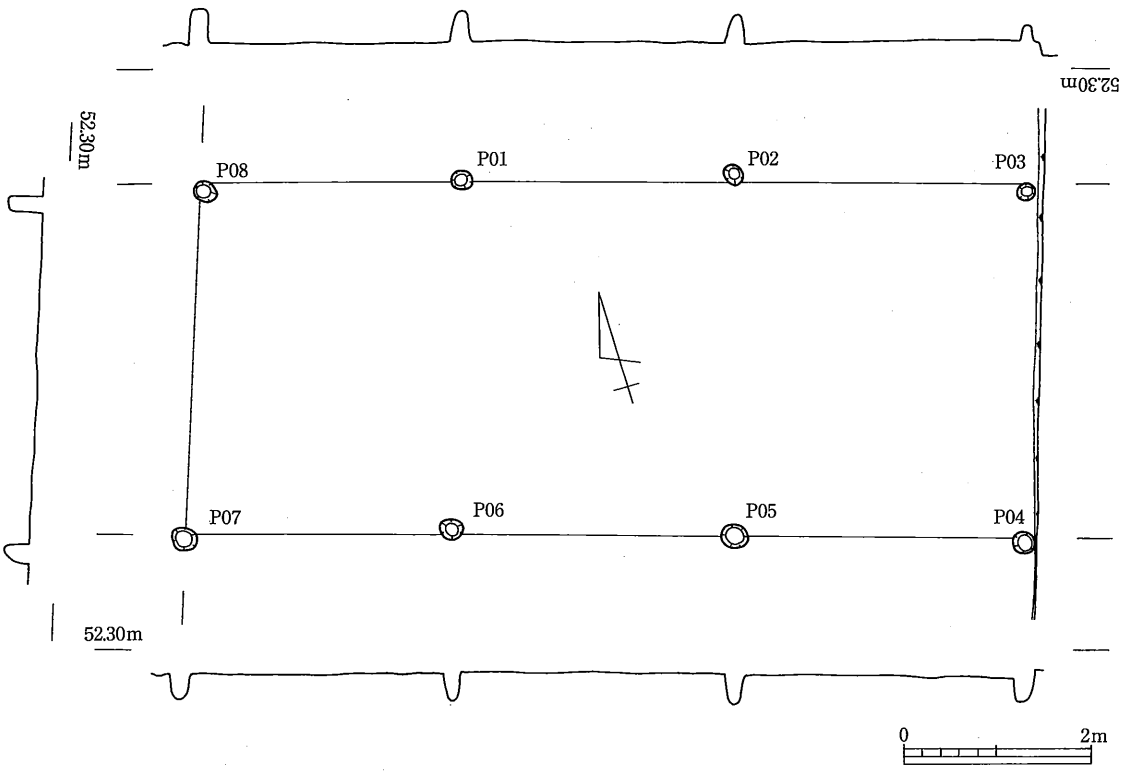
第22図　SBf06平・断面図（1/80）



第21図　SBf05出土遺物実測図



第23図　SBf06出土遺物実測図



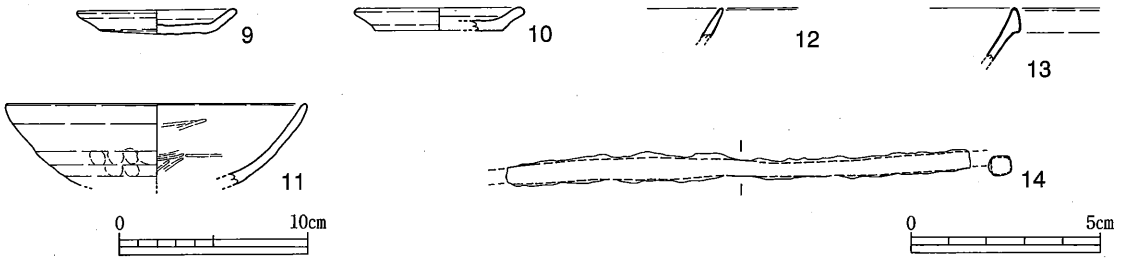
第24図　SBf07平・断面図（1/80）

SBf07（第24図）

Ⅰ地区L17区南東隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（3.7m）×桁行３間以上（９m以上）、面積は33㎡以上、主軸方位はN－72°－Eを測る。柱間は梁行3.7m、桁行３mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度28cmを測る。

前述のように、北西隅の柱穴はSBf06の南西隅の柱穴と重なっている。

出土遺物は、土器や金属器が出土している。第25図９・10は土師器の小皿である。12は須恵器の椀である。底部は欠損している。12・13は白磁碗の口縁部である。12は端部がやや尖り気味になるタイプの白磁類、13は口縁部の断面形が三角形を呈する玉縁状の白磁Ⅳ類に属するものである。いずれも12世紀後半ごろのものと考えられる。SBf06とSBf07については、一つの柱穴を共有することから同時期に並存することはあり得ないが、出土遺物からその順序を決定することは困難である。

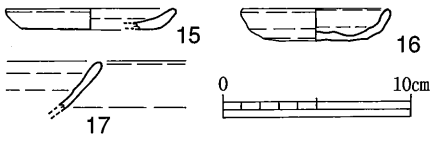


第25図　SBf07出土遺物実測図

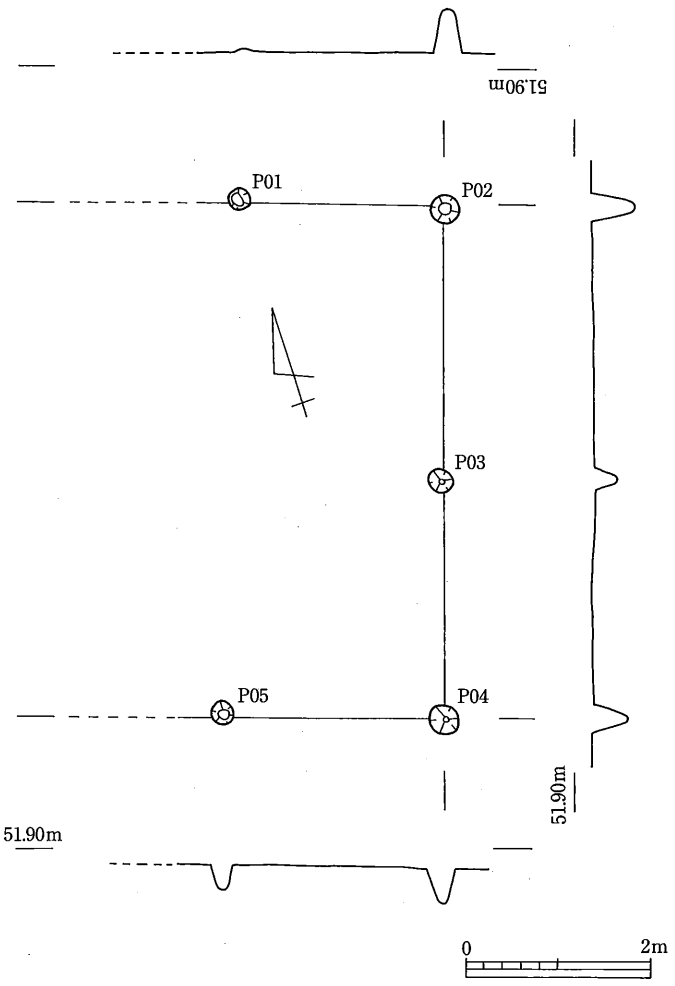
SBf08（第26図）

K地区Ｋ１区南西部やや南よりの調査区境界付近で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行２間（5.4m）×桁行２間以上（3.6m以上）、面積は19.4㎡以上、主軸方位はN－18°－Eを測る。柱間は梁行2.7m、桁行1.8mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径26cm、平均深度28cmを測る。検出したのは東端から１間分のみで、その他の部分は調査区外へ延びるため、全体の規模は不明である。

第27図はSBf08から出土した遺物である。15・16は土師器小皿である。17は土師器杯の口縁部である。遺物の特徴からみて、SBf08も12世紀後半に位置づけられる。



第27図　SBf08出土遺物実測図



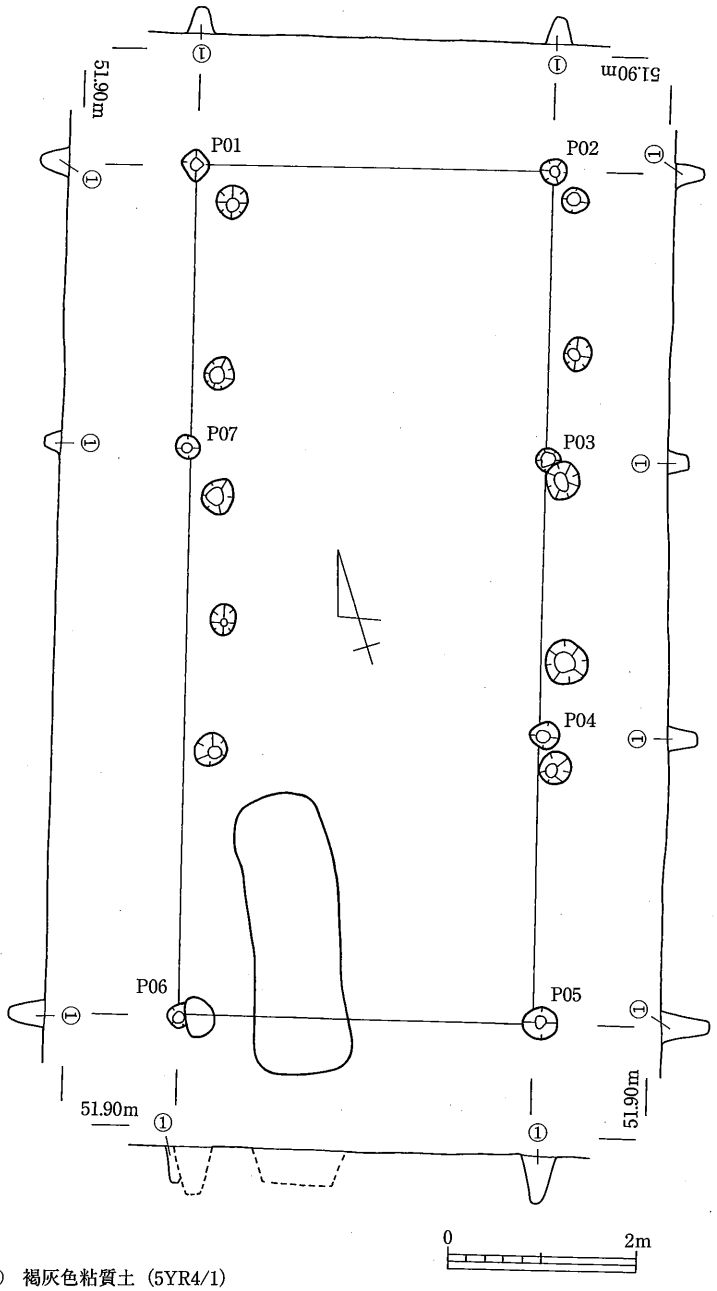
第26図　SBf08平・断面図（1/80）

SBf09（第28図）

K地区K１区中央部西よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（3.8m）×桁行３間（９m）、面積は34.2㎡、主軸方位はN－18°－Eを測る。柱間は梁行3.8m、桁行３mを測る。西側の柱列のうち、南から２つ目の柱穴は、残念ながら検出し得なかった。柱穴掘形はおおむね、円形を呈し、平均直径26cm、平均深度32cmを測る。

SBf09は、調査当初はSBf10と重なり合って検出したため、SBf10の一部として認識していた。整理作業を進める過程で、やや主軸方位が西へ偏っていることがわかり、SBf09と10は建替えによるものと認識した。掘立柱建物跡の規模からみて、09が先に構築され、その後、10に建替えられたものと考えられる。建替えられた際に、４面に庇を持つ大型のものへと変化していったと考えられる。また、建替える際に、母屋部分の南東隅の柱穴（P05）を再利用していることも判明した。

出土遺物については、第31図において、SBf10とあわせて報告するが、SBf09は10とほぼ同じ時期に構築されたものと考えられ、その時期は12世紀後半ごろと考えられる。



第28図　SBf09平・断面図（1/80）

SBf10（第29・30図）

K地区K１区中央部西よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（3.6m）×桁行６間（10.3m）、面積は37㎡を測るが、四方に庇がとりつき、その規模は梁行４間（5.7m）×桁行６間（13m）、今回報告する調査区の中で最も大きく、全体の面積は74㎡を超える大型の建物跡で、主軸方位はN－19°－Eを測る。母屋の柱間は梁行3.6m、桁行1.7mを測る。庇部分の柱間は梁行1.4m、桁行2.2mを測る。柱穴掘形は、概ね円形を呈し、母屋部分の平均直径34cm、平均深度25cmを測るが、中には50cmを超える深度をもつ柱穴も認められる。庇部分の平均直径は23cm、平均深度は25cmを測る。

第31図はSBf09・10の柱穴から出土した遺物である。SBf10のほとんどの柱穴から良好な状態の遺物が出土している。中には完形に近いものまであり、SBf10が一般の掘立柱建物跡とはその性格を若干異にする様相を呈している。

18～47は土師器小皿である。体部から口縁部にかけて外反するもの（19～22、25・26、31・33、35・

37・38、46・47）や、底部が平坦なもの、やや曲面を呈するものなどバリエーションはさまざまである。また、口径もcm～cmまでの幅が認められる。

48は瓦質土器の小皿である。型押し成形によって製作されており、体部に指押さえの痕跡が顕著に認められる。

49～59は土師器の杯である。底部と体部の境が角ばるものとやや丸みを帯びているものがある。いずれも橙色の色調の明るい、精製された胎土を利用して焼成されている。

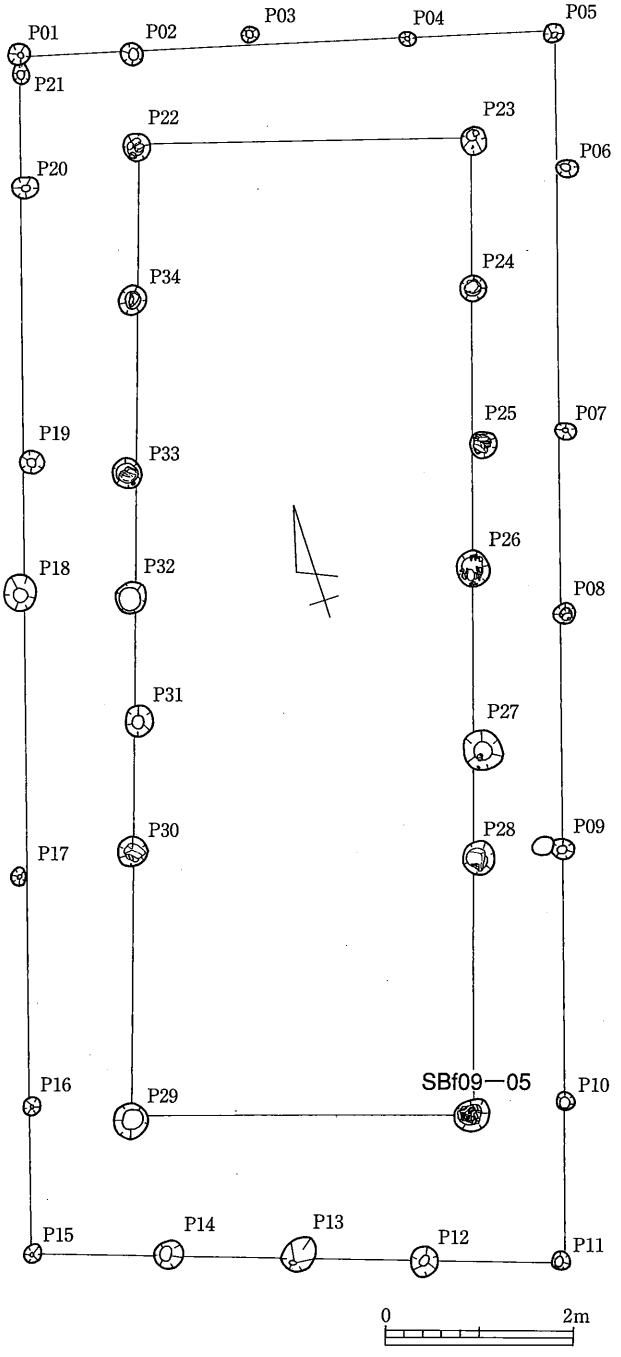
60～62は土師器の椀と考えられる。61は底部である。高台はやや内湾気味であり、これは乾燥時の重量に耐え切れなかったことを示している。

63・64は須恵器の壺の口縁部であると考えられる。65～77は須恵器の椀である。いわゆる瓦質土器に属するもので十瓶山古窯跡群で生産されたものである。木製の型を使って体部を成形しており、粘土を重ねた痕跡が歪な線となって周囲に認められる。また、外面には粘土を押し付けた際の指押えの痕跡が顕著に認められる。76は内面のヘラミガキが非常に顕著であり、丁寧な作りをしている。78～81は土師質土器の土鍋である。81には内外面ともに丁寧なハケ目が認められる。また、下半部には使用時の痕跡が黒斑となって残っている。口縁部外面には縁を成形した際の指押えが顕著に認められる。

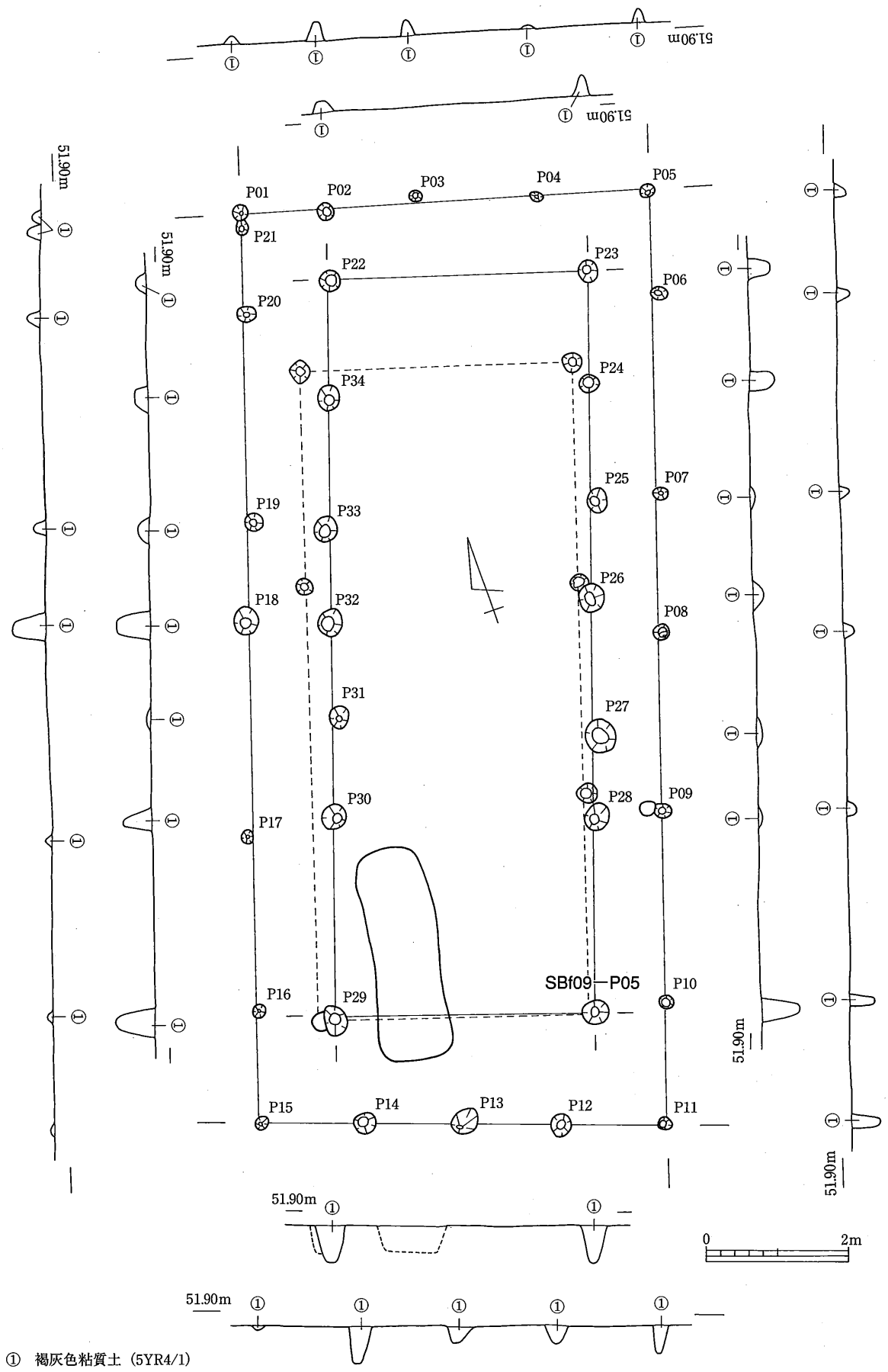
82・83は須恵器の鉢である。いずれも内面に卸目はなく、鉢として使用されたものである。色調・胎土からみて椀と同じく、十瓶山古窯跡群で生産されたものと考えられる。

84は白磁碗の口縁部である。口縁部は粘土を折り返し、断面が三角形の玉縁状を呈する。白磁Ⅳ類に属する。85は瓦の小片であるが、周囲を打ち欠き、円形に仕上げている。片面に布目圧痕が認められる。西末則遺跡では、このような瓦等を転用した円形のものが数多く認められる。

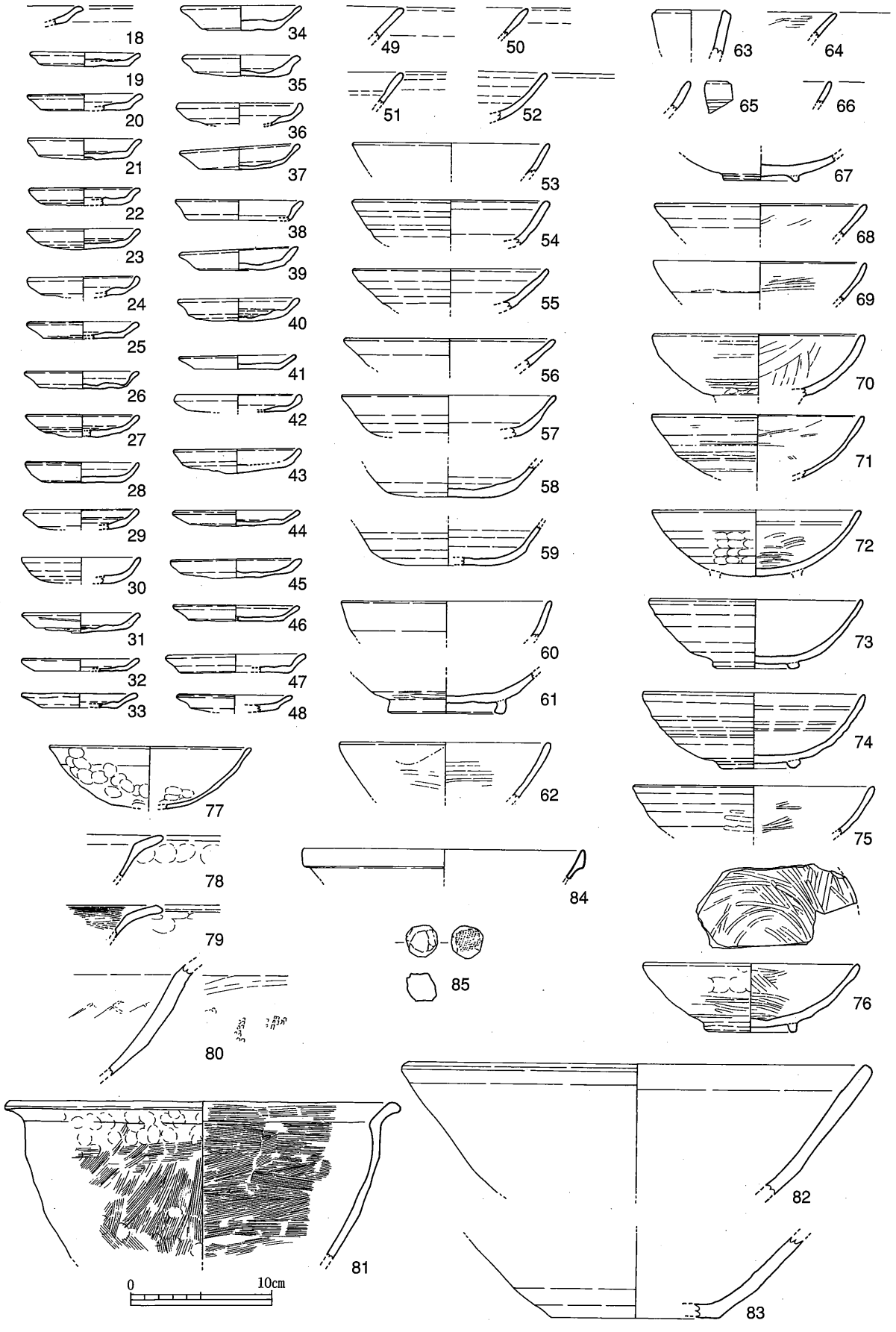
出土遺物の遺存状況が良好であることから、これらの遺物は建物の廃絶時に故意に埋められ、移動にあたっての土鎮めに利用された可能性を指摘しておく。



第29図　SBf10遺物出土状況平面図（1/80）



第30図　SBf 9・10平・断面図（1/80）

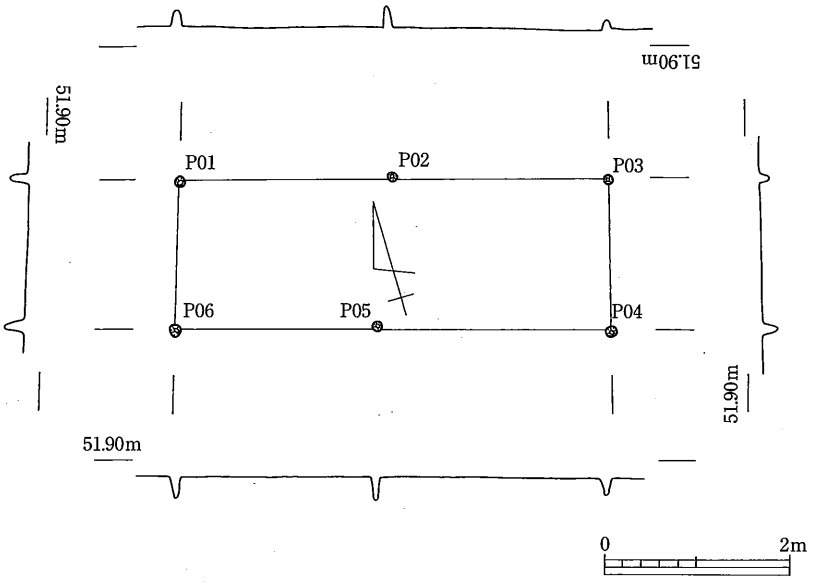


第31図　SBf09・10出土遺物実測図

SBf11（第32図）

K地区K1区南西部隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（1.6m）×桁行2間（4.6m）、面積は7.4㎡、主軸方位はN－74°－Wを測る。柱間は梁行1.6m、桁行2.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径10cm、平均深度19cmを測る。

出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、周辺の掘立柱建物跡と同じく古代末期に位置づけられよう。

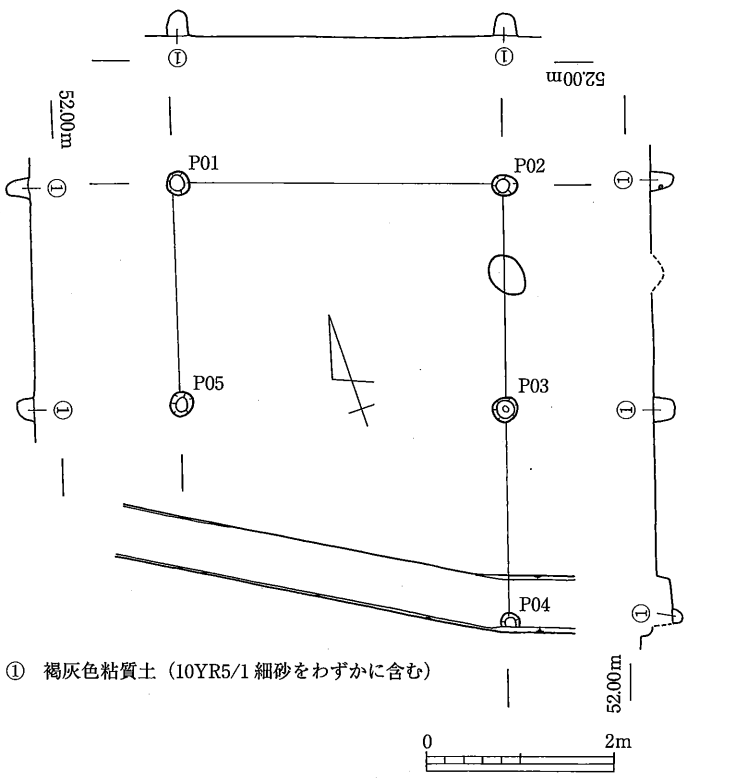


第32図　SBf11平・断面図（1/80）

SBf12（第33図）

K地区K1区南西隅やや東よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。南半部は調査区外へ延びる。梁行1間（3.5m）×桁行3間以上（4.7m）、面積は16.5㎡以上、主軸方位はN－19°－Eを測る。柱間は梁行3.5m、桁行1.6mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径24cm、平均深度22cmを測る。

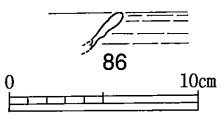
第34図86は土師器小皿の口縁部である。端部はやや肥厚する。SBf12も周辺の掘立柱建物跡と同じく、古代末期に位置づけられよう。



第33図　SBf12平・断面図（1/80）

SBf13（第36図）

K地区K2区北西隅で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3.1m）×桁行3間（6m）、面積は18.6㎡、主軸方位はN－5°－Eを測る。柱間は梁行3.1m、桁行2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径25cm、平均深度28cmを測る。



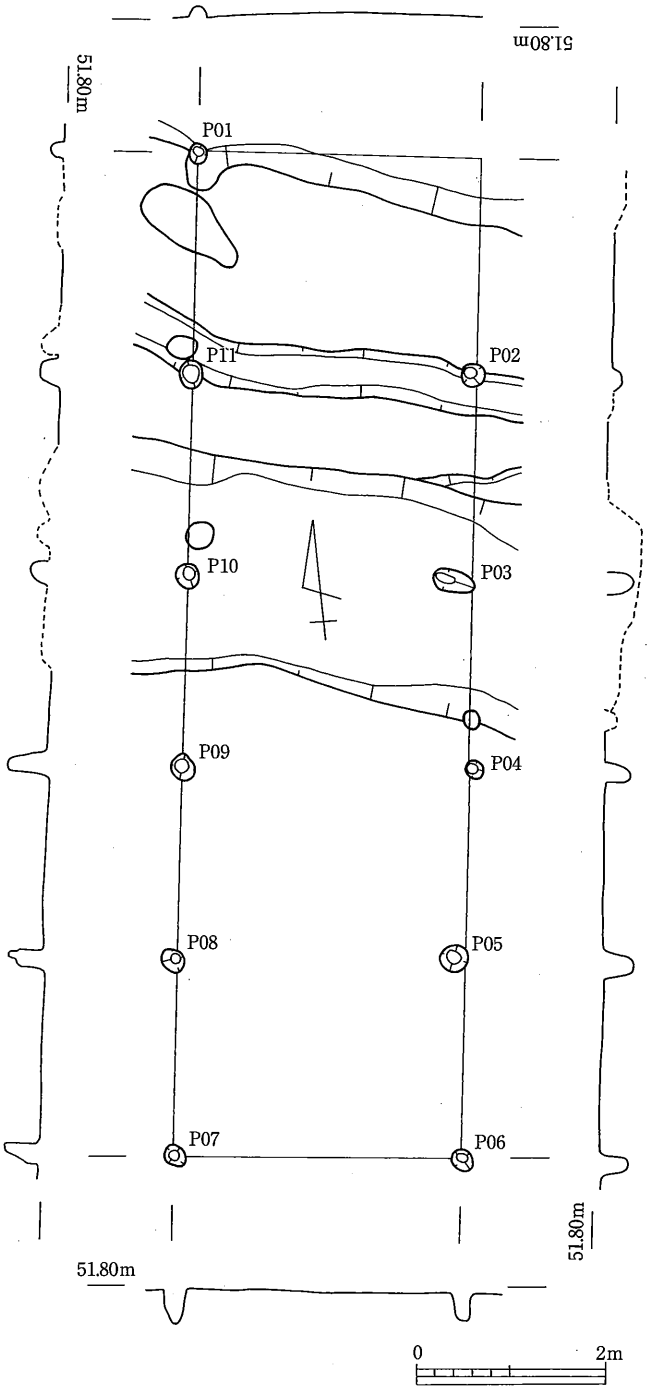
第34図　SBf12出土遺物実測図

北西隅の柱穴は、SEf03にその一部を破壊されている。SEf03は近世後半に廃絶したと考えられるため、SBf13は近世後半以前の所産であるといえる。第37図87は陶器の碗である。底部のみで内外面ともに施釉されている。遺物の特徴などからみて、SBf13は、近世中・後期ごろに位置づけられる。

SBf14（第35図）

K地区K2区北西隅やや東よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3.1m）×桁行5間（6.7m）、面積は21㎡、主軸方位はN－7°－Eを測る。柱間は梁行3.1m、桁行1.3mを測る。調査時には、建物との認識ができず、結果、北東隅の柱穴を検出し得なかった。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径24cm、平均深度27cmを測る。

SBf14はかなり長大な建物跡で、居住用というよりも一種の倉庫的な用途を考えることができよう。出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf13と同様、近世前半もしくは中期ごろに位置づけられる。

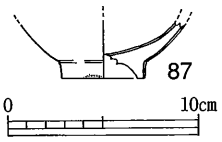


第35図　SBf14平・断面図（1/80）

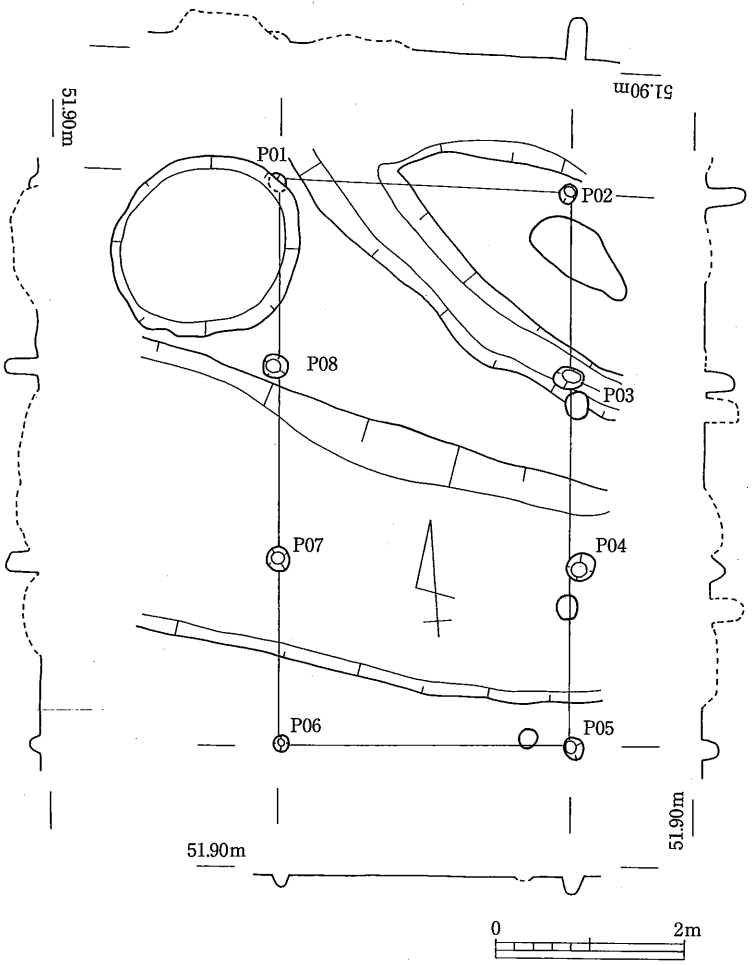
SBf15（第38図）

K地区K2区北西隅やや東よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3.1m）×桁行3間（6m）、面積は18.6㎡、主軸方位はN－80°－Wを測る。柱間は梁行3.1m、桁行2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径19cm、平均深度19cmを測る。

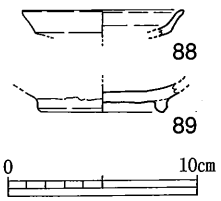
第39図はSBf15から出土した遺物である。88は土師器の小皿である。口縁部はやや外反する。89は土師器の椀の底部である。高台はほぼ直立する。出土遺物の特徴や柱穴の埋土、主軸方位からみて、SBf15は、12世紀後半から13世紀にかけての所産と考えられる。



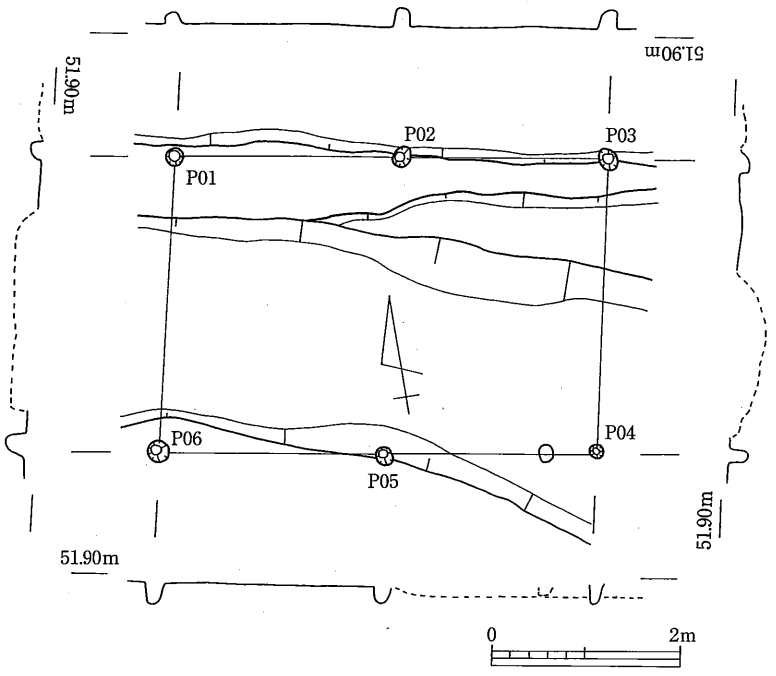
第37図　SBf13出土遺物実測図



第36図　SBf13平・断面図（1/80）



第39図　SBf15出土遺物実測図



第38図　SBf15平・断面図（1/80）

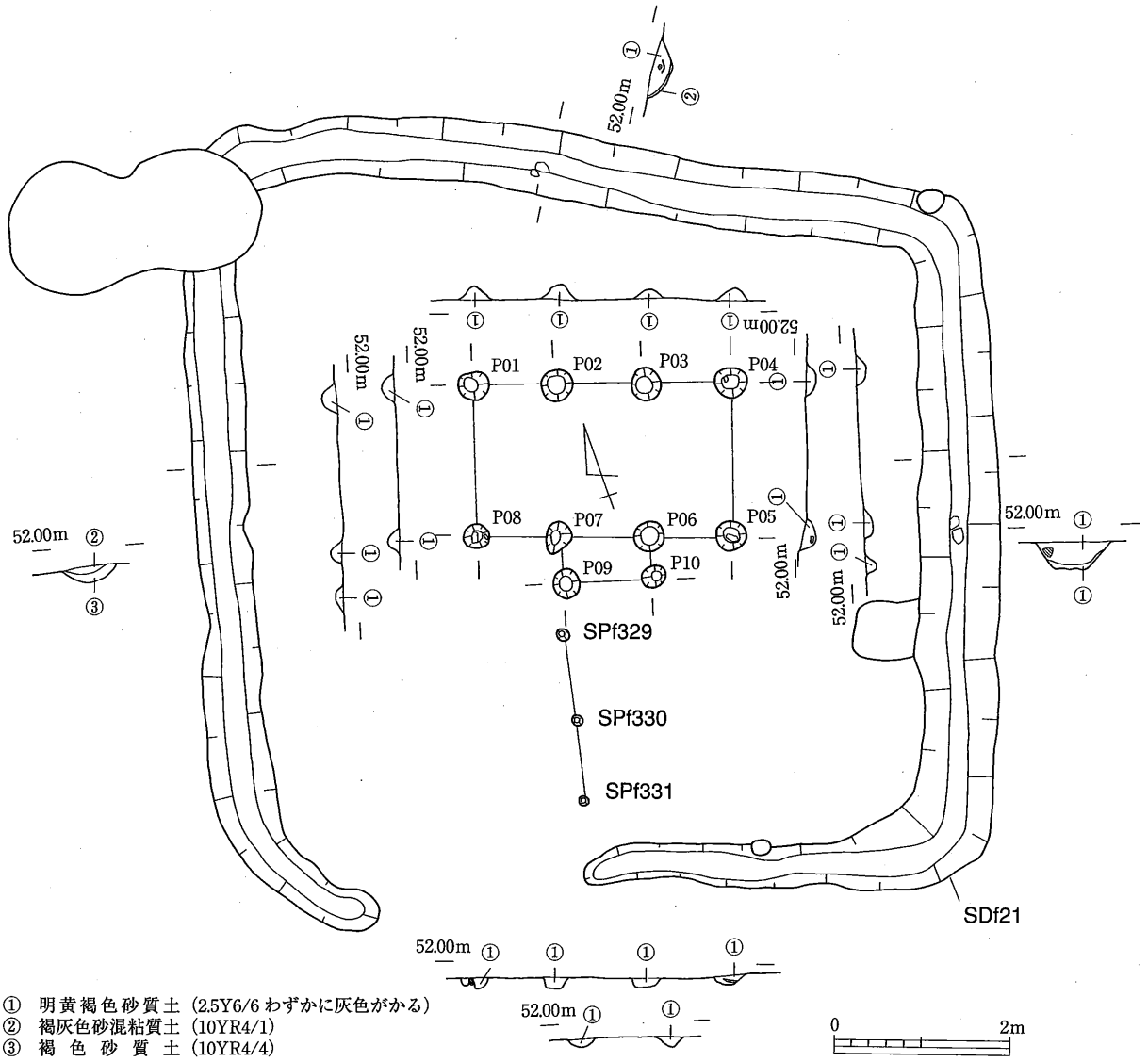
SBf16（第40図）

K地区K２区中央部やや西よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（1.7m）×桁行３間（2.9m）、面積は4.9㎡、主軸方位はN－70°－Wを測る。柱間は梁行1.7m、桁行１mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径32cm、平均深度12cmを測る。また、南側に柱穴２つ分の張出し状のものが認められる。柱穴の直径に比べて、深度が浅いことから、恒常的な住居および倉庫とは考えがたく、また規模も非常に小さいことから、恒久的な建物としてではなく、一時的な建物の利用が考えられる。

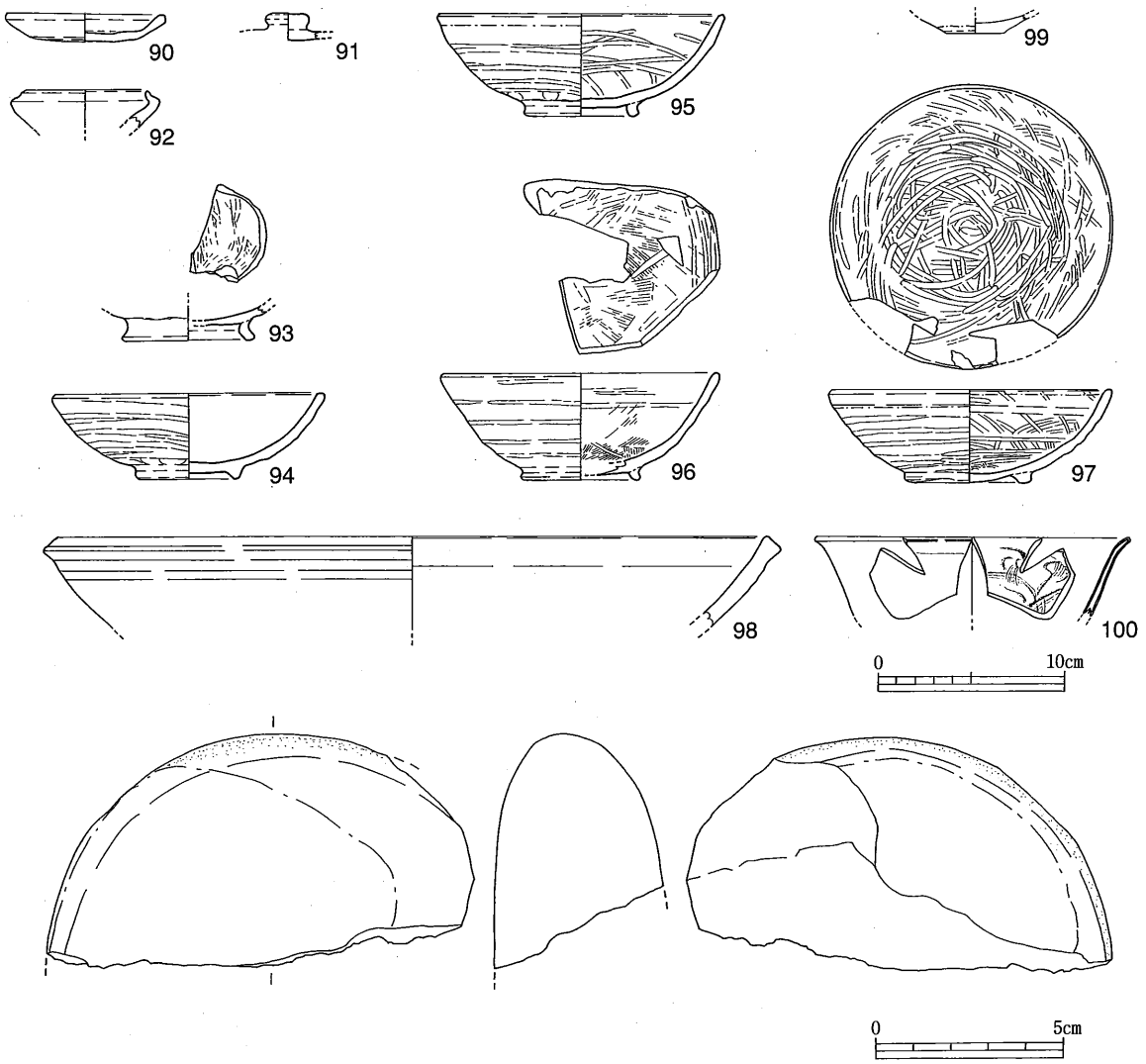
また、建物跡から東西にそれぞれ３m、北側に２m隔てた周囲に幅50～80cm、深度30～40cmの溝状遺構（SDf21）が巡っている。本溝状遺構は南側が一部、おおよそ１mほど陸橋状に途切れている部分が認められ、建物域への入口である可能性が高い。

出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、建物跡自体の詳細な廃絶時期は不明である。しかしながら、周囲を巡っているSDf21からは多くの遺物が出土している。第41図はSDf21から出土した遺物である。90は土師器の小皿である。91は須恵器の蓋である。扁平なつまみを持つ。92は土師器の薬壺の口縁部と考えられる。外面が赤褐色を呈し、丹塗りの可能性がある。93～97は軟質の須恵器の椀である。いわゆる西村型土器椀という十瓶山産の土器である。98は須恵質のこね鉢である。99は青磁皿、100は青磁椀である。100には内面に陰刻花文が認められる。101は擦痕の認められる砂岩である。

出土遺物の特徴からみて、SBf16は古代末期から中世前半のものと考えられる。



第40図　SBf16・SDf21平・断面図（1/80）



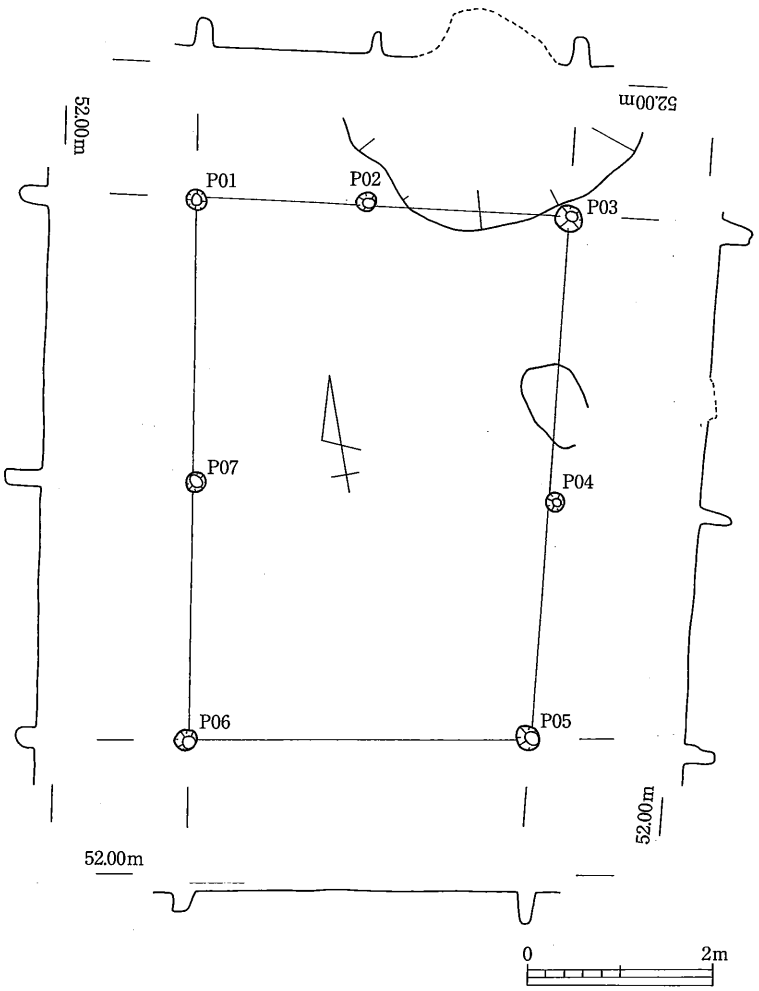
第41図　SDf21出土遺物実測図

SBf17（第42図）

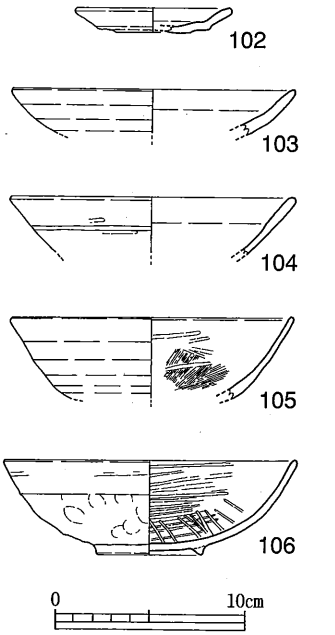
K地区K2区中央部やや北よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行2間（4m）×桁行2間（5.8m）、面積は23.2㎡、主軸方位はN－10°－Eを測る。柱間は梁行2m、桁行2.9mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径22cm、平均深度30cmを測る。

第43図はSBf17から出土した遺物である。102は、土師器の小皿である。103は土師器の杯の口縁部である。104～106は軟質の須恵器椀である。104・105は高台部分を欠く。105は内面にわずかに暗文状の痕跡が認められる。106は内面見込部に放射状に暗文が認められる。また、外面の下半部に指押えが明瞭に認められ、内面の平滑さとあわせ考えると、内型を用いた底部押し出し技法によって成形されたと考えられる。

これらの遺物の特徴や柱穴の埋土、主軸方位からみて、SBf17はSBf18・19などと同様、12C後半から13C前半に位置づけられよう。



第42図　SBf17平・断面図（1/80）



第43図　SBf17出土遺物実測図

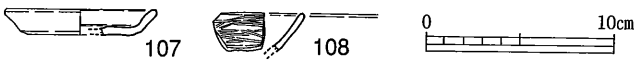
SBf18（第45図）

K地区K2区中央部やや北よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡でSBf17のすぐ東側にあたる。梁行1間（3.8m）×桁行3間（7m）、面積は27㎡、主軸方位はN－73°－Wを測る。柱間は梁行3.8m、桁行2.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径25cm、平均深度33cmを測る。

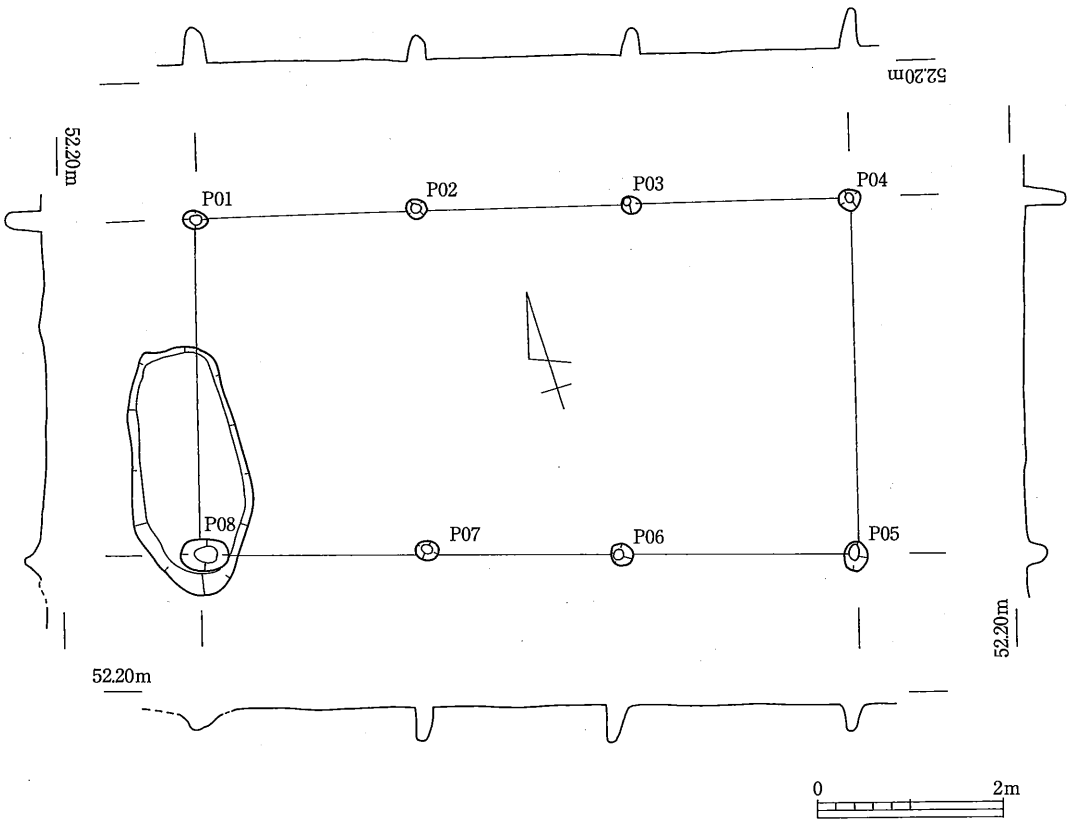
また、北側のI地区へ延びる溝状遺構SDf00がSBf18の北東隅をクランク状に巡ることから、SDf00とSBf18が同時期に並存し、かつ、雨落ち溝のような役割を果たしていたと考えられる。

第44図はSBf18から出土した遺物である。107は土師器の小皿である。108は軟質の須恵器椀の口縁部と考えられる。

出土遺物、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf18はSBf17等と同様、12C後半から13C前半ごろに位置づけられよう。



第44図　SBf18出土遺物実測図



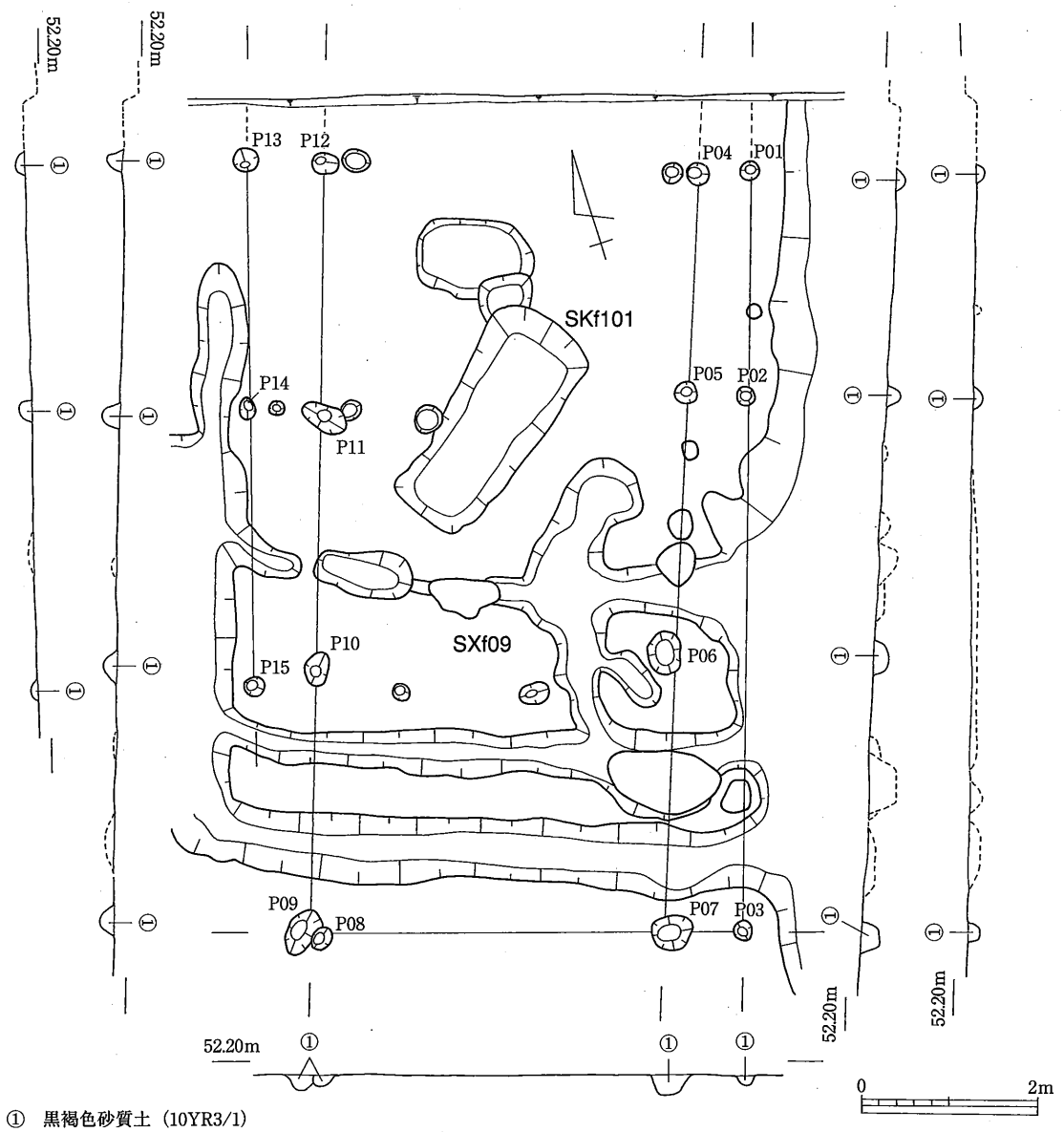
第45図　SBf18平・断面図（1/80）

SBf19（第46図）

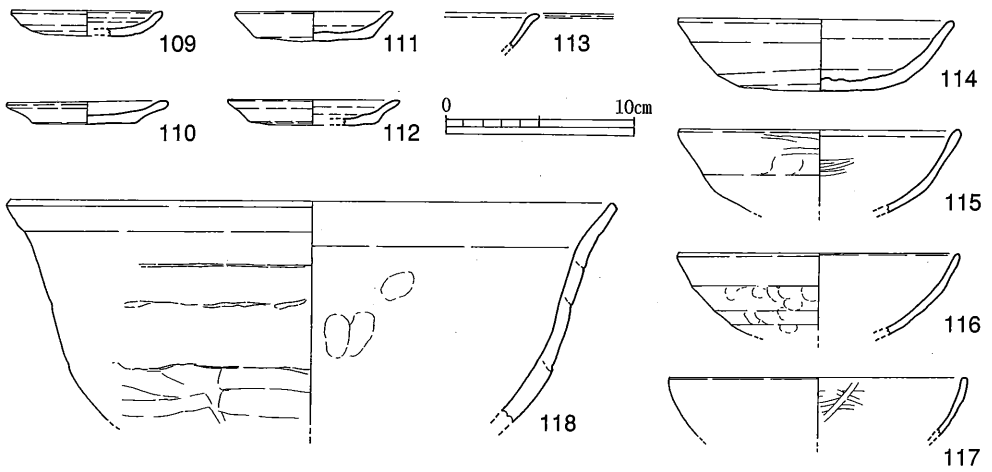
K地区K２区北東部で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。南北２面に庇を持つ。母屋部分の梁行１間（4.1m）×桁行3間以上（8.5m以上）、柱間は梁行4.1m、桁行2.8mを測る。庇部分を含めた規模は、梁行３間（5.6m）×桁行3間以上（8.5m以上）、面積は47.6㎡以上で主軸方位はN－21°－Eを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径29cm、平均深度15cmを測る。北へ延びる溝状遺構（SDf15）と東側の柱列が平行であることから、SDf15と同時期の可能性が高い。また、中央部に凸形を呈する遺構（SXf09）が認められる。この遺構は深さ５cm未満の非常に浅いもので炭化物を多量に含んでいる。その下層には地面が強い被熱により、赤褐色化しており、小型の鍛冶炉である可能性が高い。SXf03についての詳細は後述するが、位置関係が建物の中軸線に一致すること、すぐそばに金属滓を含む長大な土坑（SKf101）があることから、小規模な鍛冶作業を行っていた建物の可能性が高い。

第47図はSBf19から出土した遺物である。109～112は土師器の小皿である。113・114は土師器の杯と考えられる。115～117は軟質の須恵器椀である。いずれも内面には暗文状の痕跡、外面下半部には指押えの痕跡が認められ、十瓶山産と考えられる。

出土遺物の特徴や柱穴の埋土、主軸方位からみて、12C後半から13C前半に位置づけられよう。



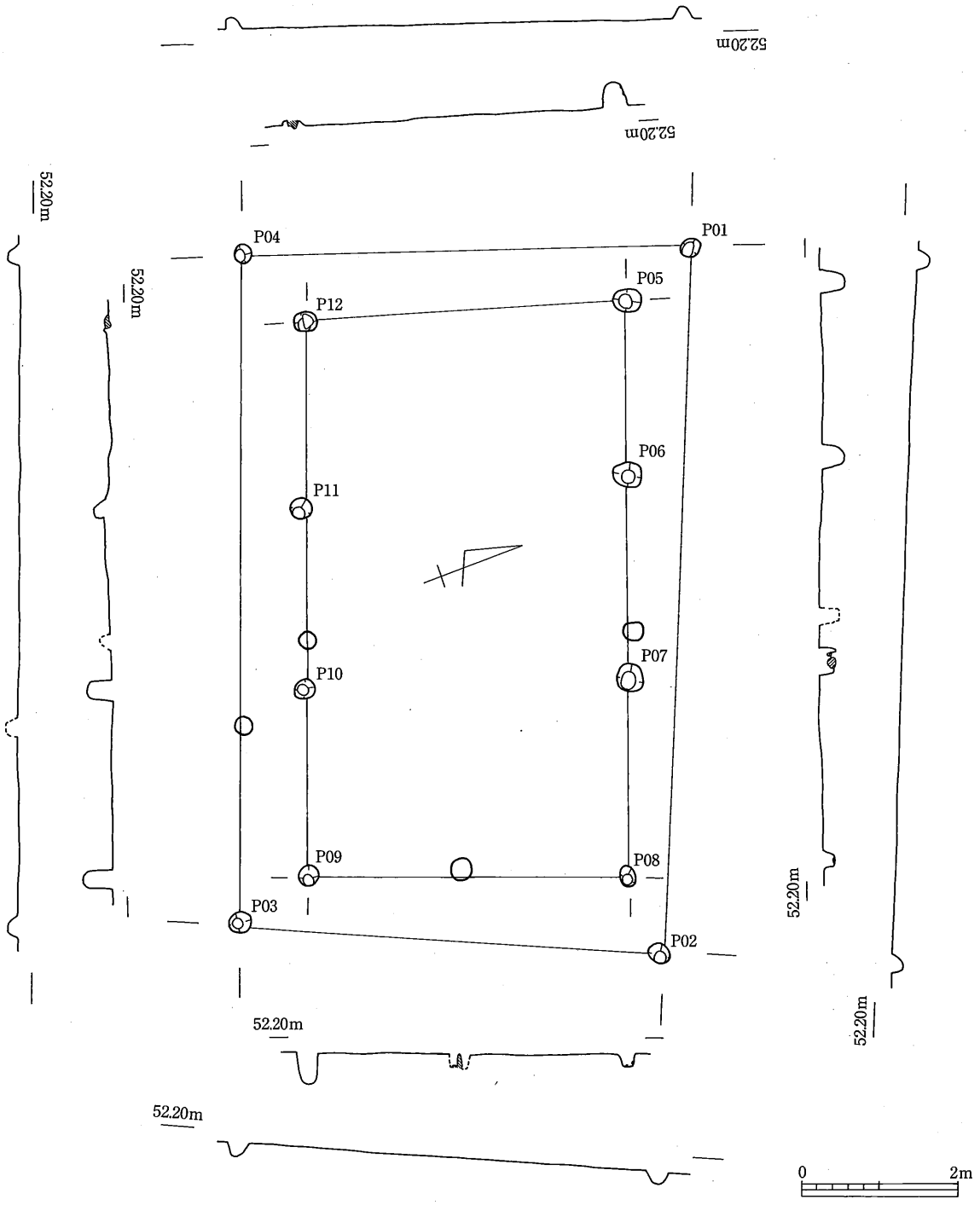
第46図　SBf19平・断面図（1/80）



第47図　SBf19出土遺物実測図

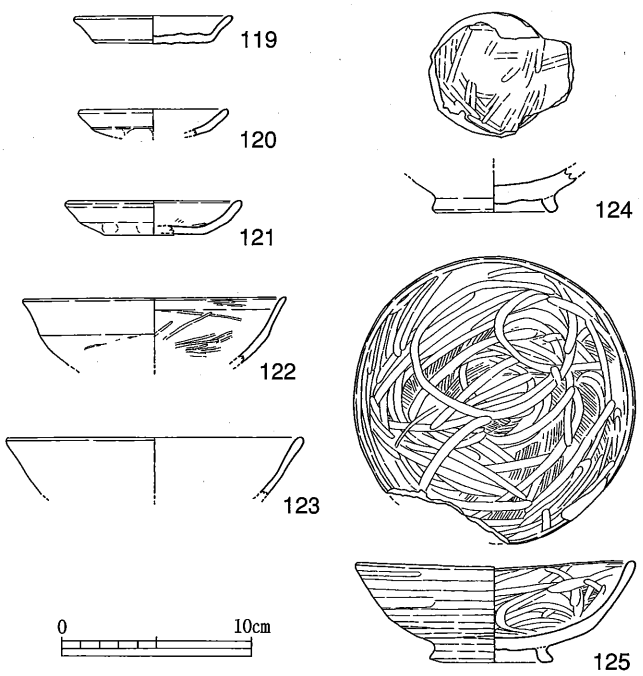
SBf20（第48図）

K地区K２区中央部やや南よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。四方に庇を持つ。母屋部分の梁行１間（4m）×桁行３間（7.2m）、柱間は梁行4m、桁行2.4mを測る。庇部分を含めた規模は、梁行5.6m、桁行8.8m、面積は49.3㎡、主軸方位はN－70°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径27cm、平均深度21cmを測る。



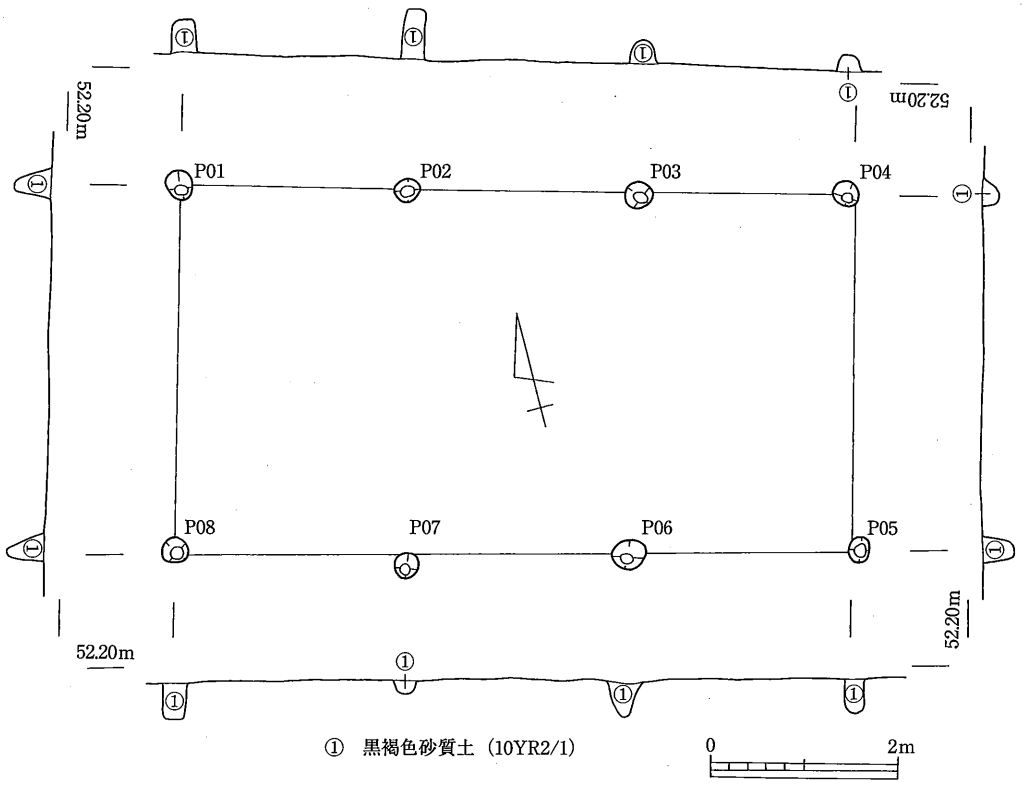
第48図　SBf20平・断面図（1/80）

第49図はSBf20から出土した遺物である。119は土師器の小皿である。底部と体部の屈曲部が明瞭で、角張っている。120・121は軟質の須恵器小皿、いわゆる西村型土器の一種である。底部の屈曲部がやや丸みを帯びており、121は底部中央がやや盛り上がる。122は瓦器椀である。内面にはわずかに暗文状の痕跡が認められる。口縁部は体部中央からやや外反させ、やや三角形状に端部を仕上げている。和泉型瓦器椀であろう。123・124はいずれも内外面ともに黒色を呈する黒色土器A類の椀である。123は口縁部のみしか残存していないが、端部は体部からほぼ直線状に丸くおさめる。124は高台部分のみしか残存していないが、内面の見込部分には円を描くように暗文状の痕跡が認められる。125は軟質の須恵器、いわゆる西村型土器椀である。ほぼ完形で、内面にはヘラ状の工具でみがいた痕跡が顕著に認められる。外面にも同様の痕跡が認められ、非常に丁寧な成形をしていることがわかる。高台は幅広でやや外側を向き、ふんばっている。



第49図　SBf20出土遺物実測図

出土遺物の特徴や、柱穴の埋土、主軸方位からみて、SBf20も周辺の掘立柱建物跡と同様、12C後半から13C前半の所産と考えられるが、あまり年月を経ずに建て替えをしていた形跡が認められ、これについては、後述する。

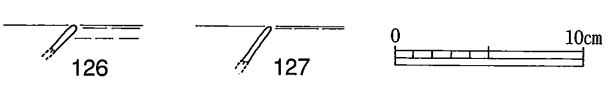


第50図　SBf21平・断面図（1/80）

SBf21（第50図）

K地区K3区中央部やや北よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3.9m）×桁行3間（7.2m）、面積は28㎡、主軸方位はN－71°－Wを測る。柱間は梁行3.9m、桁行2.4mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径29cm、平均深度32cmを測る。

周辺には、同規模の掘立柱建物跡が7棟ほど集中



第51図　SBf21出土遺物実測図

しているが、重なり合って検出したことから、何度かの建て替えを行っている。主軸方位からいえば、SBf21はSBf20とほぼ同じ方位を示している。

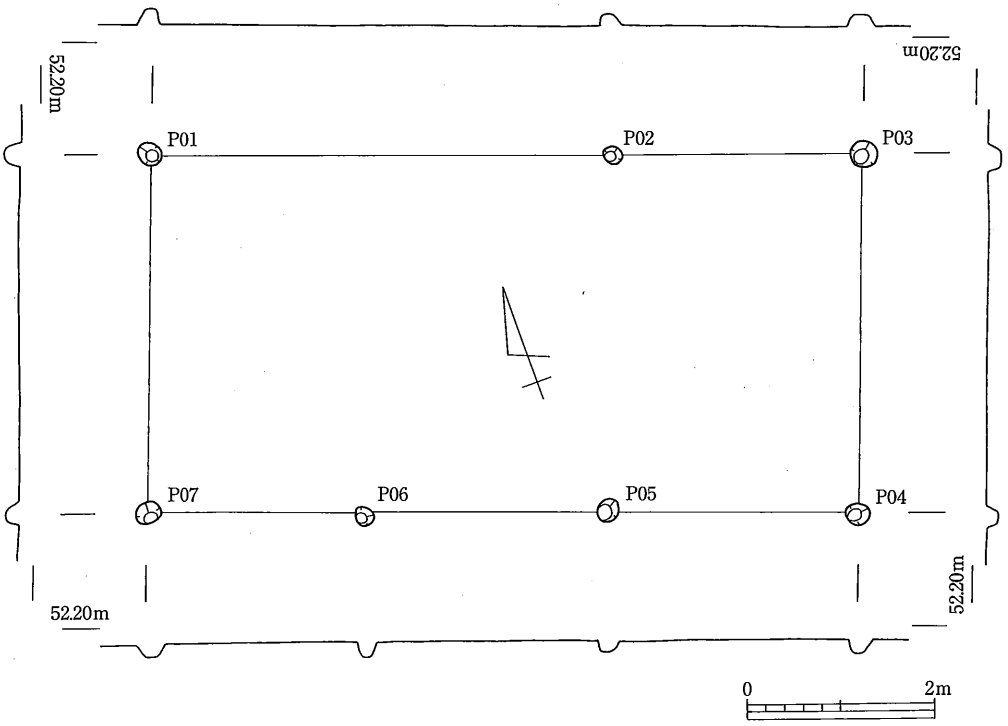
第51図はSBf21から出土した遺物である。126は土師器の小皿である。口縁部しか残っていないが、端部は丸くおさめる。127は須恵器の杯の口縁部である。端部は丸くおさめる。

出土遺物の特徴や柱穴の埋土、主軸方位からみて、SBf20と同様、12C後半から13C前半に位置づけられよう。

SBf22（第52図）

K地区K2区中央部やや南西よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3.8m）×桁行3間（7.6m）、面積は29㎡、主軸方位はN－70°－Wを測る。柱間は梁行3.8m、桁行2.5mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径23cm、平均深度13cmを測る。

出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf02と同様、中世前半に位置づけられる。

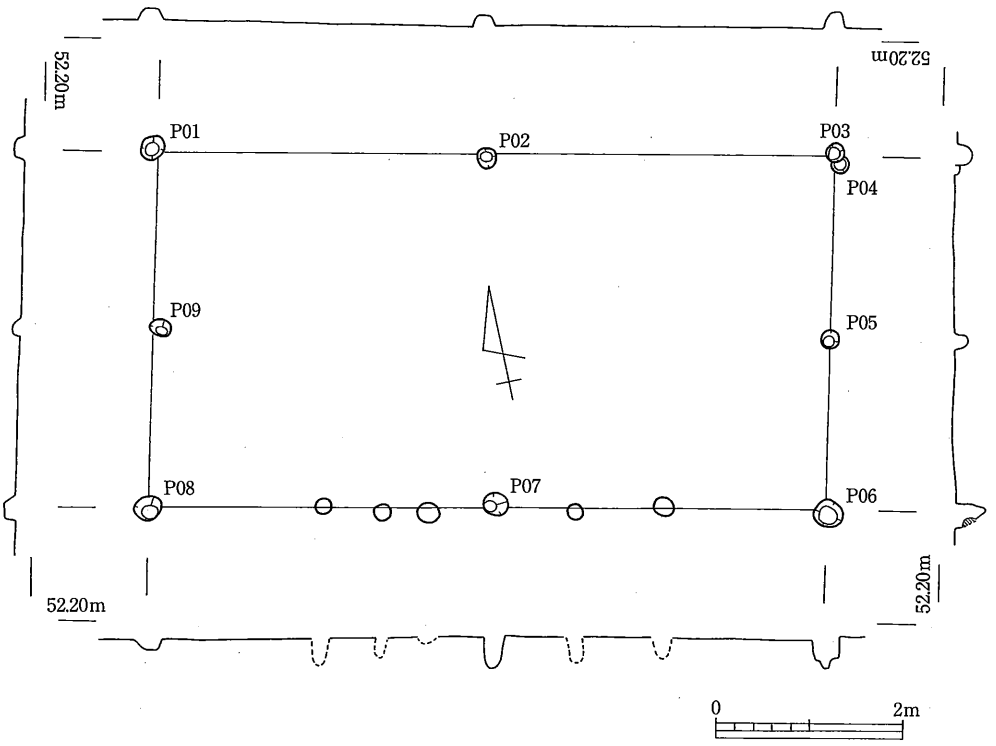


第52図　SBf22平・断面図（1/80）

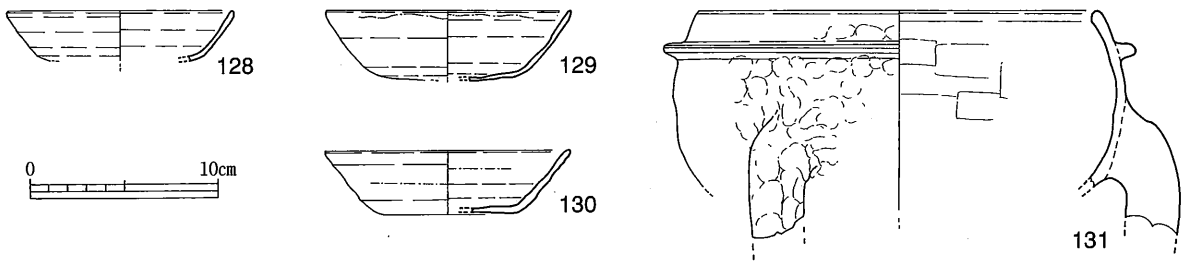
SBf23（第53図）

K地区K2区中央部やや南よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行2間（3.8m）×桁行2間（7.2m）、面積は27.4㎡、主軸方位はN－78°－Wを測る。柱間は梁行1.9m、桁行3.6mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径23cm、平均深度16cmを測る。

第54図はSBf23から出土した遺物である。128～130は土師器の杯である。131は土師質土器の三足付土釜である。これら遺物の特徴や柱穴の埋土や主軸方位からみて、中世前半に位置づけられる。



第53図　SBf23平・断面図（1/80）

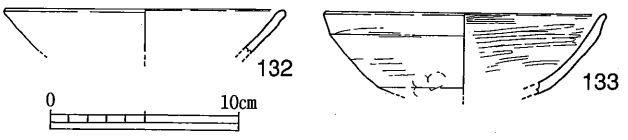


第54図　SBf23出土遺物実測図

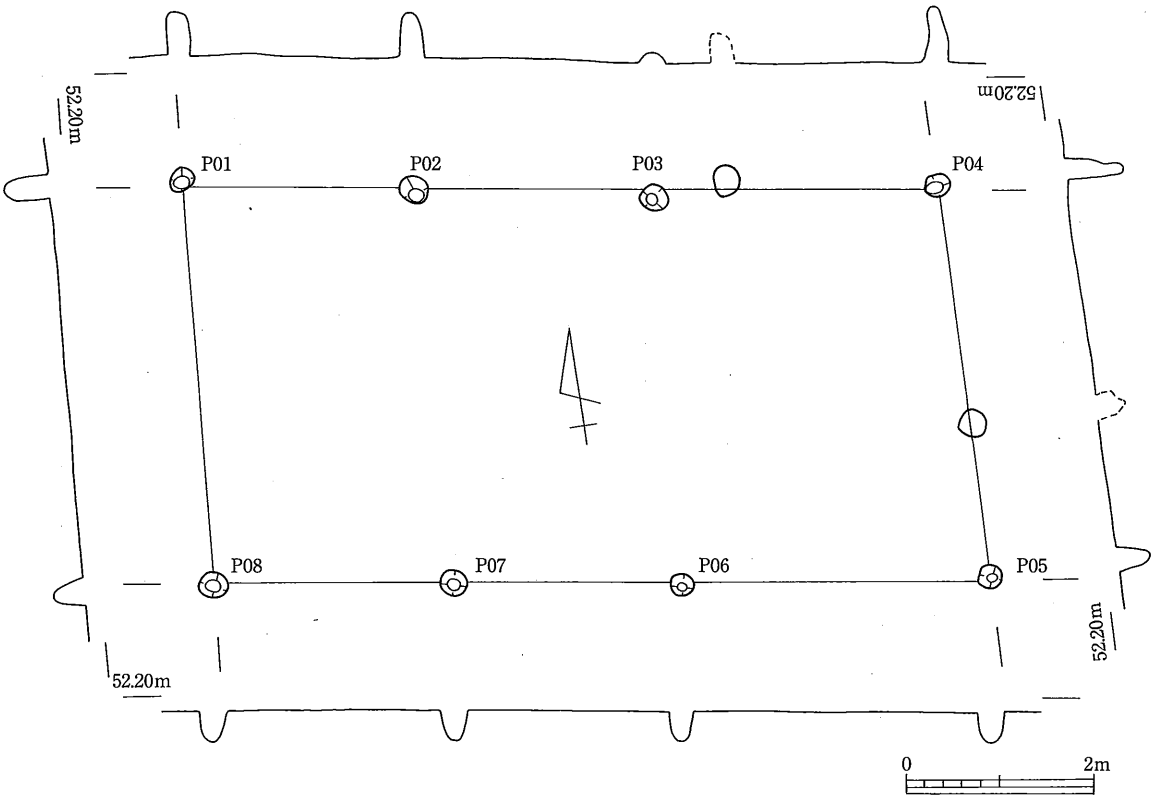
SBf24（第56図）

K地区K２・３区ほぼ中央部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（4.2m）×桁行３間（8.6m）、面積は36㎡、主軸方位はN－81°－Wを測る。柱間は梁行4.2m、桁行2.9mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径28cm、平均深度39cmを測る。

第55図はSBf24から出土した遺物である。132は土師器の杯である。133は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。下半部は指押さえが顕著に見られ、上半部はやや肥厚する。十瓶山山麓で生産されたものと考えられる。これら遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、本建物跡も中世前半に位置づけられる。



第55図　SBf24出土遺物実測図

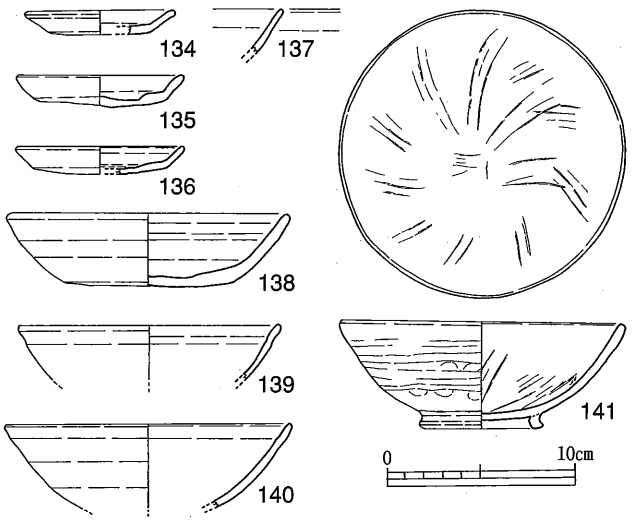


第56図　SBf24平・断面図（1/80）

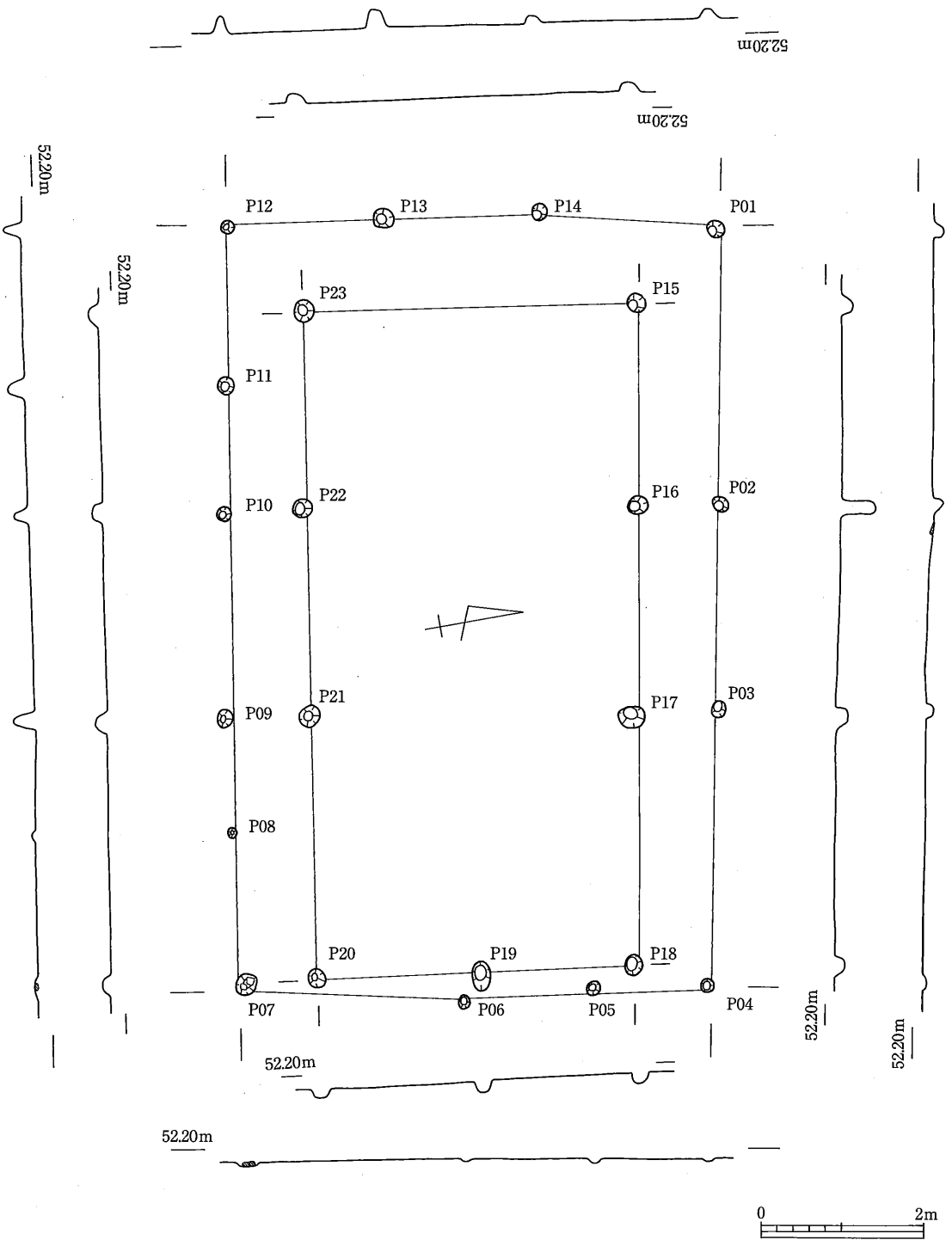
SBf25（第58図）

K地区K２・３区ほぼ中央部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。四方に庇を持つ。母屋部分の梁行１間（4.1m）×桁行３間（8.2m）、柱間は梁行4.1m、桁行2.7mを測る。庇部分を含めた規模は、梁行6m、桁行9.4m、面積は56.4㎡、主軸方位はN－81°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径22cm、平均深度14cmを測る。

第57図はSBf25から出土した遺物である。134～136は土師器の小皿である。137～140は土師器の杯、141は軟質の須恵器椀である。141は内面にやや円を描くように放射状にハケ目が認められ、外面も丁寧にナデが施され、しっかりとした作りとなっている。これら遺物の特徴や柱穴の埋土や主軸方位からみて、本建物跡も古代末期から中世前半に位置づけられる。



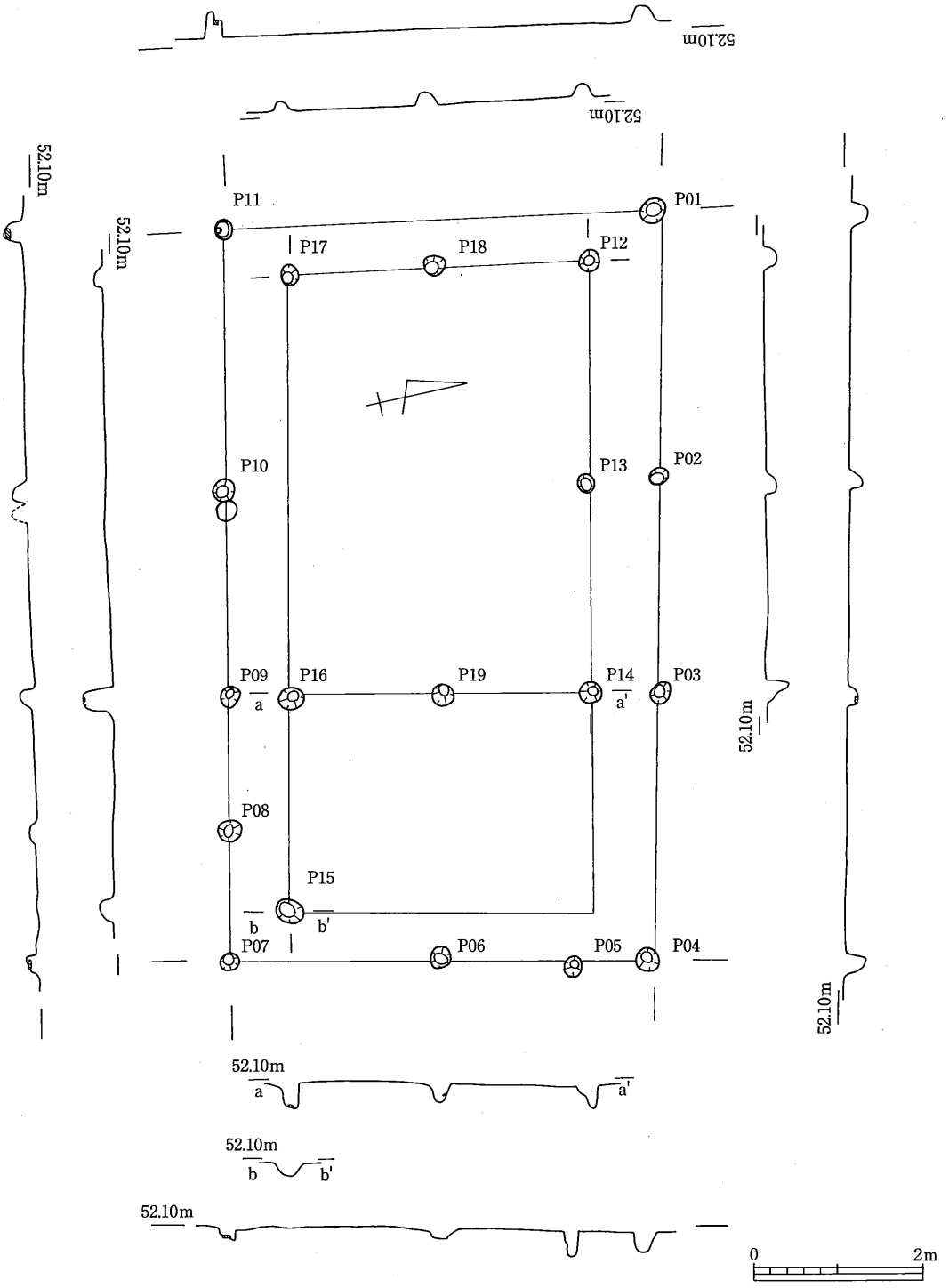
第57図　SBf25出土遺物実測図



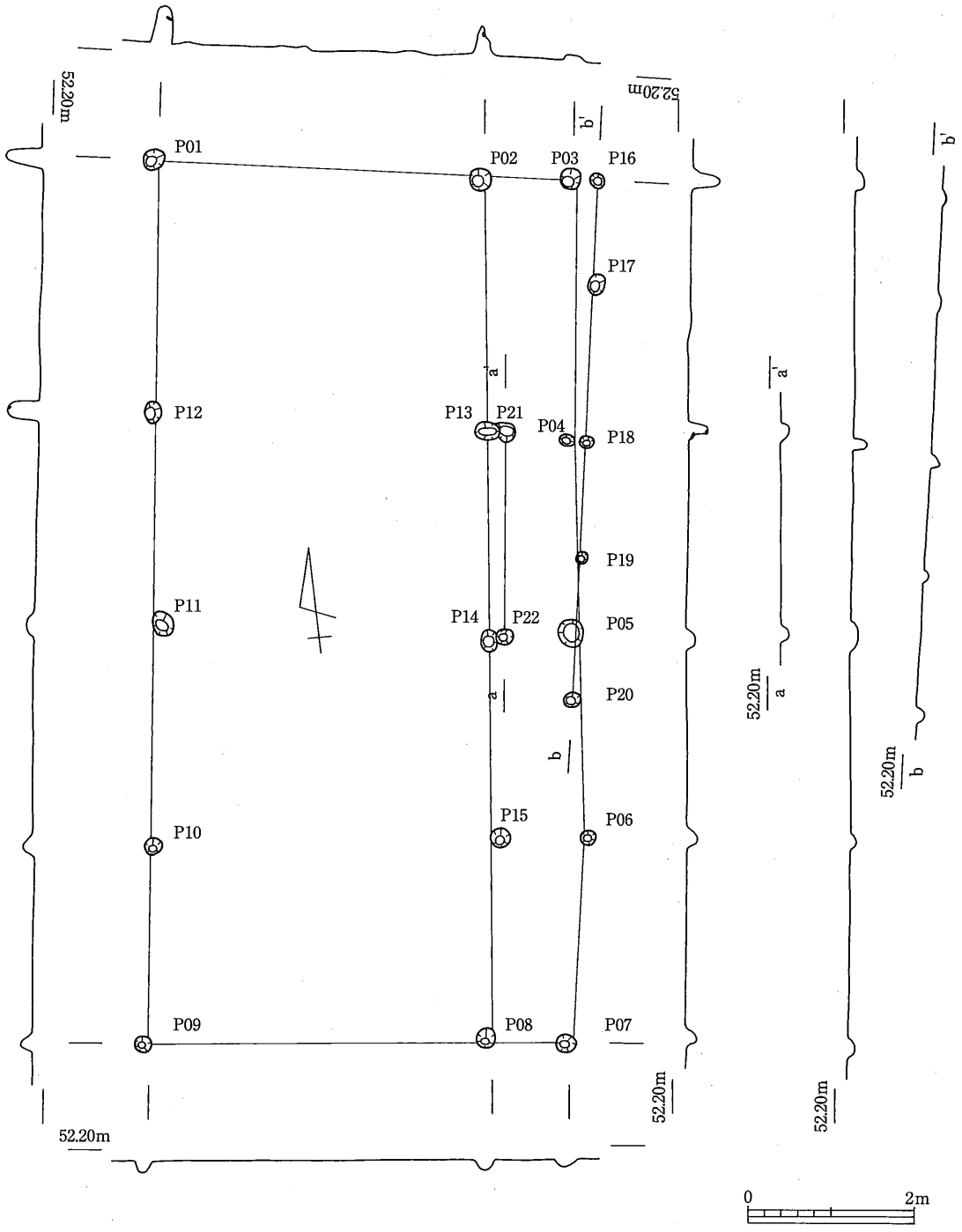
第58図　SBf25平・断面図（1/80）

SBf26（第59図）

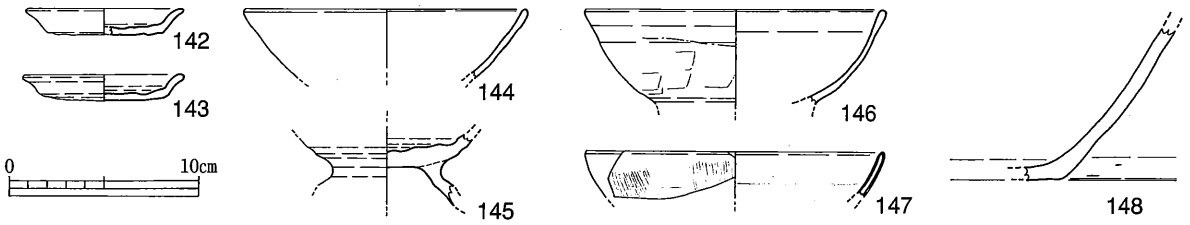
K地区K２区中央部やや南東よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。四方に庇を持つ。母屋部分の梁行２間（3.6m）×桁行3間（7.6m）、柱間は梁行1.8m、桁行2.5mを測る。庇部分を含めた規模は、梁行５m、桁行8.9m、面積は44.5㎡、主軸方位はN－78°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径26cm、平均深度20cmを測る。遺物は出土しなかったが、柱穴の埋土や主軸方位からSBf25と同時期のものと考えられる。



第59図　SBf26平・断面図（1/80）



第60図　SBf27平・断面図（1/80）



第61図　SBf27出土遺物実測図

SBf27（第60図）

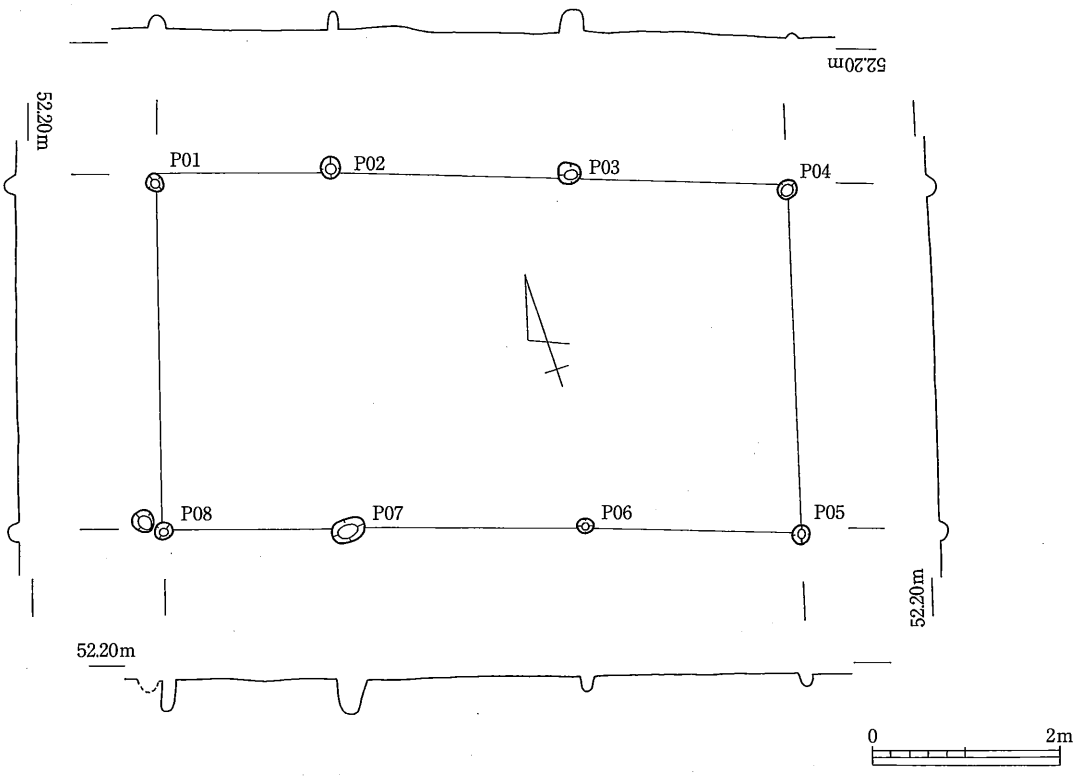
K地区K2・3区中央部やや東よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。四方に庇を持つ。母屋部分の梁行1間（5m）×桁行4間（10.6m）、柱間は梁行5m、桁行2.7mを測る。庇部分を含めた規模は、梁行5.4m、桁行10.6m、面積は57㎡、主軸方位はN－6°－Eを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径22cm、平均深度15cmを測る。

第61図はSBf27から出土した遺物である。142・143は土師質土器の小皿である。144は土師器椀、145は土師器高台付椀である。146は瓦質土器の椀、147は青磁碗の口縁部である。148は須恵器の大型鉢の底部である。遺物の特徴からみてSBf27は12世紀後半から13世紀にかけてのものであると考えられる。

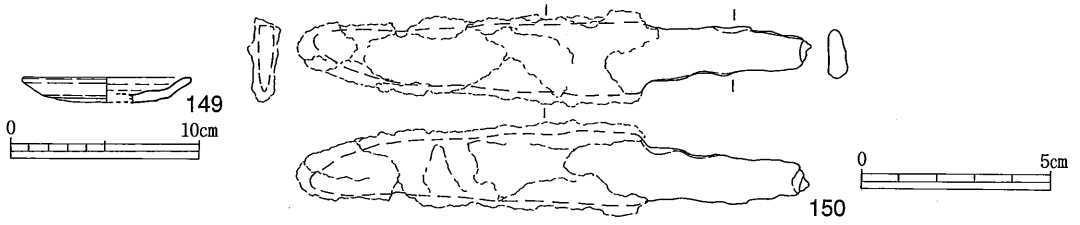
SBf28（第62図）

K地区K2区南西部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3.7m）×桁行3間（6.7m）、面積は24.8㎡、主軸方位はN－70°－Eを測る。柱間は梁行3.7m、桁行2.2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径21cm、平均深度21cmを測る。

第63図はSBf28から出土した遺物である。149は土師器の小皿である。150は柱穴から出土した金属器で、その形状からみて刀子であると考えられる。



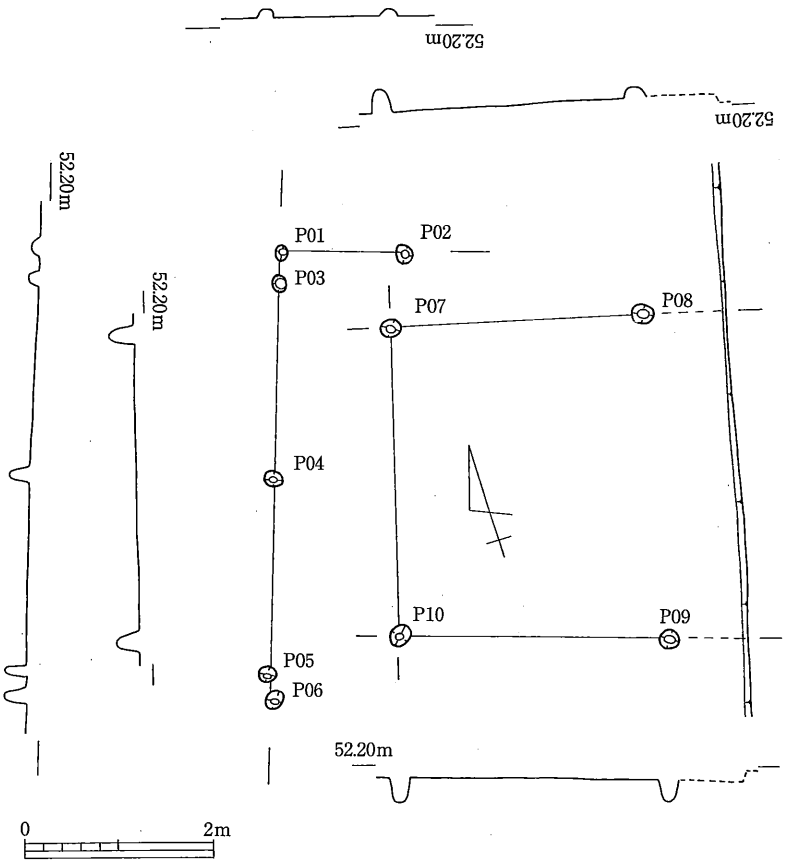
第62図　SBf28平・断面図（1/80）



第63図　SBf28出土遺物実測図

SBf29（第64図）

K地区K2・3区中央部東端の部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。西側と北側の西端の一部に柵状を呈するように柱穴の並びが認められる。母屋自体が調査区外へ延びるため、断定はできないが、対応する柱穴跡が検出されなかったことから、庇ではなく、柵状の遺構を想定しておく。建物部分の規模は、梁行1間（3.3m）×桁行2間以上（2.7m以上）、面積は9㎡以上、主軸方位はN－72°－Wを測る。柱間は梁行3.3m、桁行1.4mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度17cmを測る。



第64図　SBf29平・断面図（1/80）

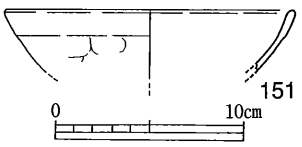
第65図はSBf29から出土した遺物である。151は土師質土器の椀である。底部は欠損しているが、体部から口縁部にかけての大部分が残存している。口縁端部はやや丸く肥厚させておさめている。

出土遺物の特徴や主軸方位などからみて、SBf29は12世紀後半から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SBf30（第67図）

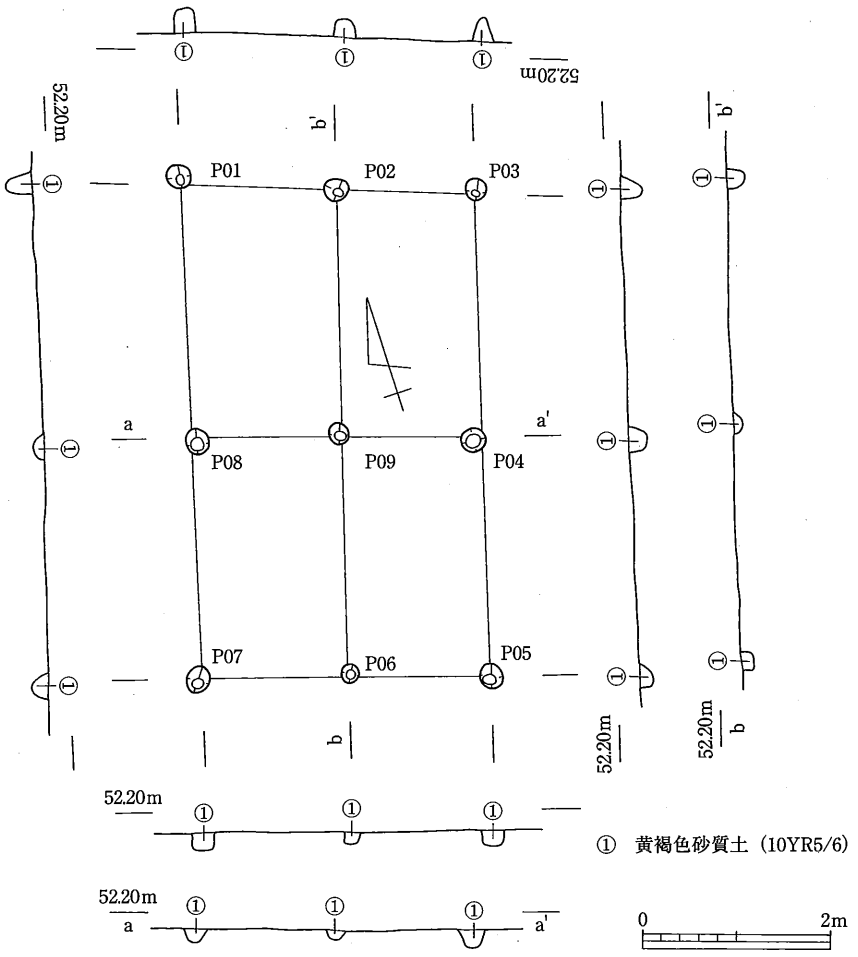
K地区K3区中央南端部やや東よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行2間（3.1m）×桁行2間（5.4m）、面積は16.7㎡、主軸方位はN－11°－Eを測る。柱間は梁行1.6m、桁行2.7mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径22cm、平均深度18cmを測る。

第66図はSBf30から出土した遺物である。152は土師器の杯である。底径が10cmとかなり大型である。そのほかには図示していないが、土師器および軟質の須恵器の破片などが出土している。出土遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、12世紀後半から13世紀にかけてのものであると考えられる。



第65図　SBf29出土遺物実測図

第66図　SBf30出土遺物実測図

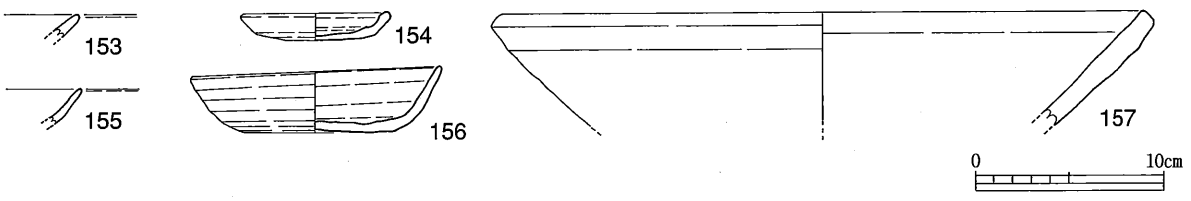


第67図　SBf30平・断面図（1/80）

SBf31（第69図）

K地区K３区中央南端部やや東よりの部分で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（2.9m）×桁行２間（5.5m）、面積は16㎡、主軸方位はN－12°－Eを測る。柱間は梁行2.9m、桁行2.8mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径21cm、平均深度26cmを測る。

第68図はSBf31から出土した遺物である。153～155は土師器の小皿である。156は土師器の杯である。屈曲部はやや丸みを帯びている。157は土師質土器の大型の鉢である。焼成がよく、端部はやや四角に仕上げている。全体的に作りは丁寧である。出土遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf31は13世紀前半ごろのものと考えられる。



第68図　SBf31出土遺物実測図

SBf32（第70図）

K地区K３区南東隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（3.2m）×桁行２間（4.1m）、面積は13.1㎡、主軸方位はN－67°－Wを測る。柱間は梁行3.2m、桁行2.1mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径19cm、平均深度23cmを測る。

第71図はSBf32から出土した遺物である。158は土師器の小皿である。159は土師器の杯の底部である。160は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。底部は欠損している。口縁端部は丸くおさめ、外面にはヘラ状工具の痕跡が顕著に残っている。出土遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf32は12世紀後半から13世紀にかけてのものであると考えられる。

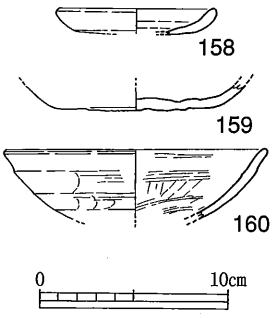
SBf33（第72図）

I地区L・M17区東端部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。東端が調査区外へ延びるため、断定はできないが、元来は四方に庇を持っていたと考えられる。母屋部分の梁行1間（4.1m）×桁行6間以上（12.1m以上）、柱間は梁行4.1m、桁行２mを測る。庇部分を含めた規模は、梁行5.7m、桁行13m以上、面積は74.1㎡以上、主軸方位はN－84°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径29cm、平均深度29cmを測る。この主軸方位はほぼ正方位に合致し、これまで報告した掘立柱建物跡とは明確に異なる。

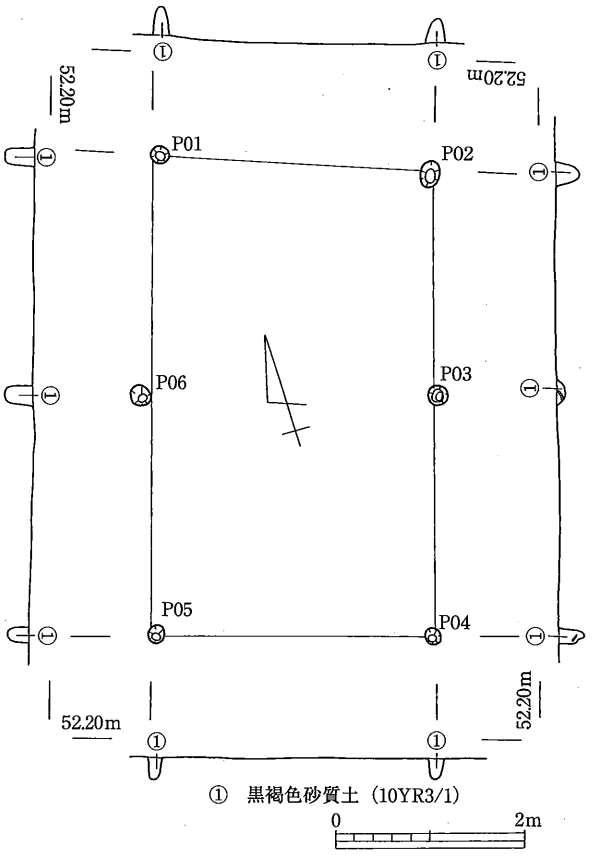
第73図はSBf33から出土した遺物である。161は土師器の杯の一部である。

162は土師器の皿であると考えられる。外面および内面の一部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたことが推測される。

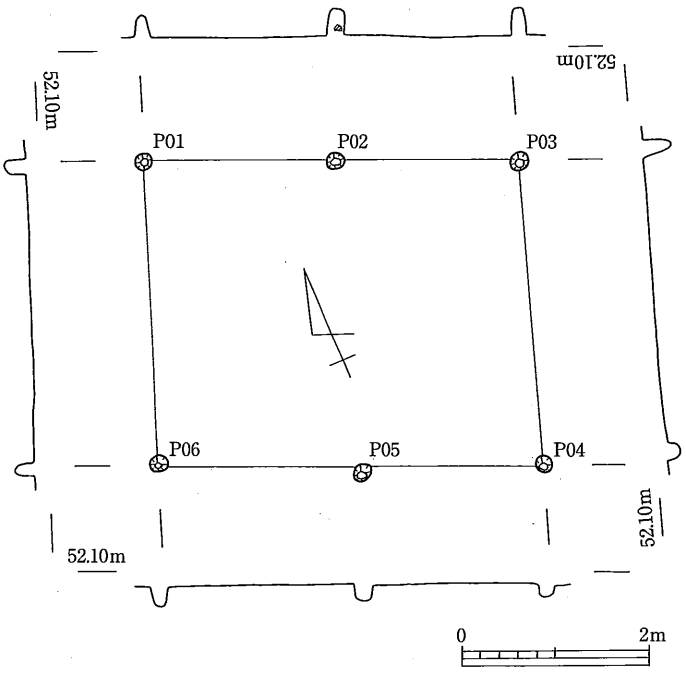
いずれも江戸時代に属するものと考えられる。出土遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf33は近世の所産であると考えられる。



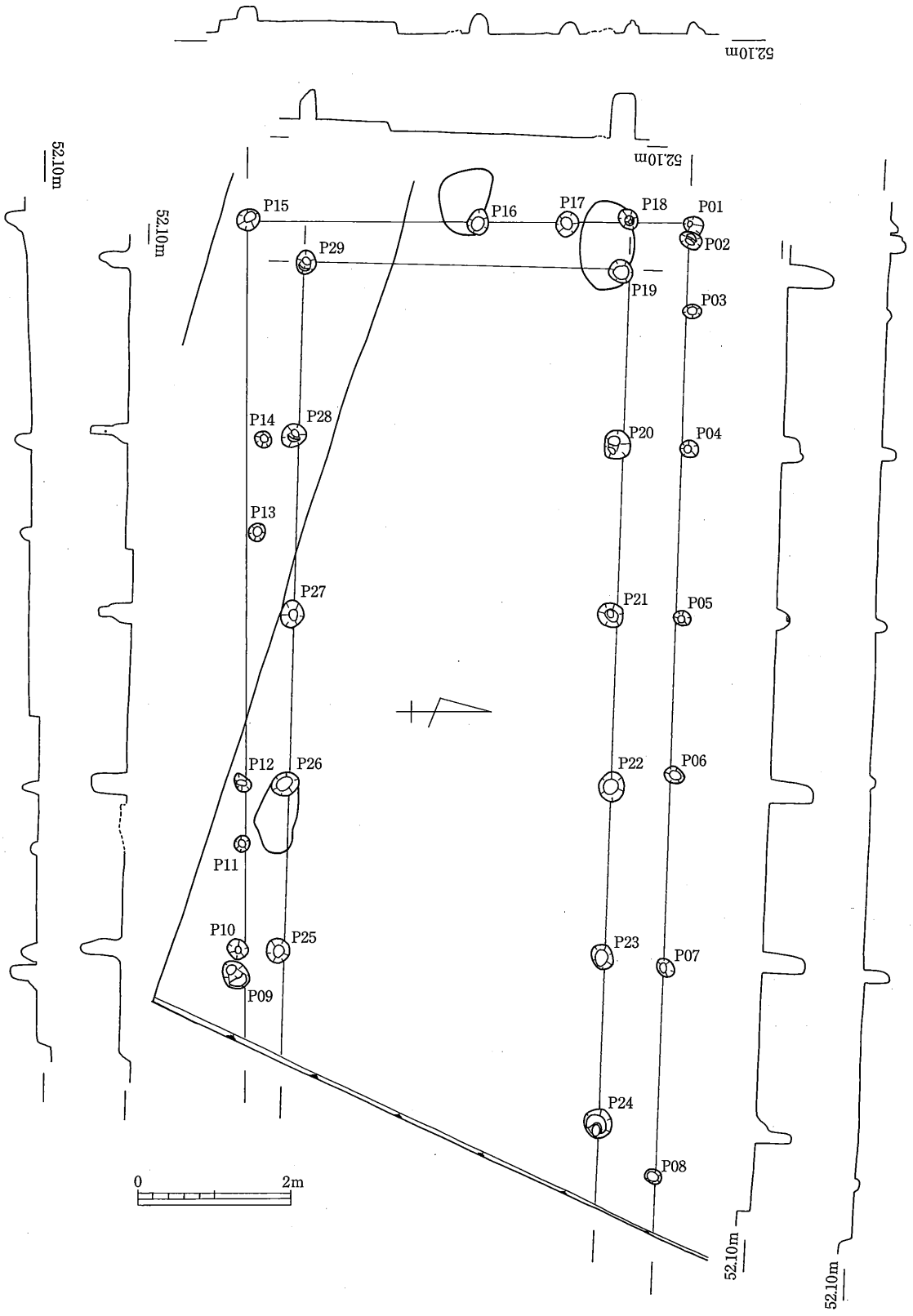
第71図　SBf32出土遺物実測図



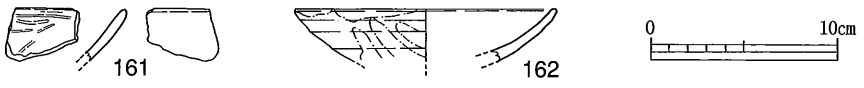
第69図　SBf31平・断面図（1/80）



第70図　SBf32平・断面図（1/80）



第72図　SBf33平・断面図（1/80）



第73図　SBf33出土遺物実測図

SBf34（第74図）

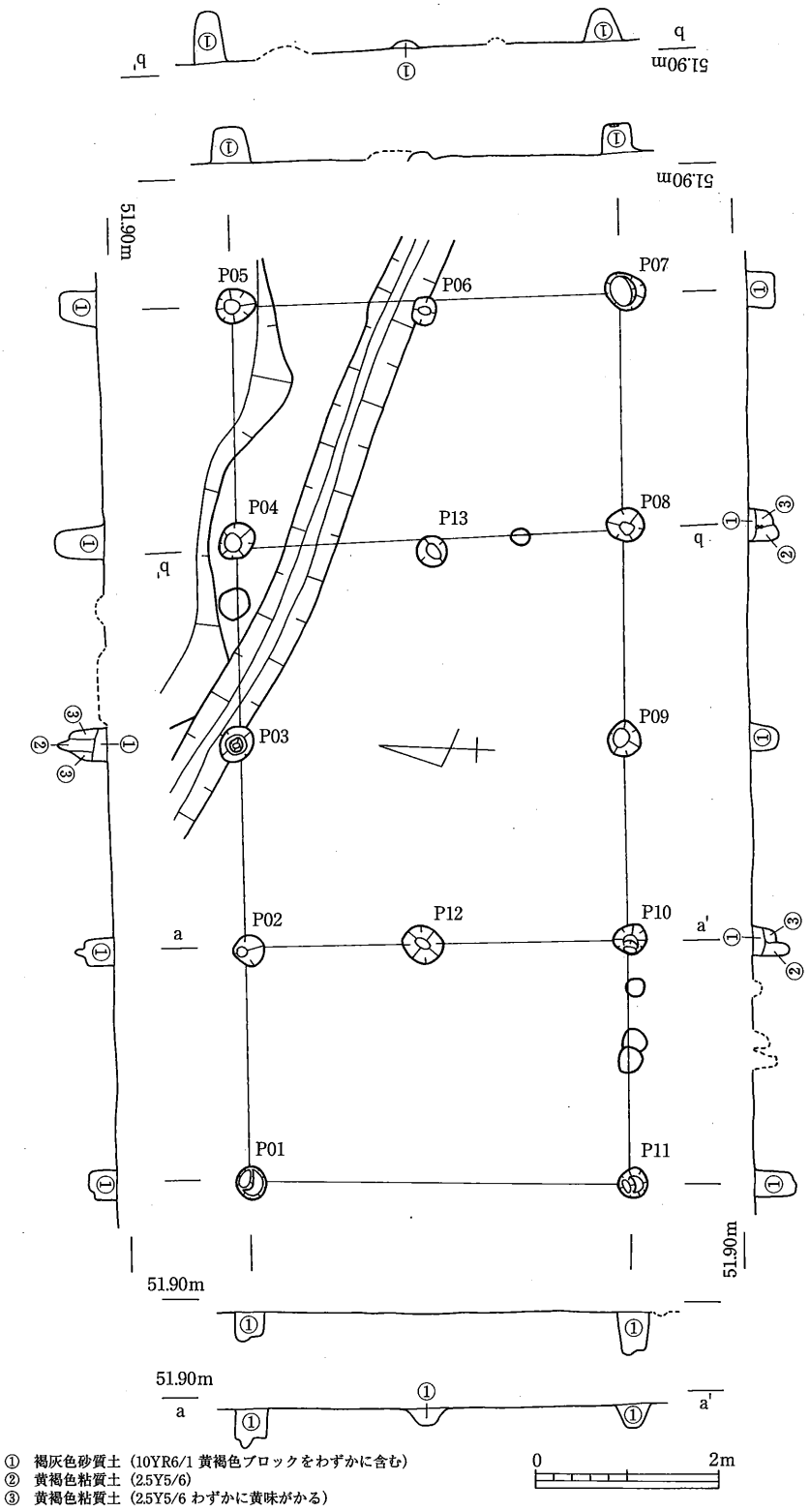
K地区K1区北西隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（4.2m）×桁行4間（9.8m）、面積は41㎡、主軸方位はN－88°－Eを測る。柱間は梁行4.2m、桁行2.5mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径36cm、平均深度34cmを測る。

第75図はSBf34から出土した遺物である。図示できるものは少なく、163のみ図示した。土師質土器の土鍋の口縁部であると考えられる。出土遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf34は、江戸時代のものと考えられる。

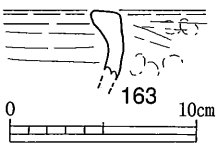
SBf35（第76図）

K地区K1区北西隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（3m）×桁行3間（5.4m）、面積は16.2㎡、主軸方位はN－87°－Eを測る。柱間は梁行3m、桁行1.8mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径29cm、平均深度32cmを測る。

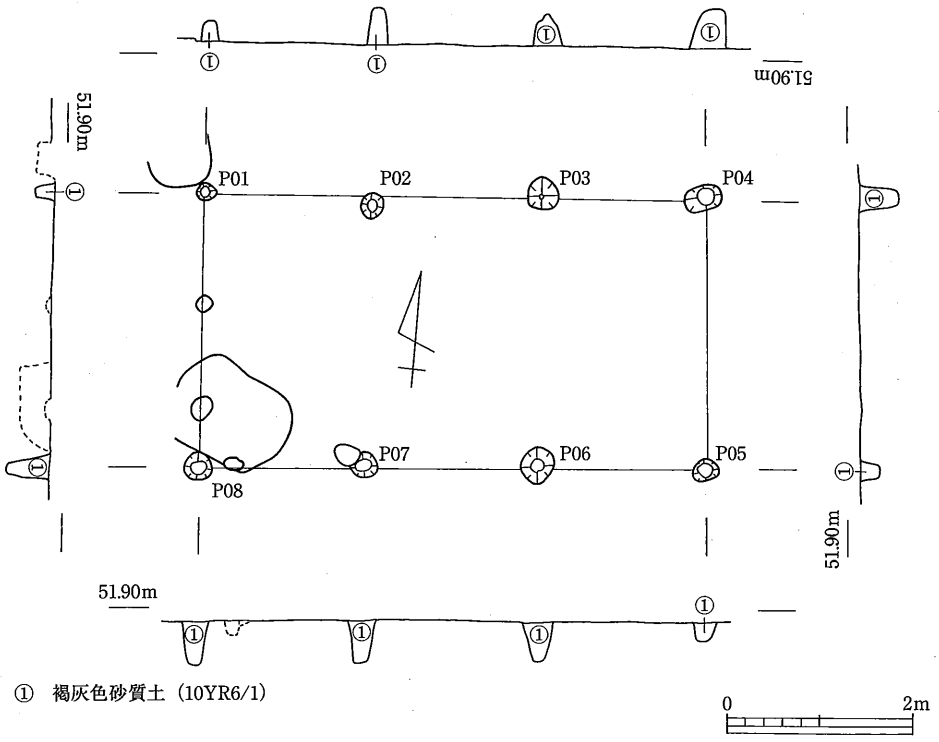
出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf33・34と同様、近世に位置づけられる。



第74図　SBf34平・断面図（1/80）



第75図　SBf34出土遺物実測図

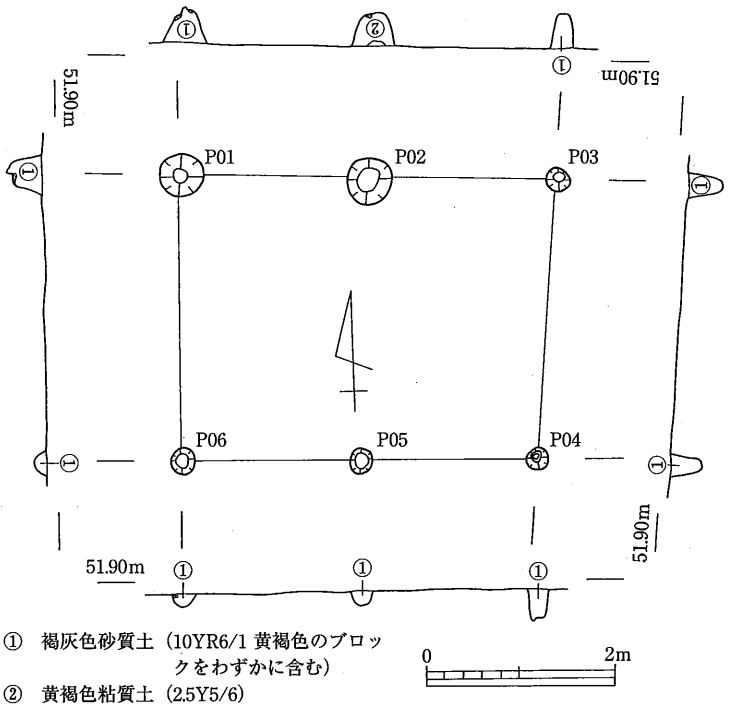


第76図　SBf35平・断面図（1/80）

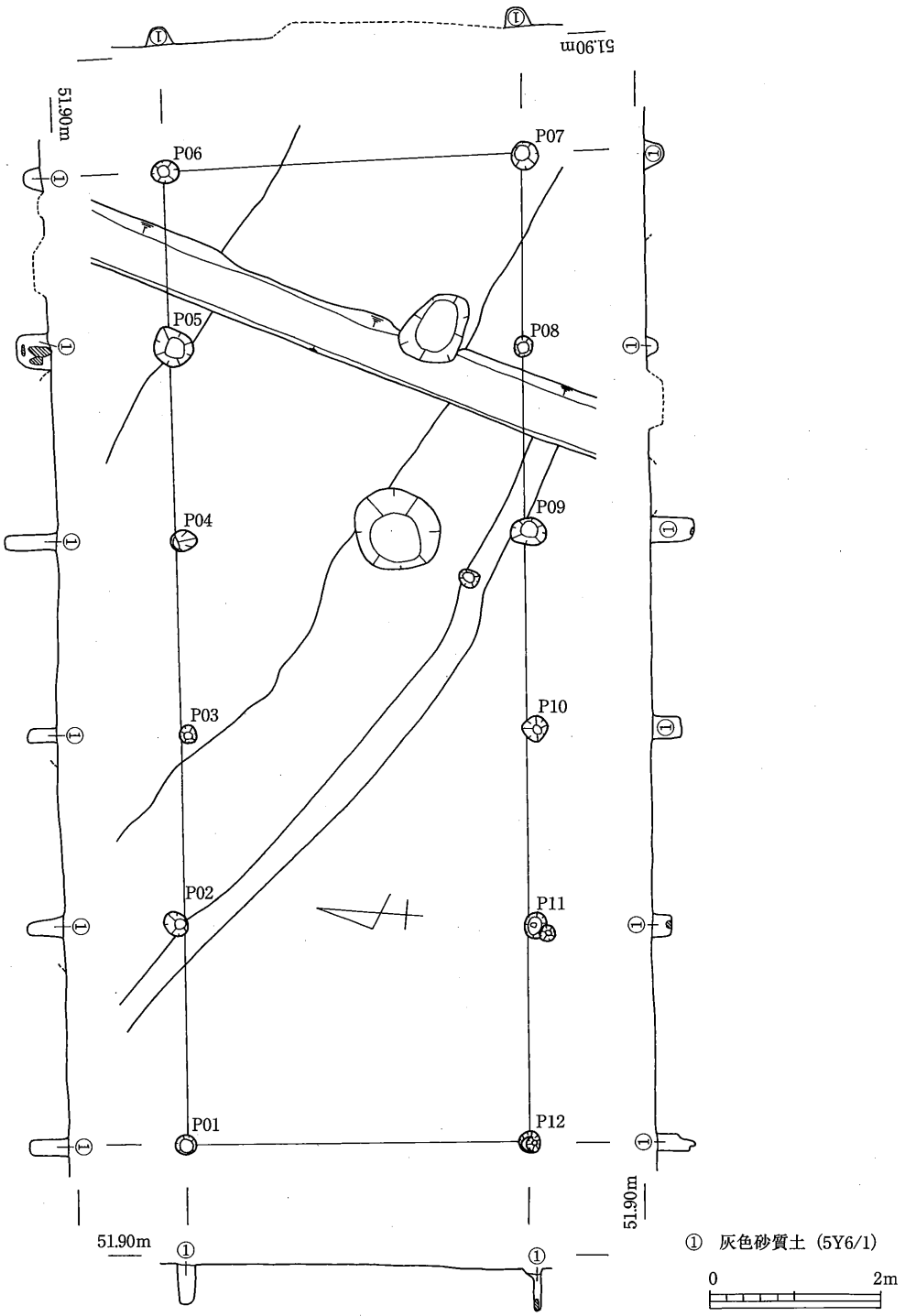
SBf36（第77図）

K地区K１区中央北よりの部分で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行１間（３m）×桁行２間（４m）、面積は12㎡、主軸方位はN－89°－Wを測る。柱間は梁行３m、桁行２mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径32cm、平均深度28cmを測る。

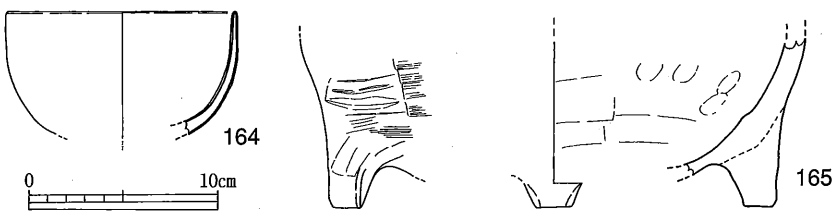
出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、近世のものと考えられる。



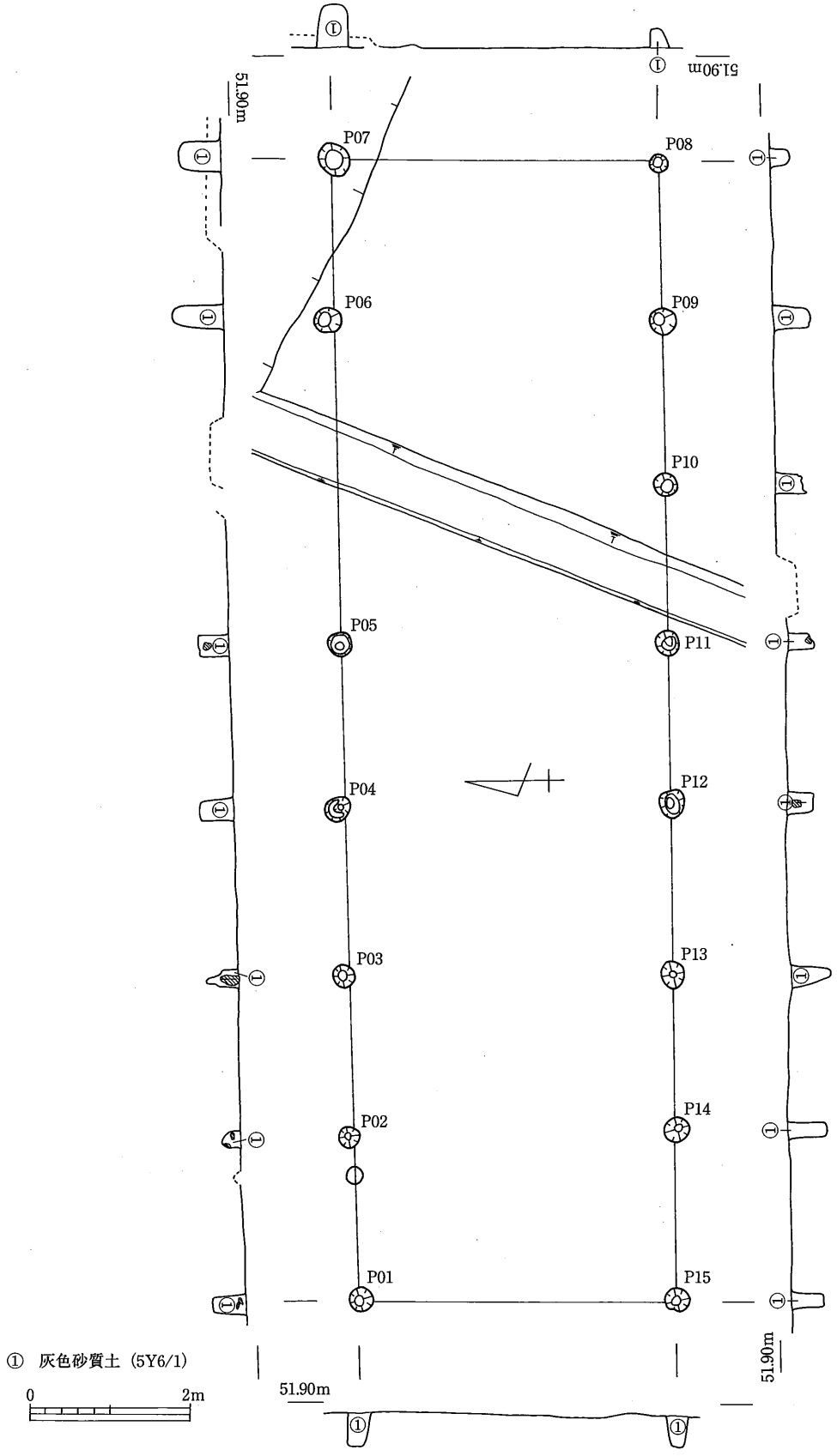
第77図　SBf36平・断面図（1/80）



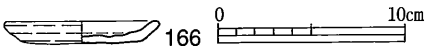
第78図　SBf37平・断面図（1/80）



第79図　SBf37出土遺物実測図



第80図　SBf38平・断面図（1/80）



第81図　SBf38出土遺物実測図

SBf37（第78図）

K地区K1区北東隅からK2区北西隅にかけて検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間（4.1m）×桁行5間（11.4m）、面積は47㎡、主軸方位はN－86°－Eを測る。柱間は梁行4.1m、桁行2.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径28cm、平均深度37cmを測る。

第79図はSBf37から出土した遺物である。164は肥前系の陶器碗である。いわゆる京焼風陶器であり、近世の所産である。165は土師質土器の三足付鍋の底部である。足の部分にはヘラ状工具の痕跡が顕著に認められる。出土遺物の特徴や、柱穴の埋土や主軸方位からみて、SBf37は近世のものであると考えられる。

SBf38（第80図）

K地区K1区北東隅からK2区北西隅にかけて検出した東西棟の掘立柱建物跡でSBf37のすぐ南側にあたる。梁行1間（4m）×桁行7間（14.1m）、面積は56.4㎡、主軸方位はN－90°－Eを測る。柱間は梁行4m、桁行2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径31cm、平均深度43cmを測る。第82図はSBf38から出土した遺物である。

第81図はSBf38から出土した遺物である。166は土師器の小皿である。ほかには細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、近世に位置づけられるものと考えられる。

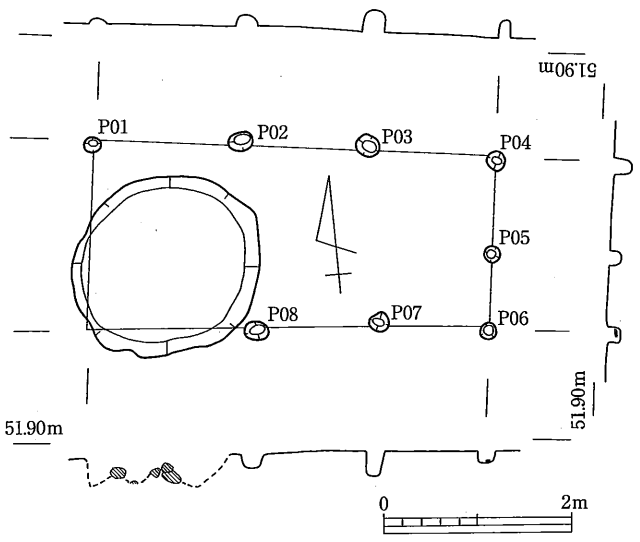
SBf39（第82図）

K地区K2区北西隅で検出した東西棟の掘立柱建物跡で、SBf37・38のすぐ東側にあたる。梁行2間（1.8m）×桁行3間（4.3m）、面積は7.7㎡、主軸方位はN－85°－Wを測る。柱間は梁行0.9m、桁行1.4mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度17cmを測る。南西隅の柱穴はSEf00に破壊されているため、検出できなかった。

出土遺物は、土器細片が出土したのみで、図示できるものはなく、詳細な廃絶時期は不明であるが、柱穴の埋土や主軸方位からみて、近世に位置づけられる。

以上、報告してきたようにI・K地区には多くの掘立柱建物跡を検出したが、主軸方位からみておおむね、古代末期から中世にかけてと近世という大まかに2つの時代に分けられる。

古代末期から中世にかけては、条里地割とほぼ同一の方位を持つグループ（SBf01～16）と条里地割から約10度西偏するグループ（SBf17～32）とに分けられる。出土遺物はほぼ同時期のものが出土しているため、一形式内前後の短い期間による建て替えが行われたと考えられる。したがって、どちらのグループが先に構成されたかは断定はできないが、条里地割よりも西偏するグループが先にあり、その後、条里地割およびそれに合致する溝状遺構等の整備に伴い、大規模な集落の改修が行われたのではないかと考えられる。



第82図　SBf39平・断面図（1/80）

また、近世の掘立柱建物跡については、その9割以上が主軸方位がほぼ磁北を向くことが特徴的である。これは条里地割が現存する状況からみれば、かなり違和感を感じる。これは、近世を通じて領内へたびたび出さ

れた御法度（例えば、延享二年）に新規の建築家屋については、大政所へ申請が必要であったことと関係があるのかもしれない。時期的には、18世紀後半以降の井戸によって柱穴が破壊されている掘立柱建物跡が認められることから、おおむね、18世紀後半以前のものであると考えられる。

（2）柵列跡

SAf01（第83図）

Ⅰ地区P18区の南東隅で検出した東西方向の小規模な柵列で、SBf04のすぐ南側に位置する。東端の柱穴がSBf04の東側の柱列とほぼ並ぶことから、SBf04に伴うものと考えられる。柱穴は2間分（2m）しか検出されず、柱穴間の距離はおよそ1mである。主軸方位はN－77°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度17cmを測る。

遺物は出土しなかったが、柱穴埋土や主軸方位からみて、SBf04と同時期のものと考えられる。

SAf02（第84図）

K地区K1区西端中央部で検出した南北方向の柵列である。柱穴は4間分（5m）を検出し、柱穴間の距離はおよそ1.3mである。主軸方位はN－13°－Eを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度20cmを測る。

第90図はSAf02から出土した遺物である。167は土師器の小皿である。168は軟質の須恵器椀の口縁部である。169はやはり軟質の須恵器椀の底部である。出土遺物や柱穴埋土、主軸方位からみて、SBf08等と同時期のものと考えられる。

SAf03（第85図）

K地区K1区の中央やや東よりの部分で検出した南北方向の柵列である。周囲には建物跡などの遺構は認められなかった。柱穴は4間分（5.9m）を検出し、柱穴間の距離はおよそ1.5mである。主軸方位はN－15°－Eを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度20cmを測る。

遺物は出土しなかったが、柱穴埋土や主軸方位からみて、SAf01等と同時期のものと考えられる。

SAf04（第91図）

K地区K2区中央西端部分で検出した東西方向の柵列である。柱穴は3間分（3.1m）しか検出されず、柱穴間の距離はおよそ1mである。主軸方位はN－84°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径15cm、平均深度10cmを測る。

遺物は出土しなかったが、柱穴埋土や主軸方位からみて、SBf37・38と同時期の近世の所産と考えられる。

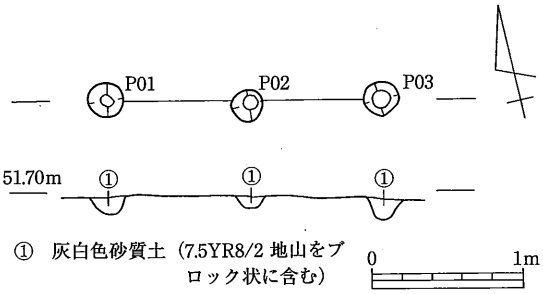
SAf05（第86図）

K地区K2区の南西隅で検出した南北方向の柵列である。SBf16とこれをめぐるSDf21の西側に位置する。柱穴は2間分（3.4m）しか検出されず、柱穴間の距離はおよそ1.7mである。主軸方位はN－17°－Eを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度15cmを測る。

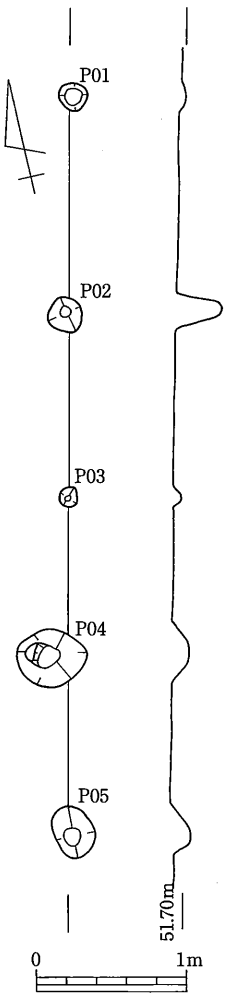
遺物は出土しなかったが、柱穴埋土や主軸方位からみて、SBf16と同時期のものと考えられる。

SAf06（第87図）

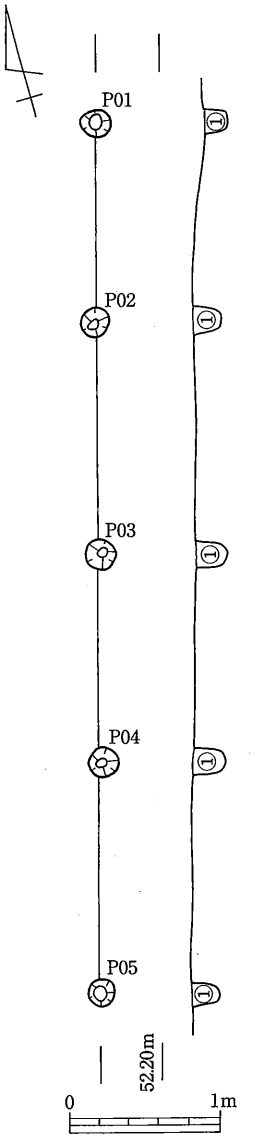
K地区K2区の中央西側部分で検出した南北方向の柵列である。柱穴は2間分（2.6m）しか検出されず、柱穴間の距離はおよそ1.3mである。主軸方位はN－17°－Eを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度20cmを測る。



第83図　SAf01平・断面図（1/50）

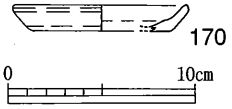


第84図　SAf02
平・断面図（1/50）

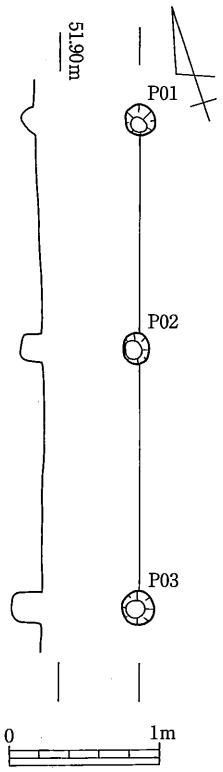


① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）

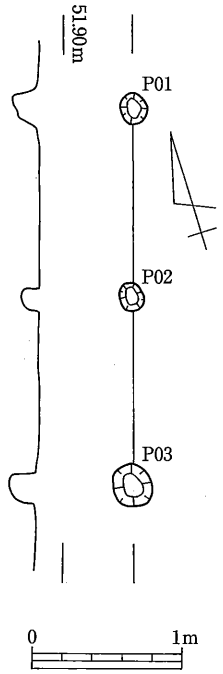
第85図　SAf03
平・断面図（1/50）



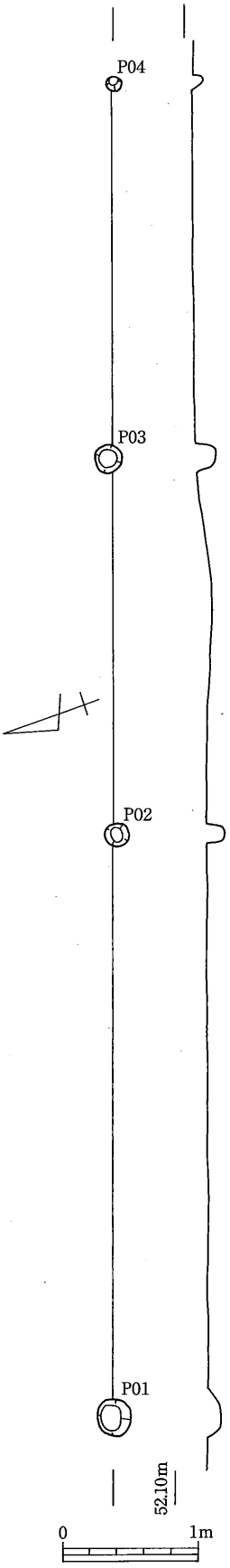
第89図　SAf07
出土遺物実測図



第86図　SAf05
平・断面図（1/50）



第87図　SAf06
平・断面図（1/50）



第88図　SAf07
平・断面図（1/50）

遺物は出土しなかったが、柱穴埋土や主軸方位からみて、SAf05ならびにSBf16などと同時期のものと考えられる。

SAf07（第88図）

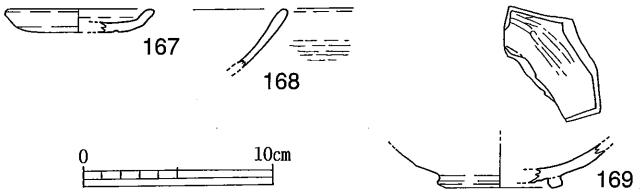
K地区K2区ほぼ中央部で検出した東西方向の柵列である。SBf17のすぐ西側に位置する。柱穴は3間分（10m）検出し、柱穴間の距離はおよそ3.3mである。主軸方位はN－74°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度15cmを測る。

第89図はSAf07から出土した遺物である。170は土師器の小皿である。形態からみて12C後半から13C前半にかけてのものと思われる。遺物および柱穴埋土、主軸方位からみて、SAf05・07と同時期のものと考えられる。

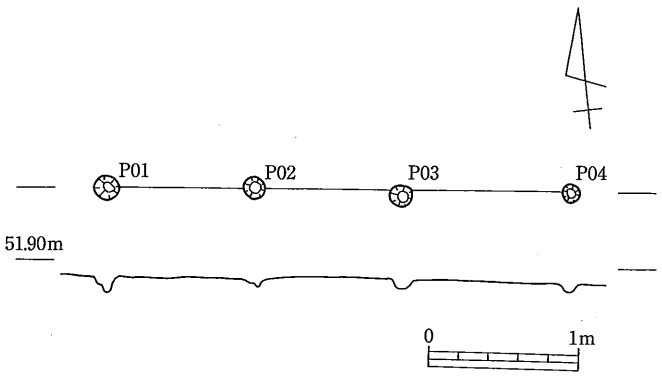
SAf08（第92図）

K地区K3区の中央南端で検出した東西方向の柵列である。SBf30・31と重なり合うようにして検出されたため、あるいは、掘立柱建物跡の北端の柱列の可能性もあるが、ここでは柵列として報告しておく。柱穴は2間分（5.2m）を検出し、柱穴間の距離はおよそ2.6mである。主軸方位はN－70°－Wを測る。柱穴掘形は円形を呈し、平均直径20cm、平均深度20cmを測る。

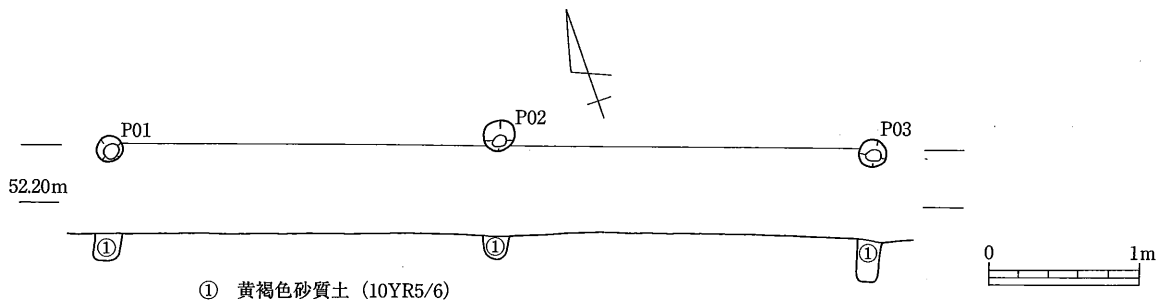
遺物は出土しなかったが、柱穴埋土や主軸方位からみて、SBf30・31と同時期のものと考えられる。



第90図　SAf02出土遺物実測図



第91図　SAf04平・断面図（1/50）



第92図　SAf08平・断面図（1/50）

（3）柱穴跡

I地区の柱穴跡

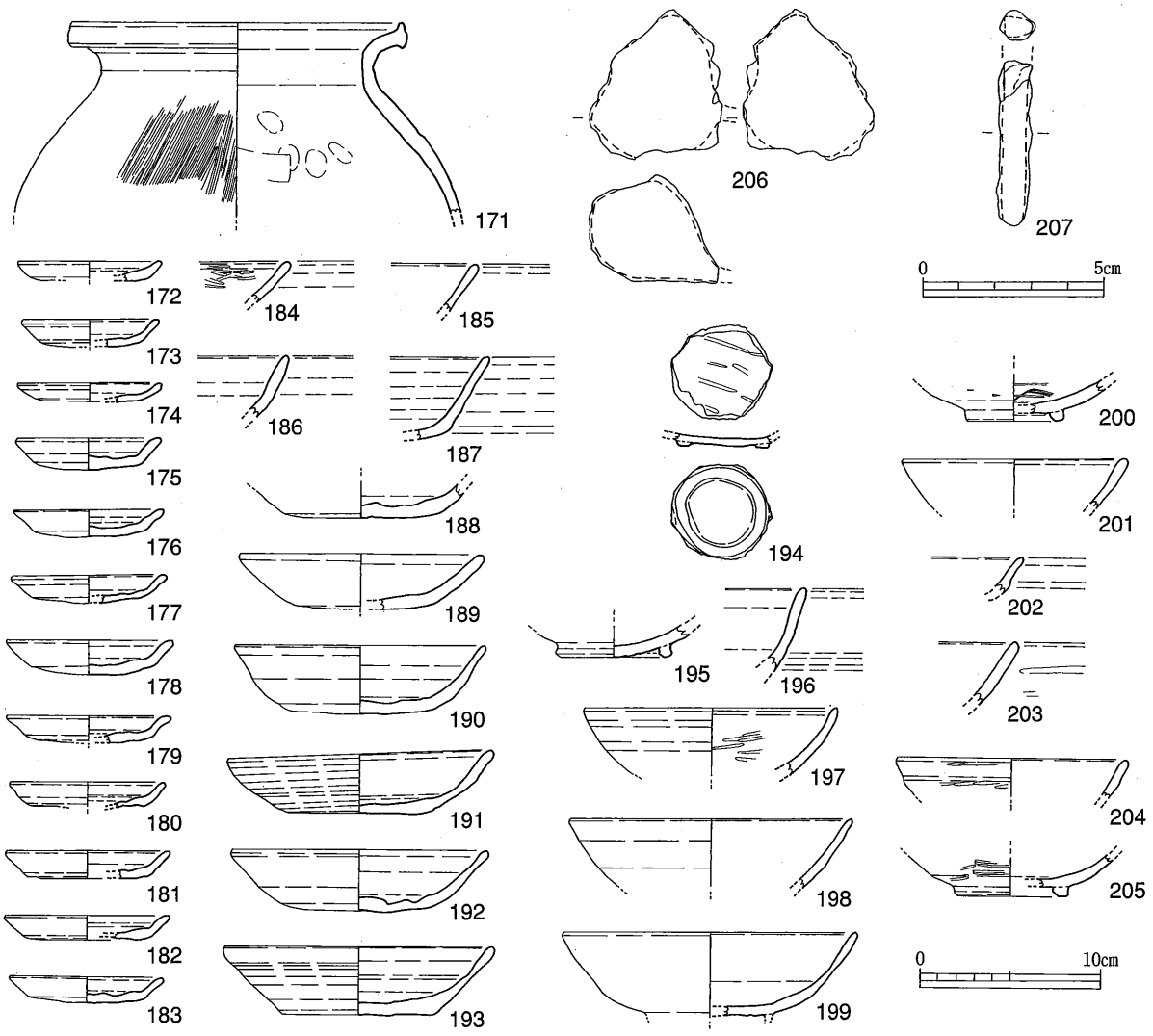
I地区からは掘立柱建物跡をのぞき、およそ120基の柱穴跡を検出している。これらはおおむね、古代末期から中世前半に属するものと考えられるが、SPf000のように弥生土器を包含する柱穴跡も認められる。また、SBf33の周辺に一部、近世ごろの柱穴跡も認められる。

第93図はI地区の柱穴跡から出土した遺物である。171は弥生土器の甕である。外面にはハケ目が認められ、内面には指押えが認められる。口縁部はやや肥厚し、上方へつまみあげる。弥生時代後期後半ごろのものと考えられる。172～183は土師器の小皿である。184～193は土師器の杯である。194～205は土師器および瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。206・207は金属器である。207は釘ではないかと考えられる。

K地区の柱穴跡

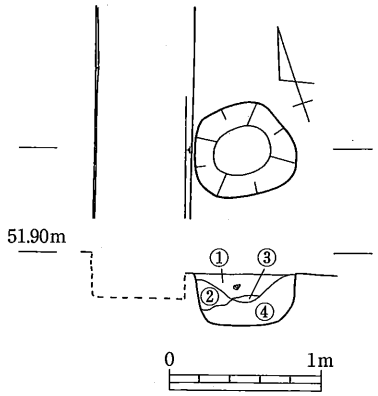
SPf021（第94図）

K地区K1区北東隅の部分で検出した柱穴跡である。土坑の可能性もあるが、ここでは柱穴として報告しておく。直径約70cm、深度約40cmと規模の大きいもので、平面形はややいびつな台形状を呈する。SDf11やSXf02よりも上位で検出したため、これらよりも後出するものであり、したがって、近世以降のものと考えられる。



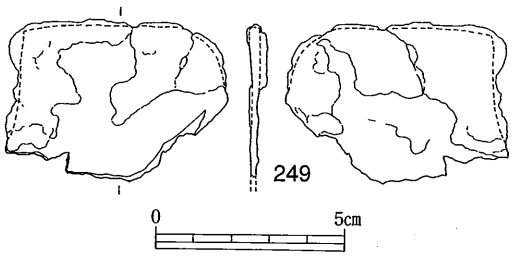
第93図　I地区柱穴出土遺物実測図

第95・96図はK地区の柱穴跡から出土した遺物である。208～221は土師器の小皿である。222～234は土師器の杯である。235～240は土師質土器の椀である。241は軟質須恵器の壺、242～247は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。248は瓦質土器の土鍋の口縁部である。

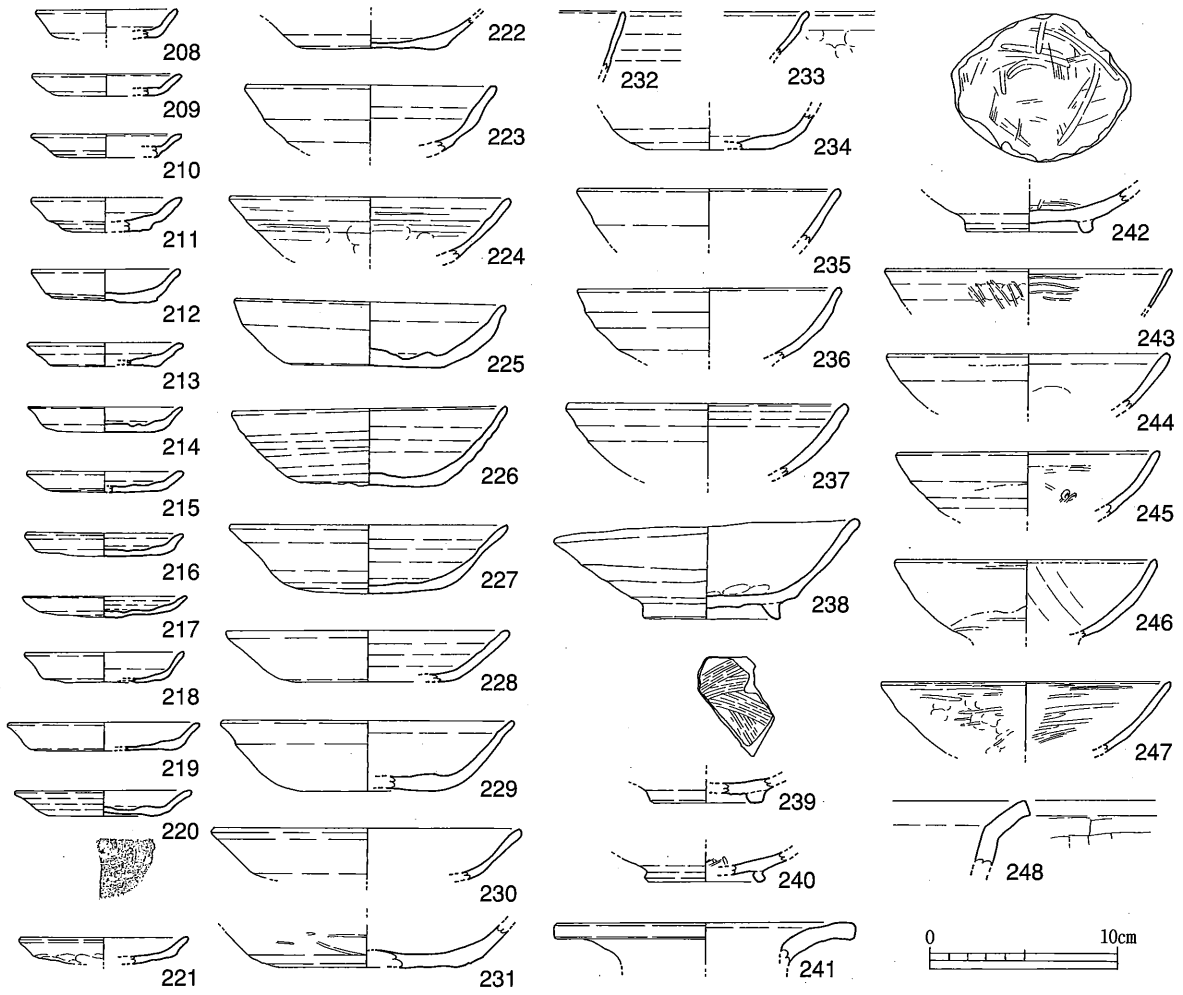


① 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
② にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
③ 黄灰色砂質土（2.5Y6/1わずかに黄味がかる）
④ 黄褐色粘質土（2.5Y5/6）

第94図　SPf21平・断面図（1/50）



第96図　K地区柱穴出土遺物実測図②



第95図　K地区柱穴出土遺物実測図①

第4節　土坑

SKf01（第97図）

Ⅰ地区P18区ほぼ中央部で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.4m、深度は10cmを測る。埋土はSBf01の柱穴等と同じ色調を呈している。

遺物はほとんど出土していないため、時期の特定は困難であるが、埋土の色調などからみて、SBf01等と同じ時期に属するものと考えられる。

SKf03（第98図）

Ⅰ地区P18区ほぼ中央部、SKf01の南側、SBf02のすぐ西側で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径1.6m、短径1.5m、深度は20cmを測る。埋土はSBf01の柱穴等と同じ色調を呈している。

遺物はほとんど出土していないため、時期の特定は困難であるが、埋土の色調などからみて、SBf01等と同じ時期に属するものと考えられる。

SKf04（第99図）

Ⅰ地区P18区ほぼ中央部で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.4m、深度は10cmを測る。埋土はSBf01の柱穴等と同じ色調を呈している。

埋土中には直径15cm程度の礫が多く認められ、故意に埋められた可能性が高い。

しかしながら、遺物はほとんど出土していないため、時期の特定は困難であるが、埋土の色調などからみて、SBf01等と同じ時期に属するものと考えられる。

SKf05（第100図）

Ⅰ地区M17区ほぼ中央部、SDf02のすぐ北側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.4m、短径1.1m、深度は20cmを測る。埋土はSBf01の柱穴等と同じ色調を呈している。

第106図はSKf05から出土した遺物である。250は白磁の碗である。やや浅めのもので口縁部はわずかに外反しながら、端部はやや鋭く仕上げる。底部は欠損しているが、体部には全体に淡い白色釉が施されている。白磁碗Ⅳ類に属し、12C後半から13C前半に比定されよう。

SKf06（第101図）

Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SDf02のすぐ南側で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.4m、深度は10cmを測る。埋土はSBf05の柱穴等と同じ色調を呈している。

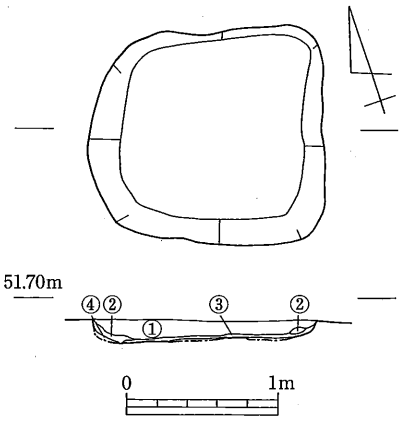
第107図はSKf06から出土した遺物である。251は瓦質土器の椀の口縁部の小片である。

出土遺物の特徴や埋土の共通性からみて、SKf06は中世前半ごろのものと考えられる。

SKf07（第102図）

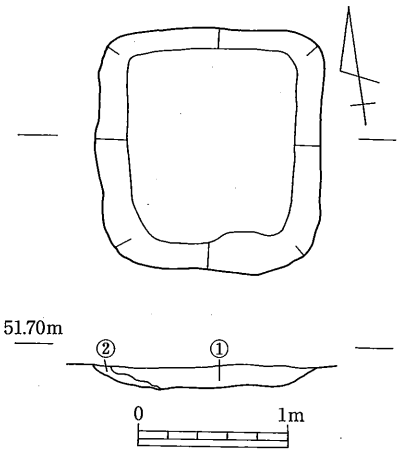
Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf06に隣接して検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.4m、深度は15cmを測る。

遺物はほとんど出土していないため、時期の特定は困難であるが、埋土の色調などからみて、SKf06等と同じ時期に属するものと考えられる。



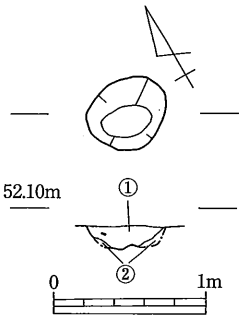
① 黄色粘質土（5Y7/8 灰白色砂質土をブロック状に含む）
② 灰白色砂質土（N7/）
③ 灰色粘質土（N3/）
④ 明黄褐色粘質土（2.5Y6/6 地山）

第97図　SKf01平・断面図（1/50）



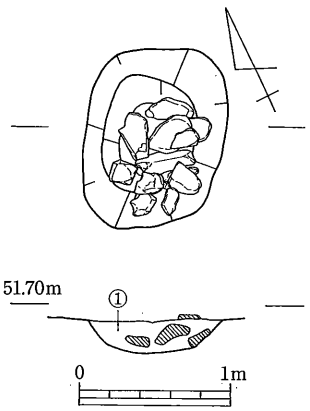
① 灰白色細砂混砂質土（7.5Y8/2）
② 灰白色細砂混砂質土（7.5Y8/2 明褐色砂質土 7.5YR5/6 をブロック状に含む）

第98図　SKf03平・断面図（1/50）



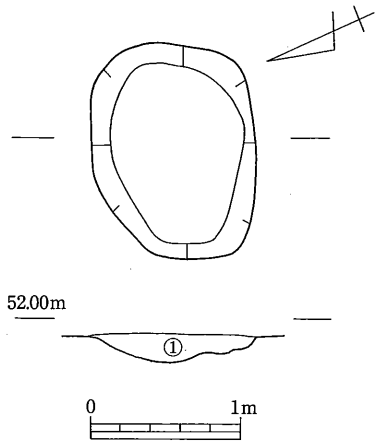
① 暗灰色粘質土（N3/）
② 黄色粘土（2.5Y8/6 地山）

第102図　SKf07
平・断面図（1/50）



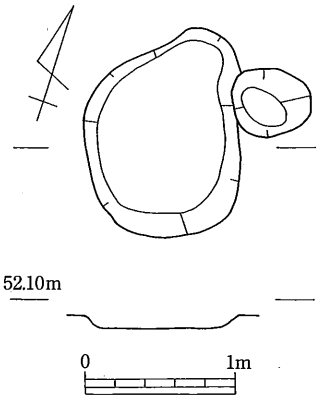
① 灰色砂質土（N5/ 黄褐色粘質土をブロック状に含む）

第99図 SKf04平・断面図(1/50)

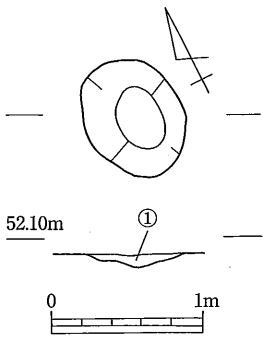


① 黄色砂質土（5Y8/6）

第100図 SKf05平・断面図(1/50)

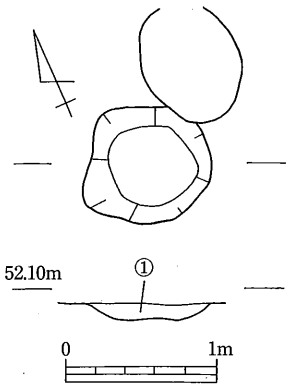


第101図 SKf06平・断面図(1/50)



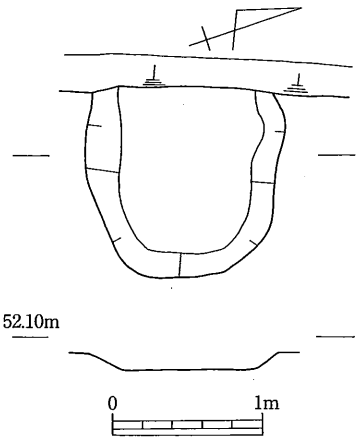
① 黒色粘質土（7.5YR2/1）

第103図 SKf08平・断面図(1/50)



① 黒色粘質土（7.5YR2/1）

第104図 SKf09平・断面図(1/50)



第105図 SKf10平・断面図(1/50)

SKf08（第103図）

Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf06の南側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m、深度は10cmを測る。

遺物はほとんど出土していないため、時期の特定は困難であるが、埋土の色調などからみて、SKf06等と同じ時期に属するものと考えられる。

SKf09（第104図）

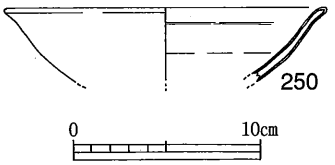
Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf08に隣接して検出した土坑である。形状はやや歪な円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m、深度は10cmを測る。

第108図はSKf09から出土した遺物である。252は土師器の小皿である。底部と体部の屈曲部が明瞭で厚く、口縁端部はつまみながら丸くおさめており、12C～13Cの所産であると考えられる。

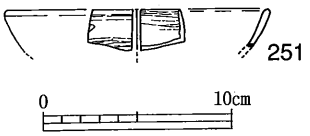
したがって、本土坑についてもこの時期のものと考えられる。

SKf10（第105図）

Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf09の南側で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈するが、後世の撹乱で西半分が破壊されているため、全体の形状は不明である。規模は長径1.2m以上、短径1.3m、深度は15cmを測る。

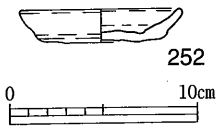


第106図 SKf05出土遺物実測図

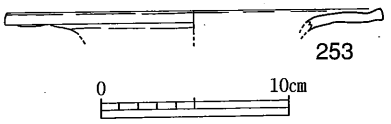


第107図 SKf06出土遺物実測図

第109図はSKf10から出土した遺物である。253は弥生土器の壺の口縁部である。内外面ともに横ナデが顕著に認められる。口縁端部は四角形を呈する。弥生時代後期ごろのものと考えられる。他の出土遺物には時期を特定するものがないため、本土坑は弥生時代後期ごろのものであると考えられる。



第108図 SKf09出土遺物実測図



第109図 SKf10出土遺物実測図

SKf11（第110図）

Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf10の東側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.7m、深度は30cmを測る。

SKf12（第111図）

Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf10の南東部で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径0.7m、深度は20cmを測る。

第119図はSKf12から出土した遺物である。254は土師器の小皿である。底径が大きく、立ち上がりは短い。255は須恵器の壺の口縁部である。十瓶山産と考えられる。256は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。見込み部分に暗文が顕著に認められる。口縁部やや下側で粘土の継ぎ目が明瞭に観察できる。

出土遺物の特徴や埋土の状況からみて、本土坑は12世紀代のものと考えられる。

SKf13（第112図）

Ⅰ地区N17区ほぼ中央部、SKf12の南西部で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.5m、深度は20cmを測る。

第120図はSKf13から出土した遺物である。257は土師器の小皿である。底部外面にはヘラ切り痕が認められる。258は瓦質土器の椀の口縁部である。

出土遺物の特徴や埋土からみて、本土坑は12世紀代のものと考えられる。

SKf15（第113図）

Ⅰ地区N17区南端、SKf14の南側で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.5m、深度は25cmを測る。

第121図はSKf15から出土した遺物である。259は土師器の小皿である。底径に比べて立ち上がりが低い。260・261は土師器の杯である。262は鉄製品である。形状からみると刀子に似ているが、刃部が明瞭でないため、刀子の可能性のある鉄製品としておく。

出土遺物・埋土からみて、本土坑も12世紀代のものと考えられる。

SKf17・18（第114図）

Ⅰ地区N17区中央部で検出した土坑である。SDf02の南側で重なって検出した。形状はいずれもやや歪な円形を呈し、規模はSKf17が長径1.3m、短径1m、深度30cm、SKf18が長径1.6m、短径1.4m、深度20cmを測る。切り合い関係からみてSKf17の方が先に掘削されたものと考えられる。

第122図はSKf17・18から出土した遺物である。263・264・267は土師器の杯である。265は土師器の椀、266は黒色土器の椀、268は瓦質土器の椀、269は瓦質土器の鉢である。

出土遺物の特徴や埋土からみて、SKf17・18は12世紀代のもので、あまり時間差を隔てずに掘削し直されたものであろう。

SKf19（第115図）

Ⅰ地区N17区南端で検出した土坑である。形状は歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.5m、深度は20cmを測る。

第123図はSKf19から出土した遺物である。270は土師器の小皿、271は土師器の杯でいずれも底部外面にヘラ状工具の痕跡が認められる。272は土師器の高杯の接合部である。273は瓦質土器の椀である。見込み部分には暗文が顕著に認められる。

出土遺物や埋土からみて、SKf19も12世紀代のものであると考えられる。

SKf20（第116図）

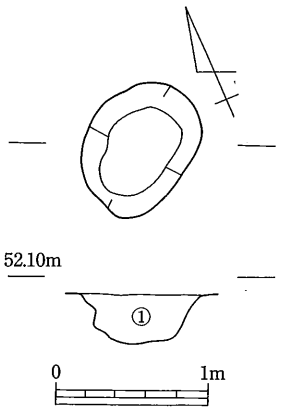
Ⅰ地区N17区南端、SKf19の東側で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径1.6m、短径0.9m、深度は10cmを測る。

第125図はSKf20から出土した遺物である。274～276は土師器の小皿である。277は須恵器の椀で見込みには暗文が認められる。、278は瓦質土器の椀、279は瓦質土器の鉢の口縁部である。280は須恵器の壺の底部である。

埋土の状況や出土遺物からみてSKf20も12世紀代のものと考えられる。

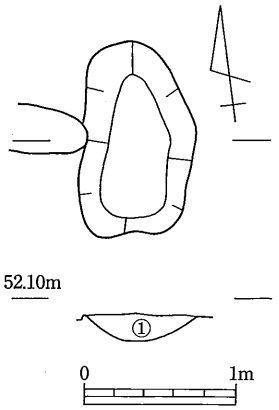
SKf21（第117図）

Ⅰ地区N17区南端、SKf20のすぐ南側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.9m、深度は20cmを測る。調査区の南壁にほぼ接しており、用水路をはさんで南側のK2区では掘立柱建物跡SBf19が展開している。用水路下部の調査ができなかったが、あるいは南側の掘立柱建物跡などと関連がある土坑かもしれない。第126図はSKf21から出土した遺物である。281・282は土師器の小皿、283は



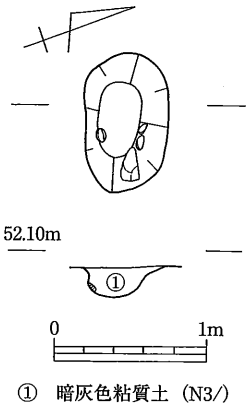
① 暗灰色粘質土
(N3/ 地山ブロックを多量に含む)

第110図 SKf11平・断面図(1/50)



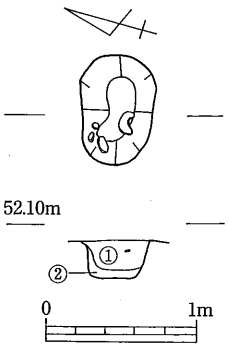
① 暗灰色粘質土
(N3/ 炭化物をわずかに含む)

第111図 SKf12平・断面図(1/50)



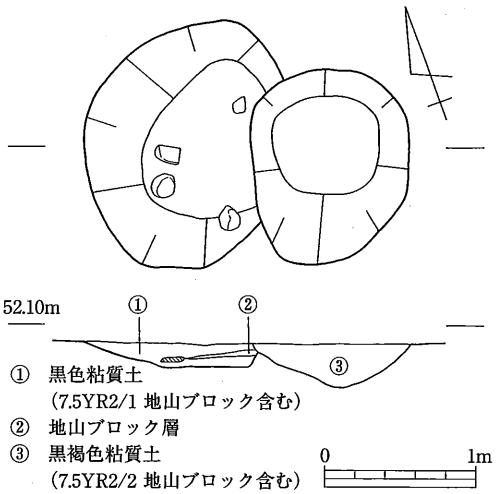
① 暗灰色粘質土 (N3/)

第112図 SKf13平・断面図(1/50)



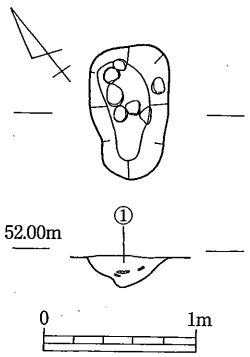
① 暗灰色粘質土
(N3/ 地山ブロック含む)
② 浅黄色粗砂層 (7.5Y7/3)

第113図 SKf15
平・断面図(1/50)



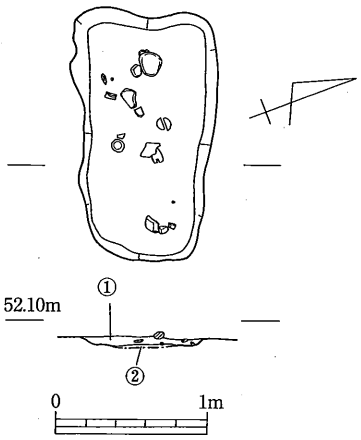
① 黒色粘質土
(7.5YR2/1 地山ブロック含む)
② 地山ブロック層
③ 黒褐色粘質土
(7.5YR2/2 地山ブロック含む)

第114図 SKf17・18平・断面図(1/50)



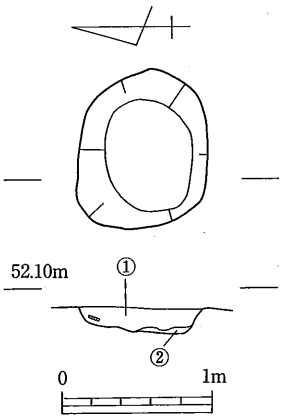
① 暗灰色粘質土 (N3/ 炭化物含む)

第115図 SKf19
平・断面図(1/50)



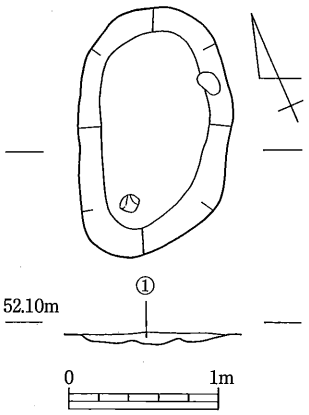
① 暗灰色粘質土 (N3/ 炭化物を多量に含む)
② 黄色粘土 (2.5Y8/6 Fe、Mn粒含む地山)

第116図 SKf20平・断面図(1/50)



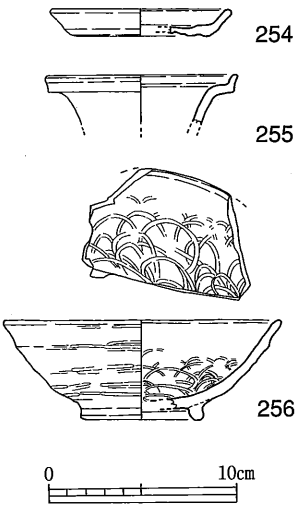
① 暗灰色粘質土
(N3/ 赤褐色の焼土塊、炭化物を多量に含む)
② 浅黄色粗砂層 (7.5Y7/3)

第117図 SKf21平・断面図(1/50)

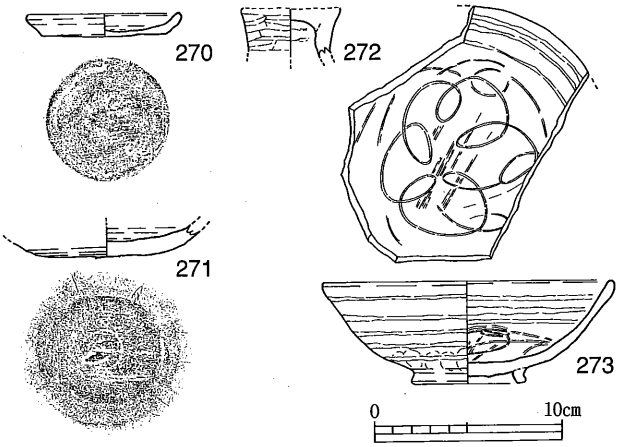


① 暗灰色粘質土(N3/ わずかに下層で
地山ブロック含む)

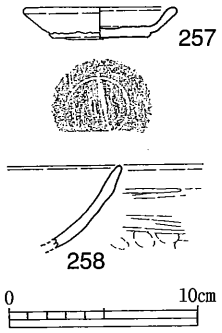
第118図 SKf22平・断面図(1/50)



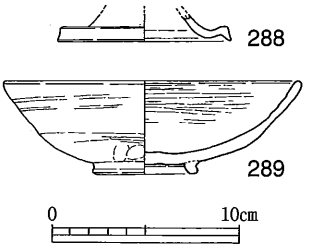
第119図 SKf12出土遺物実測図



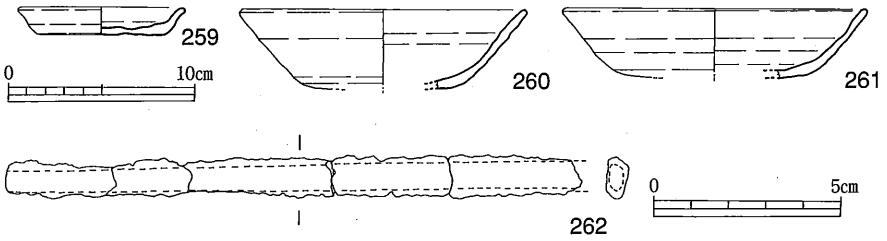
第123図 SKf19出土遺物実測図



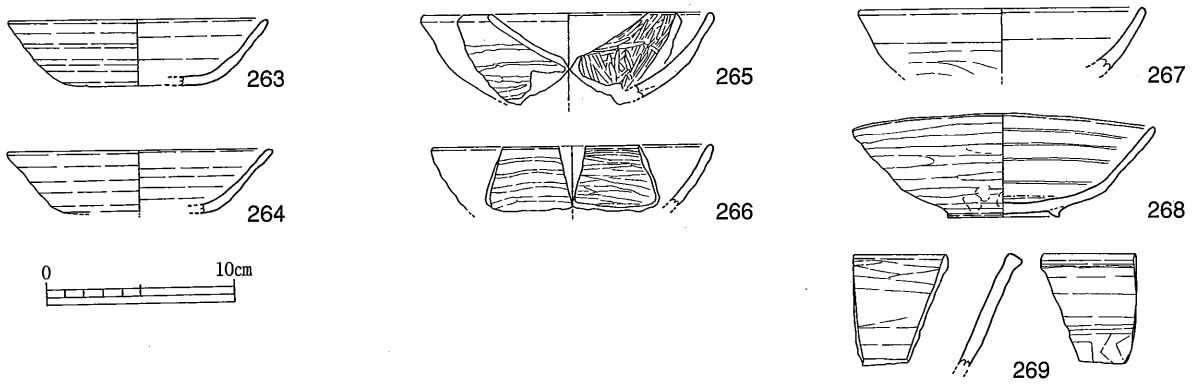
第120図 SKf13出土遺物実測図



第124図 SKf22出土遺物実測図



第121図 SKf15出土遺物実測図



第122図 SKf17・SKf18出土遺物実測図

土師器の杯である。いずれも底部外面にヘラ状工具の痕跡が認められる。284・285は須恵器の椀、286は瓦器の小皿で内面に暗文が顕著に認められる。287は瓦器の椀である。口縁端部はやや外反ぎみに丸くおさめている。

埋土や出土遺物からみてSKf21も12世紀代のものと考えられる。

SKf22（第118図）

Ⅰ地区N17区中央部で検出した土坑である。SDf02が南へ分岐する部分の南西部にあたる。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.7m、短径1m、深度は10cmを測る。

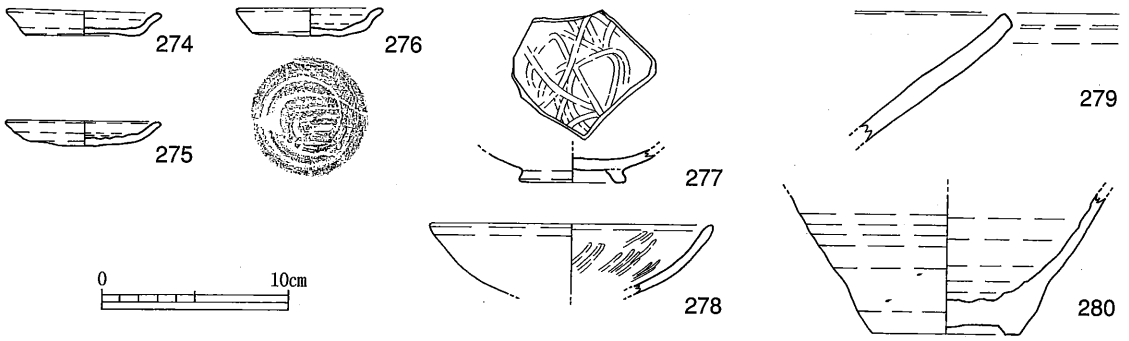
第124図はSKf22から出土した遺物である。288は須恵器の高杯である。端部は大きく外反し、わずかに持ち上げながら折り曲げて鋭く仕上げている。289は瓦質土器の椀である。内面にはヘラミガキの痕跡が認められ、外面にもミガキの痕跡が認められる。

出土遺物の特徴（289）や埋土の状況からみて、SKf22も12世紀代のものと考えられる。

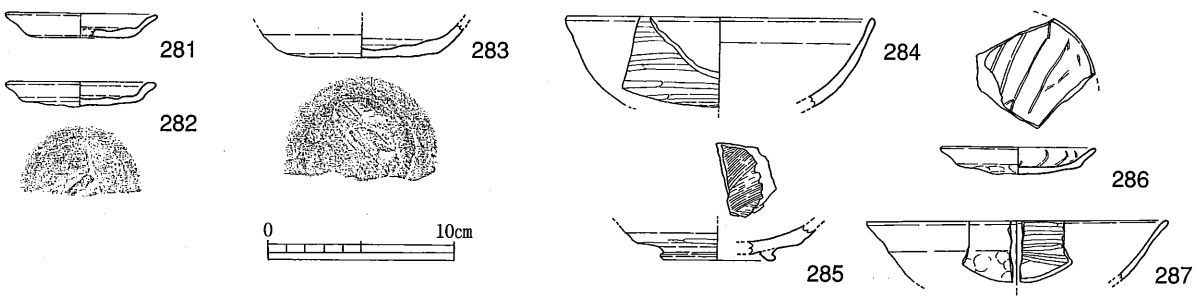
SKf25（第127図）

Ⅰ地区N17区中央部で検出した土坑である。SBf33の柱穴に一部破壊されている。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.6m、深度は10cmを測る。

第136図はSKf25から出土した遺物である。290は土師器の小皿である。内外面ともにヘラ状工具の痕跡が認められる。出土遺物の特徴から本土坑も12世紀代のものと考えられる。



第125図 SKf20出土遺物実測図



第126図 SKf21出土遺物実測図

SKf26（第128図）

Ⅰ地区N17区南端で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.6m、短径0.6m、深度は20cmを測る。

第137図はSKf26から出土した遺物である。291は土師質土器の土鍋である。口縁部しか残っていないが、体部から大きく外反して折り曲げるもので端部はやや三角形ぎみに調整している。大型の土鍋であると思われる。

出土遺物の特徴からみてSKf26は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf28（第129図）

Ⅰ地区N17区中央部で検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.8m、深度は30cmを測る。遺物は出土していないが、埋土の色調がSBf33の柱穴と同一であることから、SBf33と同時期であり、何らかの関係を持っていたものと考えられる。

SKf29（第130図）

Ⅰ地区N17区中央部で検出した土坑である。SKf28のすぐ南側でSBf33に平行して検出した。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径1.1m、深度は20cmを測る。SKf28と同様、遺物は出土していないが、埋土の色調がSKf28と同一であることから、近世の所産であり、SBf33と関わりを持っていたものと考えられる。

SKf31（第131図）

Ⅰ地区N17区中央部で検出した土坑である。SBf33のすぐ南側に位置し、試掘調査のトレンチで中央部から南半分が一段低くなっている。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.4m、深度は15cmを測る。

第138図はSKf31から出土した遺物である。292は土師器の杯である。

出土遺物や埋土からみて、SKf31は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf32（第132図）

Ⅰ地区N17区中央部やや南よりの調査区東端部で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径１m、短径0.8m、深度は40cmを測る。

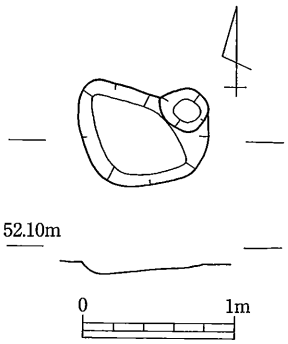
第139図はSKf32から出土した遺物である。293は土師器の小皿、294は土師器の杯である。立ち上がりが急でかなり深めの杯である。あるいは椀であるかもしれない。

出土遺物の特徴からみて、SKf32は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

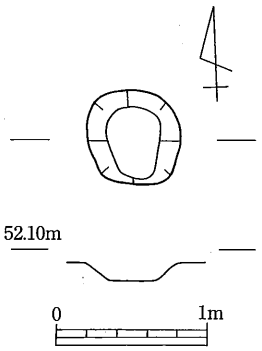
SKf33（第133図）

Ｋ地区Ｋ１区北西隅で検出した大型の土坑である。弥生時代の河川跡（SRf02）の埋没後に掘削されている。形状はやや歪な円形を呈し、規模は長径1.3m、短径1.1m、深度は60cmを測る。

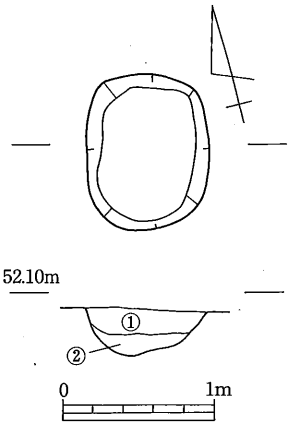
第140図はSKf33から出土した遺物である。295は陶器の皿である。高台は中央部を削りだして作っている。見込み部分は蛇の目釉剥ぎをされており、胎土からみて唐津焼であろう。18世紀後半以降のものであると考えられる。



第127図 SKf25平・断面図(1/50)

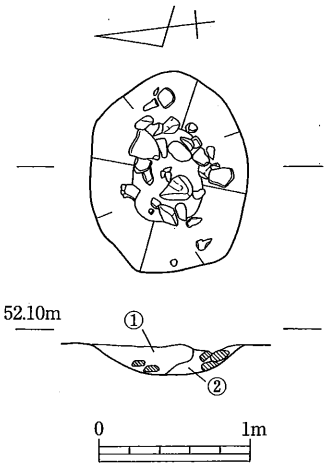


第128図 SKf26平・断面図(1/50)



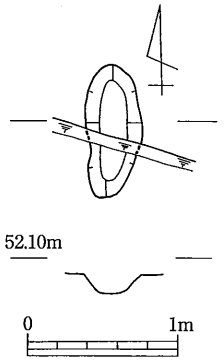
① 浅黄色細砂混粘質土 (5Y8/4)
② 明黄褐色細砂混粘質土 (2.5Y6/8)

第129図 SKf28平・断面図(1/50)

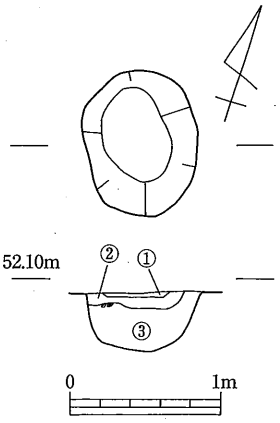


① 灰色粘質土 (3Y6/1)
② 淡黄色細砂混粘質土 (5Y8/4)

第130図 SKf29平・断面図(1/50)

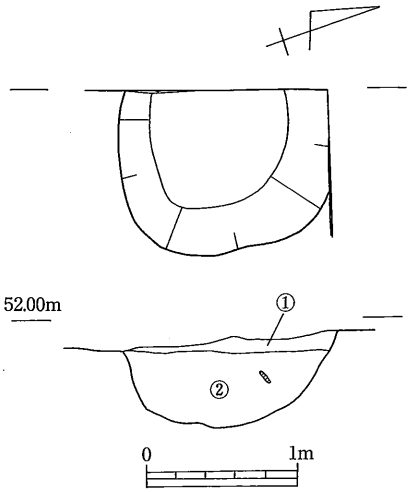


第131図 SKf31平・断面図(1/50)



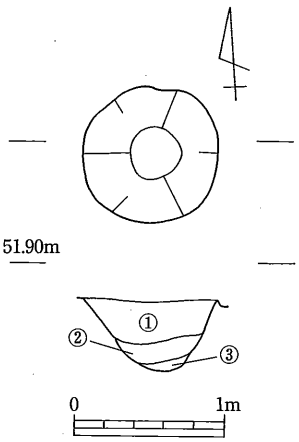
① 褐色粘質土 (7.5YR4/3)
② 灰褐色粘質土 (7.5YR4/4)
③ 灰褐色粘質土 (7.5YR4/4 地山ブロックを多量に含む)

第132図 SKf32平・断面図(1/50)



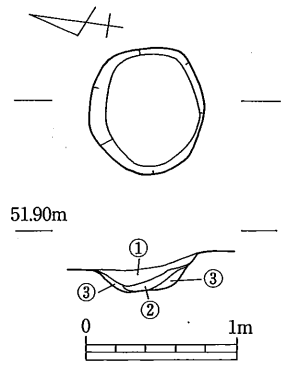
① 褐灰色砂質土 (10YR4/1)
② 黒褐色砂混粘質土 (10YR3/1)

第133図 SKf33平・断面図(1/50)



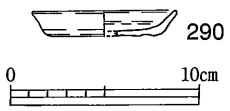
① 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1)
② 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3)
③ オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4)

第134図 SKf34平・断面図(1/50)

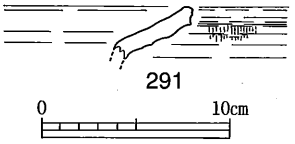


① 灰白色砂質土 (2.5Y7/1)
② 黄褐色粗砂層 (2.5Y5/3)
③ オリーブ褐色粗砂層 (2.5Y4/6)

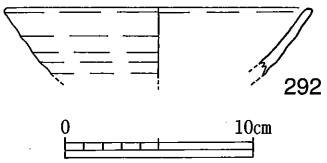
第135図 SKf35平・断面図(1/50)



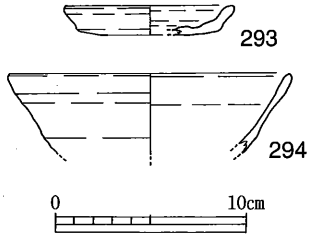
第136図 SKf25出土遺物実測図



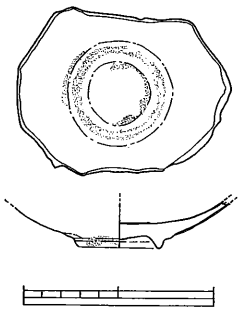
第137図 SKf26出土遺物実測図



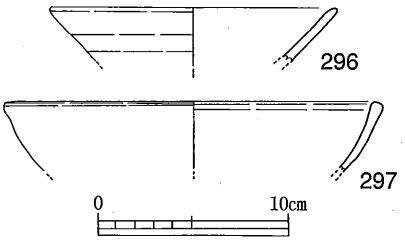
第138図 SKf31出土遺物実測図



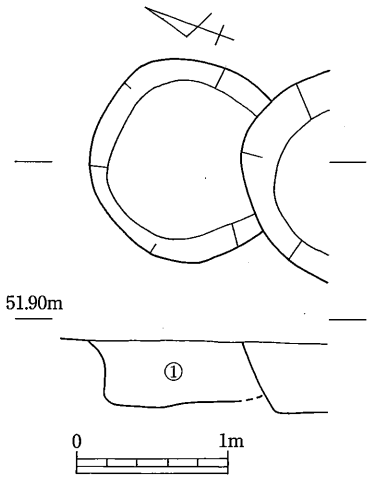
第139図 SKf32出土遺物実測図



第140図 SKf33出土遺物実測図

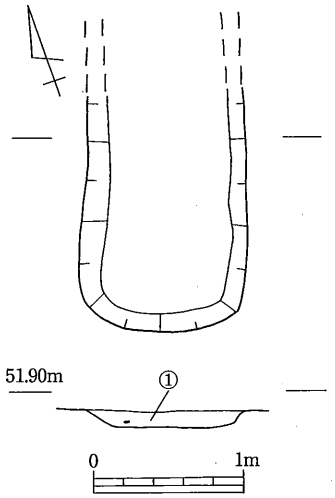


第141図 SKf34出土遺物実測図



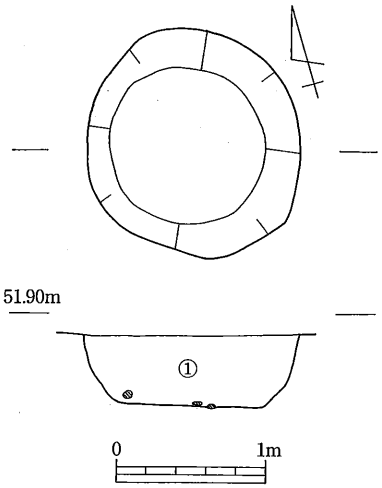
① 暗黄灰色砂質土（2.5Y5/2黒褐色粘質土2.5Y3/2、にぶい黄褐色粘質土2.5Y6/4をブロック状に多量に含む）

第142図 SKf36平・断面図(1/50)



① 暗黄灰色砂質土（2.5Y5/2）

第143図 SKf37
平・断面図(1/50)



① 暗黄灰色砂質土（2.5Y5/2黒褐色粘質土2.5Y3/2、にぶい黄褐色粘質土2.5Y6/4をブロック状に多量に含む）

第144図 SKf38平・断面図(1/50)

SKf34（第134図）

K地区K１区北西部で検出した土坑である。弥生時代の溝状遺構（SDf09）の埋没後に掘削されている。形状は円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.9m、深度は50cmを測る。

第141図はSKf34から出土した遺物である。296は土師器の杯である。297は瓦質土器の鉢と考えられる口縁部である。

出土遺物や埋土からSKf34は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf35（第135図）

K地区K１区北西部で検出した土坑である。SXf02を破壊するように掘削されていることから、近世以降の所産であろう。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.8m、深度は20cmを測る。

SKf36（第142図）

K地区K１区北西部で検出した大型の土坑である。弥生時代の河川跡（SRf02）の埋没後に掘削されている。南側の一部をSKf38に破壊されている。形状はやや歪な円形を呈し、規模は長径1.4m、短径1.3m、深度は40cmを測る。

第151図はSKf36から出土した遺物である。298は弥生土器の甕であるが、これは埋没時に下層のSRf01の遺物が混入したものと考えられる。

埋土の状況およびSBf34との位置関係からみてSKf36は近世の所産であると考えられる。

SKf37（第143図）

K地区K１区北西部、SKf36のすぐ東側で検出した土坑である。北側が調査区外へ延びるため全体の形状および規模は不明であるが、やや歪な方形を呈し、規模は長径2.1m以上、短径1.1m、深度は10cmを測る。

第152図はSKf37から出土した遺物である。299は土師質土器の三足付土釜の足部である。

埋土の状況などからみて、SKf37も近世のものであると考えられる。

SKf38（第144図）

K地区K１区北西部で検出した土坑である。SKf36を破壊して掘削されている。形状は円形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.5m、深度は45cmを測る。

埋土の色調がSKf36によく似ていることから時期的にも同じ近世のものであり、掘削しなおされたものであろう。

SKf39（第145図）

K地区K１区北西部で検出した小規模の土坑である。弥生時代の溝状遺構（SDf09）の埋没後に掘削されている。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.4m、深度は５cmを測る。

出土遺物がないため、詳細な時期・性格は不明であるが、埋土の状況から近世以前のものと考えられる。

SKf40（第146図）

K地区K１区北西部、SKf39のすぐ東側で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.4m、深度は５cmを測る。

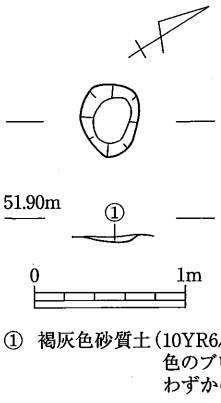
出土遺物がないため、詳細な時期・性格は不明であるが、埋土の状況から近世以前のものと考えられる。

SKf42（第147図）

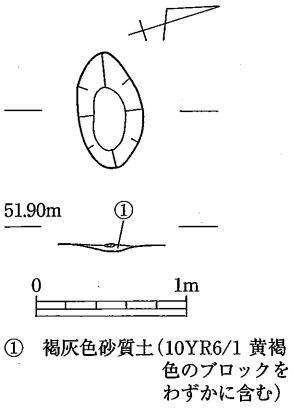
K地区K１区北西部、西壁に接して検出した土坑である。一部調査区外にあたるが、形状はほぼ円形を呈し、規模は長径1m、短径0.8m、深度は25cmを測る。

第153図はSKf42から出土した遺物である。300は土師器の小皿である。底部から体部にかけての屈曲部がやや丸みを帯びている。口縁端部はやや肥厚させて丸くおさめる。

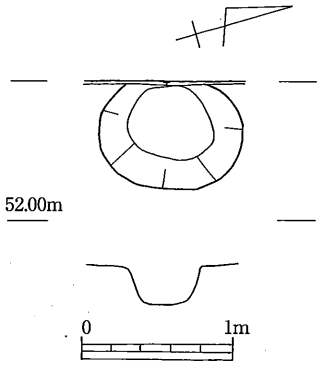
埋土および出土遺物からSKf42は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。



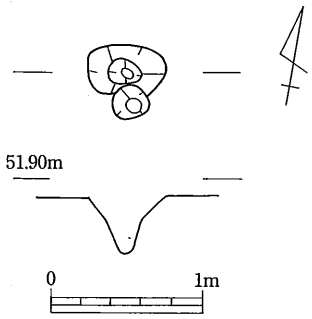
第145図 SKf39平・断面図(1/50)



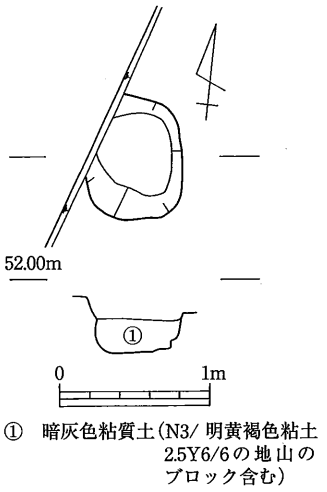
第146図 SKf40平・断面図(1/50)



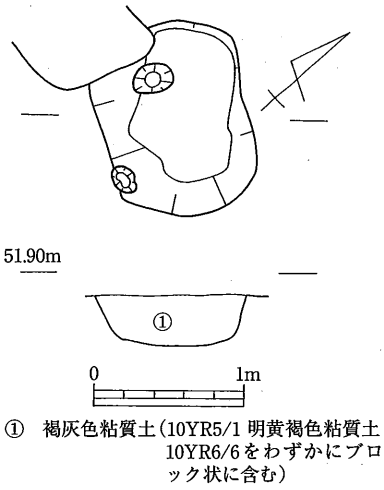
第147図 SKf42平・断面図(1/50)



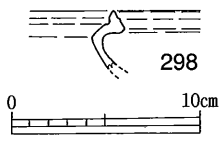
第148図 SKf43平・断面図(1/50)



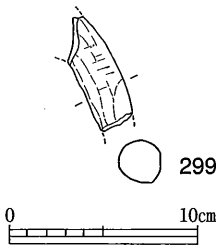
第149図 SKf44平・断面図(1/50)



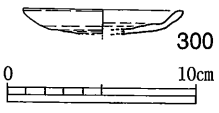
第150図 SKf45平・断面図(1/50)



第151図 SKf36出土遺物実測図



第152図 SKf37出土遺物実測図



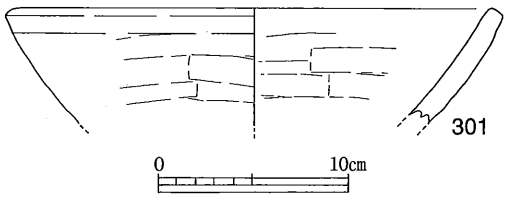
第153図 SKf42出土遺物実測図

SKf43（第148図）

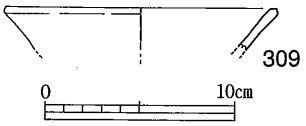
K地区K1区北西部、SKf42のすぐ東側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.3m、深度は40cmを測る。

第154図はSKf43から出土した遺物である。301は瓦質土器の鉢である。口縁部から体部はほぼ同じ厚みでやや丸みを帯びる。内外面ともに板状の工具の痕跡が認められる。

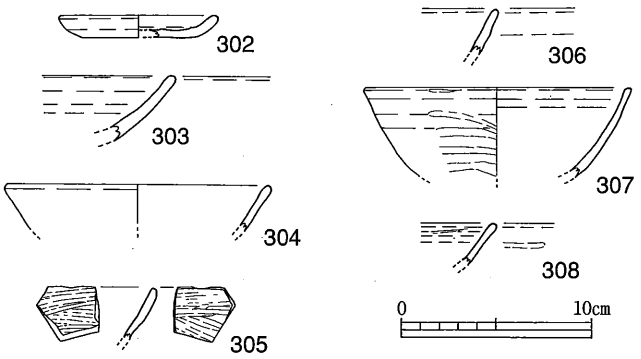
出土遺物の特徴からSKf43も12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。



第154図 SKf43出土遺物実測図



第156図 SKf45出土遺物実測図



第155図 SKf44出土遺物実測図

SKf44（第149図）

K地区K１区北西部、SKf42の南側で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.7m、深度は30cmを測る。

第155図はSKf44から出土した遺物である。302は土師器の小皿である。303・304は土師器の杯である。305は黒色土器の椀、306・307は須恵器の椀である。308は瓦質土器の椀の口縁部である。出土遺物からみてSKf44も12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf45（第150図）

K地区K１区北東部で検出した土坑である。SBf35の南西部にあたるが、柱穴が本土坑を破壊しているので、建物跡に先行するものである。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径0.9m、深度は35cmを測る。

第156図はSKf45から出土した遺物である。309は黒色土器の杯である。内面のみ黒色を呈するいわゆるA類に属す。

埋土の状況からSKf45は12世紀以前のものであると考えられる。

SKf46（第157図）

K地区K１区北東部で検出した土坑である。SKf45を破壊するように掘削されているが、埋土の色調がよく似ていることから、それほど時間差はないものと考えられる。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径１m、短径0.8m、深度は40cmを測る。

第166図はSKf46から出土した遺物である。310は土師器の小皿である。311は須恵器の椀である。

埋土の状況や出土遺物からみて、SKf46は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf48（第158図）

K地区K１区北東部で検出した大型の土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径1.2m、短径１m、深度は５cmを測る。

第167図はSKf48から出土した遺物である。312は土師器の高台付の杯の脚部であると考えられる。

埋土の状況や出土遺物からみて、SKf48は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf49（第159図）

K地区K１区北東部、SKf48のすぐ南側で検出した小規模の土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規

模は長径1.3m、短径1.1m、深度は5cm非常に浅い。

第168図はSKf49から出土した遺物である。313は土師器の小皿である。314は土師器の杯である。

出土遺物の特徴からSKf49も12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf50（第160図）

K地区K1区中央部、SKf49の東側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1m、短径0.7m、深度は20cmを測る。

第169図はSKf50から出土した遺物である。315は須恵器の椀の口縁部である。

出土遺物からみてSKf50も12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf51（第161図）

K地区K1区中央部やや北よりの部分で検出した土坑である。東側でSKf52と接している。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1m、短径1m、深度は30cmを測る。

SKf52（第162図）

K地区K1区中央部やや北よりの部分で検出した大型の土坑である。SKf51の東側と接するようにして検出した。形状は円形を呈し、規模は長径2.1m、短径2.1m、深度は70cmを測る。

第170図はSKf52から出土した遺物である。316は弥生時代後期の甕の口縁部である。ほかにも図示できなかったが、弥生土器の破片が少量出土している。

したがって、SKf52は弥生時代後期のものであると考えられる。

SKf53（第163図）

K地区K1区中央部で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.5m、深度は15cmを測る。

第171図はSKf53から出土した遺物である。317は土師器の小皿である。体部の立ち上がりは低い。

埋土の状況などからみて、SKf53は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf54（第164図）

K地区K1区中央部やや北西よりで検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.6m、深度は5cmを測る。

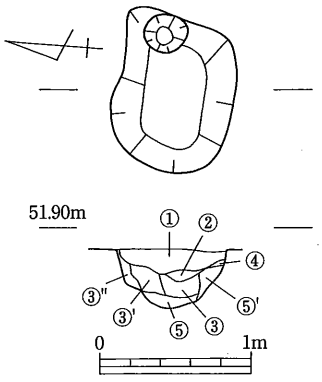
埋土の状況からみて、SKf54も12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf55（第165図）

K地区K1区中央部で検出した土坑である。形状はやや歪な円形を呈し、規模は長径1.2m、短径1.2m、深度は5cmを測る。

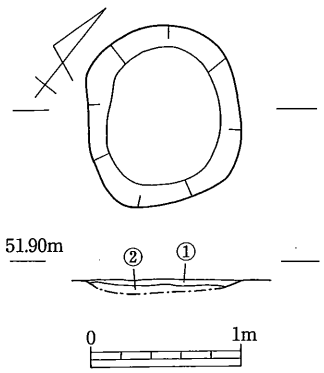
第172図はSKf55から出土した遺物である。318・319は土師器の杯である。319は立ち上がりが急でかなり深めであるため、椀の可能性もある。320は土師質土器の土鍋である。外面には板状の工具の痕跡が顕著で、内面には一面にハケ目が施されている。

埋土の状況や出土遺物の特徴からみて、SKf55は北側にあるSKf53などと同様、12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。



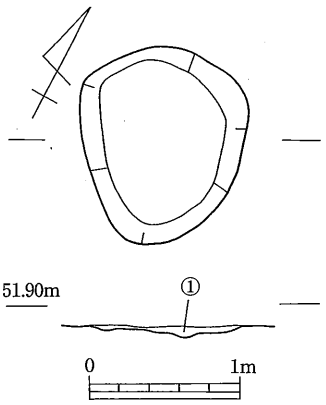
① 褐灰色粘質土（7.5YR6/1）
② 青黒色粘質土（5PB2/1）
③ 灰色粘質土（5Y5/1）
④ 灰色粘質土（5Y4/1）
⑤ 明黄褐色粘土（2.5Y6/6）

第157図 SKf46平・断面図(1/50)



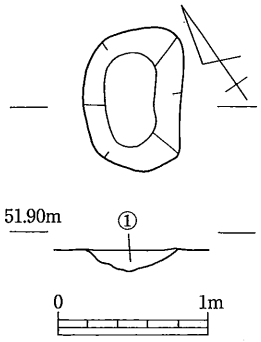
① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）
② 明黄褐色粘土（2.5Y6/6地山）

第158図 SKf48平・断面図(1/50)



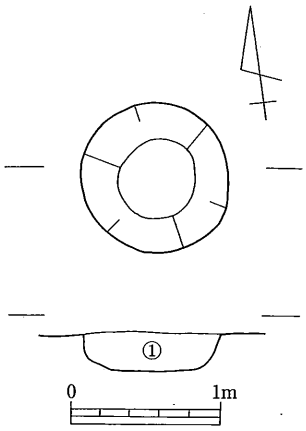
① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1 炭化物含む）

第159図 SKf49平・断面図(1/50)



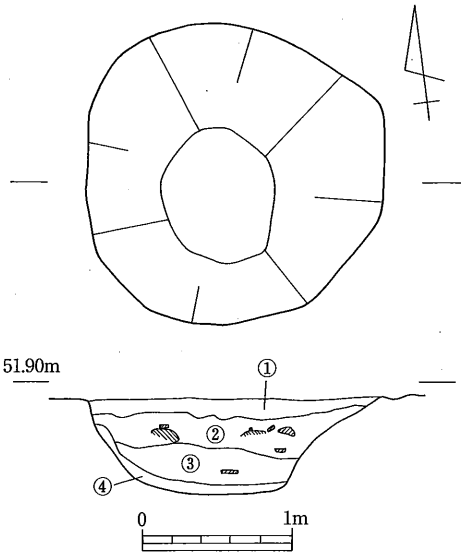
① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1 わずかに炭化物含む）

第160図 SKf50
平・断面図(1/50)



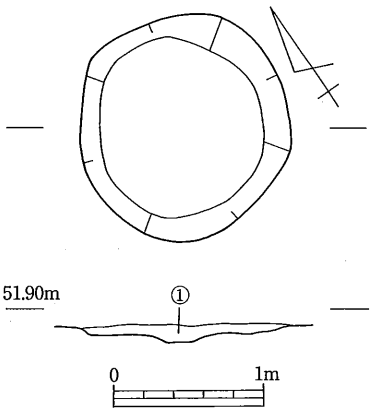
① 黄灰色砂質土（2.5Y5/1 黄褐色粘質土のブロック含む）

第161図 SKf51
平・断面図(1/50)



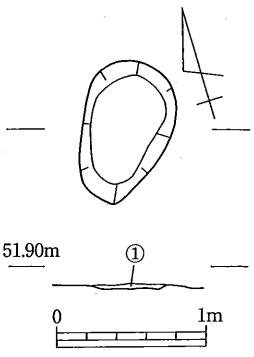
① 明黄褐色砂質土（10YR7/6）
② 褐灰色粘質土
（10YR5/1 黄褐色粘質土をブロック状に含む）
③ 黄褐色粘質土（10YR5/6）
④ 褐灰色粘質土（10YR4/1）

第162図 SKf52平・断面図(1/50)



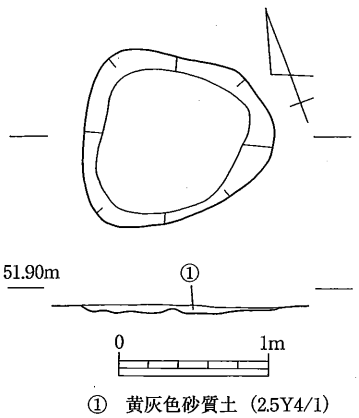
① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）

第163図 SKf53平・断面図(1/50)



① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）

第164図 SKf54平・断面図(1/50)



① 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）

第165図 SKf55平・断面図(1/50)

SKf56（第173図）

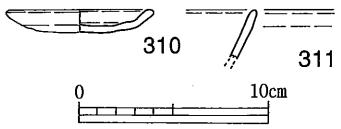
K地区K１区中央部やや西より、SKf55のすぐ南側で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.6m、深度は10cmを測る。

SKf57（第174図）

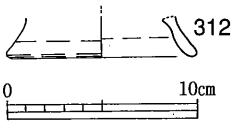
K地区K１区中央部やや西より、SKf56の南側で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.3m、深度は５cmを測る。

SKf58（第175図）

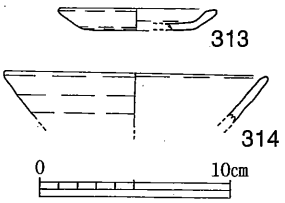
K地区K１区中央部やや西より、SKf57の東側で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m、深度は10cmを測る。



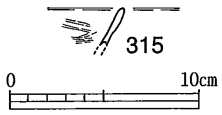
第166図 SKf46出土遺物実測図



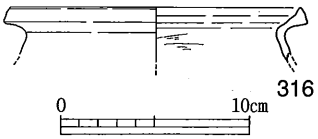
第167図 SKf48出土遺物実測図



第168図 SKf49出土遺物実測図

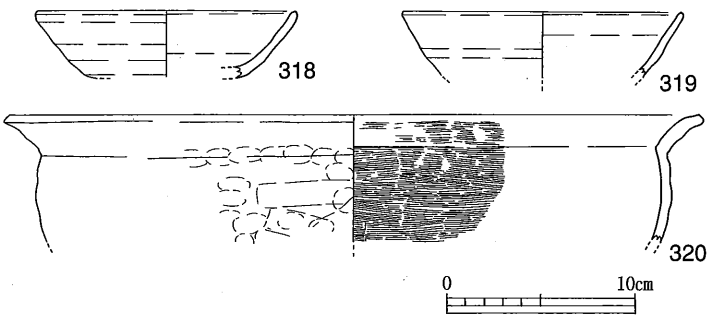


第169図 SKf50出土遺物実測図

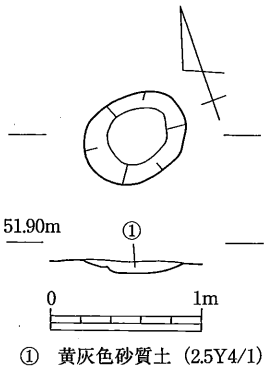


第170図 SKf52出土遺物実測図

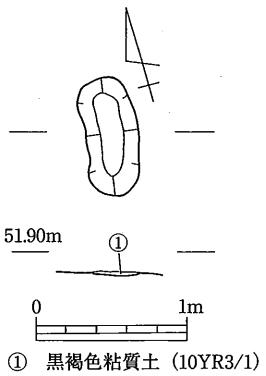
第171図 SKf53出土遺物実測図



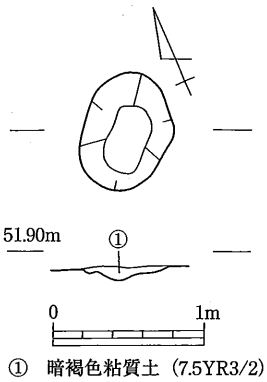
第172図 SKf55出土遺物実測図



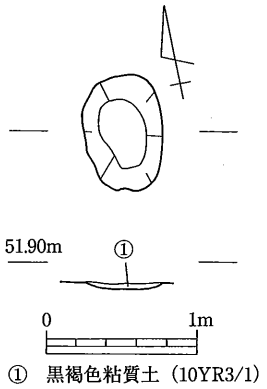
第173図 SKf56平・断面図(1/50)



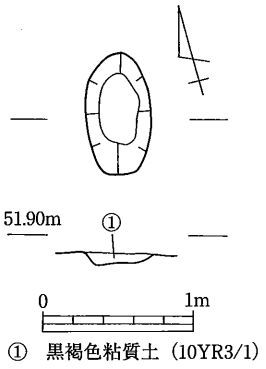
第174図 SKf57平・断面図(1/50)



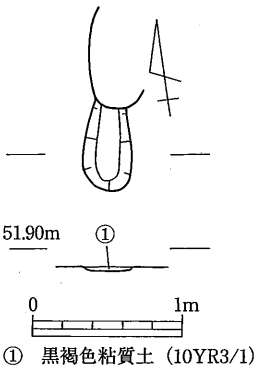
第175図 SKf58平・断面図(1/50)



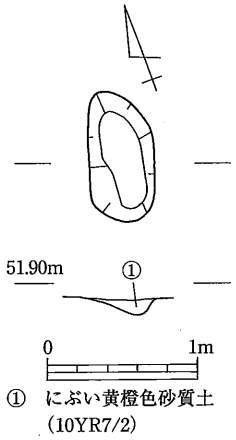
第176図 SKf59平・断面図(1/50)



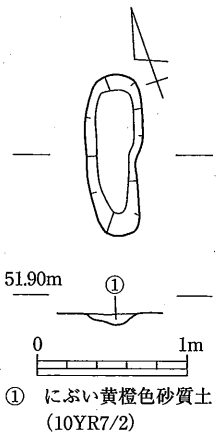
第177図 SKf63平・断面図(1/50)



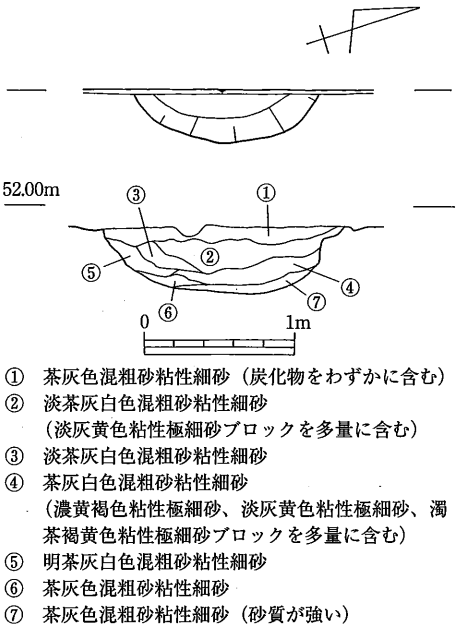
第178図 SKf64平・断面図(1/50)



第179図 SKf65
平・断面図(1/50)



第180図 SKf66
平・断面図(1/50)



第181図 SKf67平・断面図(1/50)

SKf59（第176図）

K地区K１区中央部やや西より、SKF58の南側で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.5m、深度は５cmを測り、非常に浅い。

SKf56～59の４基の土坑は、非常に近接した範囲で検出したもので、同時期のものとみて差し支えないであろう。

SKf63（第177図）

K地区K１区中央部やや南西よりで検出した土坑である。位置的にはSBf09の内部に属する。形状は歪な楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.4m、深度は10cmを測る。

第182図はSKf63から出土した遺物である。321は土師器の杯である。322は須恵器の片口鉢の口縁部である。胎土からみて東播系のものである可能性が高い。

埋土・出土遺物からみてSKf63は12世紀から13世紀のものであると考えられる。

SKf64（第178図）

K地区K１区中央部やや南西よりで検出した土坑である。北側の一部をSKf63に破壊されている。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.6m以上、短径0.3m、深度は５cmを測る。

SKf65（第179図）

K地区K１区ほぼ中央部で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.4m、深度は10cmを測る。

第183図はSKf65から出土した遺物である。323・324はいずれも瓦質土器（軟質須恵器）の小皿である。法量の違うタイプのものである。

埋土や遺物からみて、SKf65も12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

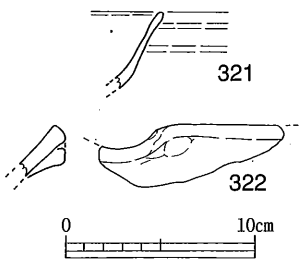
SKf66（第180図）

K地区K１区ほぼ中央部で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.3m、深度は10cmを測る。

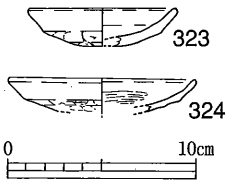
SKf67（第181図）

K地区K１区西壁際中央やや南よりの部分で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.2m、短径0.3m、深度は40cmを測る。

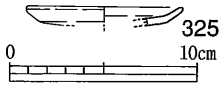
第184図はSKf67から出土した遺物である。325は土師器の小皿である。器高が非常に低いタイプのものである。SKf67は検出面が耕作土直下であるため、他の遺構よりも時期的には新しく、近世以降のものであると考えられる。325は埋没時に混入した異物であると考えられる。



第182図 SKf63出土遺物実測図



第183図 SKf65出土遺物実測図



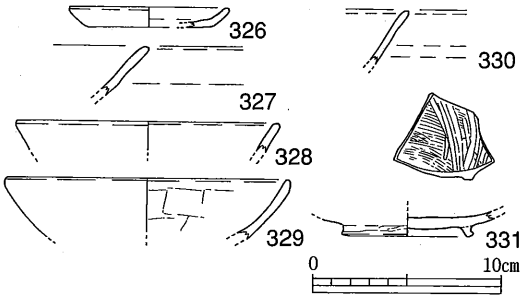
第184図 SKf67出土遺物実測図

SKf68（第185図）

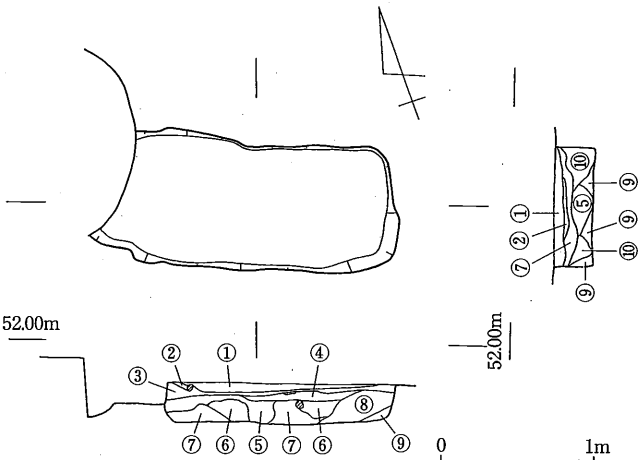
K地区K１区西壁際中央やや南より、SKf67と西壁でほぼ半分が破壊された状況で検出した土坑である。形状は隅丸方形を呈し、規模は長径2.1m、短径0.9m、深度は30cmを測る。

第186図はSKf68から出土した遺物である。326は土師器の小皿である。327～329は土師器の杯である。330は土師器の椀である。331は須恵器の椀の底部である。

遺物の特徴ならびに埋土の状況からみて、SKf68は12世紀代を中心とする時期の所産であると考えられる。また、ここでは土坑として報告しているが、第190図333に見られるような、やや特殊な遺物が出土していること、その形状や断面がほぼ直立して立ち上がるなど、土坑墓の可能性も否定できない。



第186図 SKf68出土遺物実測図



① 淡黄灰茶色混細砂粘性極細砂
② 濁紫褐灰色混細砂粘性極細砂（焼土、炭化物含む）
③ 明黄灰色混細砂粘性極細砂
④ 淡黄灰茶色混細砂粘性極細砂
（明黄褐色粘質土2.5Y7/6ブロックを多量に含む）
⑤ 淡灰黄色混細砂粘性極細砂
（10㎜以上の炭化物を多量に含む）
⑥ 淡黄灰色混細砂粘性極細砂
⑦ 明灰黄色混細砂粘性極細砂
⑧ 明黄茶灰色混細砂粘性極細砂
⑨ 濁灰黄茶色混細砂粘性極細砂
⑩ 濁黄茶灰色混細砂粘性極細砂

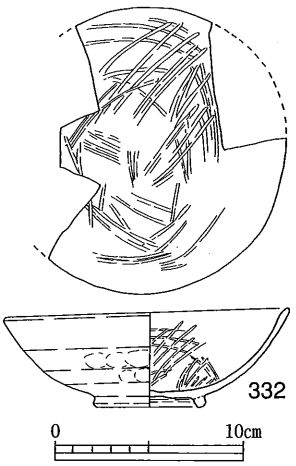
第185図 SKf68平・断面図(1/50)

SKf69（第187図）

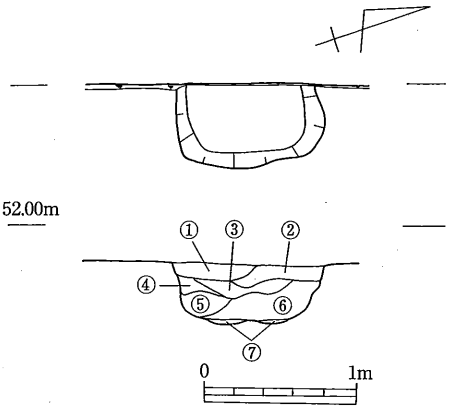
K地区K１区南端で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.5m、深度は40cmを測る。

第188図はSKf69から出土した遺物である。332は須恵器の椀である。外面には指押さえの痕跡が顕著で型作りによるものであることが推測できる。内面にはヘラミガキの痕跡が顕著である。

第189図はSKf68および69から出土した遺物である。調査開始時に掘削したトレンチから出土したもので、峻別ができなかったため、SKf68・69のいずれかからの出土として報告する。333は土師器の小皿を成形後すぐに折り曲げた耳皿である。334・335は土師器の杯である。336は須恵器の椀の口縁部である。耳皿が出土していることから、SKf68・69はほぼ12世紀代のものと考えられる。



第188図 SKf69出土遺物実測図

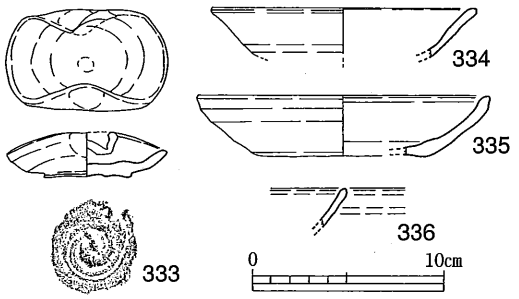


① 淡茶灰褐色粘性細砂（炭化物わずかに含む）
② 淡黄灰茶色粘性細砂（炭化物わずかに含む）
③ 濁黄灰茶色粘性極細砂
④ 淡黄茶灰色粘性極細砂
⑤ 淡黄茶灰色粘性極細砂（暗褐灰色粘性極細砂、濁茶褐黄色粘性極細砂ブロックを多量に含む）
⑥ 黄茶灰色粘性極細砂
⑦ 濁茶褐黄色粘性極細砂

第187図 SKf69平・断面図(1/50)

SKf70・71（第190図）

K地区K１区中央やや南西よりの部分で検出した土坑である。位置的にはSBf09の南東隅にあたる。埋土がよく似ており、切り合い関係が不明であるため、一括して報告する。平面プランの形状は歪な円形を呈し、規模はSKf70が長径２m、短径1.7m、深度10cm、SKf71が長径1.3m、短径1.2m、深度10cmを測る。



第189図 SKf68・69出土遺物実測図

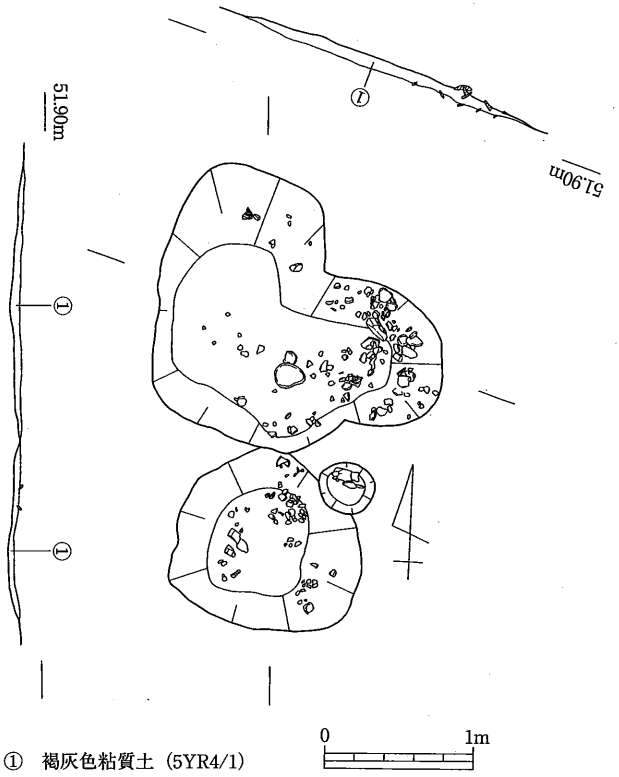
第191図はSKf70および71から出土した遺物である。346・347、363～368はSKf70から出土した土師器の小皿である。いずれも底部外面にヘラ状工具の痕跡が認められる。348、369・370はSKf70から出土した土師器の高台付杯もしくは杯である。349・350、371～373はSKf70から出土した土師器もしくは土師質土器の椀である。350には、高台を貼り付けていた痕跡が残っている。373は高台部分である。高台は端部が丸く外側へ踏ん張るように付く。374はSKf70から出土した須恵器の椀である。375は瓦質土器の小皿、376は瓦質土器の杯、377は瓦質土器の片口鉢である。注口の部分のみの出土である。いずれもSKf70から出土したものである。378～381はSKf70から出土した土師質土器の土鍋である。379・380は器壁が薄く、内面にはハケ目が施されている。351はSKf70から出土した瓦質土器の土鍋である。

382は鉄製品である。両端が欠損しているが、断面の形状および大きさから判断すると、鉄釘であると考えられる。337・338はSKf71から出土した土師器の小皿である。339はSKf71から出土した土師器の杯である。340はSKf71から出土した須恵器の椀である。341・342はやはりSKf71から出土した土師質土器の土鍋である。343はSKf71から出土した須恵器の鉢である。344はSKf71から出土した瓦質土器の片口鉢である。わずかに注口の部分がみてとれる。353～362はSKf70と71との切り合い関係を確認するために調査時に掘削したトレンチから出土したもので、峻別することが困難なため、どちらの可能性もある遺物として報告する。353～356は土師器の小皿である。

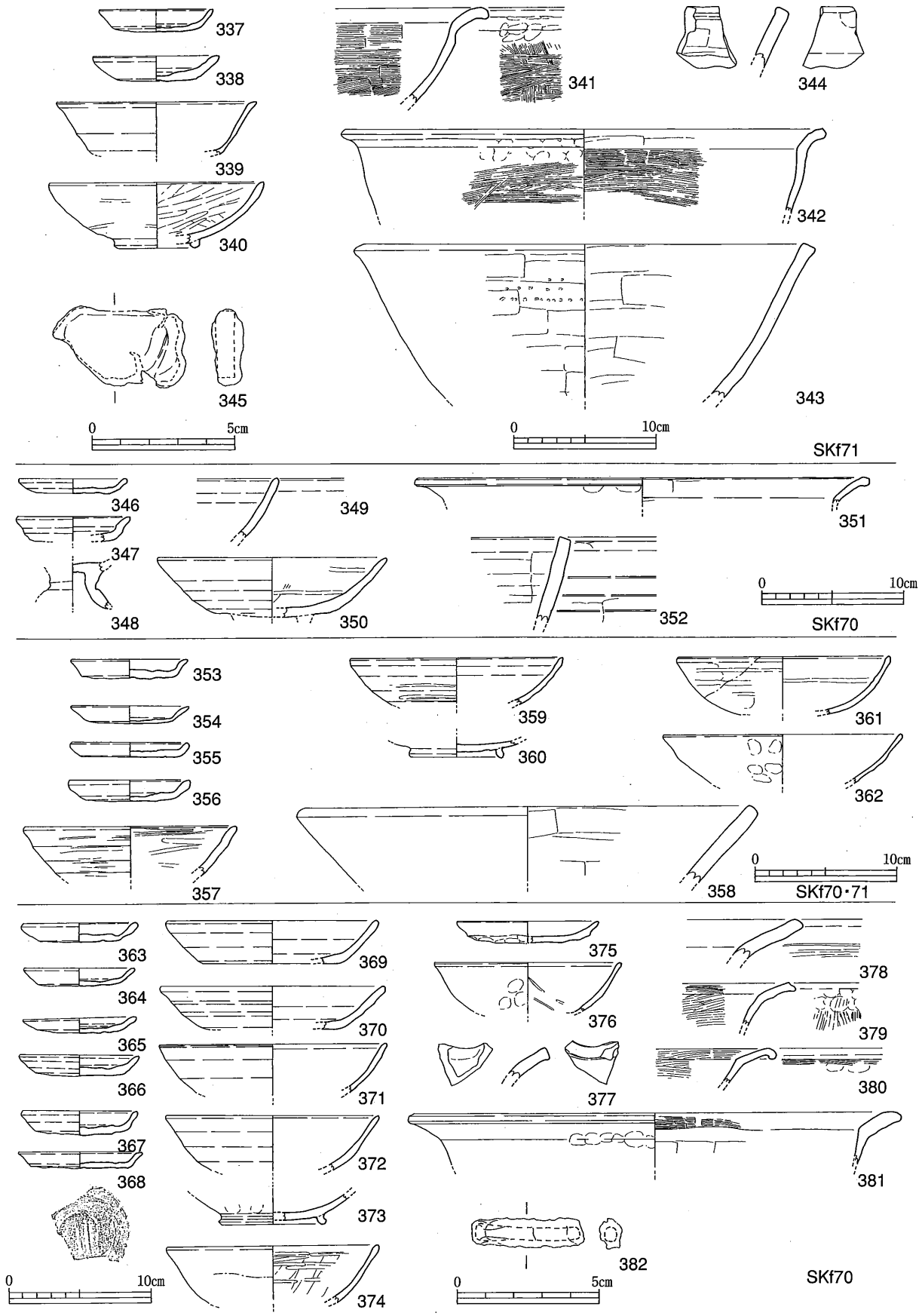
357は土師器の椀、358は土師質土器の鉢である。359・360は須恵器の椀、361・362は瓦質土器の椀である。345は鉄製品である。欠損しているため、全体像は不明である。断面の形状も一様であり、器種は不明である。

これらの出土遺物については、その特徴から12世紀代を中心とする時期に比定され、したがって本土坑も当該時期に埋没したと考えられる。

SKf70・71については、平面プランが歪で何らかの目的のために掘削されたとは考えにくい。また、表面的な大きさの割に深度が浅く、包含層の落ち込みのようにも思える。しかしながら、周辺の包含層からこれほど多くの遺物が一括して集中する場所がないこと、遺物の時期に大きな幅がないこと、掘立柱建物跡（SBf09・10）と重なること、遺物の時期が掘立柱建物跡とほぼ同じであることからここでは、掘立柱建物跡に密接に関連する土坑として報告しておく。



第190図 SKf70・71平・断面図(1/50)



第191図　SKf70・71出土遺物実測図

SKf72（第192図）

K地区K１区北東隅で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.9m、深度は20cmを測る。SBf37の北側に位置し、柱穴の埋土とSKf72の埋土がほぼ一致することから、SKf72も近世の所産であると考えられる。

SKf73（第193図）

K地区K１区北東隅、SKf72のすぐ南側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.8m、深度は30cmを測る。

第201図はSKf73から出土した遺物である。383・384は染付の皿である。いずれも小片であるが肥前系であると考えられる。出土遺物の特徴および埋土がSKf72とほぼ同じことからみて、本土坑も近世の所産であると考えられる。

SKf74（第194図）

K地区K１区北東隅で検出した土坑である。位置的にはSBf37の内部に位置する。埋土はSBf37のものとよく似ており、同時期のものではないかと考えられる。形状は円形を呈し、規模は長径１m、短径0.9m、深度は20cmを測る。

SKf75（第195図）

K地区K１区北東隅で検出した土坑である。位置的にはSBf38の内部に位置する。形状は円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m、深度は10cmを測る。

第202図はSKf75から出土した遺物である。385は瓦の転用品である。元来は平瓦であったものを意図的に打ち欠いたものでやや歪であるが円形を意識している。

出土遺物に時期を特定するものはないが、埋土や掘立柱建物跡との関係などからみてSKf75は近世のものであると考えられる。

SKf78（第196図）

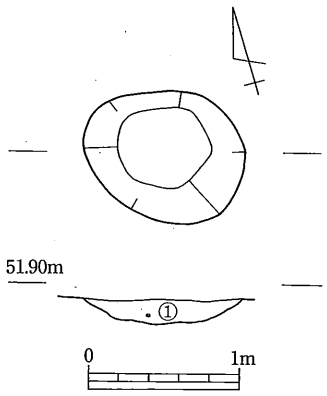
K地区K１区南東部で検出した土坑である。形状はほぼ方形を呈し、規模は長径1.5m、短径0.8m、深度は15cmを測る。

第203図はSKf78から出土した遺物である。386は平瓦の一部である。側縁の部分であり、端部は凹面を面取りして仕上げている。凹面には布目痕が、凸面にはタタキ痕が明瞭に認められる。焼成は非常によく、暗灰色を呈している。タタキ痕から荒縄を巻いた板状の工具が想定できる。12世紀前後に十瓶山周辺で生産されたものであろう。

SKf86（第197図）

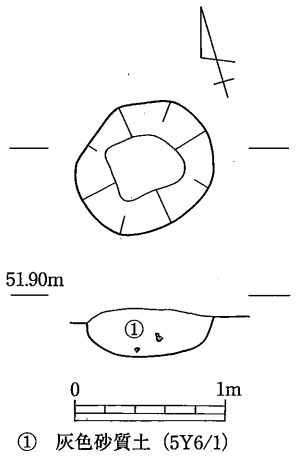
K地区K２区西部で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.5m、深度は60cmを測る。

出土遺物は素焼きの土器片が少量出土したのみで、時期の特定は困難である。



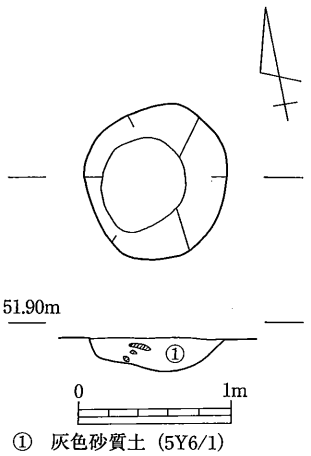
① 灰色砂質土（5Y6/1）

第192図 SKf72平・断面図(1/50)



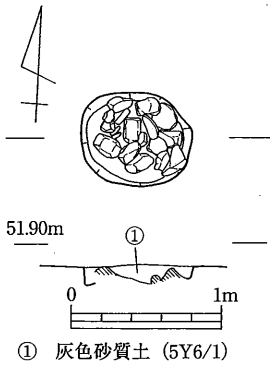
① 灰色砂質土（5Y6/1）

第193図 SKf73平・断面図(1/50)



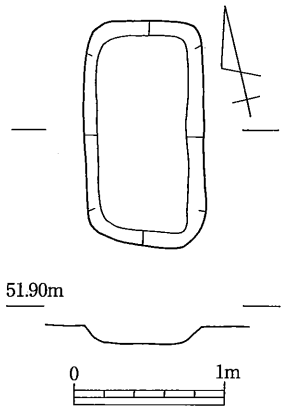
① 灰色砂質土（5Y6/1）

第194図 SKf74平・断面図(1/50)

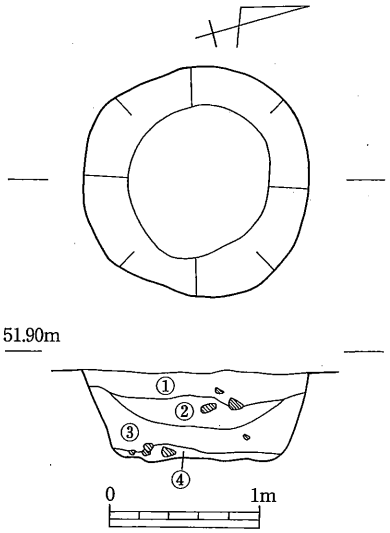


① 灰色砂質土（5Y6/1）

第195図 SKf75平・断面図(1/50)

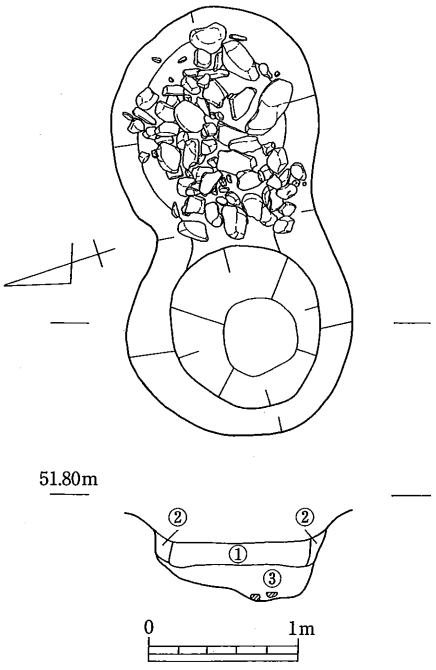


第196図 SKf78平・断面図(1/50)



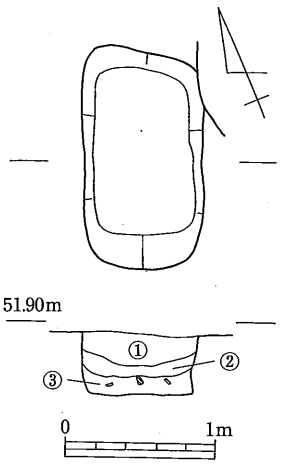
① 灰白色砂質土（5Y7/2）
② 灰オリーブ色砂質土（5Y6/2）
③ 灰オリーブ色砂質土（5Y6/2）
＋オリーブ色粘質土（5Y6/8）
④ 灰色砂質土（5Y4/1）

第197図 SKf86平・断面図(1/50)



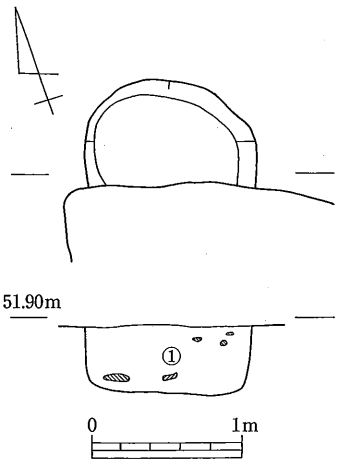
① 黄色粘質土（2.5Y8/8）ブロック＋暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）ブロックの互層ベースは砂質土
② 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
③ 褐色粗砂層（10YR4/6）

第198図 SKf87・SXf06平・断面図(1/50)



① 褐灰色砂質土（10YR6/1 黄褐色粘質土 2.5Y5/6ブロック含む）
② 青灰色シルト（10BG5/1 黄褐色粘質土 2.5Y5/6ブロック含む）
③ 暗褐色粗砂混粘質土（7.5YR3/4）

第199図 SKf88平・断面図(1/50)



① 灰白色砂混粘質土（10YR7/1 地山ブロック含む）

第200図 SKf89平・断面図(1/50)

SKf87（第198図）

K地区K2区西部で検出した土坑である。石組の不明遺構（SXf06）と隣接するように検出した。形状は円形を呈し、規模は長径1.5m、短径1.1m、深度は40cmを測る。

出土遺物はほとんどなく、時期の特定は困難であるが、SXf06がSDf21を破壊していることから、おそらく近世ごろの所産と思われる。

SKf88（第199図）

K地区K2区北壁中央部で検出した土坑である。形状は方形を呈し、規模は長径1.5m、短径0.8m、深度は40cmを測る。

第204図はSKf88から出土した遺物である。387は土師器の小皿である。底部は平らで体部との屈曲部が厚く、口縁端部までつまみ上げて仕上げている。388は土師器の杯である。底部が欠損しているので、椀の可能性もある。389は瓦質土器の椀である。摩滅が著しく、暗文等は不明である。

387は中世以前ではなく、近世ごろのものであると考えられるため、SKf88は周辺の遺構との関係からみても近世ごろのものであると考えられる。

SKf89（第200図）

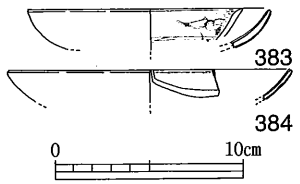
K地区K2区中央やや西よりの部分で検出した土坑である。ほぼ半分を後世の撹乱によって破壊されていた。形状は円形を呈し、規模は長径1.2m以上、短径0.7m以上、深度は50cmを測る。

遺物は出土していないが、埋土の状況からみて、近世ごろのものと考えられる。

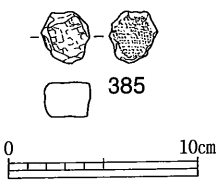
SKf91（第205図）

K地区K2区中央やや南西よりで検出した小型の土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m、深度は5cmを測る。

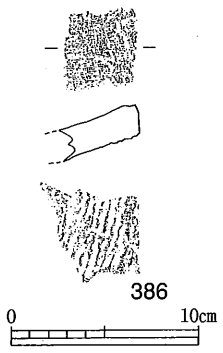
遺物は出土しなかったが、埋土からみて12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。



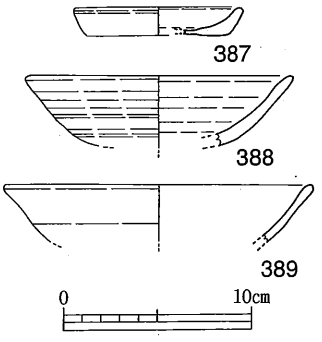
第201図 SKf73出土遺物実測図



第202図 SKf75出土遺物実測図



第203図 SKf78出土遺物実測図



第204図 SKf88出土遺物実測図

SKf92（第206図）

K地区K２区中央やや南よりで検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径1.2m、短径１m、深度は60cmを測る。

第214図はSKf92から出土した遺物である。390は黒色土器の椀である。内面のみ黒色を呈するいわゆるA類に属す。底部には高台が貼り付けられていた痕跡が残る。

出土遺物の特徴や埋土などからみて、SKf92は12世紀代のものであると考えられる。

SKf94（第207図）

K地区K２区中央北よりの部分で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m、深度は30cmを測る。

第215図はSKf94から出土した遺物である。391は土師器の小皿である。392は土師器の杯、393は須恵器の杯である。須恵器に古い様相が認められるが、土師器の特徴からみて、SKf94は12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf95（第208図）

K地区K２区中央北よりの部分で検出した土坑である。形状は方形を呈し、南側の一部をSXf07によって破壊されている。規模は長径１m、短径0.6m、深度は10cmを測る。

遺物は出土しなかったが、埋土からみて12世紀代のものと考えられる。

SKf96（第209図）

K地区K２区ほぼ中央で検出した土坑である。形状はやや楕円形を呈し、規模は長径1.2m、短径１m、深度は30cmを測る。

遺物は出土しなかったが、周辺の遺構の状況や埋土からみて、12世紀から13世紀ごろのものと考えられる。

SKf97（第210図）

K地区K２区中央北東よりの部分で検出した小型の土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.4m、短径0.3m、深度は10cmを測る。

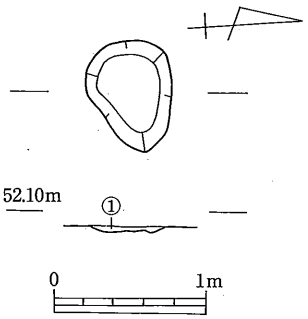
遺物は出土しなかったが、周辺の遺構の状況や埋土からみて、12世紀から13世紀ごろのものと考えられる。

SKf98（第211図）

K地区K２区北東部で検出した土坑である。位置的にはSBF19の内部に位置する。すぐ南には方形の大型土坑であるSKf101がある。形状は楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径0.9m、深度は20cmを測る。

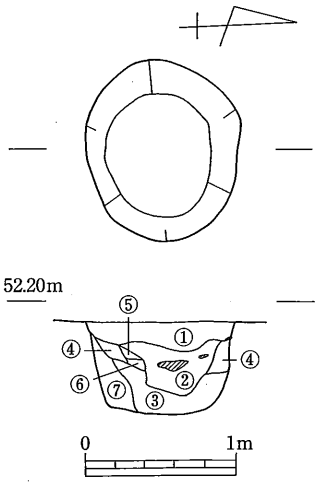
第216図はSKf98から出土した遺物である。394は土師質土器の椀である。高台部分は断面が三角形を呈している。

出土遺物の特徴や掘立柱建物跡（SBf19）との位置関係、埋土などからみて、SKf98は12世紀から13世紀ごろのものと考えられる。



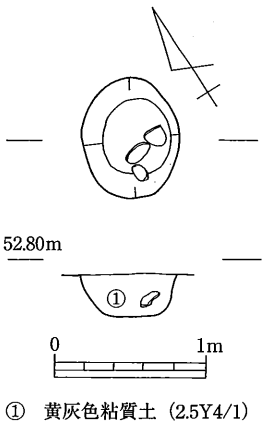
① 褐灰色砂混粘質土（10YR4/1）

第205図 SKf91平・断面図(1/50)



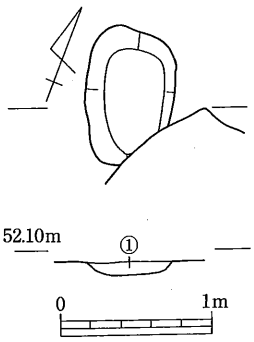
① 黒褐色粘質土（10YR3/1）
② 黒褐色粘質土（2.5Y3/1）
③ 黒褐色砂質土（2.5Y3/2）
④ 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）
⑤ 黒褐色粘質土（2.5Y3/1 やや黒味がかる）
⑥ 黒褐色粘質土（2.5Y3/1 やや砂っぽい）
⑦ 褐灰色砂質土（10YR4/1 わずかに礫含む）

第206図 SKf92平・断面図(1/50)



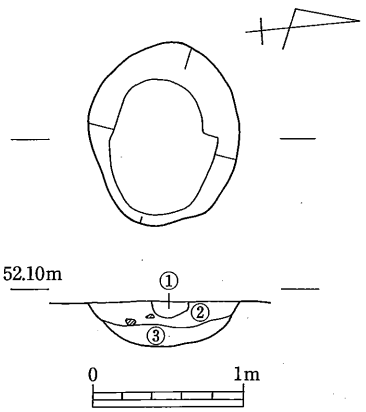
① 黄灰色粘質土（2.5Y4/1）

第207図 SKf94平・断面図(1/50)



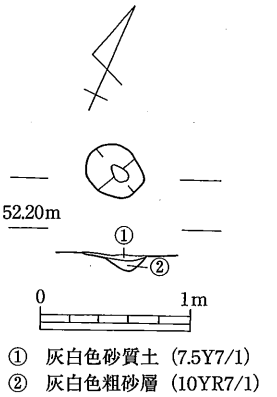
① 黒褐色砂質土（10YR3/1）

第208図 SKf95平・断面図(1/50)



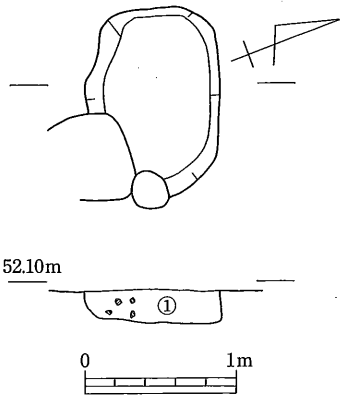
① 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）
② にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
③ 褐色粗砂層（10YR4/4）

第209図 SKf96平・断面図(1/50)



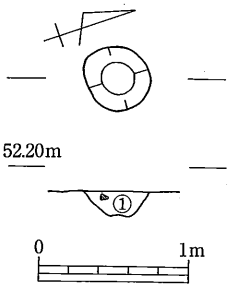
① 灰白色砂質土（7.5Y7/1）
② 灰白色粗砂層（10YR7/1）

第210図 SKf97平・断面図(1/50)



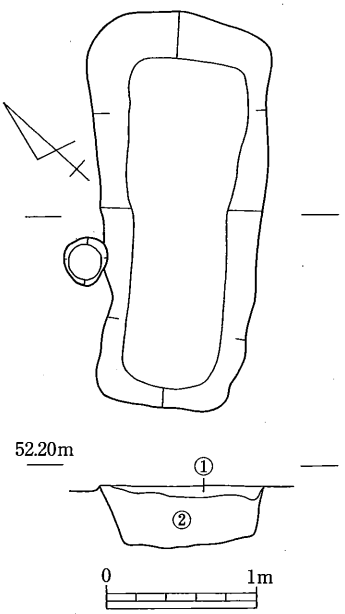
① 黒褐色砂質土（10YR3/1）＋黄色粘土（地山）のブロック状堆積

第211図 SKf98平・断面図(1/50)



① 黒褐色粘質土（10YR3/1 炭化物、焼土有り）

第212図 SKf100平・断面図(1/50)



① 褐灰色粘質土（10YR4/1）
② 褐灰色粘質土（10YR4/1）と淡黄色粘土（5Y8/3）と炭化物の互層

第213図 SKf101平・断面図(1/50)

SKf100（第212図）

K地区K2区北東部、SKf98の東側、SKf101のすぐ北側で検出した小型の土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.4m、短径0.4m、深度は20cmを測る。

第217図はSKf100から出土した遺物である。395は土師器の杯の口縁部から体部にかけての破片である。口縁端部はあまり外反せずに直線的に立ち上がる。

埋土や出土遺物からみて、SKf100も12世紀から13世紀にかけてのものと考えられる。

SKf101（第213図）

K地区K2区北東部で検出した土坑である。位置的にはSBf19の内部にあたり、すぐ南側には小型鍛冶遺構であるSXf09が位置している。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径2.6m、短径1.1m、深度は40cmを測る。

第218図はSKf101から出土した遺物である。396は白磁の碗の口縁部である。器壁は薄く、口縁端部はわずかに折り曲げて外反させる。397は土師質土器の椀である。鉄滓は確認していないが、粒状の金属粒がわずかに出土している。

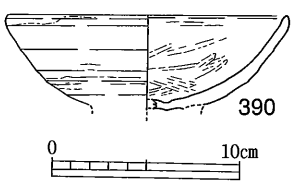
SKf101は掘立柱建物跡（SBf19）および小型の鍛冶遺構（SXf09）などと関係のある遺構であると考えられる。時期的には12世紀代を中心とする時期が考えられよう。

SKf102（第219図）

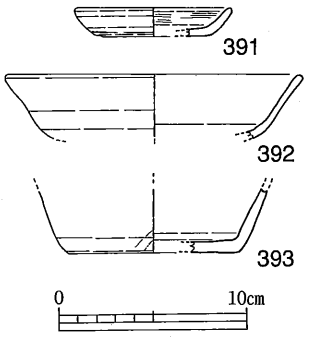
K地区K2区北東部、SKf101のすぐ南側で検出した土坑である。小型の鍛冶遺構（SXf09）から派生する溝状遺構に重なって検出された。形状は楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.5m、深度は20cmを測る。

第225図はSKf102から出土した遺物である。398は土師器の小皿である。体部から口縁部にかけて大きく折り曲げ外反している。

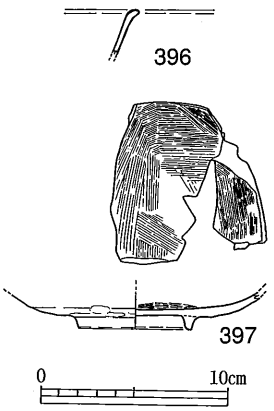
埋土や周囲の遺構の状況からみて12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられ、やはり掘立柱建物跡（SBf19）やSXf09などと関連する遺構であると思われる。



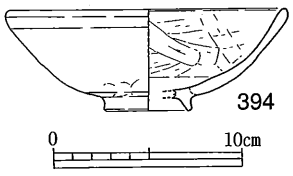
第214図 SKf92出土遺物実測図



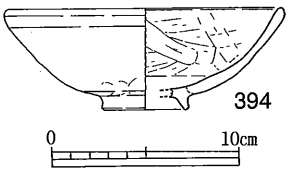
第215図 SKf94出土遺物実測図



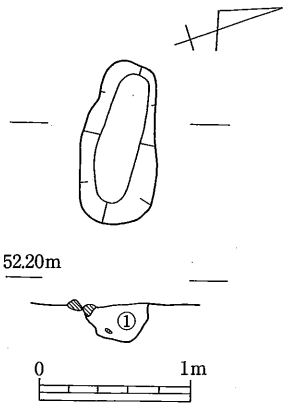
第218図 SKf101出土遺物実測図



第216図 SKf98出土遺物実測図

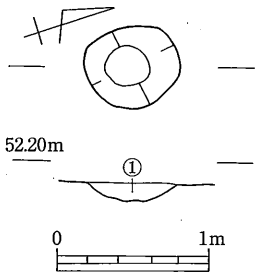


第217図 SKf100出土遺物実測図



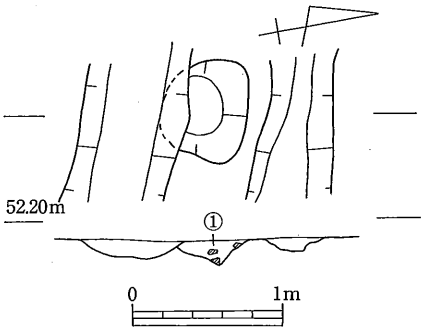
① 褐灰色粘質土（10YR4/1）

第219図 SKf102平・断面図(1/50)



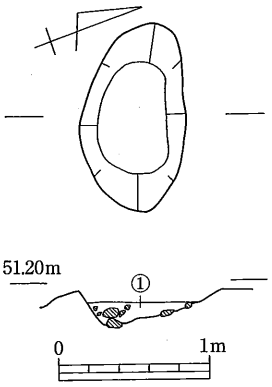
① 褐灰色粘質土（10YR4/1 炭化物をわずかに含む）と淡黄色粘土（5Y8/3）の互層

第220図 SKf103平・断面図(1/50)



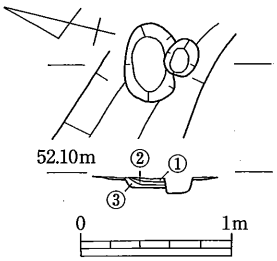
① 褐灰色粘質土（10YR4/1 礫を多量に含む）

第221図 SKf104平・断面図(1/50)



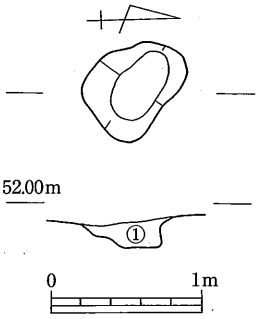
① 黒褐色砂質土（10YR3/1）

第222図 SKf105平・断面図(1/50)



① 黒褐色砂質土（10YR3/1）
② 褐灰色砂質土（10YR4/1）
③ 黒褐色砂質土（10YR3/2）

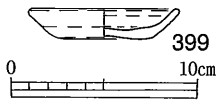
第223図 SKf106平・断面図(1/50)



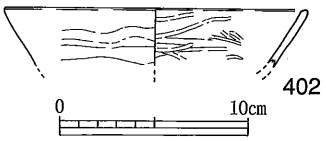
① 黒褐色砂質土（10YR3/1）

第224図 SKf107平・断面図(1/50)

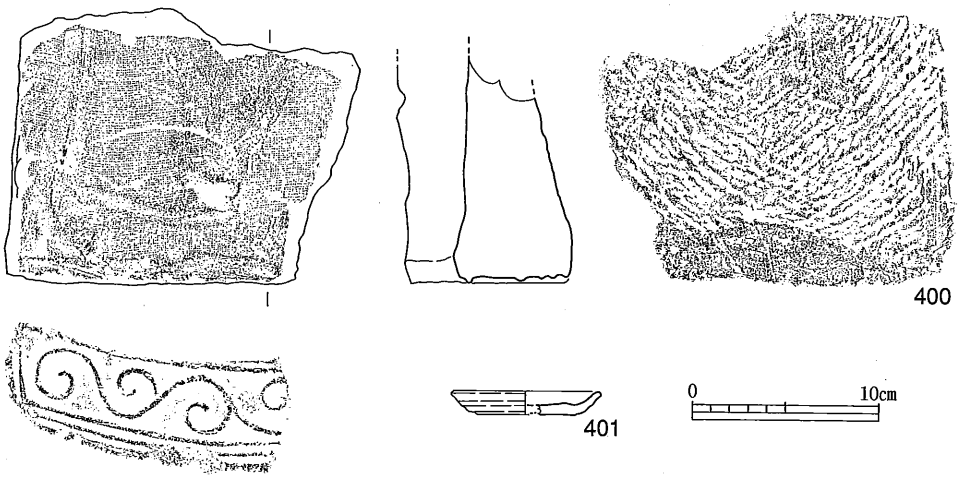
第225図 SKf102出土遺物実測図



第226図 SKf103出土遺物実測図



第228図 SKf107出土遺物実測図



第227図 SKf105出土遺物実測図

SKf103（第220図）

K地区K2区北東部、SXf09のすぐ南側で検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.6m、短径0.5m、深度は10cmを測る。

第226図はSKf103から出土した遺物である。399は土師器の小皿である。底部外面にはヘラ状の工具の痕跡が認められ、中央部がやや内面で盛り上がっている。体部から口縁部にかけては直線的に立ち上がり、あまり外反しない。端部は丸くおさめる。

出土遺物などから12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf104（第221図）

K地区K2区北東部、SDf16・17の間で検出した土坑である。南側の一部をSDf17によって破壊されている。形状は方形を呈し、規模は長径0.6m、短径0.6m、深度は20cmを測る。

遺物が出土しなかったため、時期の特定は困難であるが、溝状遺構に破壊されていることから12世紀以前のものであると考えられる。

SKf105（第222図）

K地区K2区北東部で検出した土坑である。西流しながら並行に走る溝状遺構SDf16・17にはさまれたように検出した。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径0.7m、深度は20cmを測る。

第227図はSKf105から出土した遺物である。400は軒平瓦である。瓦当部の約3分の1は欠損している。瓦当部の文様は偏行唐草文で、十瓶山周辺のますえ畑瓦窯跡に同文関係を求めることができる。しかしながら胎土に大粒の砂粒が多いことから同窯で焼成されたとは考えにくい。むしろ、西側の谷筋に位置する丸山窯跡群に胎土がよく似ているので、あるいはそちらで焼成されたものであるかもしれない。時期的には12世紀代が与えられよう。401は土師器の小皿である。

SKf106（第223図）

K地区K2区北東部で検出した小型の土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.4m、深度は10cmを測る。遺物は出土しなかったが、SDf17を破壊して掘削されていることから13世紀以降のものであると考えられる。

SKf107（第224図）

K地区K2区北東部で検出した土坑である。溝状遺構SDf15の埋土を除去した後に検出した土坑である。形状はやや歪な方形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.5m、深度は20cmを測る。

第228図はSKf107から出土した遺物である。402は須恵器の杯である。

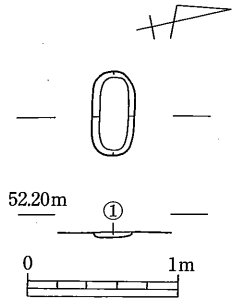
出土遺物や遺構の検出状況からみて12世紀代のものであると考えられる。

SKf109（第229図）

K地区K3区中央北より、SEf07のすぐ南側で検出した小型の土坑である。形状は方形を呈し、規模は長径0.6m、短径0.3m、深度は5cmを測る。

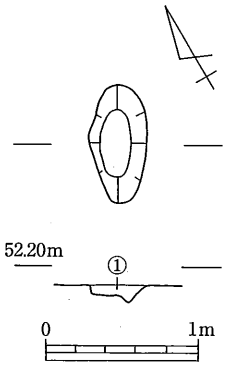
SKf110（第230図）

K地区K3区中央やや北よりで検出した小型の土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.4m、深度は10cmを測る。



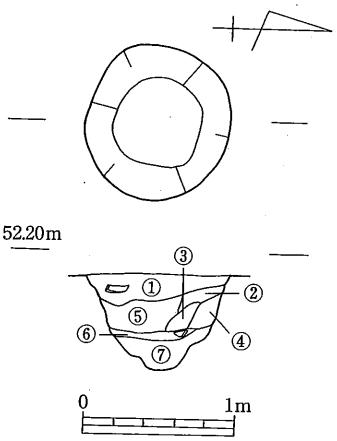
① 黒褐色粘質土（10YR3/1）

第229図 SKf109平・断面図(1/50)



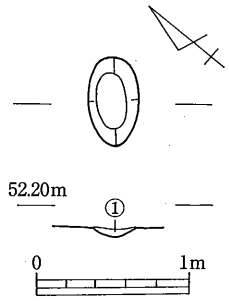
① 黒褐色粘質土（10YR3/1）

第230図 SKf110平・断面図(1/50)



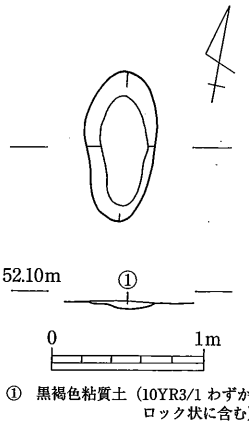
① 黒褐色粘質土（10YR3/1）
② 淡黄色粘質土（5Y8/4 わずかに灰色がかる）
③ 淡黄色粘質土（5Y8/4 ②よりも橙色がかる）
④ 淡黄色粘質土（5Y8/4 ③よりも白色がかる）
⑤ 淡黄色粘質土（5Y8/4 北半部に灰色がかる土が多い）
⑥ 灰色砂質土（5Y5/1）
⑦ 黄色粘質土（5YR7/6 礫をわずかに含む）

第232図 SKf113平・断面図(1/50)



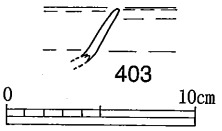
① 黒褐色粘質土（10YR3/1）

第231図 SKf111平・断面図(1/50)

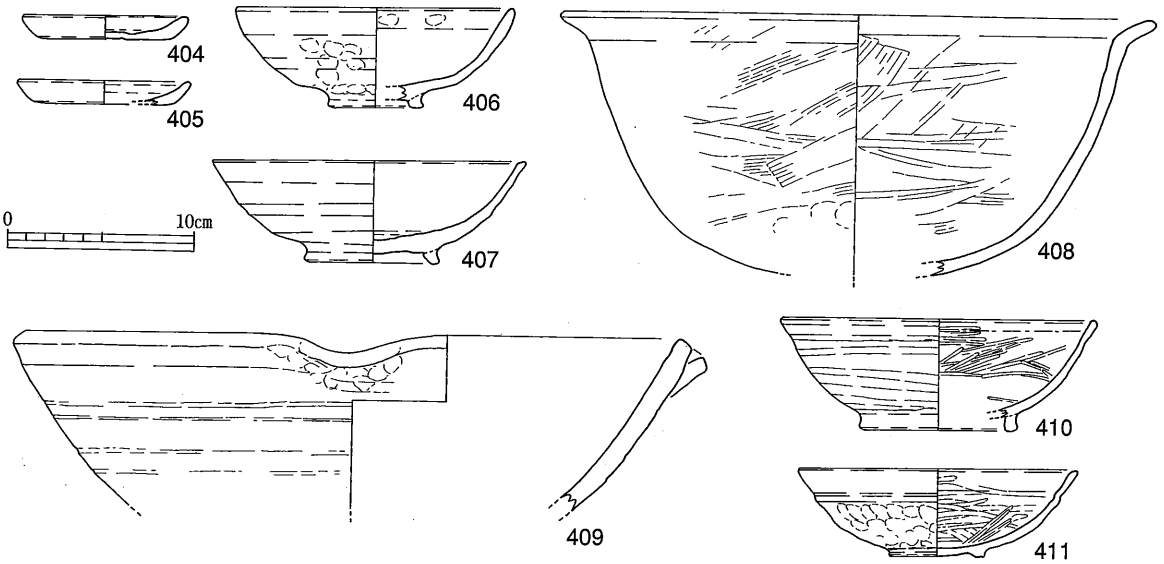


① 黒褐色粘質土（10YR3/1 わずかに地山をブロック状に含む）

第233図 SKf114平・断面図(1/50)



第234図 SKf111出土遺物実測図



第235図 SKf113出土遺物実測図

SKf111（第231図）

K地区K3区中央やや北より、SKf110のすぐ南側で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径0.6m、短径0.3m、深度は5cmを測る。

第234図はSKf111から出土した遺物である。403は須恵器の杯の口縁部である。端部は直線的に仕上げている。12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

SKf113（第232図）

K地区K3区中央やや北よりで検出した土坑である。形状は円形を呈し、規模は長径0.9m、短径0.9m、深度は1mを測る。断面の形状は擂鉢状を呈する。遺物は小皿や椀、鉢、土鍋といった日常雑器が多く出土している。

第235図はSKf113から出土した遺物である。404・405は土師器の小皿である。406は土師器の椀、407は土師質土器の椀である。408は土師質土器の土鍋、409は須恵器の片口鉢である。410は瓦質土器の椀、411は瓦器の椀である。

出土遺物の特徴や埋土の状況からみて、SKf113は12世紀代のものであると考えられる。

SKf114（第233図）

K地区K3区ほぼ中央部で検出した土坑である。弥生時代の河川跡SRf03が埋没した後に掘削されたもので、形状はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径1m、短径0.5m、深度は5cmを測る。

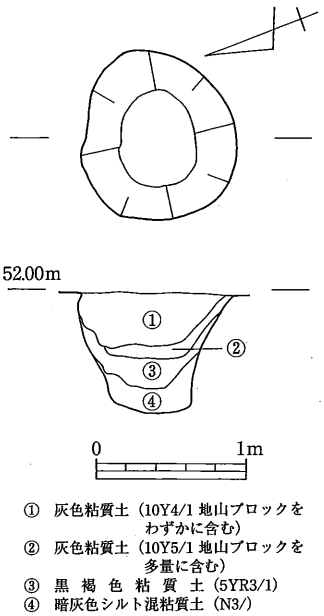
遺物は出土しなかったため、時期の特定は困難である。

第5節　井戸跡・墓跡

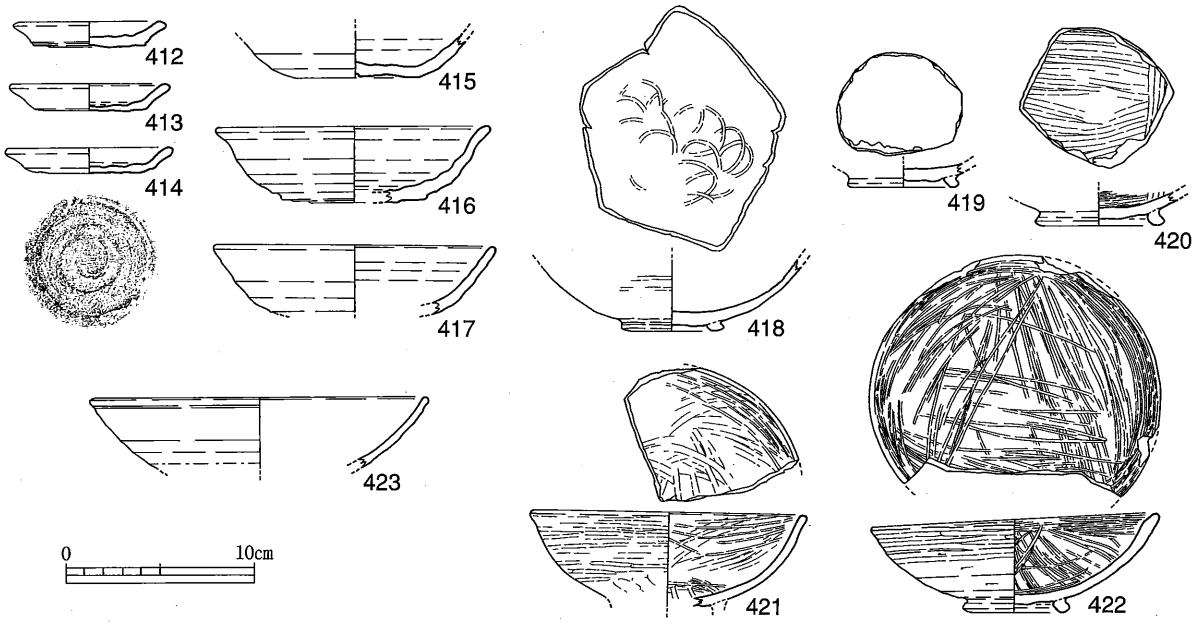
SEf01（第236図）

I地区N17区中央やや南よりの部分で検出した、やや小型の井戸跡である。SDf02の屈曲部の北側にあたる。すぐ東側には大型の井戸跡であるSEf02がある。形状は、ほぼ円形を呈し、規模は長径1.1m、短径1m、深度は80cmを測る。掘り方はやや擂鉢状を呈していることから、井戸を掘削しようとしたが、湧水点ではなかったため、掘削を途中で放棄したものと考えられる。埋土中からは小皿や椀といった、日常雑器が多く出土している。

第237図はSEf01から出土した遺物である。412～414は土師器の小皿である。415～417は土師器の杯、418は土師器の椀である。419は元来は、瓦質土器の椀だったものの転用品である。高台部分のみ残して、あとは細かく打ち欠いて円形の転用品に加工している。同様の資料は、多くの遺跡で認められるが、その用途や目的については不明である。420～422は黒色土器の椀である。いずれも内面のみ黒色を呈するいわゆるA類に属する。特に、422の内面には三角形を描くように三方向に暗文が施されている。423は白磁の碗である。高台部分は欠損しており体部から口縁部にかけての破片である。体部からやや内湾しながら自然に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。



第236図 SEf01平・断面図(1/50)



第237図 SEf01出土遺物実測図

SEf02（第238・239図）

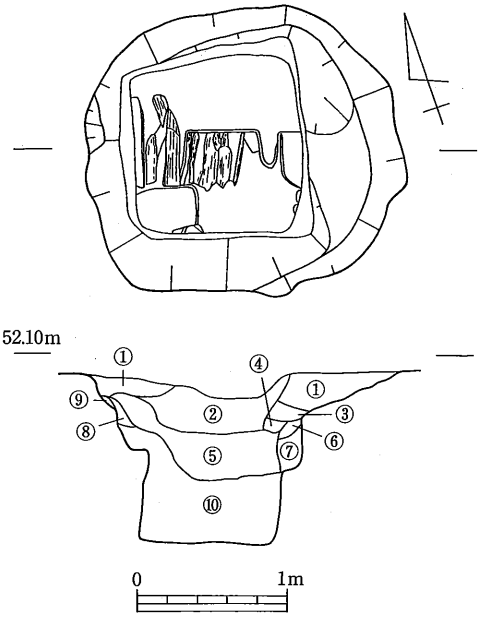
Ⅰ地区N17区中央やや南よりの部分で検出した、大型の井戸跡である。すぐ西側にはSEf01がある。掘り方の形状は方形で検出面の規模は２ｍ四方である。四隅がやや丸みを帯びており、東側がやや膨らんでいる。

掘りすすめると、四隅に柱らしい木製品が認められた。その間には縦板らしい木製品が確認でき、さらに横方向に延びる木製品も確認できた。

調査中は壁の崩落の危険性があったため、少しずつ、掘りながら周囲の木枠の状況を図化しながら調査を進めた。その結果、最下部には直径50cmと60cmの曲物が二段置かれており、その上面には円礫を敷き詰めて水質を高める工夫がなされていた、最終的に最下層までの深度は2.5ｍを測る。曲物の上部は１ｍ四方程度の空間を保つため、四隅に柱を立てその間を幅30cmの縦板が３枚並んで立てられていた。柱にはほぞ穴があけられ、横木によって縦板を支える構造になっていた。横木は縦板に残る痕跡から二段あることが推測されるが、上部のほぞ穴は木材が腐食していたため、確認できなかった。また、柱のうち２本には最下部に刳り込みがあり、この部分にも縦板を支える機能がうかがえるが、詳細は不明である。

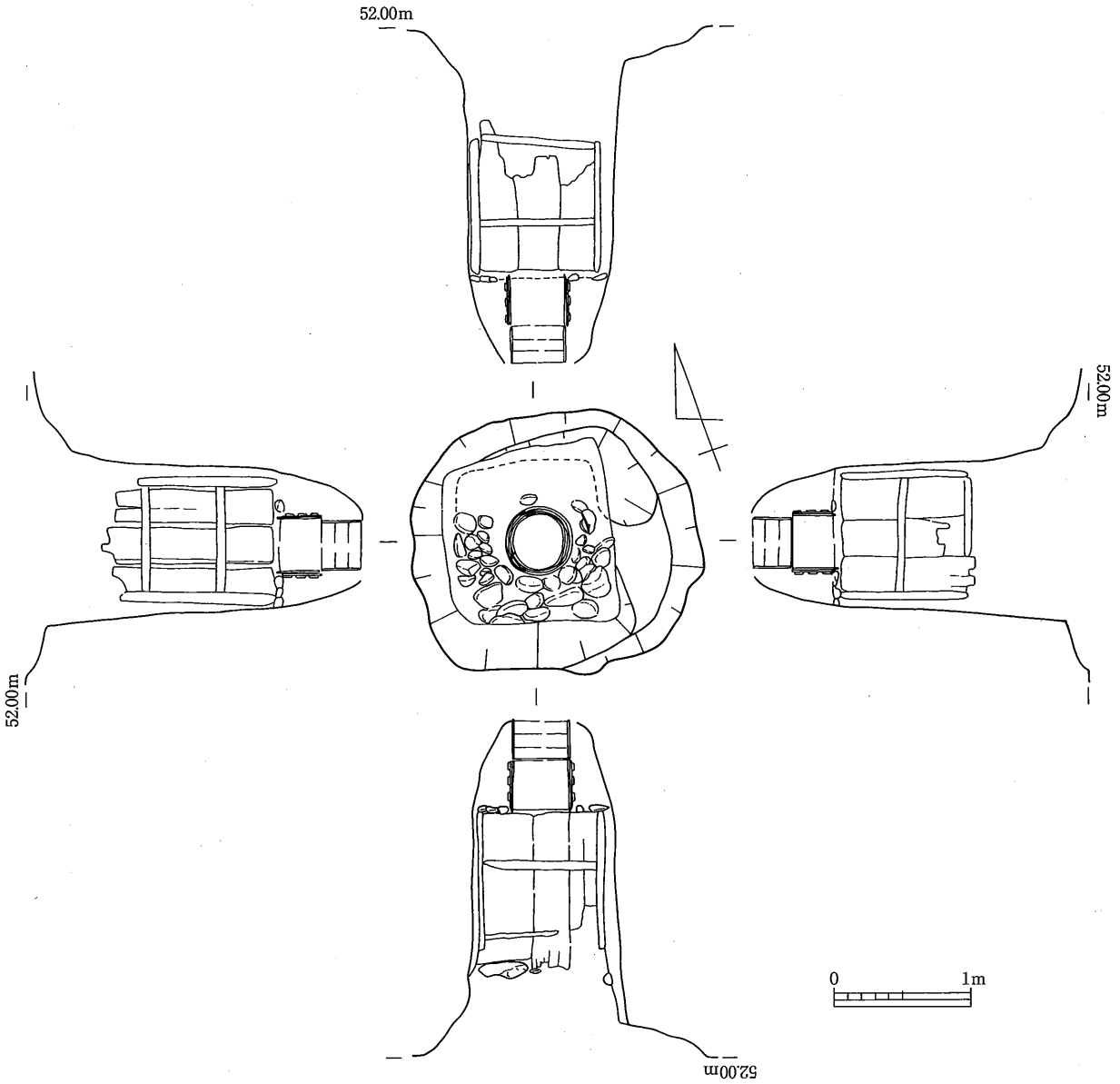
埋土中からは、多くの土器類が出土したが、裏込めとなっていた粗砂層からはほとんど遺物が出土しなかった。

第240図はSEf02から出土した遺物である。426のみ一部欠損していたが、これ以外の図化した遺物はすべて完形品である。424・425は土師器の小皿である。426は土師器の杯である。427～429は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。427には内面に放射状に暗文が認められる。428・429には内面の約３分の２に放射状に板状の工具の痕跡が認められ、残りの部分にはやはり放射状にヘラミガキの痕跡が顕著に認められ

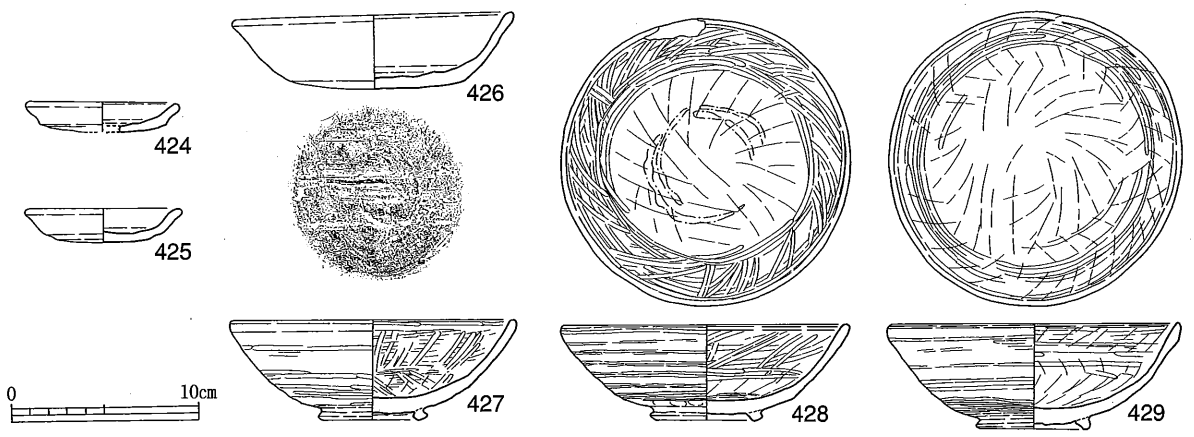


① 灰 色 砂 質 土（5Y6/1 小礫を含む粗砂層 地山ブロック含む）
② 明黄褐色粘質土（2.5Y6/8）
③ 黄 灰 色 砂 質 土（2.5Y5/1 粘性強い 地山ブロックをわずかに含む）
④ 黄灰色シルト混砂質土（2.5Y5/1）
⑤ 暗 灰 色 粘 質 土（N3/ シルト層の土層、炭化物含む）
⑥ 黄 灰 色 砂 質 土（2.5Y5/1 ③よりも多く地山ブロック含む）
⑦ 黄灰色礫混粗砂層（2.5Y5/1）
⑧ 黄 色 粘 土（2.5Y7/8 ⑤をラミナ状に含む）
⑨ 黄 色 粘 土（2.5Y7/8 Fe、Mn粒の沈着著しい 地山）
⑩ 黒色シルト混粘土（2.5GY2/1 所々にFe沈着著しい）

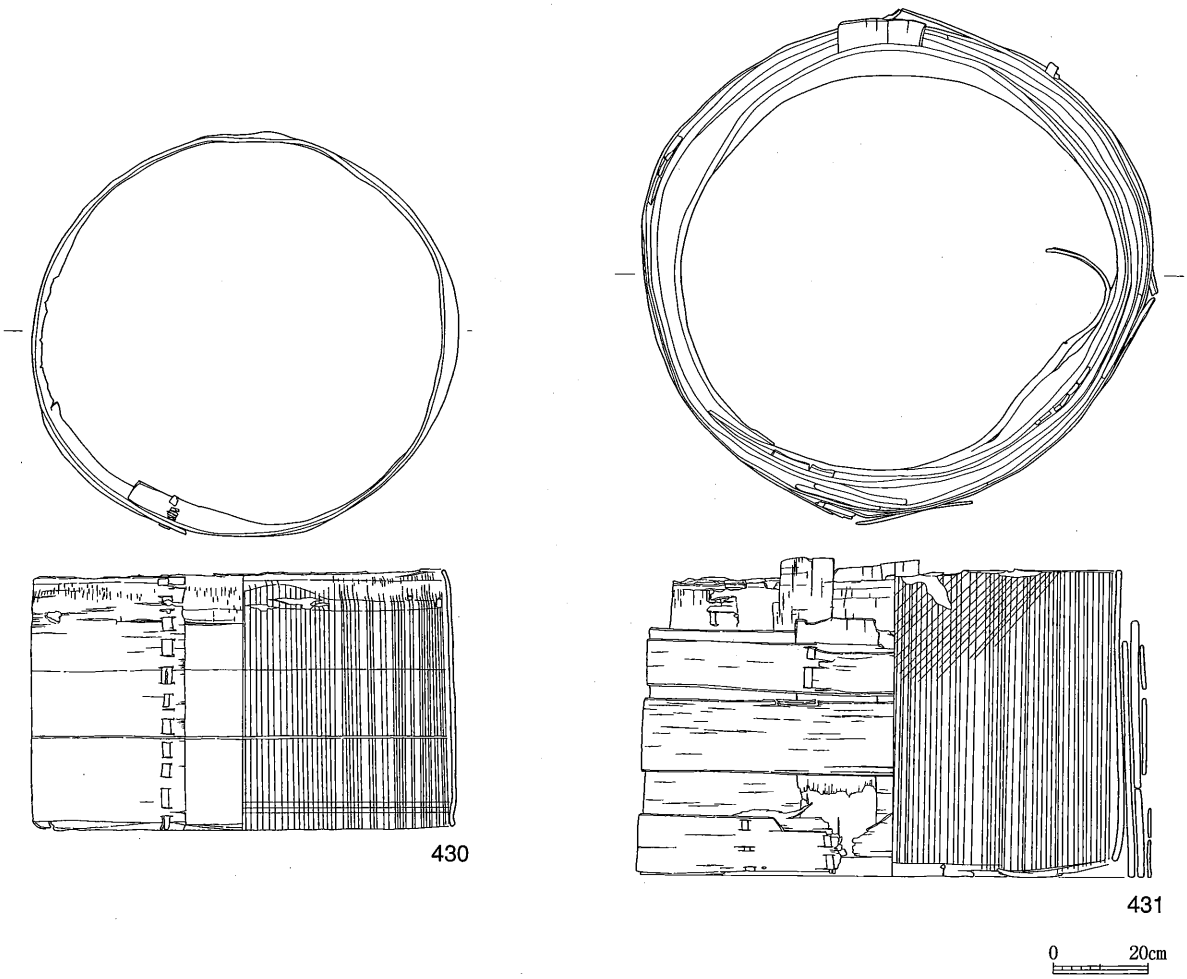
第238図 SEf02平・断面図(1/50)



第239図 SEf02立面図(1/50)



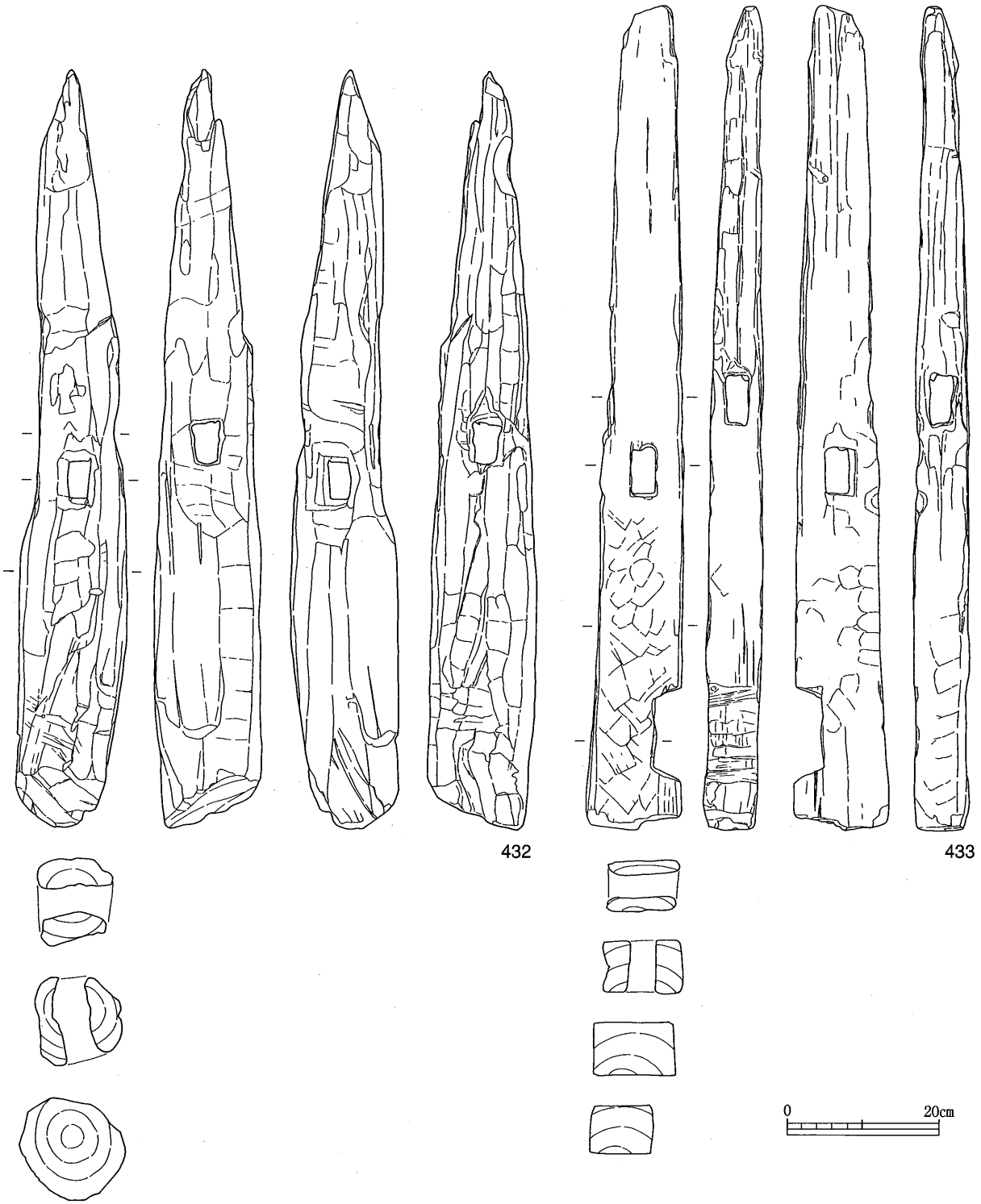
第240図 SEf02出土遺物実測図①



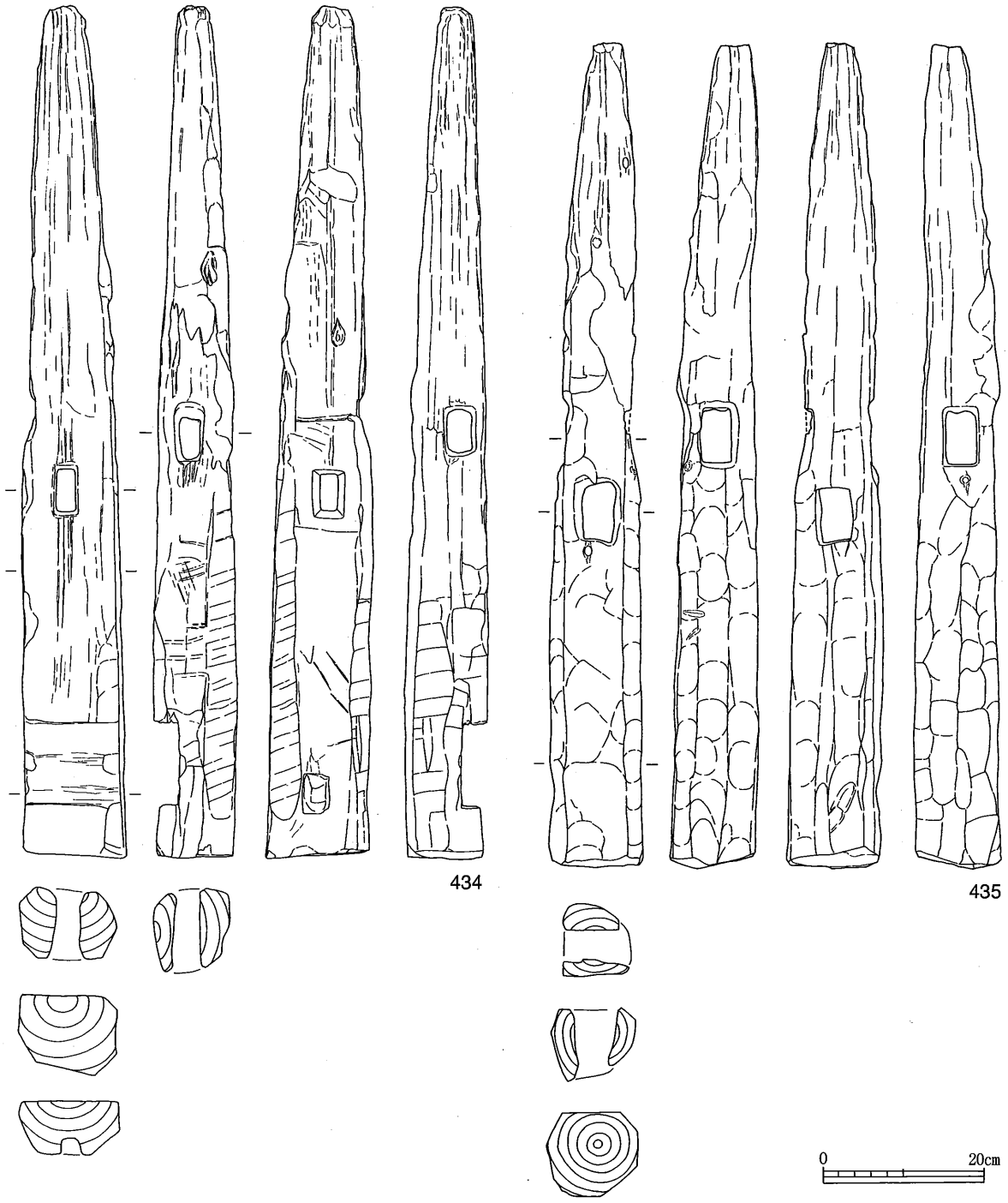
第241図 SEf02出土遺物実測図②

る。第241図は最下層に据えられていた曲物である。430が下段、431が上段である。第242・243図は四隅の柱材である。ほぞ穴があけられ、横木が差し込めるようになっている。第244・245図は縦板である。特に439～443には横木が当たっていた部分が顕著に認められる。第246図は横木と思われる木製品である。第247図はその他の木製品である。板状のものが多く、縦板の一部と考えられる。

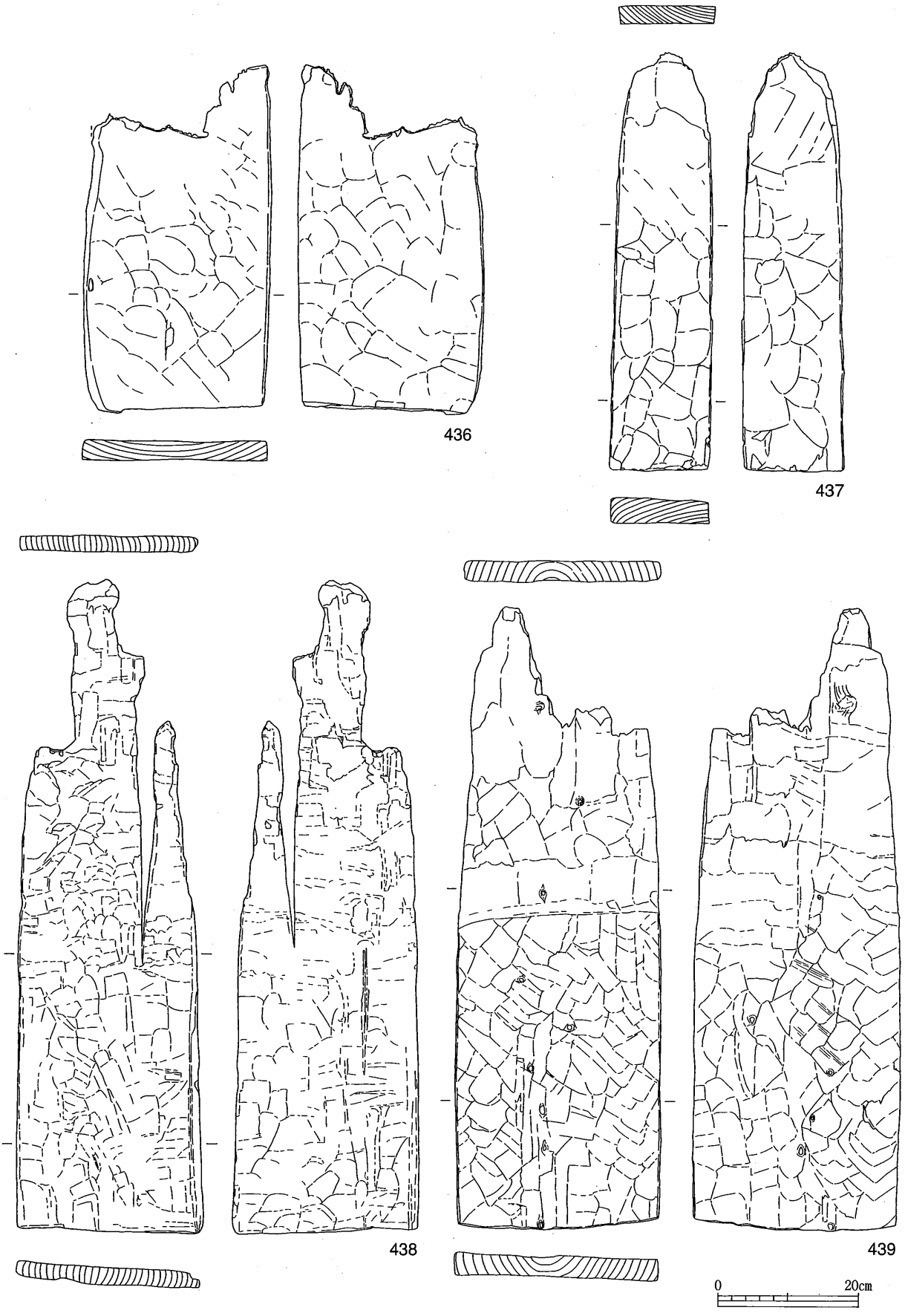
出土遺物の特徴からみて、SEf02は12世紀後半ごろに埋没したものと考えられる。また、出土遺物の大部分が完形品であったことから、これらの遺物は井戸を廃棄する際の祭祀に使用されたものであると考えられる。



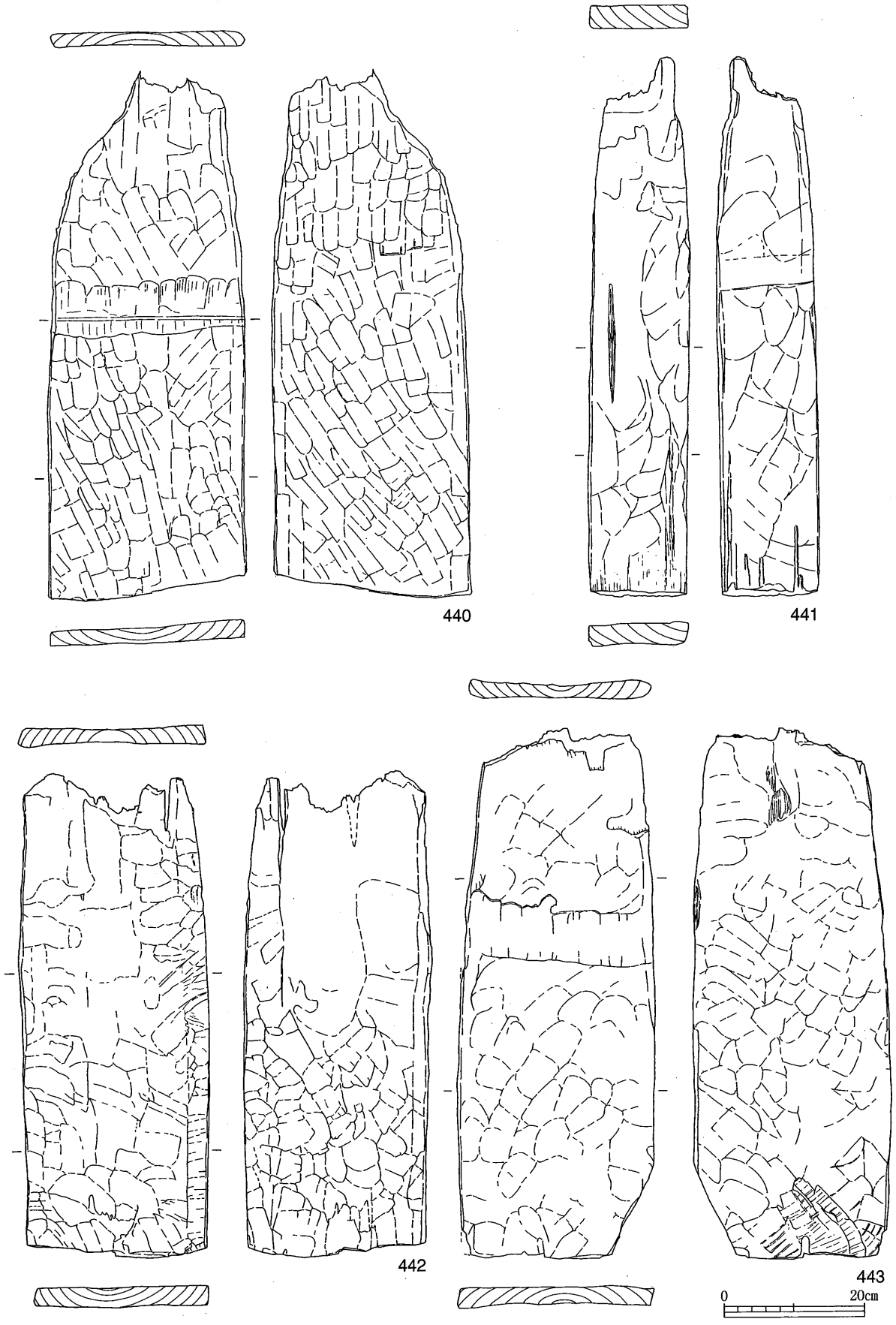
第242図　SEf02出土遺物実測図③



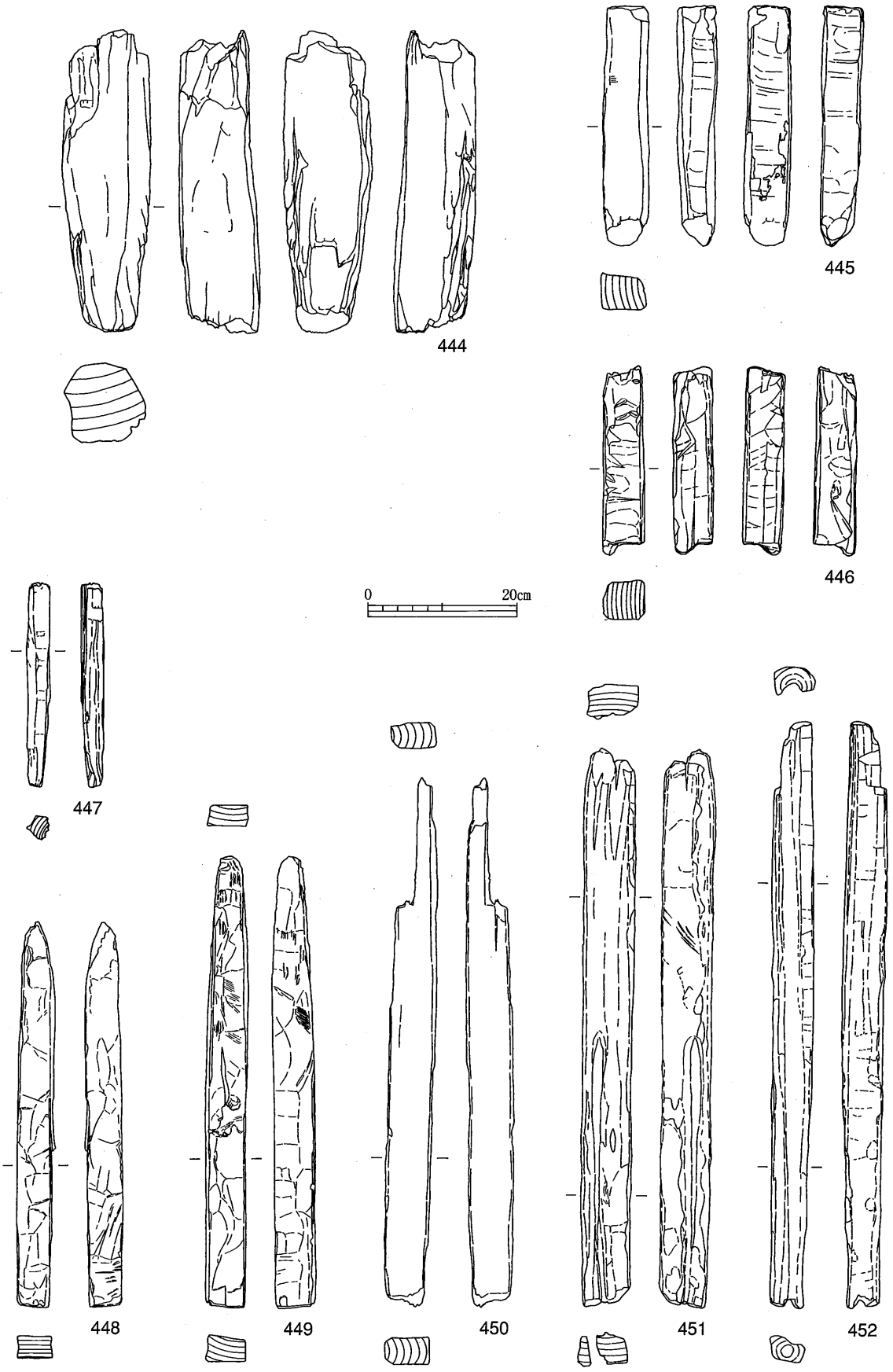
第243図　SEf02出土遺物実測図④



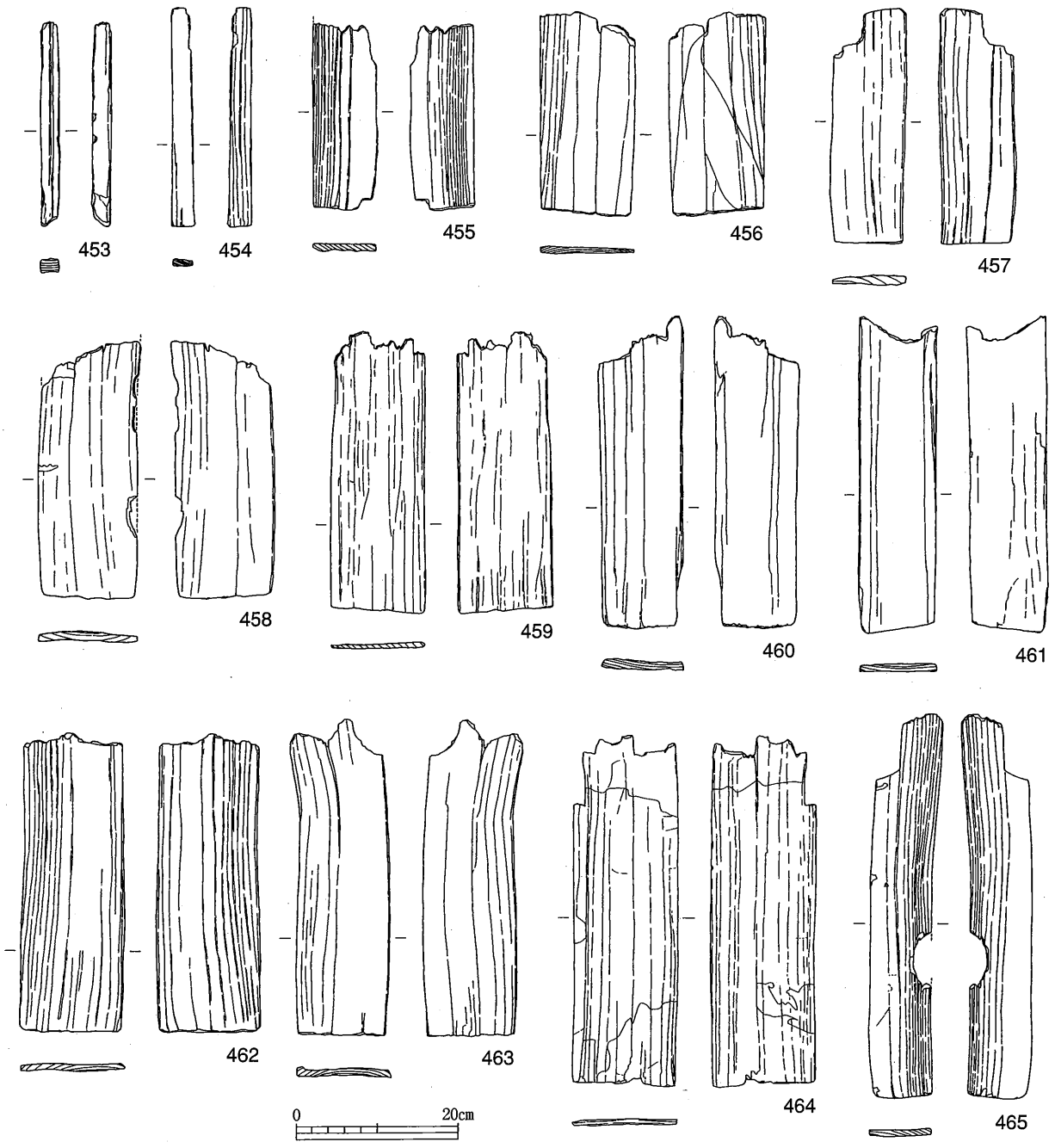
第244図　SEf02出土遺物実測図⑤



第245図　SEf02出土遺物実測図⑥



第246図　SEf02出土遺物実測図⑦



第247図　SEf02出土遺物実測図⑧

SEf03（第248図）

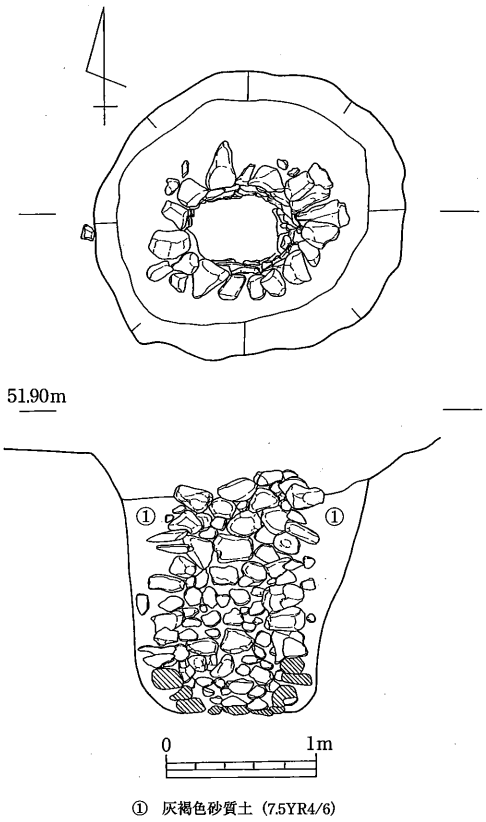
K地区K２区北西隅で検出した井戸跡である。位置的にはSBf37のすぐ東にあたる部分である。形状はほぼ円形を呈し、長径２m、短径1.9mを測る。検出時は掘り方前面に20cm程度の礫が一面に分布していた。礫を取り除くと円形に組まれた石材が認められ、石組の井戸跡であることが確認できた。最終的な掘り方の深度は1.8mを測る。

断割して断面を観察すると、石材は上から下まで同程度の大きさの石材を組み合わせており、下層に行くほどやや広がっている。

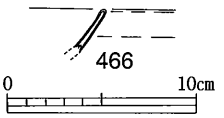
井戸跡内部および裏込め土層である灰褐色砂質土からは、ほとんど遺物が出土していない。わずかに陶磁器片が見つかった程度である。

第249図はSEf03から出土した遺物である。466は磁器の碗である。口縁部のみの破片であるが、全体的に青緑色の釉が施釉されている。おそらくは、肥前系のものと思われる。時期的には18世紀後半以降のものであると考えられる。

したがって、SEf03は18世紀ごろに機能していた井戸跡であると考えられ、SBf37などの掘立柱建物跡と何らかの関係を持つ遺構であると考えられる。



第248図 SEf03平・断面図(1/50)



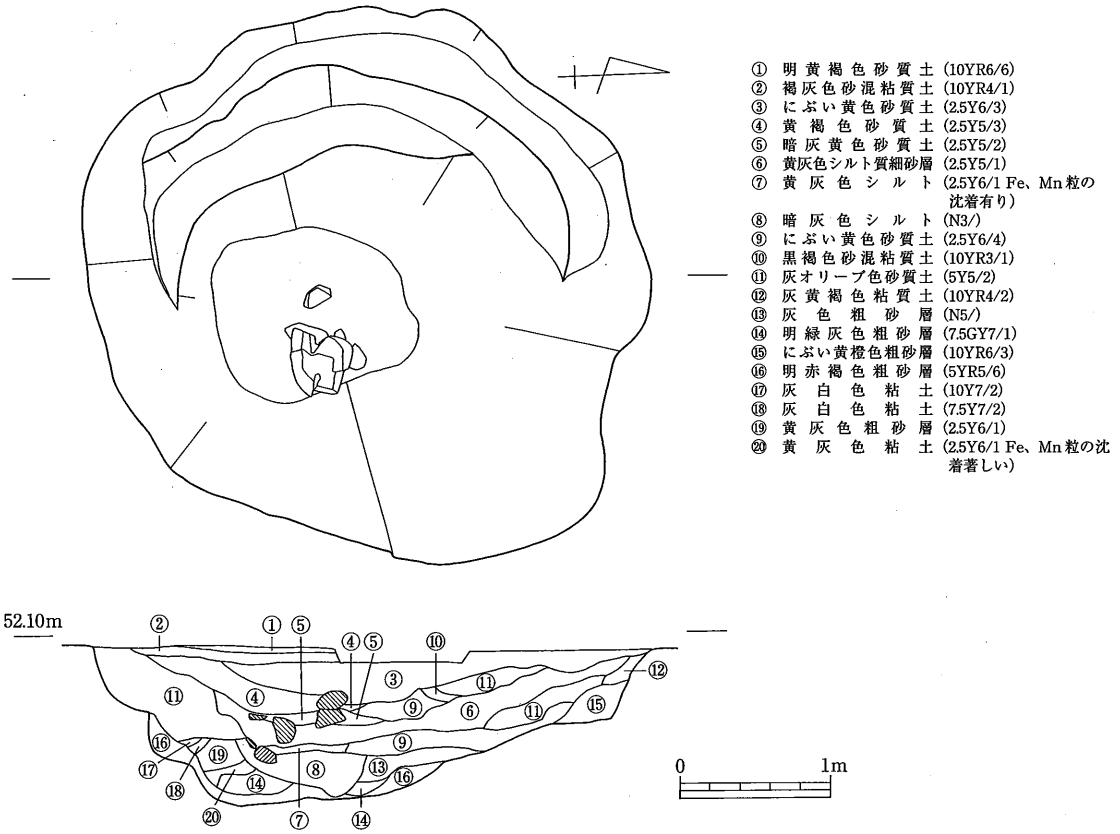
第249図 SEf03出土遺物実測図

SEf04（第250図）

K地区K２区中央やや北東よりの部分で検出した。掘り方の形状は歪な円形で西半分は隅丸の方形に近い形状を呈しているが、東側は大きく東へ張り出している。長径は3.8m、短径は3.6mを測る。最大深度は1.1mと大きさの割に浅い。また、断面形も弧状を呈しており、大型の土坑のようにみえる。しかしながら、西側にはテラス状の段が認められこの段から直線的に下がる土層が認められることから、当初はこの段の部分で掘削されたものと考えられる。周囲に木枠等を設けない素掘りであったため、東側が大きく崩壊し、このような形状になったものであろう。

埋土中からは多くの遺物が出土している。特に最下層からは、土鍋・椀などの日常雑器が多量に出土している。第251図はSEf04から出土した遺物である。467～470は土師器の小皿である。471～475は土師器の杯、476は土師器の高台付杯である。477は土師器の椀である。478は黒色土器の椀である。内面のみ黒色を呈するいわゆるA類に属する。479は須恵器の杯である。480は土師質土器の土鍋である。口縁部のみの破片である。481は黒色土器の椀である。やはりA類に属し、内面にはやや不規則ながら放射状に暗文が施されている。482は須恵器の椀の底部である。483は土師質土器の土鍋である。底部のみ欠損している。484は須恵器の甕である。外面には細かい格子状のタタキが認められ、十瓶山産のものである。485は須恵器の鉢、486は瓦質土器の鉢である。487は須恵器のこね鉢である。488は瓦器の椀、489～492は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。493は瓦質土器の鉢である。

出土遺物からみて、SEf04は12世紀代に埋没したものと考えられる。



第250図 SEf04平・断面図(1/50)

SEf05（第252図）

K地区K2区中央やや東よりの部分で検出した井戸跡である。SBf18と26のほぼ中間に位置する。形状は北側に頂点を持つ歪な五角形を呈する。長径は2.4m、短径は2.1m、最大深度80cmを測る。木枠等の施設は見つかっていない。

第253図はSEf05から出土した遺物である。494は土師器の小皿である。495・496は土師器の杯である。494は体部がかなり丸みを帯びている。497は黒色土器の椀である。内側のみ黒色を呈するいわゆるA類に属する。498は白磁の椀である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、端部は玉縁状を呈する。499・500は平瓦の破片である。いずれも凹面には布目痕が、凸面には縄目のタタキが認められる。縄は荒縄であり、胎土・技法からみて十瓶山産のものであると考えられる。

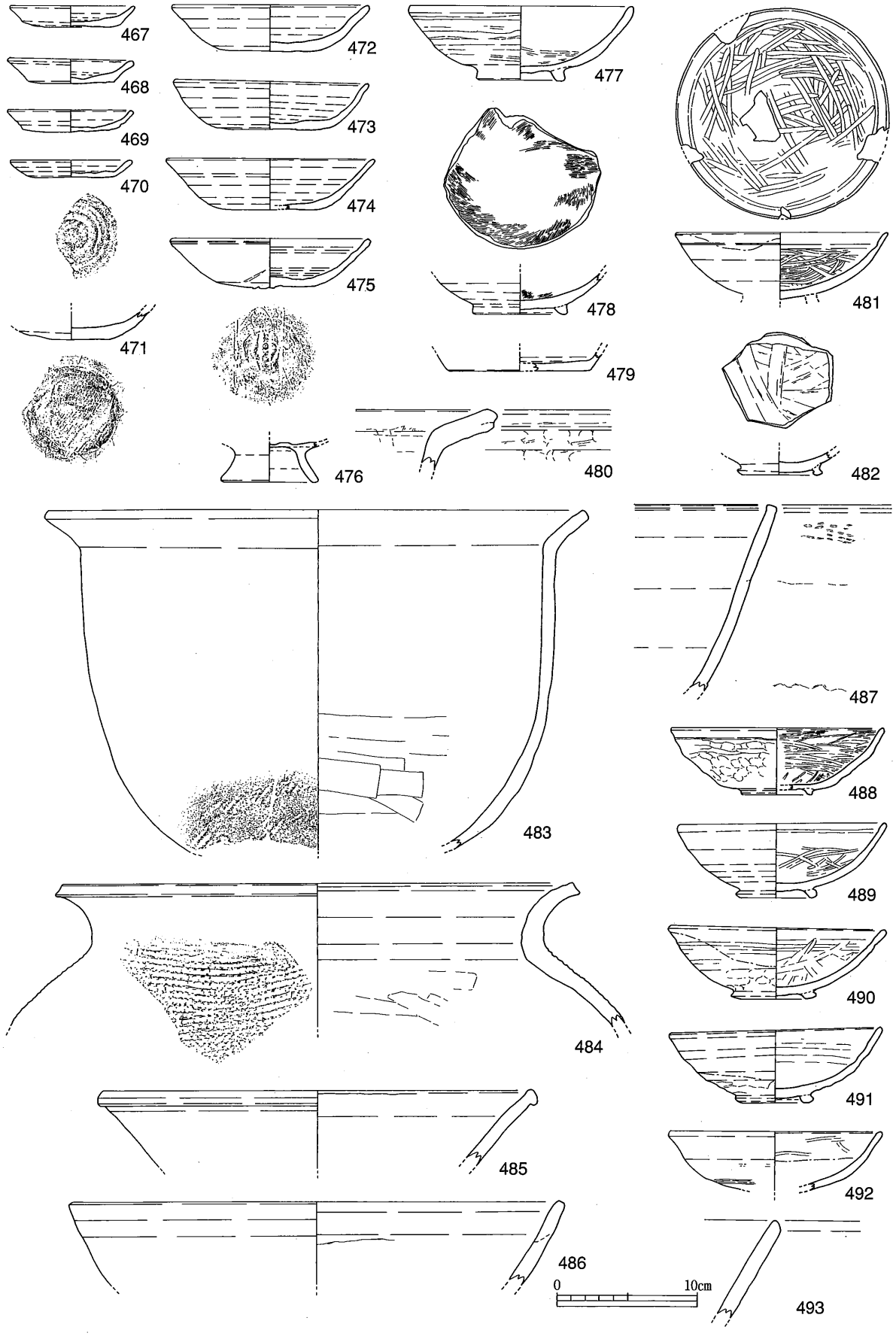
出土遺物の特徴から、SEf05は12世紀代に埋没したものと考えられ、周辺の多くの掘立柱建物跡と密接な関係のある遺構であると考えられる。

SEf06（第254図）

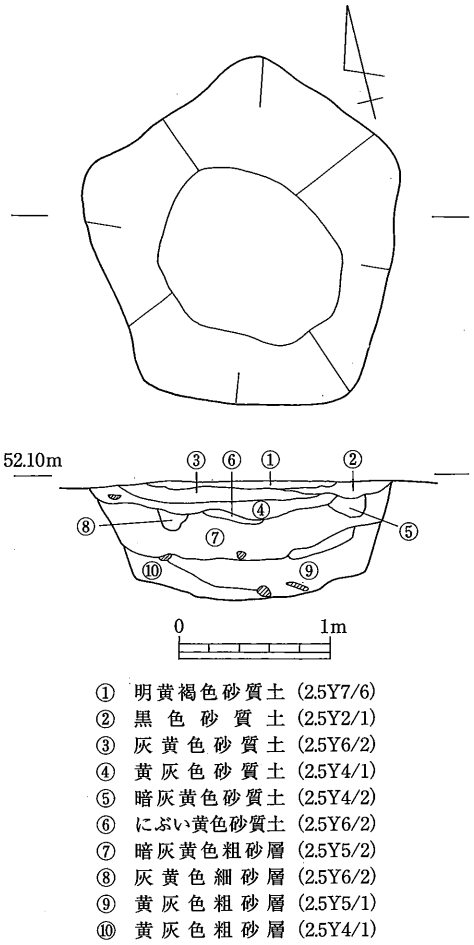
K地区K2区南東隅で検出した井戸跡である。SBf28のすぐ南側にあたる。掘り方の形状は歪な方形で、北側が大きく張り出している。長径2.5m、短径2.1mを測る。断面は上部がやや広いコップ状を呈している。最大深度は1.5mを測る。張り出した北側には小さな円礫が多く散布していた。

SEf06にもSEf02と同様、木枠が設置されており、柱材や縦板等が認められた。最下層の曲物は検出されなかった。また、地山が脆く、調査時に崩壊を重ねたため、木枠の設置状況が図化できず、崩壊した土砂の中から柱材や縦板、その他の遺物を回収するにとどまった。

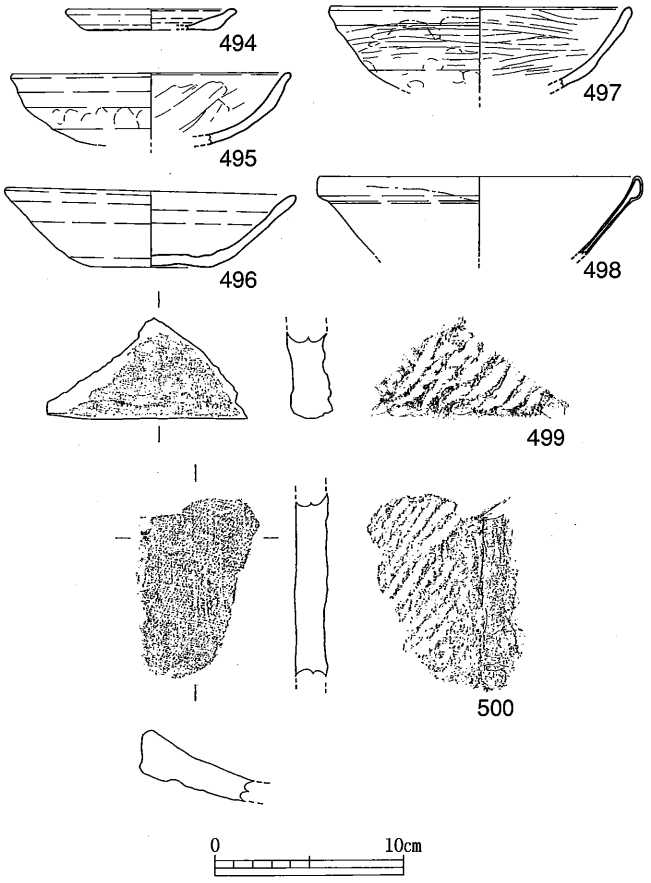
第256図はSEf06から出土した遺物である。501・502は土師器の小皿である。いずれも口径8cm程度を示す



第251図　SEf04出土遺物実測図



第252図 SEf05平・断面図(1/50)



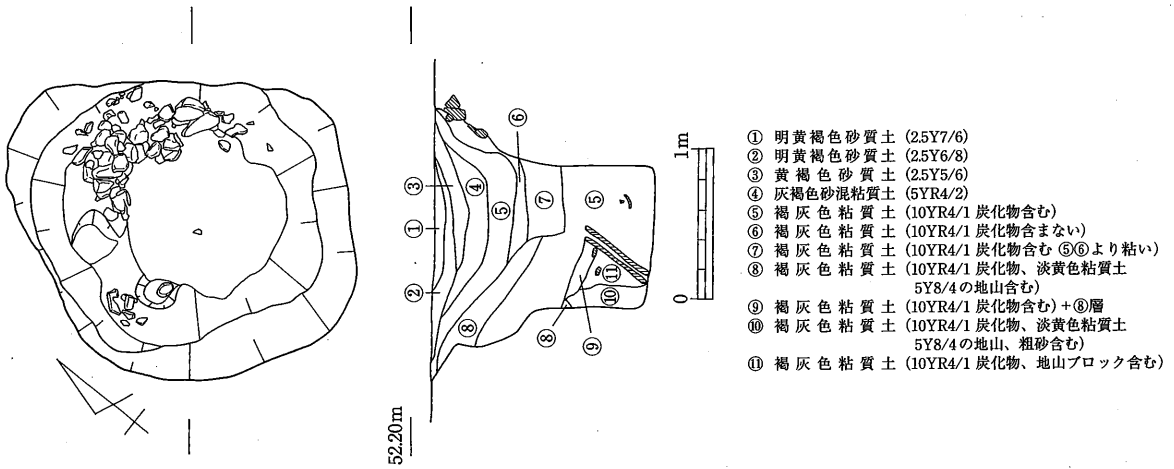
第253図 SEf05出土遺物実測図

が、501は底径が小さく体部が外側へ大きく張り出すタイプのものである。503は土師器の椀の底部で見込部分に暗文が認められる。、504は土師器の杯である。505・506は黒色土器の椀である。内面のみ黒色を呈するA類に属する。507は土師質土器の土鍋である。体部はやや直立気味のものであろう。508は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。綾川町西村遺跡周辺で生産されたものと考えられる。509は須恵器の椀、510は須恵器の蓋のつまみ部分である。511～513は須恵器の椀である。514・515は須恵器の甕である。いずれも格子状のタタキ目が認められる。綾川町十瓶山周辺で生産されたものと考えられる。514は口縁部が大きく外反するもので、515はやや直立気味の口縁部を持つものである。516・517は白磁の椀である。いずれも口縁端部が玉縁状を呈する。518は丸瓦である。有段式（玉縁）で凹面には紐状の痕跡が認められる。519は平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄目のタタキ痕が顕著に認められる。520～522は金属製品である。520は下端がとがっており、上端がやや折り曲げて丸くなっていることから鉄釘であると思われる。521も下端がとがっているため、鉄釘の破片と考えられる。522も鉄器である。一方の端が茎状になっているため、刀子などが考えられるが、断面をみると刃部と考えられるような部分が認められないため、刀子の可能性を指摘するにとどめる。

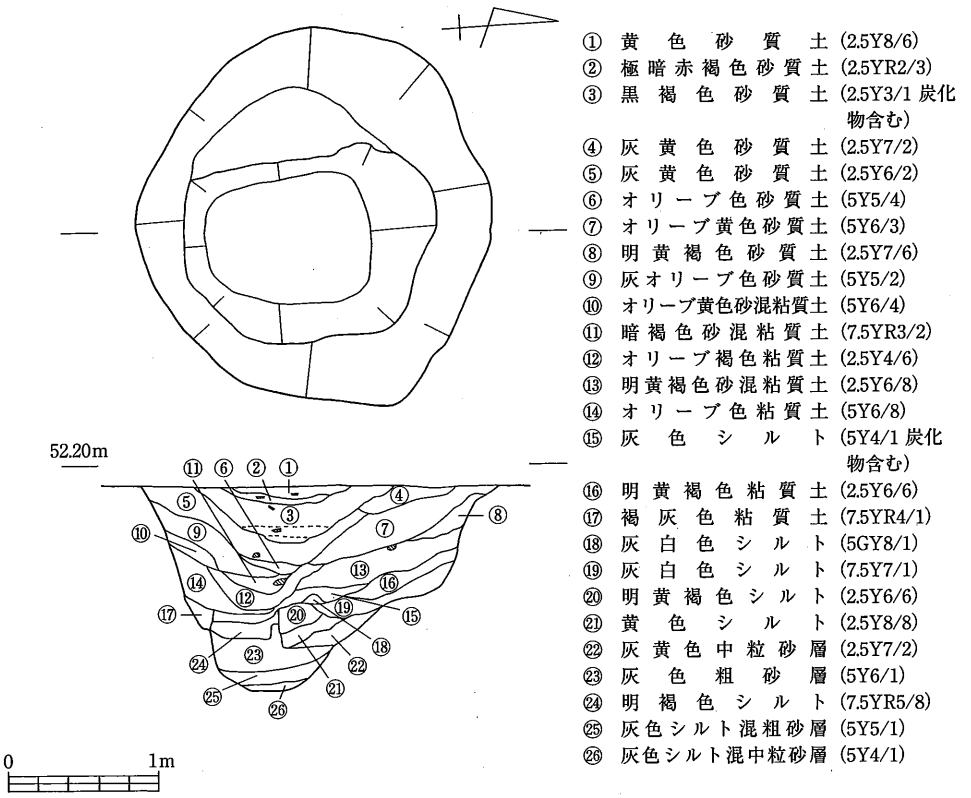
第257～261図はSEf06の井戸枠である。523～526は四隅の柱材である。いずれも上部に行くにつれて細くなっているのは、腐食によるものである。いずれもほぞ穴があけられ、横木によって縦板を支える構造であったことがうかがえる。ほぞ穴は横木がぶつからないように上下に空けられている。また、523・524には下端に刳り込みが認められる。527～532・539は縦板と考えられる板材である。いずれも幅約30cmで表面にはヤ

リガンナで削った痕跡が明瞭に認められ、非常に丁寧に加工されていることがうかがえる。特筆すべきは531で、下端から50cmほどのところに「田」の文字が線刻されている。この文字が何を意味するかは不明であるが、井戸枠に線刻が施されている例は県内では初例である。533～538は横木と考えられる木製品である。ほぞ穴との接合部が直角に削り出されているものも認められる。

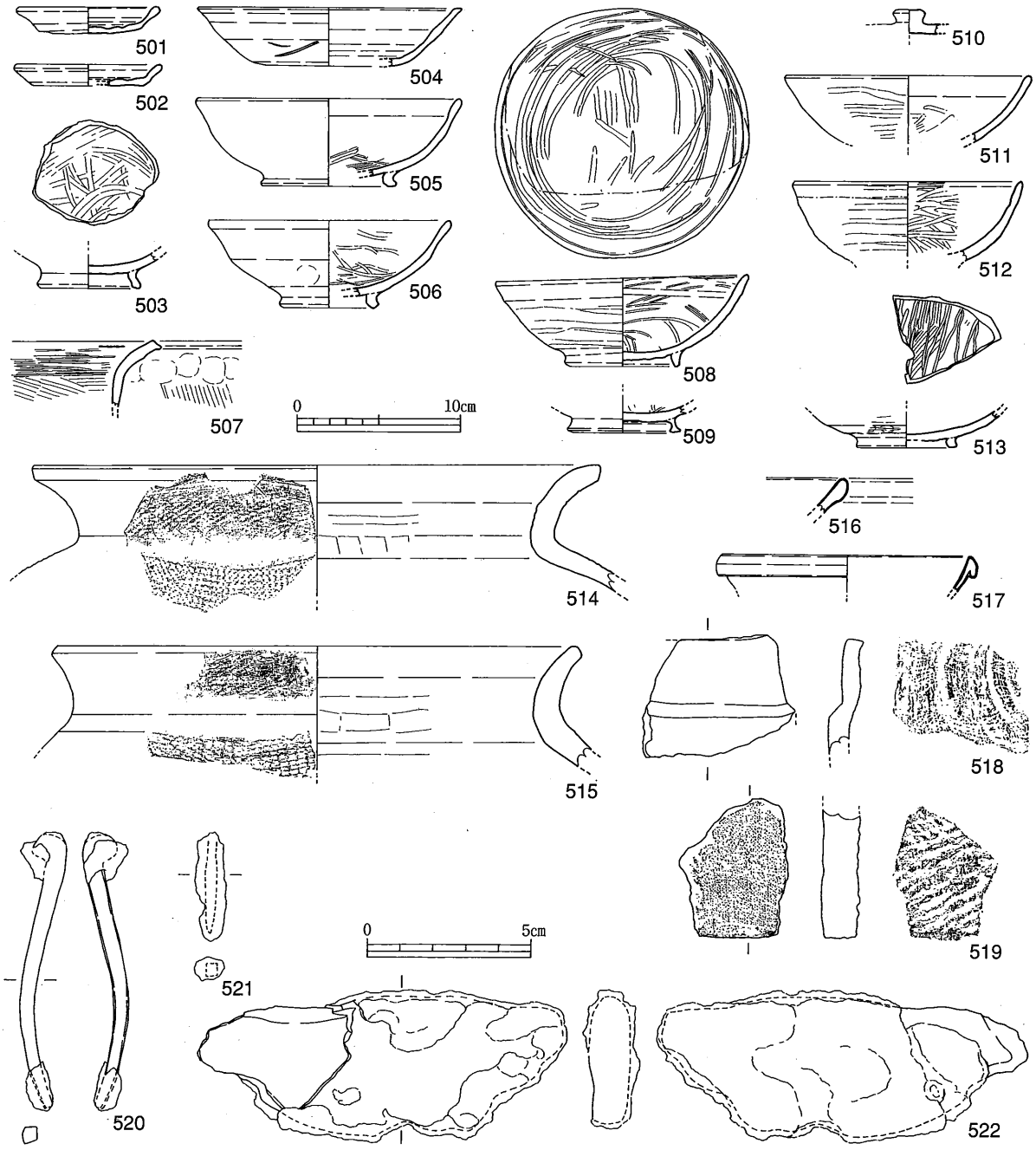
出土遺物の組成や特徴、また周辺の遺構のあり方からみて、SEf06は12世紀代に埋没したものと考えられる。



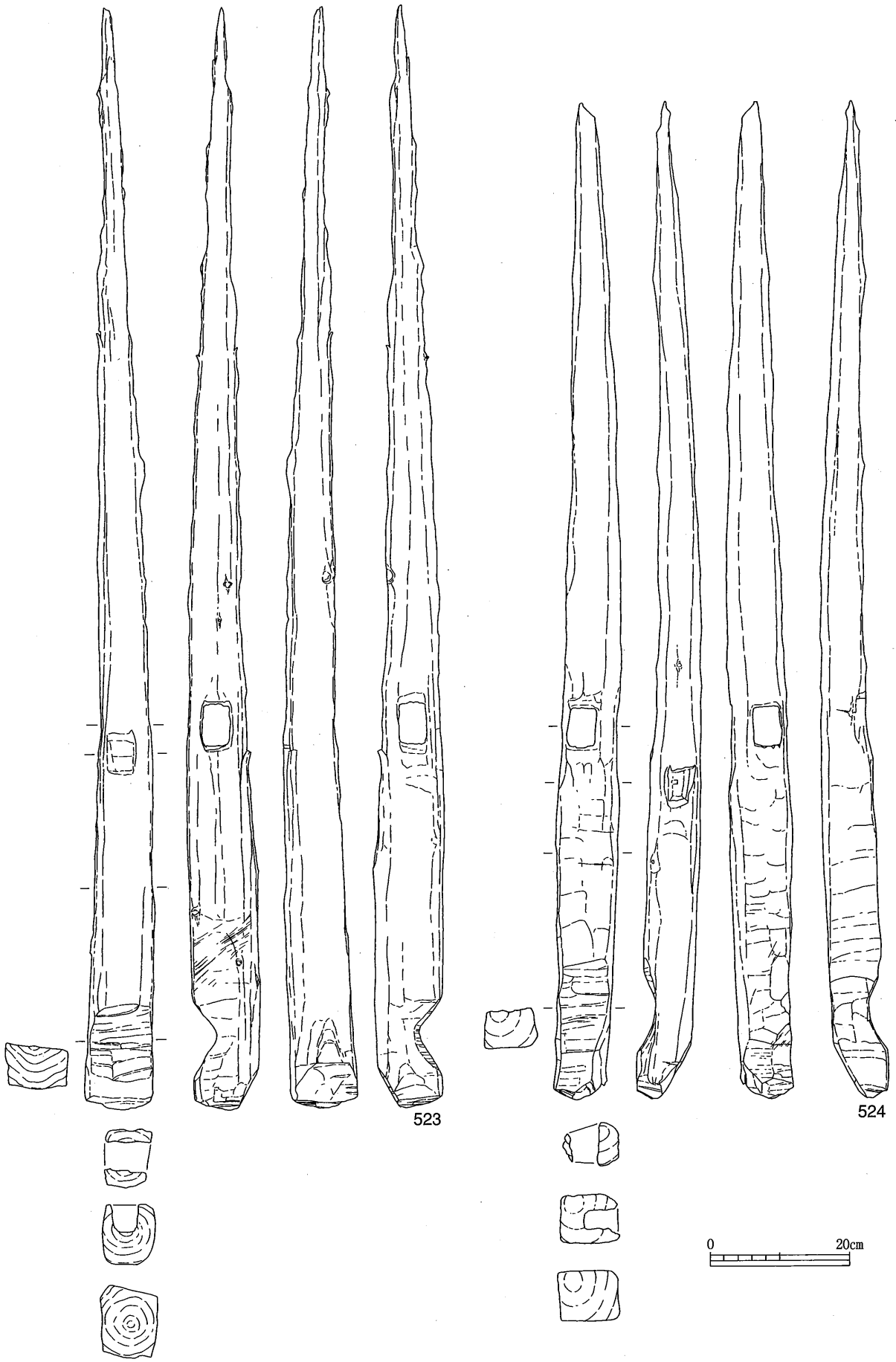
第254図 SEf06平・断面図(1/50)



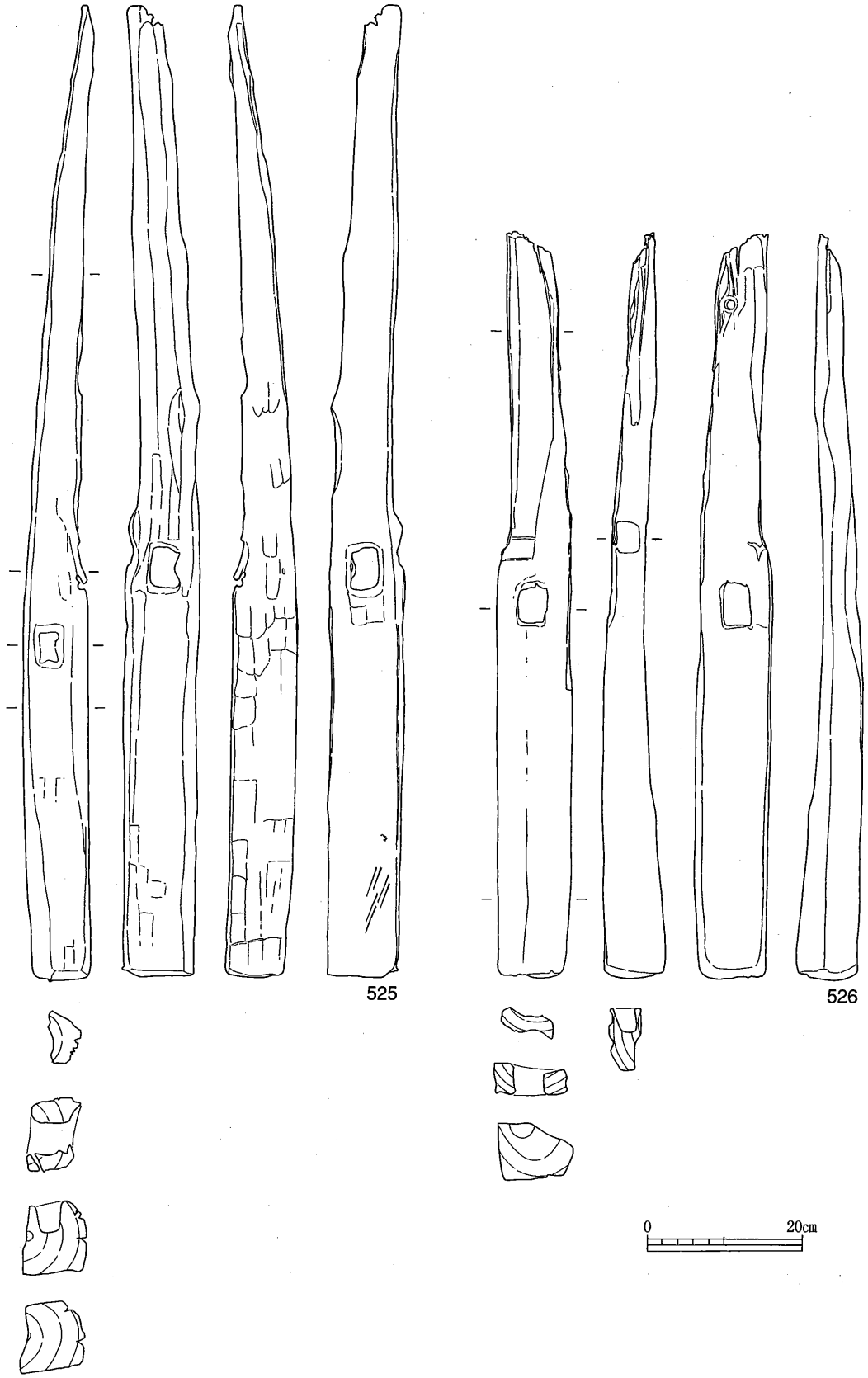
第255図 SEf07平・断面図(1/50)



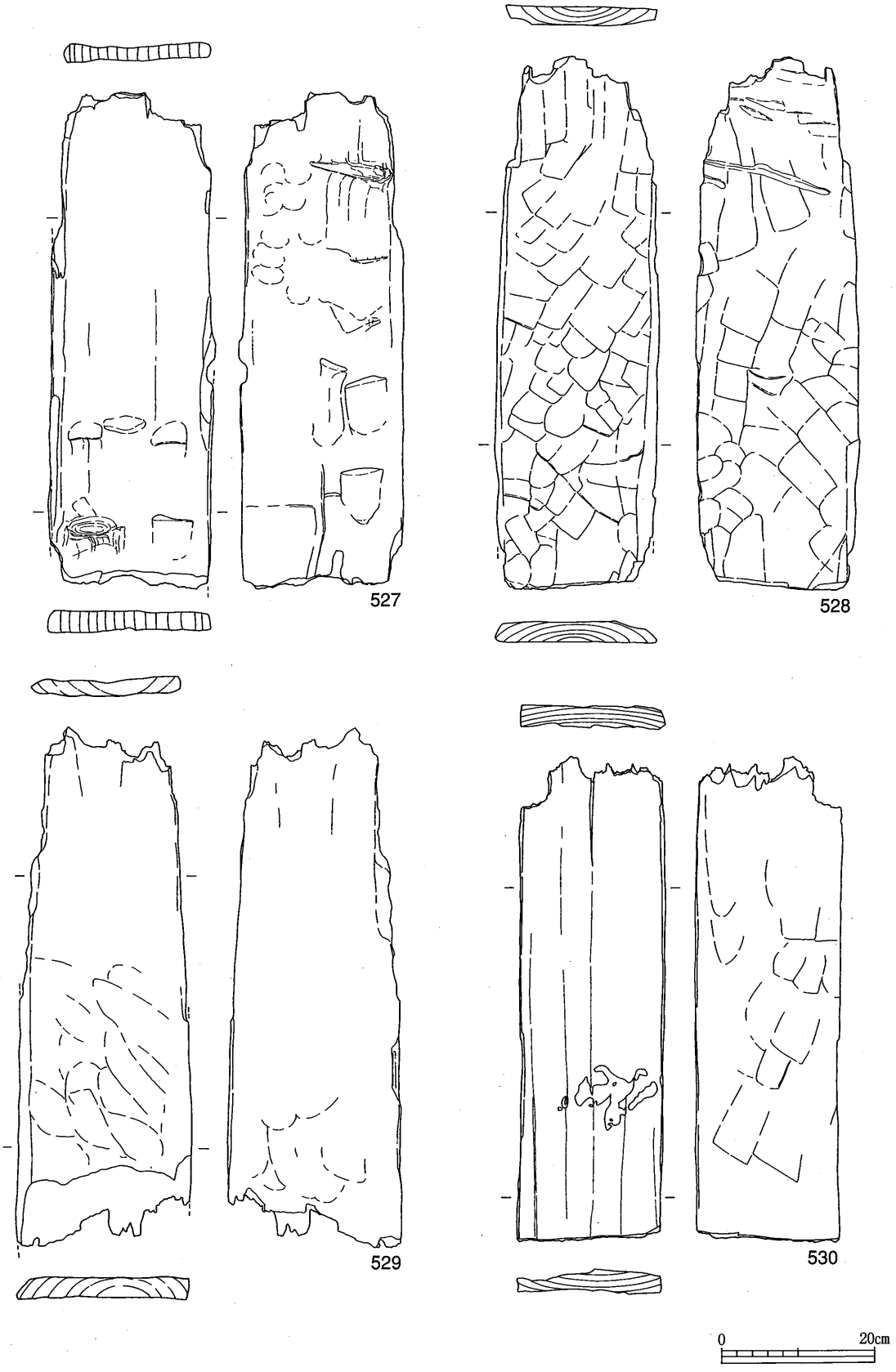
第256図　SEf06出土遺物実測図①



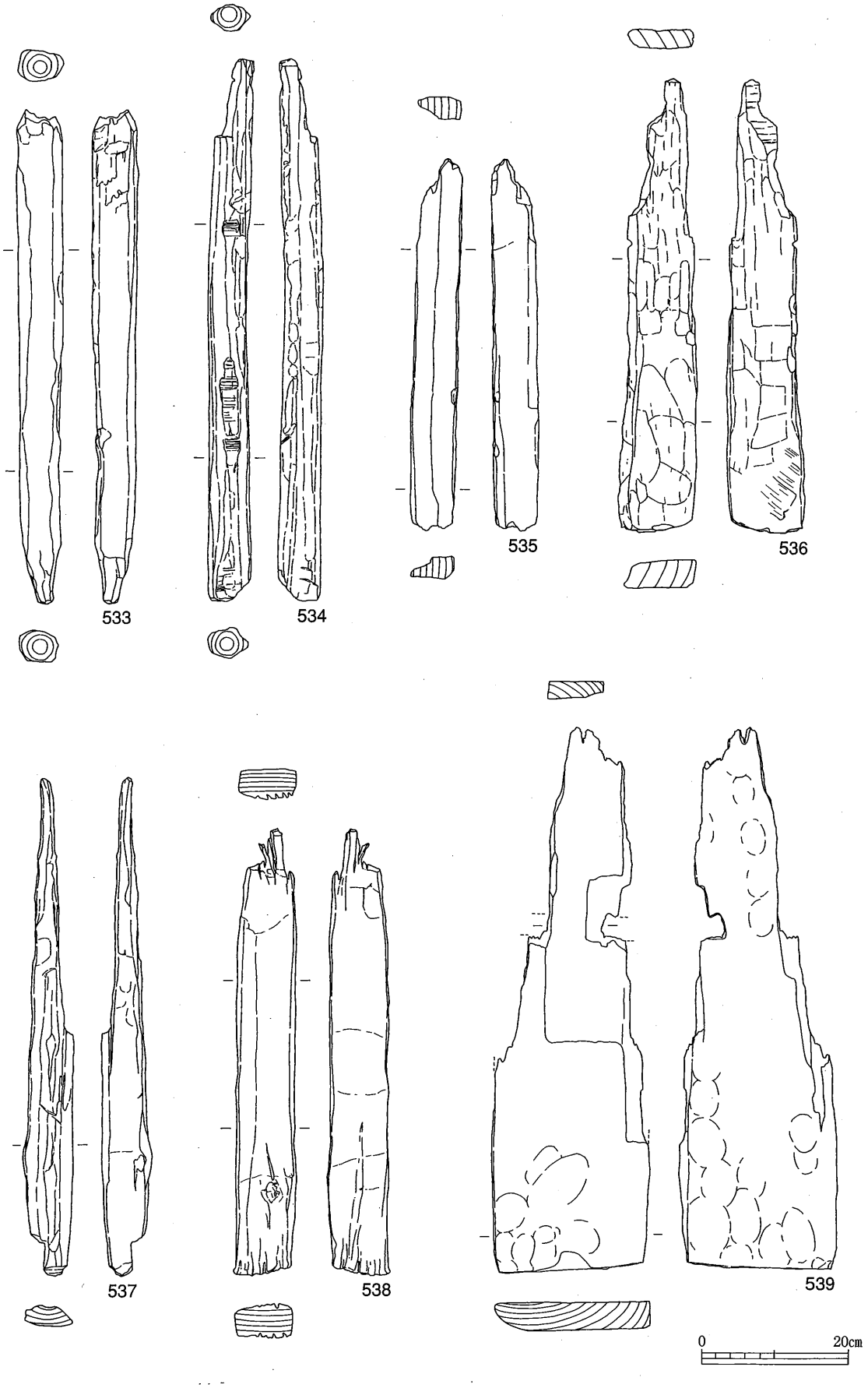
第257図　SEf06出土遺物実測図②



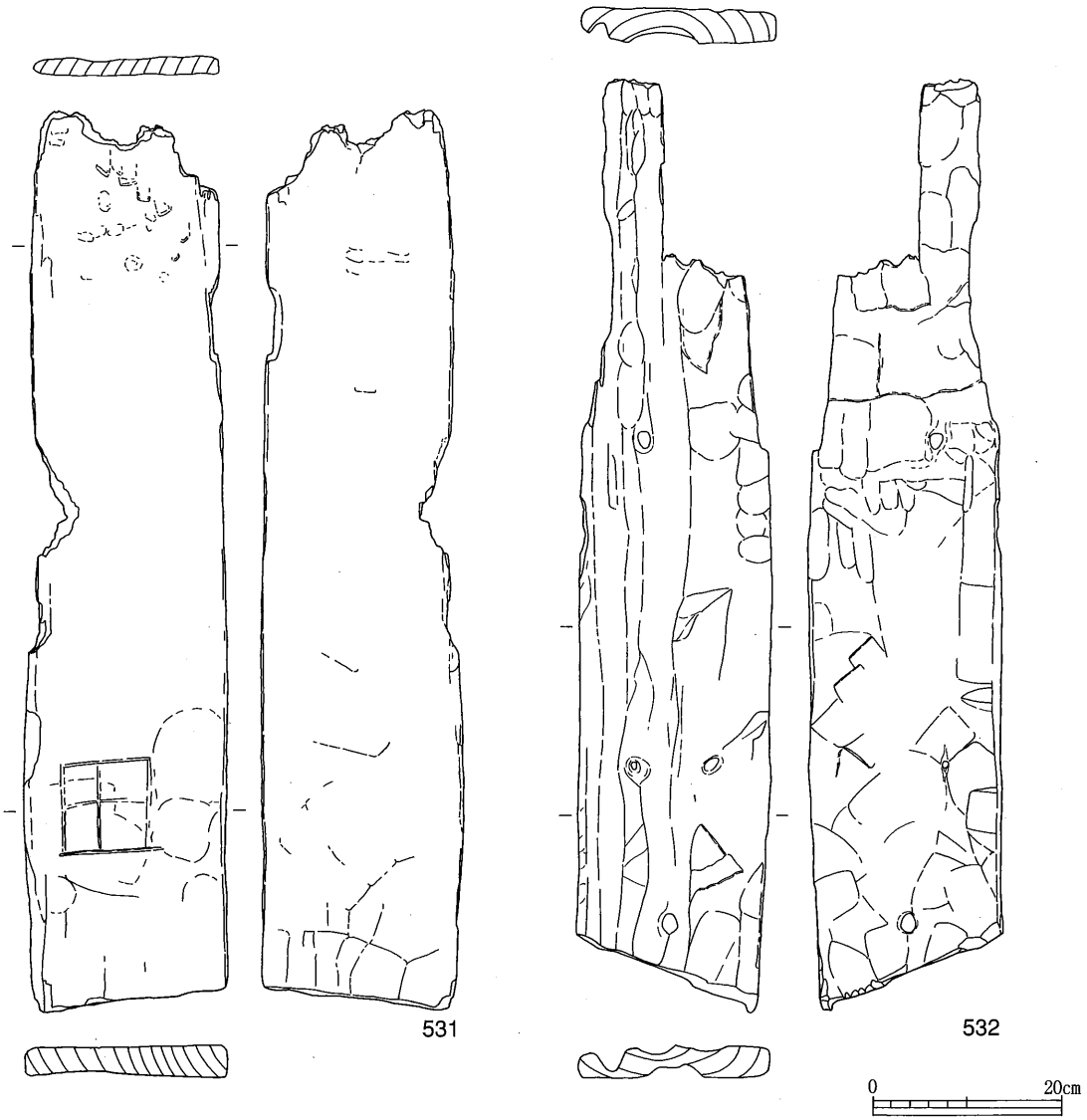
第258図　SEf06出土遺物実測図③



第259図　SEf06出土遺物実測図④



第260図　SEf06出土遺物実測図⑤



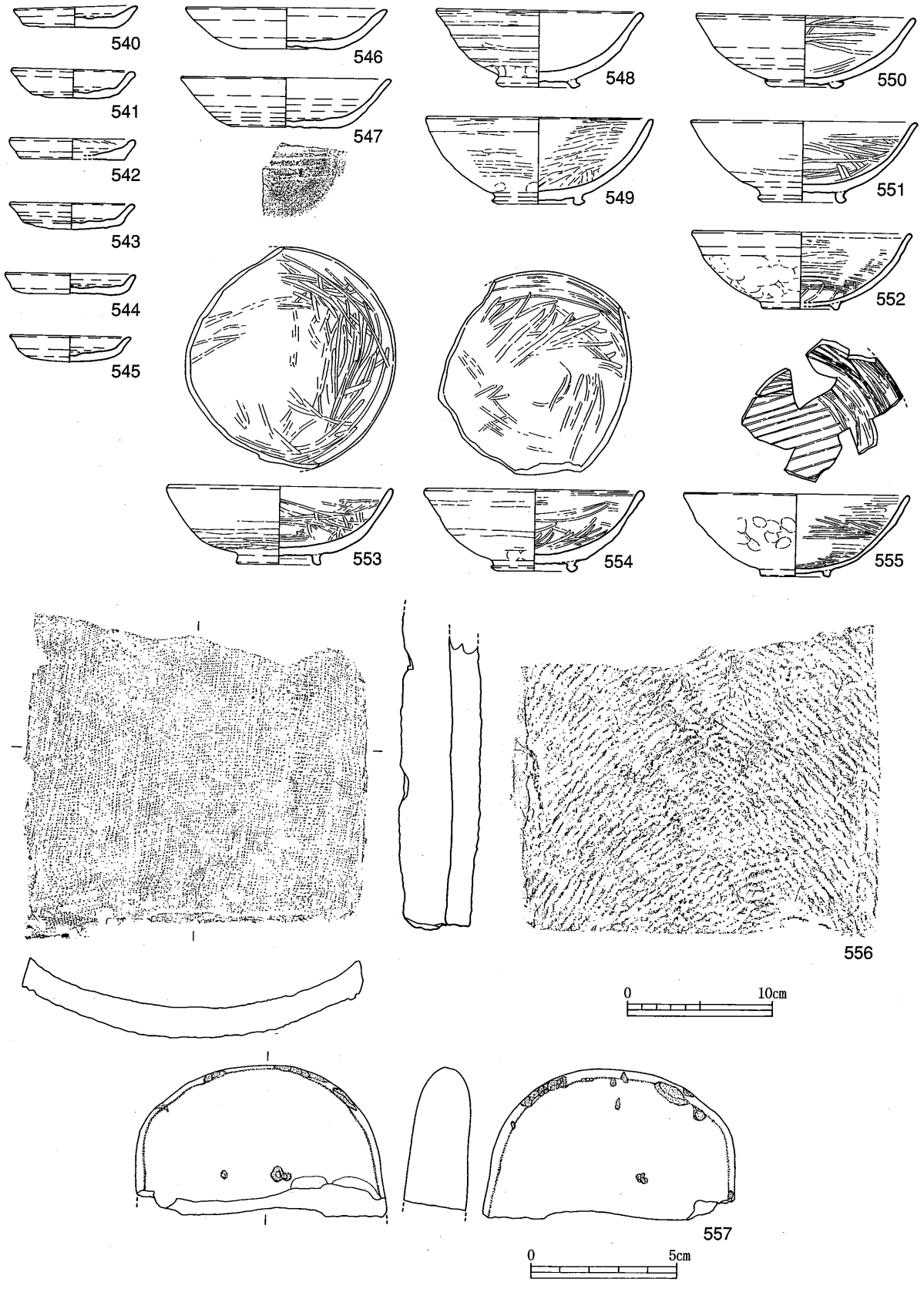
第261図 SEf06出土遺物実測図⑥

SEf07（第255図）

K地区K3区中央北よりで検出した井戸跡である。SBf21のすぐ東側にあたる。形状は歪な円形を呈し、長径2.5m、短径2.4m、最大深度は1.3mを測る。掘り方は擂鉢状を呈し、井戸枠等は認められない。断面の形状、井戸枠を持たないこと、最大深度が他の井戸跡よりも浅いことを考えれば、SEf01と同じく、井戸を掘削しようとしたが何らかの事情で放棄せざるを得なかった可能性も考えられる。

第262図はSEf07から出土した遺物である。540～545は土師器の小皿である。546・547は土師器の杯である。548は土師器の椀、549～551・553・554は黒色土器の椀である。554は内外面ともに黒色を呈するB類に属するが、554以外はすべてA類に属する。552は瓦器の椀である。555は瓦質土器（軟質須恵器）の椀である。これらの椀にはすべて内面に放射状の暗文が顕著に認められる。556は平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄目のタタキ痕が顕著に認められる。十瓶山産のものであると考えられる。557は石器である。半分以上欠損しているが、残存部分の端部が摩滅していることから磨石の可能性が考えられる。

出土遺物の特徴からみて、SEf07も他の井戸跡と同様、12世紀代に廃絶したものと考えられるが、SEf01と同じく、井戸枠を持つものに比べて、出土遺物の量が卓越していること、井戸枠を持たないことや最大深度が井戸枠をもつものよりも浅いことなどを考え合わせれば、井戸として機能していたかどうかは不明である。



第262図　SEf07出土遺物実測図

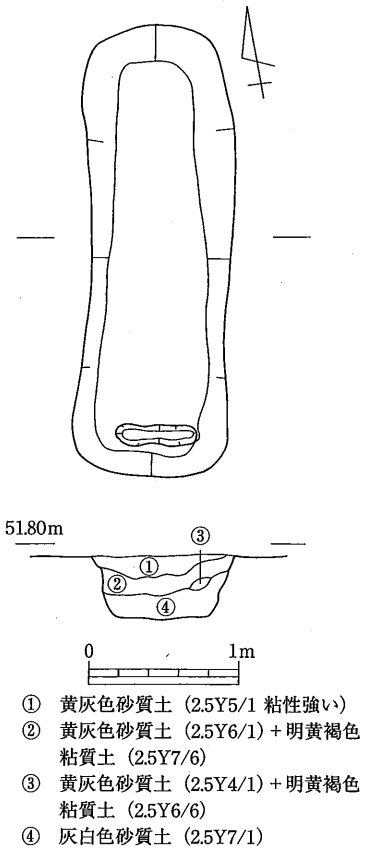
STf01（第263図）

K地区K１区の南西部で検出した土坑墓と考えられる遺構である。SBf09の南西隅に位置する。形状は隅丸の長方形で、長径３m、短径１m、深さは40cmを測る。断面はほぼ四角形を呈し、底部はやや丸みを帯びている。埋土中にいくつかの大きな円礫が認められた。また、精査の結果、南端部分で木棺の小口の痕跡ではないかと考えられる窪みを検出した。人骨・歯などは出土していないが、これらの所見により、この遺構を土坑墓として報告する。

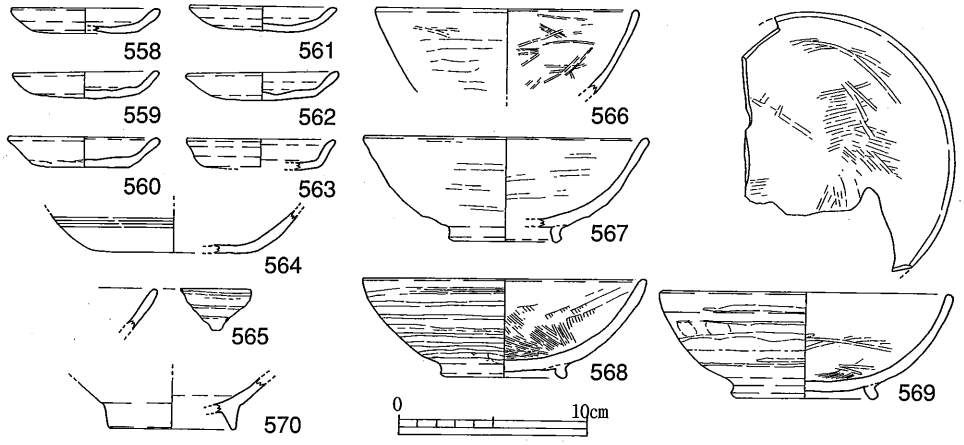
第264図はSTf01から出土した遺物である。558～563は土師器の小皿である。564は土師器の杯である。565は瓦器の椀である。566～569は須恵器の椀である。いずれもやや高い高台をもつ。570は白磁の椀の底部である断面が三角形の直線的な高台を持つ。

出土遺物の特徴からみて、STf01は12世紀から13世紀にかけて構築されたものであると考えられる。

被葬者については、不明であるが、その位置関係からみてやはり掘立柱建物跡SBf09・10に居住していた人物と何らかの関係があるものと思われる。SBf09・10は四面庇を持ち、規模も大きく、この集落の中心的な建物である可能性が高く、建物の廃絶後に関係者を葬ったものと考えられる。



第263図 STf01平・断面図(1/50)



第264図 STf01出土遺物実測図

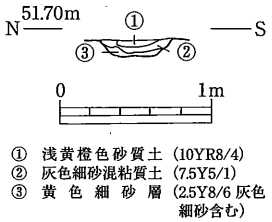
第６節　溝状遺構・自然河川・その他の遺構

SDf01（第265図）

I地区の北端を東から西へ流れる溝状遺構である。M17区・L17区の北端では調査区の壁に沿うように検出し、西側のP18区ではやや南へ振れるが、おおむね調査区の境界に沿って検出した。後世の削平の影響もあろうが、幅は30～40cm程度、深度は15～20cm程度である。L17区の北端部分で１ヶ所幅が１mと広くなっている個所が認められ、一時期澱み状を呈していたことが推測される。埋土は主に灰色の粘質土で下層に砂層、上層に砂質土が混在するところもある。

遺物は細片しか出土していないので、図化できなかったが、土師器の破片や陶磁器の破片がわずかに出土している。したがって、SDf01は近世段階に埋没したものと考えられる。

SDf01はおおむねI地区の北端を流れるが、位置的には西末則遺跡周辺の条里地割に合致することから、その開削時期は周辺の条里地割施工段階と同じ時期と考えられる。その後、近世段階になり、掘立柱建物跡が真北方向に建てられるようになり、その機能を失い、土地の境界としてその名残をとどめたのものと考えられる。



第265図 SDf01断面図(1/50)

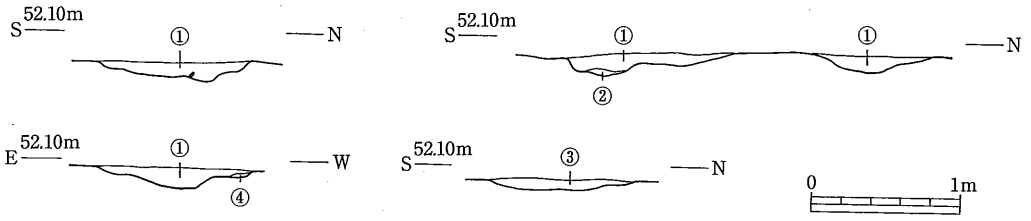
SDf02（第266図）

I地区南部を東から西へ流れる溝状遺構である。N17区の南端から約10mのところを起点に条里地割に平行に西へ流れる。埋土は暗灰色を呈する粘質土の単一層であり、土質の違いはあるものの基本的な土層は一貫している。幅は平均して約1m、深度は20～30cmを測る。一部二股になっている部分はあわせて3m程度と広くなっている。

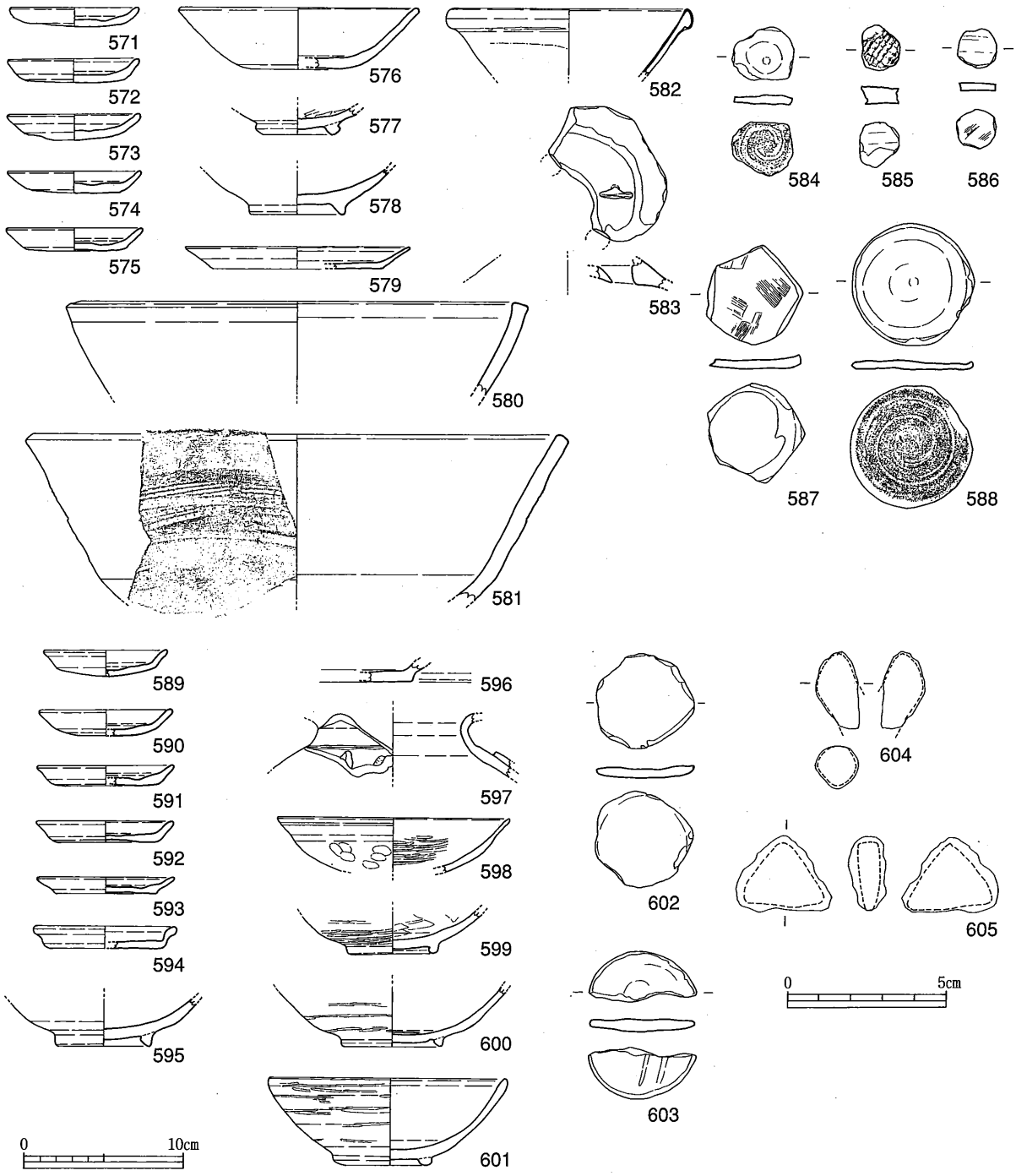
出土遺物は、埋土中より土師器をはじめ、多くの遺物が出土している。第267図はSDf02から出土した遺物である。571～575・589～594は土師器の小皿である。576は土師器の杯、577・578・595は土師器の椀である。579は須恵器の皿である。580は須恵器の鉢、581は瓦質土器の鉢である。582は白磁の碗である。583は土師質土器の香炉と考えられるものである。福岡県太宰府市の史跡大宰府跡から類例が出土している。584～588・602・603は転用品である。いずれも打ち欠いて丸く仕上げている。596は須恵器の杯、597は須恵器の壺である。598は瓦器の椀、599～601は瓦質土器の椀である。604・605は鉄製品である。605は断面が三角形を呈し、刀子状のものであると考えられる。

後世の削平の影響も考えなければならないが、検出状況のみから判断すると、N17区がそのはじまりと考えられる。途中、南からの溝状遺構と合流している。また、合流部のすぐ西側で二股に分岐し、また合流している箇所が認められるが、これはある時期、流水量が多くなったことによるものであろう。また、L17区でも深度のピークが2つあり、この付近では細い溝状遺構が平行して走っていた状況がみてとれる。P18区の調査では、SDf02を検出できなかったが、東西の壁面の土層観察によって、SDf02がP18区よりも西側へ流れていく様子が確認できた。南から合流する溝状遺構については現在の用水路をはさんだK地区から続いているもので、K地区のSDf14・15などと密接な関係があるものと考えられる。

出土遺物の特徴からみてSDf02は12世紀から13世紀にかけて埋没したものと考えられる。



第266図 SDf02断面図(1/50)



第267図　SDf02出土遺物実測図

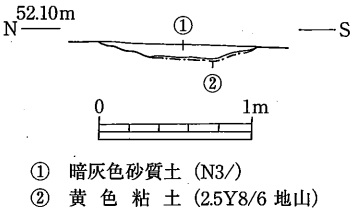
SDf03

I地区L17・M17区で検出した南東から北西に向かって流れる溝状遺構である。南東部ではSRf02が検出されているので、SDf03はSRf02から派生する溝状遺構であると考えられる。L17区ではSDf02によって破壊されている。埋土はSRf02の最上層と同一であり、遺物はほとんど出土していない。わずかに弥生土器と考えられる破片が出土したのみである。

これらのことから、SDf03は弥生時代に機能していた溝状遺構であると考えられる。

SDf05（第268図）

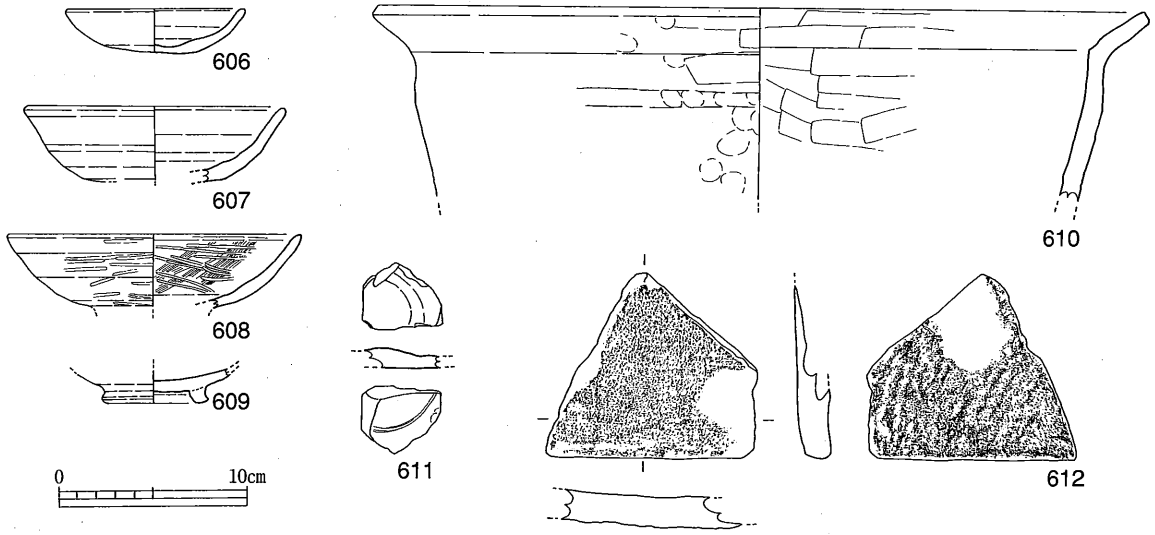
N17区からM17区にかけて検出した溝状遺構である。幅約１m、深度は15cm程度を測る。SDf02に平行して流れるように検出されたが、N17区で２箇所途切れている。埋土はSDf02とほぼ同じである。状況からみて、SDf05はSDf02の南からの流れから派生させたもので、SDf02と同じ機能を持っていたものと考えられる。



第268図 SDf05断面図(1/50)

第269図はSDf05から出土した遺物である。606は土師器の小皿である。607・611は土師器の杯、608は土師器の椀である。609は瓦質土器の椀である。610は土師質土器の土鍋である。612は平瓦である。凹面は布目痕、凸面には荒い縄目のタタキが認められる。

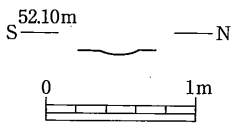
出土遺物の特徴、周辺の遺構の状況からみて、SDf05はSDf02と同じく12世紀から13世紀にかけて埋没したものと考えられる。



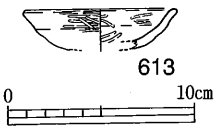
第269図 SDf05出土遺物実測図

SDf06（第270図）

Ⅰ地区M17区で検出した小規模の溝状遺構である。幅20cm、深度は10cm程度である。SDf05から北へ派生する溝状遺構の一部であると考えられる。第271図613はSDf06から出土した瓦質土器の小皿である。



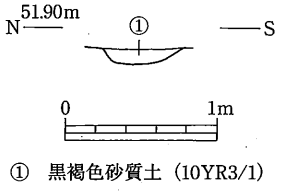
第270図 SDf06断面図(1/50)



第271図 SDf06出土遺物実測図

SDf11（第272図）

K地区K１区で検出した東から西へ流れる溝状遺構である。幅30cm、深度10cmを測る。埋土は黒褐色砂質土でSRf02の最上層と同一である。SRf02とほぼ平行に流れ、K２区ではほとんど検出されなかったため、起点はK２区あたりであると考えられる。おそらくは、SRf02がオーバーフローした流れを西側で開削したものであると考えられる。



第272図 SDf11断面図(1/50)

第273図614はSDf11から出土した須恵器の蓋と考えられる遺物である。

中央部が欠損しているが、古墳時代後期ごろのものと考えられる。

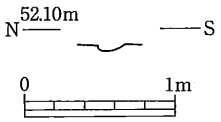
したがって、SDf11は弥生時代から古墳時代にかけて機能し、古墳時代後期ごろに埋没したものと考えられる。

第273図 SDf11出土遺物実測図

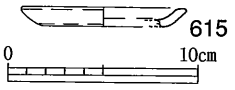
SDf13（第274図）

K地区K２区中央やや北よりの部分で検出した小規模な溝状遺構である。幅10cm、深度10cmを測る。SAf07およびSBf17の北側に位置する。延長は1.5mほどにしか過ぎない。第275図615はSDf13から出土したはじきの小皿である。

出土遺物からみて、SDf13は12世紀から13世紀にかけて埋没したもので、周辺の掘立柱建物跡や柵列と関連性のある遺構であると考えられる。



第274図 SDf13断面図(1/50)



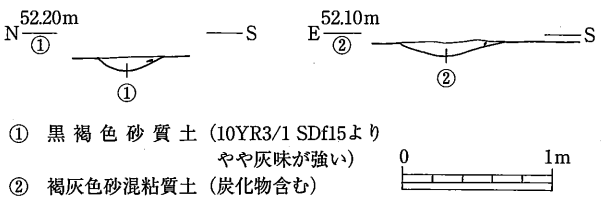
第275図 SDf13出土遺物実測図

SDf14（第276図）

K地区K２・３区の北端部で検出した溝状遺構である。SBf18の東側と北側に位置する。東側を基点とし、雨落溝のように北側へ屈曲する。そのまま西へ流れ、SBf18の北西隅で再び北流する。東側はSBf19の西側にあたり、このあたりの掘立柱建物跡の雨落溝である可能性がある。東側のSDf15と平行し、そこから派生するSDf16や17とも重なる部分があり、SDf14と15は同一の溝状遺構の可能性も否定できない。しかしながら、SDf17とは土層に若干の違いがあり、ここでは別の溝状遺構として取り扱うこととする。ただし、流路の方向が一致すること、出土遺物の時期がほぼ同じであることから、これらの溝状遺構は同じ時期に機能していたものと考えられる。

第277図はSDf14から出土した遺物である。616～623は土師器の小皿である。624～626は土師器の杯である。627は須恵器の小型の壺である。蓋は伴わないが、薬壺であると考えられる。628は須恵器製の硯である。一部しか残っていないが、陸の部分の脚部であることから風字硯であることがわかる。また中央に縦方向の仕切りがあった痕跡がみてとれる。629は須恵器の甕である。胴部があまり張らず、口縁端部は緩やかに外反し、丸くおさめている。外面には細かい格子状のタタキが認められる。十瓶山産のものであると考えられる。

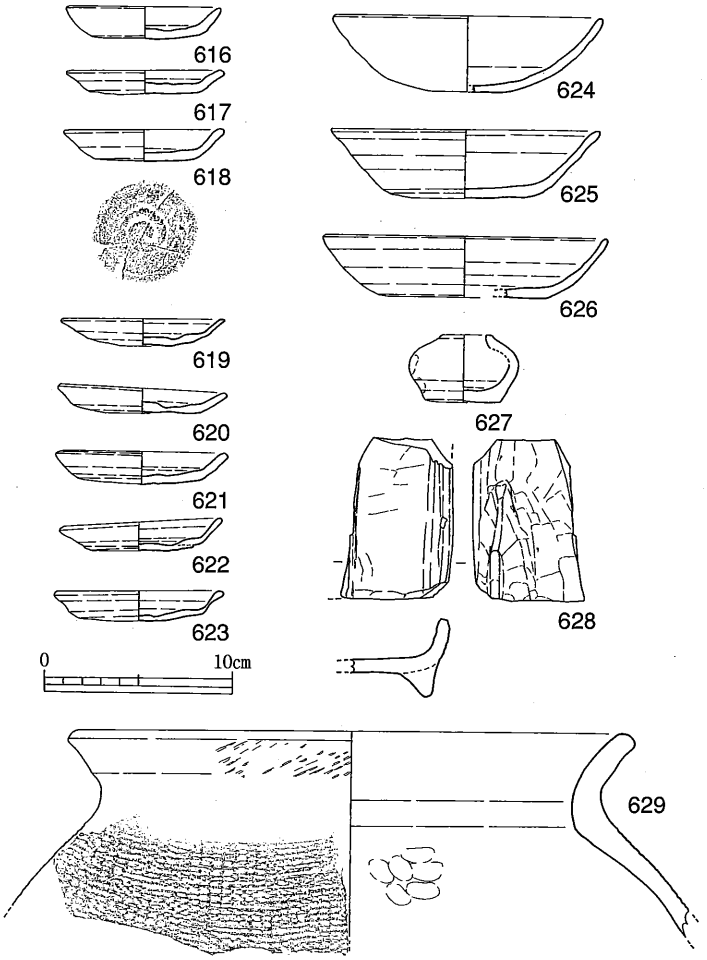
出土遺物の特徴からSDf14は12世紀から13世紀にかけて埋没したものと考えられる。



第276図 SDf14断面図(1/50)

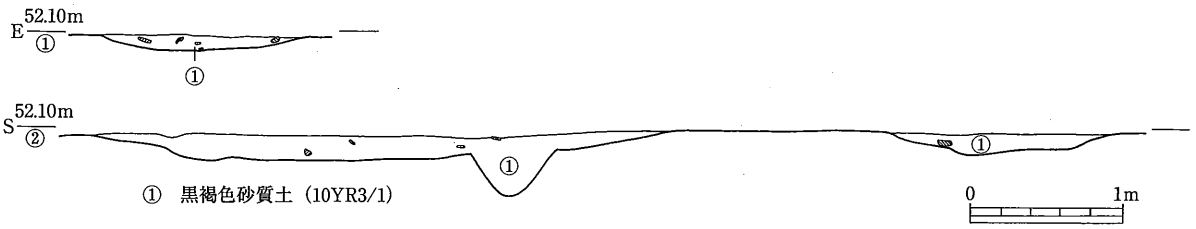
SDf15（第278図）

K地区K3区で検出した溝状遺構である。基本的には東から西へ流れる溝状遺構でK3区北東部ではオーバーフローした流路が検出された。第279図下段の断面図がこの部分にあたり最大幅6m前後を測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層であり、長期間かけて徐々に埋没したのではないことが伺える。東から西へ流れる本体の部分は断面図でV字を示す幅70cm程度の流路であり、この部分はK3区を拡張した際にも検出されたが、途中で切れた状態で検出された。つまり、この部分が起点となり、西側へ排水するための溝状遺構であると考えられる。西へ流れるSDf15はSBf19の東側でほぼ直角に方向を北に変えている。位置的には現在の用水路をはさんで、北側のSDf02の南側の南北流の溝状遺構とほぼ一致する。このことから、SDf15とSDf02は同時期に機能していた溝状遺構であると考えられる。

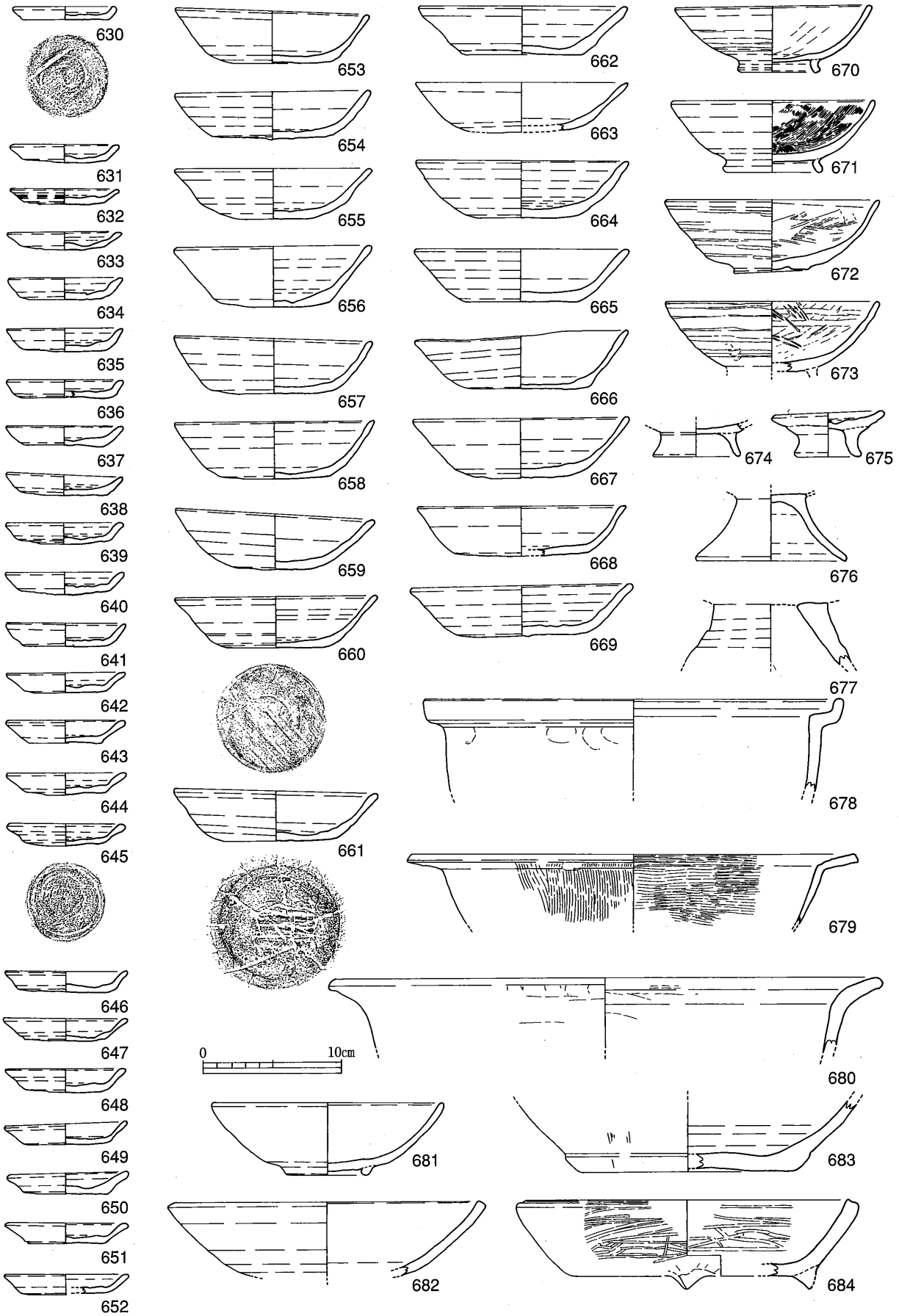


第277図 SDf14出土遺物実測図

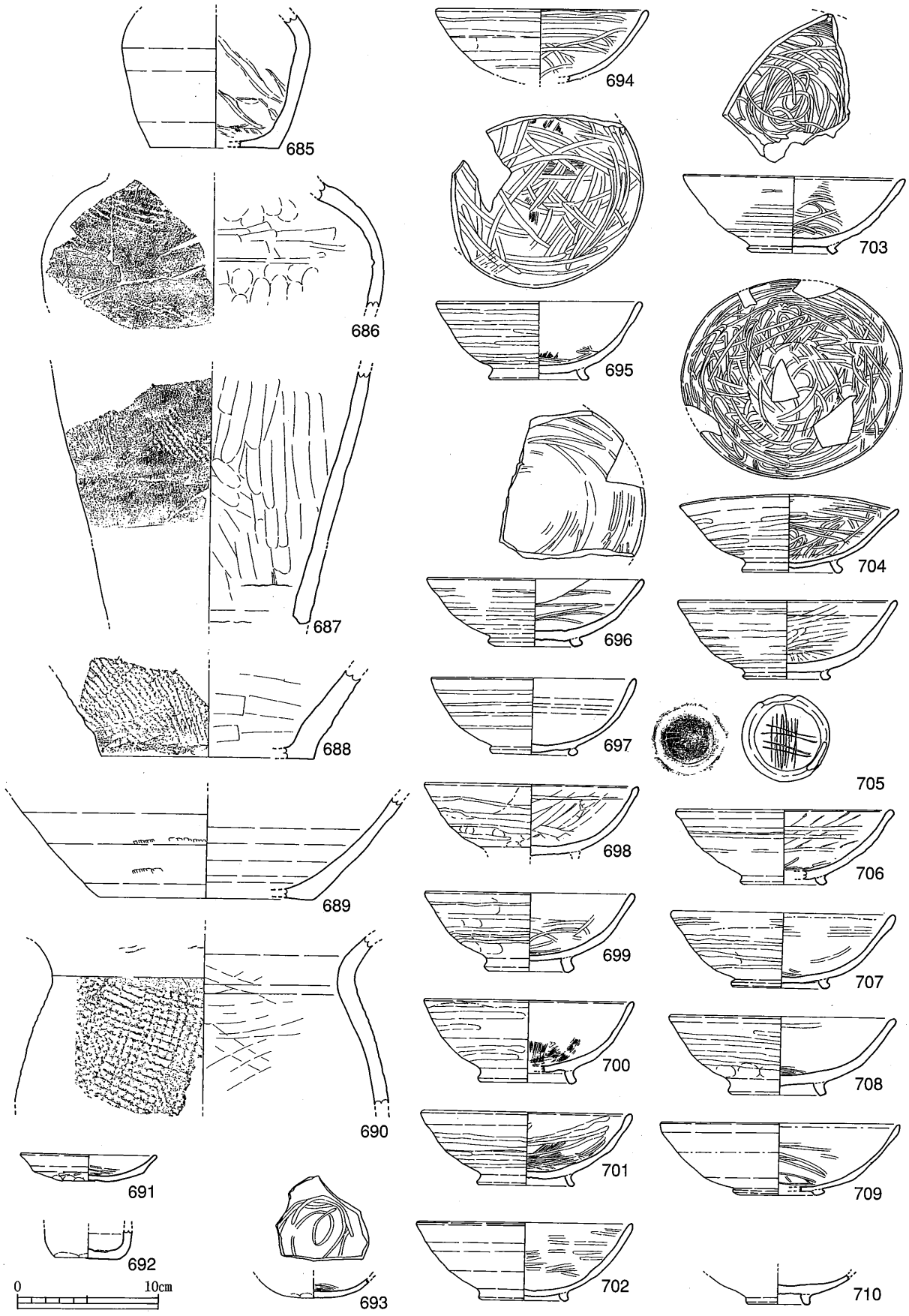
第279～283図はSDf15から出土した遺物である。630～652は土師器の小皿である。653～669は土師器の杯である。670～673は土師器の椀である。674・676・677は土師質土器の高台付の杯である。675は土師器の高台付の小皿である。678～680は土師質土器の土鍋である。678は二重口縁を持つものである。679は大きく外反する口縁部を持ち、浅めの土鍋である。680は緩やかに外反する口縁部を持ち、深めのものである。681は須恵器の椀、682～684は須恵器の鉢である。684は脚が付くタイプのもので瓦質土器によくみられるタイプのものである。685～689は須恵器の壺である。685は小型の壺で底部は平らである。686～689は大型の壺で、外面には縄目のタタキが認められる。十瓶山産であると考えられる。690は須恵器の甕である。691は瓦質土器の小皿、692は瓦質土器の小型の壺ではないかと考えられる。683は瓦器の杯、685～712は瓦質土器の椀である。いずれも内面にヘラミガキの痕跡が顕著に認められ、綾川町西村遺跡をはじめとして、古代末期から中世にかけて県内で出土例の多い十瓶山産のものであると考えられる。このうち、注目されるのは705の椀である。高台部分の内側に線状のものが縦横に描かれている。よくみると縦方向に5本、横方向に4本の線が描かれている。縦方向には線と線を斜めにつなぐような薄い線刻も認められ、これは縦方向の線を刻む際の工具の運びを示している。



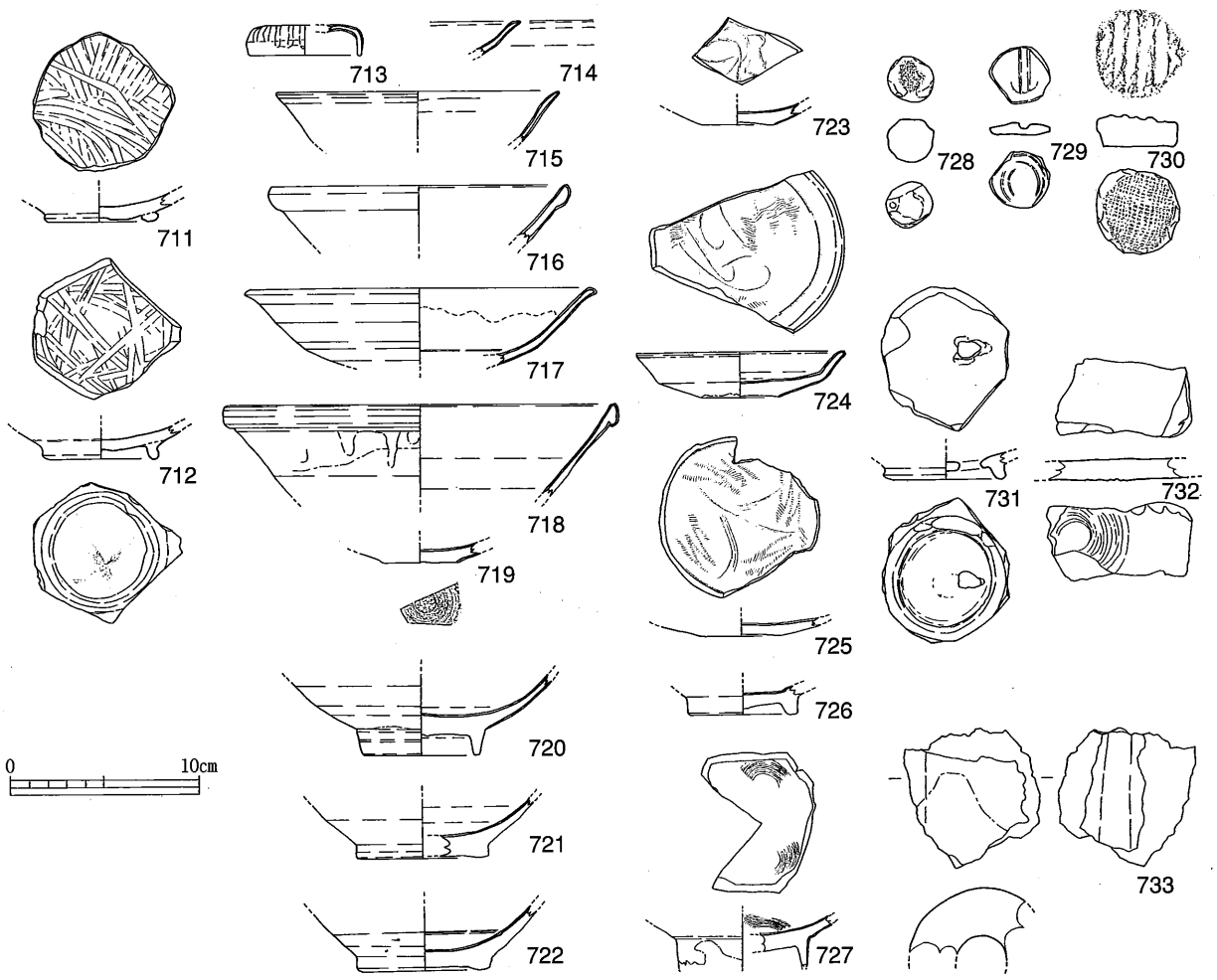
第278図 SDf15断面図(1/50)



第279図　SDf15出土遺物実測図①



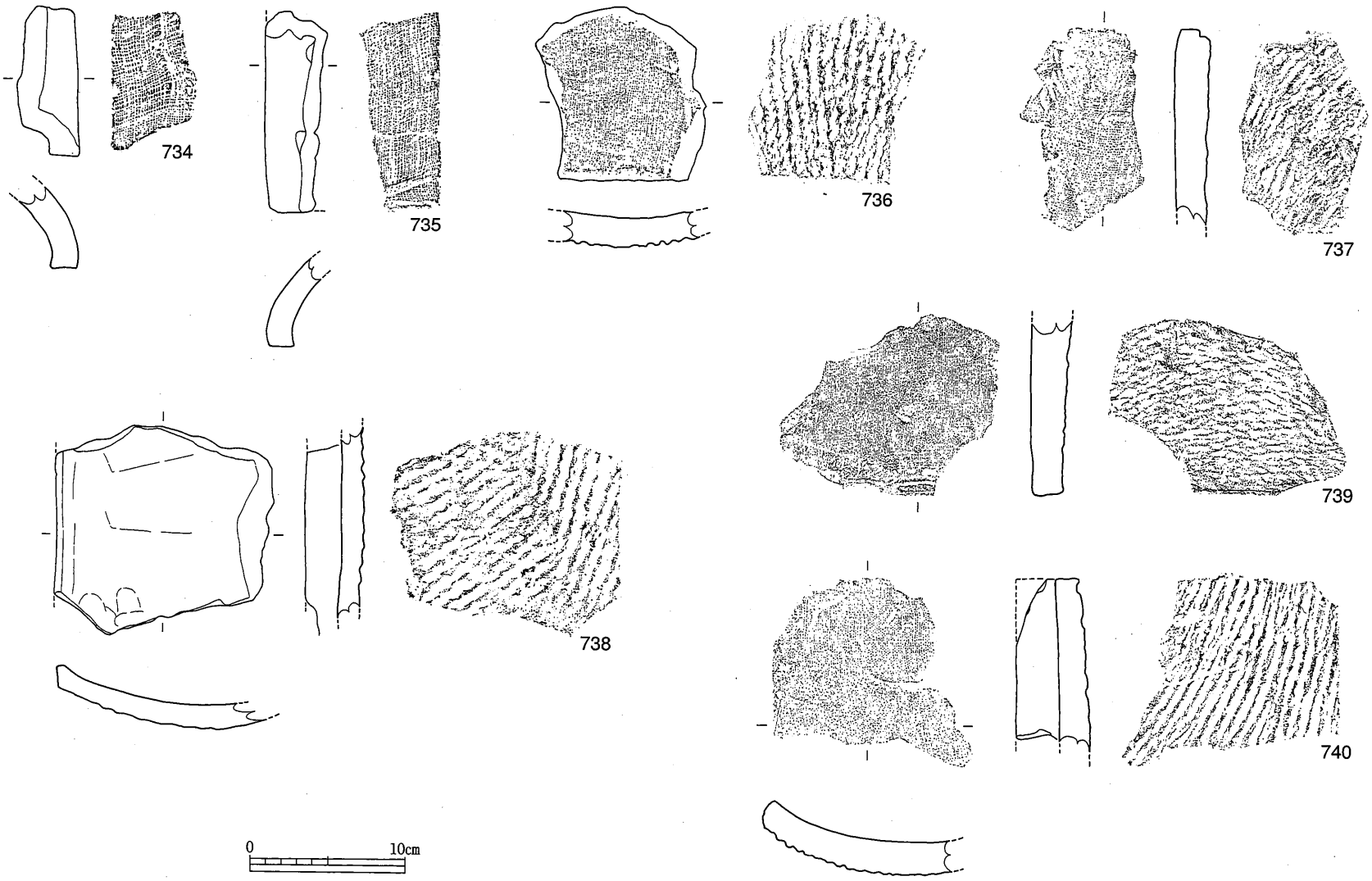
第280図　SDf15出土遺物実測図②



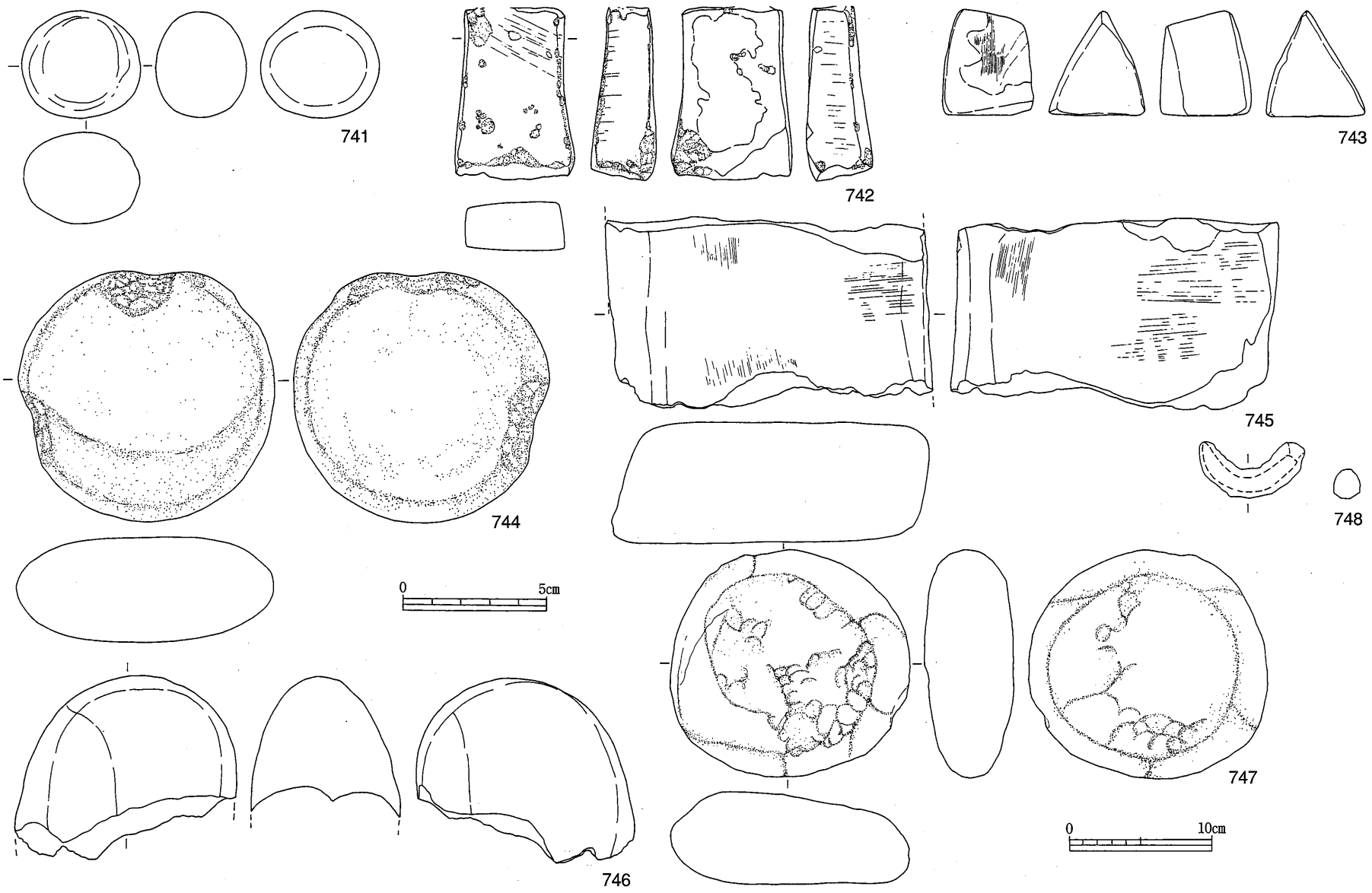
第281図 SDf15出土遺物実測図③

この縦5本、横4本が直交して構成するものはいわゆる「九字」とよばれる災厄からの忌避を示す呪いの一種であると考えられる。密教系の儀式によくみられるもので一般的には「臨兵闘者皆陣列在前」（台密系では最後の三文字が列前行）として知られている。つまり、西末則遺跡で生活をしていた人々はすでに「九字」による災厄の忌避を日常的に行っていたことがわかる。711は転用品であり、丸く打ち欠いている。713は白磁の合子の蓋と考えられる。714～722は白磁の碗である。723～725は青磁の皿である。726は青磁の碗、727は白磁の碗である。728・730は平瓦の転用品である。729は土師器の小皿の転用品、731は瓦質土器の椀の転用品である。733は鞴の羽口である。734・735は丸瓦である。734は玉縁の部分である。736～740は平瓦である。741～747は石器である。742・743、745は砥石と考えられるもので、いずれも擦痕が明瞭に認められる。743は手に持って使用する持ち砥石である。744・746は叩石もしくは磨石、747は台石もしくは叩石と考えられるものである。

出土遺物の特徴からみて、SDf15はSDf14などと同じく、12世紀から13世紀にかけて埋没したものと考えられ、SBf19などの掘立柱建物跡と非常に密接な関係のあるものであると考えられる。おそらくは、SDf02・14・15は、土地利用に際して、居住域と生産域を明確に区別するために掘削されたもので、排水という目的よりもそちらに主眼がおかれたものであると考えられる。



第282図　SDf15出土遺物実測図④



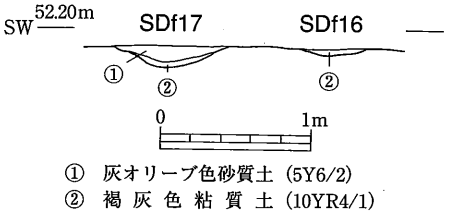
第283図　SDf15出土遺物実測図⑤

SDf16・17（第284図）

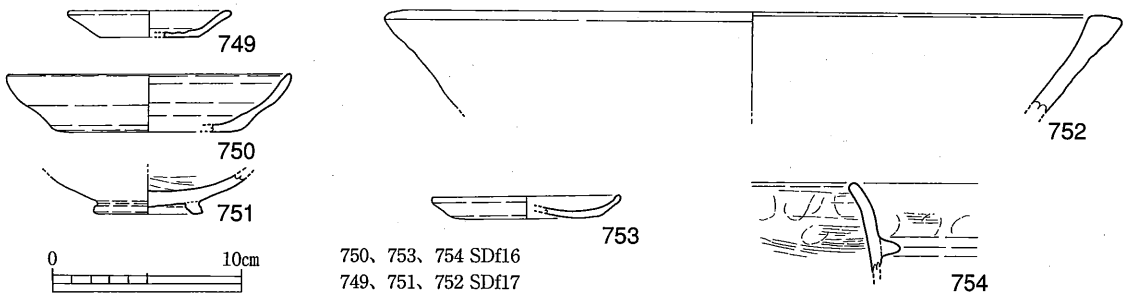
K地区K3区で検出した溝状遺構である。いずれもSDf15の南北方向の流れから派生し、SDf14へと続くものである。SBf19および小型の鍛冶遺構と考えられるSXf09などと密接な関係を持つものと考えられる。

第285図はSDf16・17から出土した遺物である。749は土師器の小皿である。750は土師器の杯、751は土師器の椀である。752は大型の土師器の鉢である。753は瓦質土器の小皿、754は瓦質土器の土鍋である。

出土遺物からみて、SDf16・17も12世紀から13世紀にかけて埋没したものと考えられ、SDf02や14・15と同じような性格の溝状遺構であると考えられる。



第284図 SDf16・17断面図(1/50)

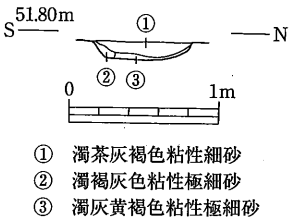


第285図 SDf16・17出土遺物実測図

SDf19（第286図）

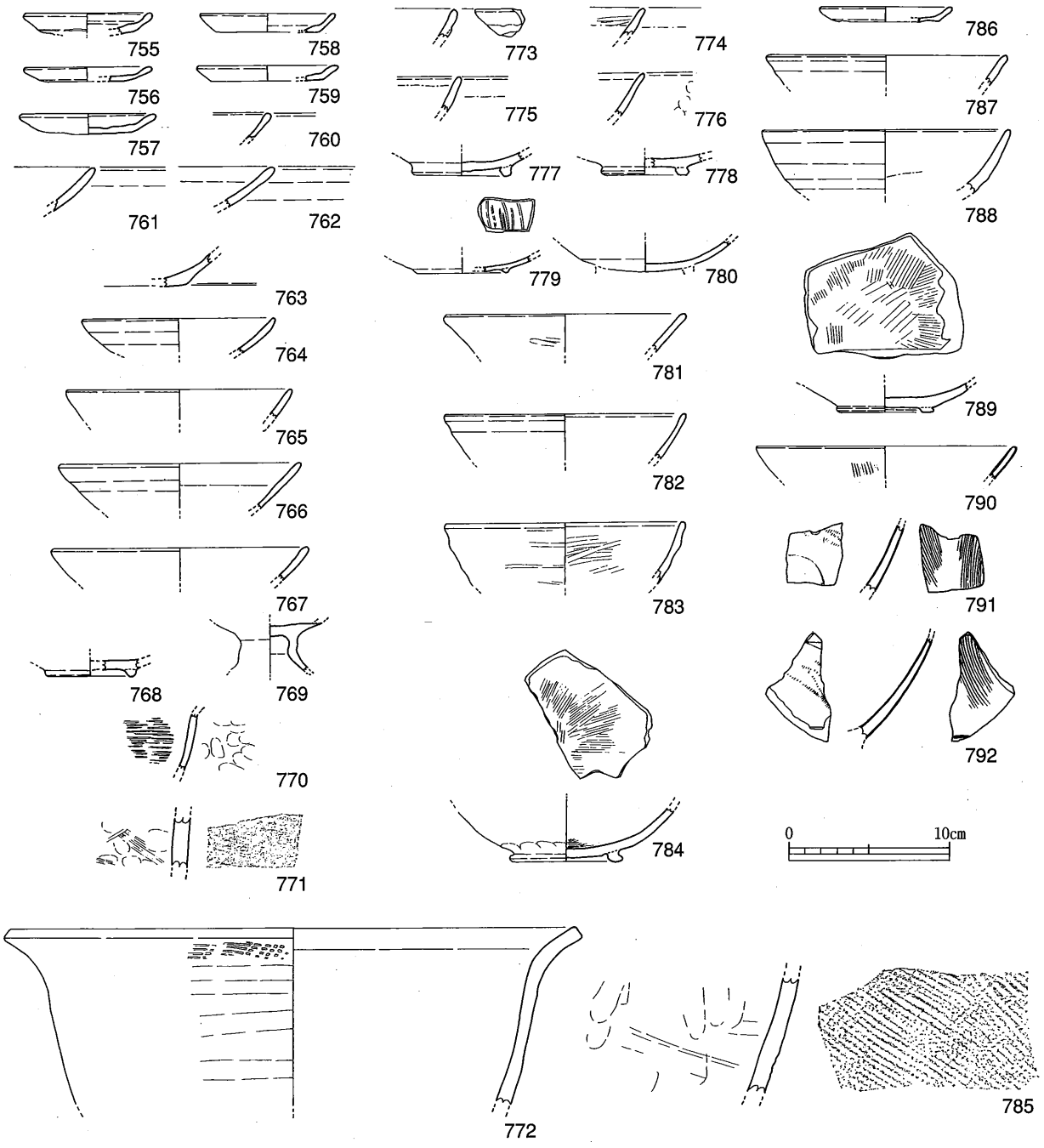
K地区K1区で検出した溝状遺構である。幅60cm、深度15cmを測る。K1区の南から北へ向かって流れ、SBf09・10のすぐ南側で西へ直角に振れる。西に振れた流れはSBf09・10の南西隅でやや北へ振れ、再び西へ流れる。SBf10の雨落溝の役割を担っていたものと考えられる。

埋土中より、多くの遺物が出土している。第287図はSDf19から出土した遺物である。755～759は土師器の小皿である。760～767は土師器の杯である。768は土師器の椀、769は土師器の高杯、770は土師器の鉢と考えられるものである。771は土師器の甕、772は土師質土器の土鍋である。773は黒色土器の椀である。内面のみが黒色を呈するA類に属する。774～784は須恵器の椀である。785は須恵器の甕である。786は瓦質土器の小皿、787は瓦質土器の杯、788は瓦質土器の椀である。瓦質土器はいずれも十瓶山産のものと考えられる。789は土師質土器の椀である。790～792は青磁の碗である。いずれも外面にハケによる文様が描かれている。



第286図 SDf19断面図(1/50)

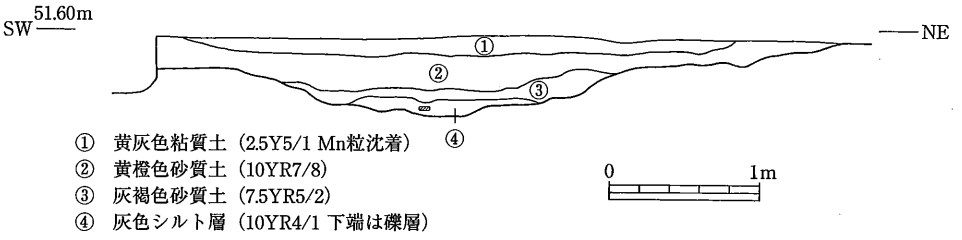
土鍋の体部がやや外反することや黒色土器と軟質の須恵器が共伴することなど、出土遺物の特徴からみて、SDf19は12世紀代に埋没したものと考えられる。また、SBf08・09・10の南側を建物とほぼ平行に、しかもSBf10の庇部分の柱穴を回り込むように流れていることから、これらの掘立柱建物跡の雨落ち溝としての役割をになっていたものと考えられ、西側の建物から東、そして南の段丘崖から綾川方面へ排水していたものと考えられる。



第287図　SDf19出土遺物実測図

SRf01（第288図）

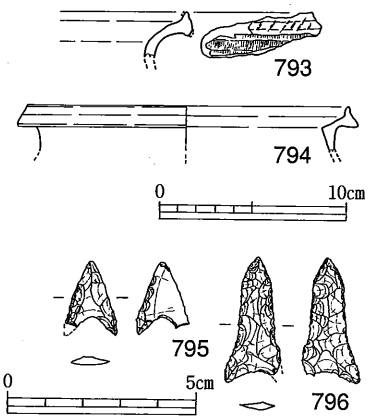
Ⅰ地区P18区で検出した自然河川である。深度の違いからみて南東から北西にかけて流れるものであると考えられる。東側は後述するSRf02と同じ流れとなるため、SRf01と02は元来は同一の自然河川であったと考えられる。東側はJ地区でも検出されており、綾川の氾濫源の一部と考えられる。



第288図 SRf01断面図(1/50)

第289図はSRf01から出土した遺物である。793は弥生土器の壺の口縁部、794は弥生土器の甕の口縁部である。793は広口壺の口縁部と考えられ、端部は大きく肥厚させ、ナデを施して調整したあとに刻目を入れている。794はやはり口縁端部を大きく肥厚させた口縁部を持つ甕である。端部の外面には強いナデが認められる。735・736はサヌカイト製の打製石族である。735は凹基式、736はやはり凹基式であるが、基部のすぐ上部がややくびれるタイプのものである。

出土遺物およびSRf02の状況などからみて、SRf01は弥生時代後期ごろに主に機能し、古墳時代後期ごろに埋没したものと考えられる。



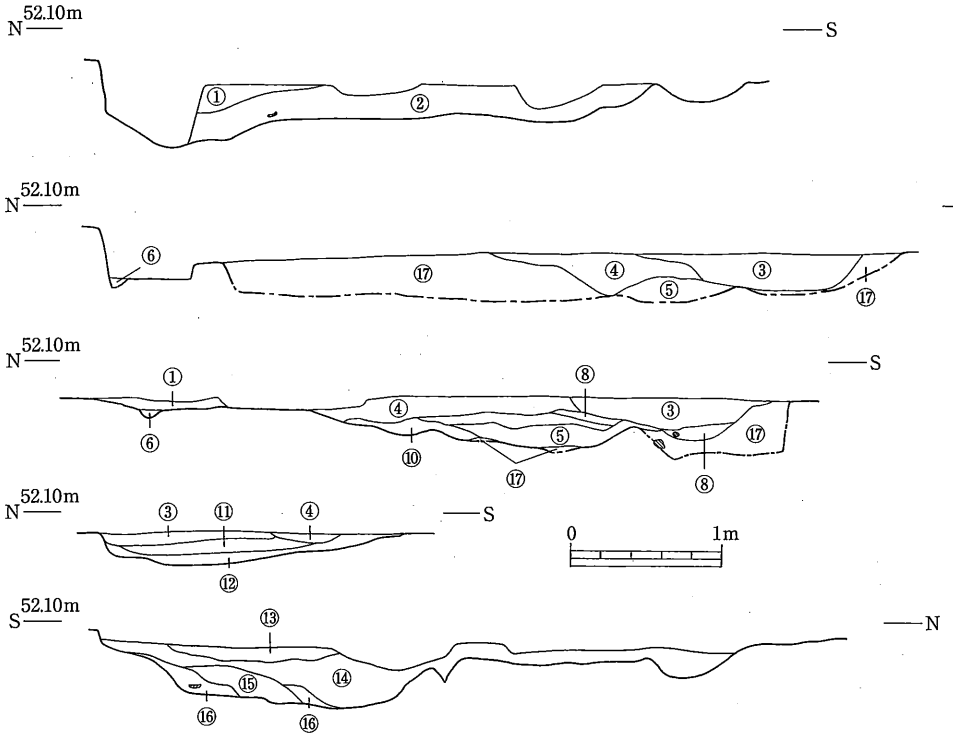
第289図 SRf01出土遺物実測図

SRf02（第290図）

Ⅰ地区の南端およびK地区の北端部分で検出した自然河川である。基本的には東から西へと流れるものであり、直線的ではなく蛇行しながら流れている。また、K地区北端部ではいくつかの流れに分岐しているが、西側でふたたび合流する。大部分が現代の用水路と同じ場所を流れるため、全体の規模・様相ははっきりしない。幅は平均すると、3～4mほどであり、最大幅は約6mである。深度は浅く、もっとも深いところで60cm程度である。埋土は粘質土と砂層が混在したもので、流れの早い時期と遅い時期があったことを示している。

埋土中からは、量的には多くないが、弥生土器を中心とした遺物が出土している。第292図はSRf02から出土した遺物である。797～806は弥生土器の甕である。797は胴部があまり張り出さないタイプのものである。803は外面にハケ目が顕著に認められる。807は弥生土器の高杯である。808～819は弥生土器の壺である。809は壺の頸部である。外面にはハケ目が認められる。820は弥生土器の鉢である。成形・調整の特徴からいずれも弥生時代後期ごろのものと考えられる。821・822は須恵器の杯蓋である。屈曲部に突帯が、明瞭にめぐっており、6世紀中葉ごろのものと考えられる。823～825はサヌカイト製の打製石族である。823は凸基式、824・825は凹基式のものである。826は打製石斧と考えられるもので、827はその形状からはよくわからないがここでは石包丁としておく。石器はいずれもその特徴からみて弥生時代後期ごろのものと考えられる。

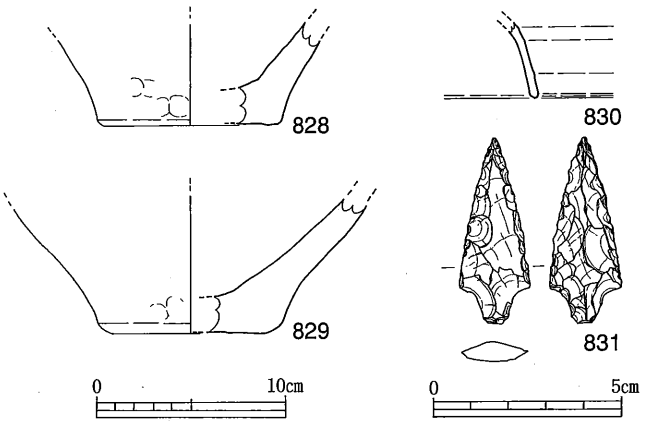
出土遺物からみて、SRf02は弥生時代後期ごろに主に機能し、古墳時代後期ごろに埋没したものと考えられる。蛇行しているため、人為的な開削とは考えにくいが、南側の肩部がかなり急に下がっていること、底部の屈曲部が著しいことから自然河川を利用して人為的に開削しなおしている可能性も考えられる。おそらくは、西南の綾川の氾濫源より、灌漑用の水路として利用していたものと考えられる。



第290図 SRf02断面図(1/50)

SRf03（第293図）

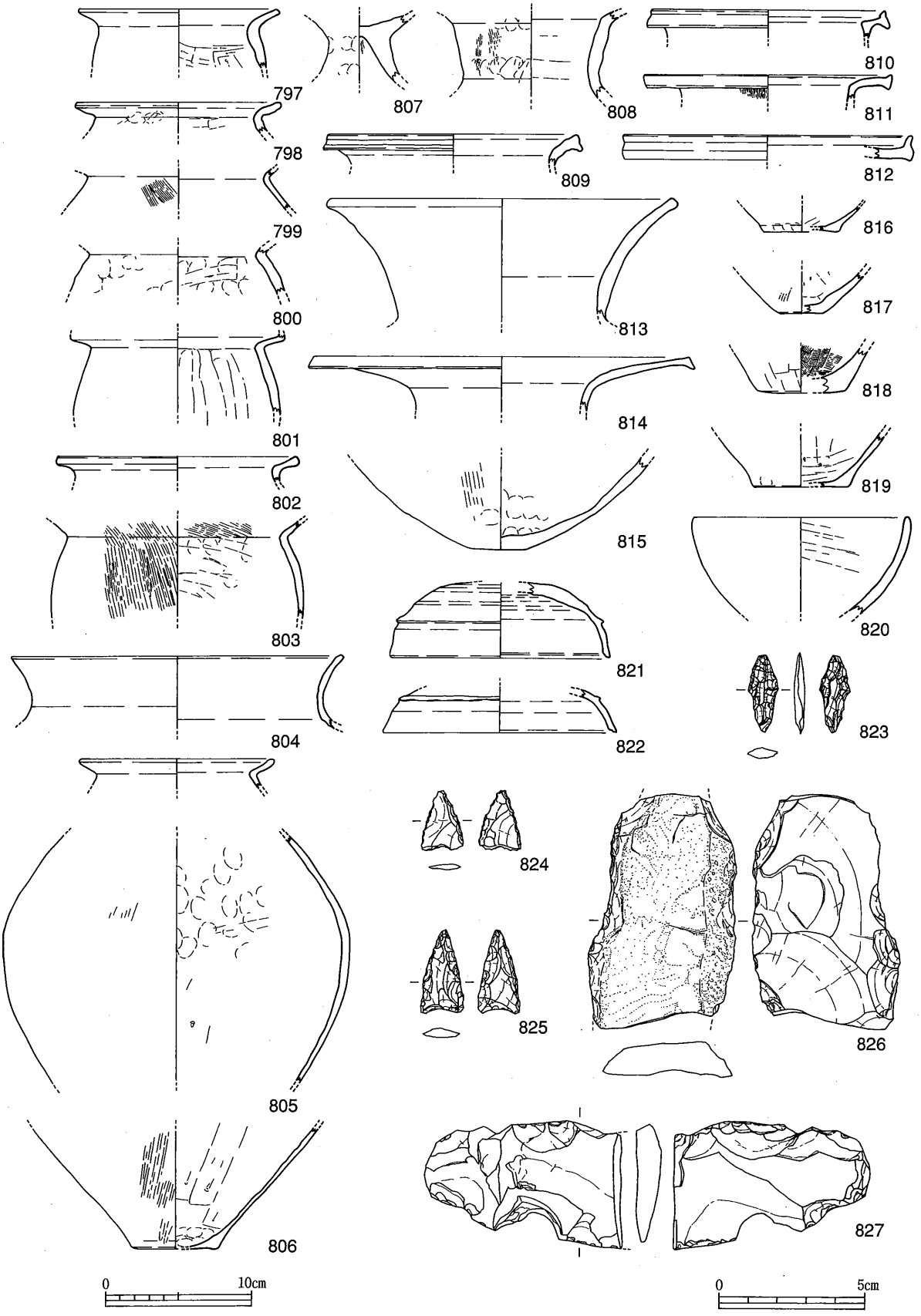
K地区南側を大きく蛇行しながら東から西へと流れる自然河川である。東西ともに調査区外へ延びるため、詳細は不明であるが、検出した範囲では、K地区南東隅から蛇行しながら西へと流れる。西端はK1区南半分ほどを占める。幅は西側がもっとも広く約20m、狭いところで約7mを測る。深度はもっとも深いところで約1mを測る。埋土はほぼレンズ上に堆積しており、比較的穏やかな流れであり、ゆっくり埋没したものと考えられる。



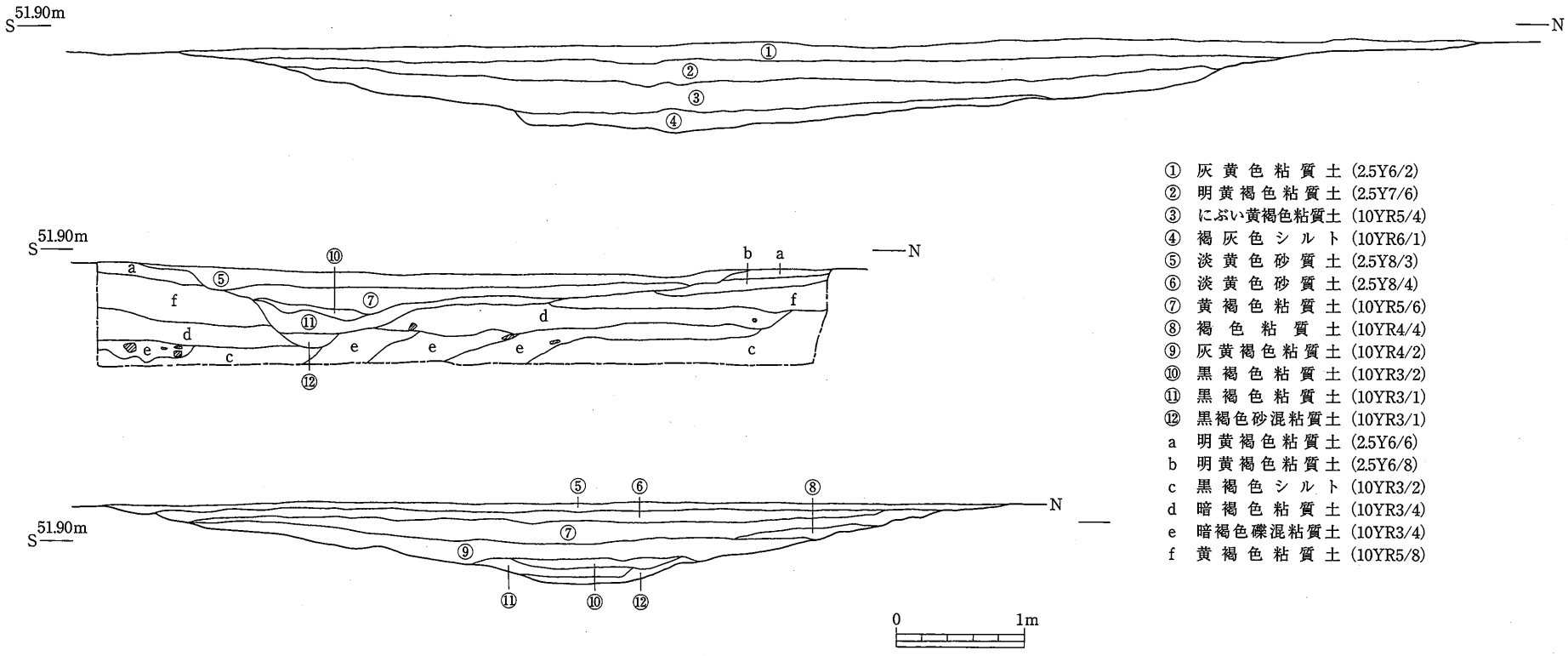
第291図 SRf03出土遺物実測図

大きさの割に出土遺物は非常に少なく、わずかに弥生土器などが出土したにすぎない。第291図はSRf03から出土した遺物である。528・529は弥生土器の底部である。器壁が厚いこと、胎土に大粒の砂粒を多く含むことから弥生時代前期後半ごろのものと考えられる。530は須恵器の杯蓋の破片である。立ち上がりの特徴から6世紀後半ごろのものと考えられる。

SRf03は幅が大きい割に深度がそれほど深くなく、また土層の堆積もレンズ状を呈しており、比較的緩やかに流れていたことが推測できる。おそらくは古代以前の綾川の氾濫原のひとつであり、遺跡南側の段丘崖が形成される以前にゆっくりと埋没していったものと考えられる。出土遺物が少ないことからみて、あまり周辺の灌漑用などには利用されなかった可能性が高い。



第292図　SRf02出土遺物実測図



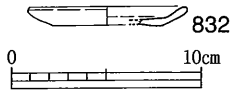
① 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)
② 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6)
③ にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4)
④ 褐灰色シルト (10YR6/1)
⑤ 淡黄色砂質土 (2.5Y8/3)
⑥ 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4)
⑦ 黄褐色粘質土 (10YR5/6)
⑧ 褐色粘質土 (10YR4/4)
⑨ 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)
⑩ 黒褐色粘質土 (10YR3/2)
⑪ 黒褐色粘質土 (10YR3/1)
⑫ 黒褐色砂混粘質土 (10YR3/1)
a 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6)
b 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/8)
c 黒褐色シルト (10YR3/2)
d 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
e 暗褐色礫混粘質土 (10YR3/4)
f 黄褐色粘質土 (10YR5/8)

第293図　SRf03断面図 (1/50)

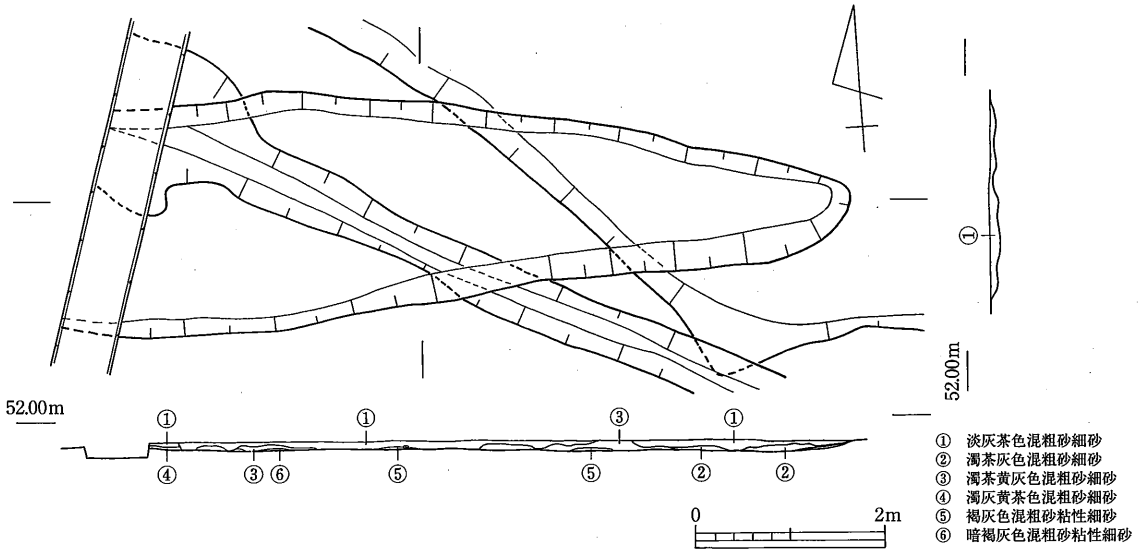
SXf02（第294図）

K地区K１区北東隅で検出した大型の遺構である。西側が調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、長大な楕円形を呈していたと考えられる。長径4.5m、短径２mを測る。深度はもっとも深いところでわずか10cmと非常に浅い。SRf02やSDf11の埋没後に機能していたもので、SKf34・35によって破壊されている。埋土は色調は違うものの細砂層の互層である。

第295図832は土師器の小皿である。出土遺物および埋土の状況などからみて、SXf02は中世段階に埋没したものであると考えられる。



第295図 SXf02出土遺物実測図



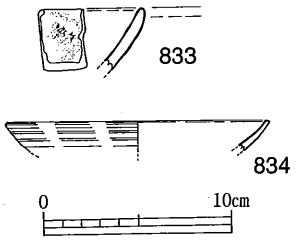
第294図 SXf02平・断面図(1/50)

SXf05（第296図）

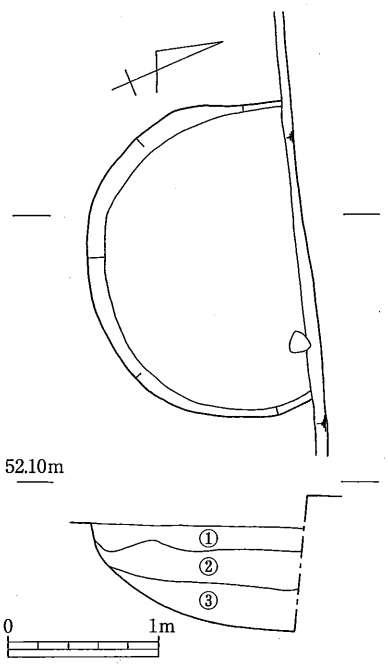
K地区K２区の北端部で検出した円形を呈する遺構である。北半分が調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、直径約２mほどのものであると考えられる。調査当初は円形にめぐる溝状遺構としていたが、内側も地山とは若干違う色調であったため、掘削したところ、地山をブロック状に大量に含み、かつ、非常に軟質で除去できたため、円形の土坑状の遺構であることが判明した。埋土はおおむねレンズ状の堆積をしている。

第297図はSXf05から出土した遺物である。833は陶器の碗である。内面には褐色の釉がかかっている。834は陶器の皿である。いずれも肥前系のものと考えられる。

出土遺物からみて、SXf05は隣接するSKf88と同じく、近世段階に機能し、埋没したものと考えられる。



第297図 SXf05出土遺物実測図



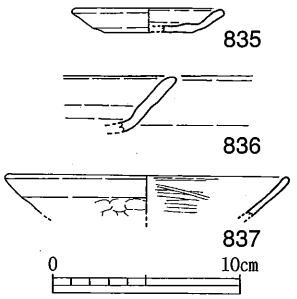
第296図 SXf05平・断面図(1/50)

SXf07（第298図）

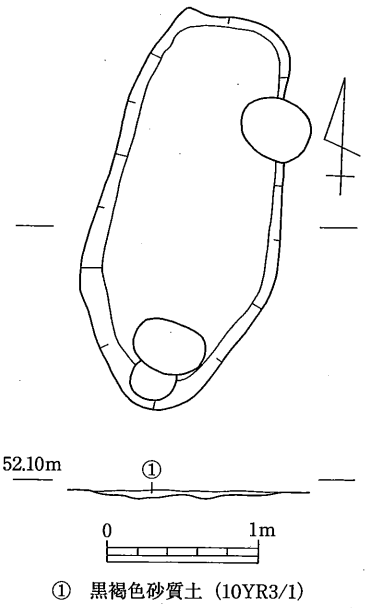
K地区K2区のほぼ中央部で検出した遺構である。SBf18の南西隅の柱穴付近にあたる。形状はやや歪な楕円形を呈しており、長径3.5m、短径1.5mを測るが、深度は5cmと非常に浅い。

埋土は黒褐色砂質土で、少量ではあるが遺物が出土している。第299図はSXf07から出土した遺物である。835は土師器の小皿である。836は土師器の杯である。837は瓦質土器の椀である。いずれもその特徴からみて12世紀から13世紀にかけてのものであると考えられる。

したがって、SXf07はSBf18に伴うものであると考えられる。



第299図 SXf07出土遺物実測図



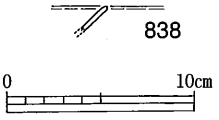
第298図 SXf07平・断面図(1/50)

SXf09（第300図）

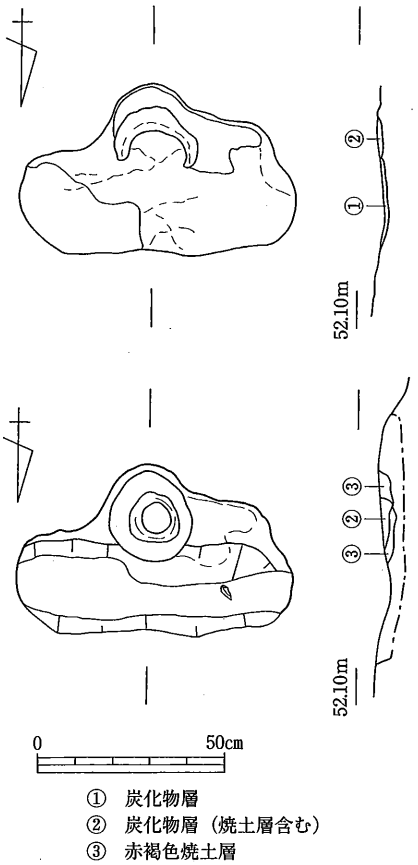
K地区K2区中央やや東よりの部分で検出した遺構である。位置的にはSBf19の内部、中央やや南よりの部分にあたる。形状は中央部が南側に張り出した楕円形を呈し、長径は1.3m、短径は広いところで1m、狭いところで50cmを測る。検出時は全体的に赤褐色を呈しており、遺構全体が被熱していることがわかった。調査を進めた結果、南側に張り出した部分がドーナツ状に最も被熱しており、その周辺は真っ黒に炭化していた。ドーナツ状の部分およびその内部は還元作用によりやや緑がかった色調を呈していた。

第301図838はSXf09から出土した遺物である。土師器の小皿である。口縁部の破片であるが、12世紀代のものであると考えられる。

SXf09はその形状からみて、小型の鍛冶遺構であると考えられ、村落内での小規模な鍛冶作業を行う場所であったと考えられる。鍛冶作業は屋内で行われたと考えられ、その場所はSBf19であったと考えられる。このSBf19の雨落溝の機能を持っていたと考えられる溝状遺構SDf15からは、鞴の羽口が出土しており、また、すぐ北側の大きな土坑SKf101からは少量ではあるが、鉄滓と考えられる遺物が出土していることを考えあわせれば、この遺構はまさに村落内の小規模な鍛冶遺構であり、SBf19は鍛冶作業を常時行っていた作業場である可能性が高い。



第301図 SXf09出土遺物実測図



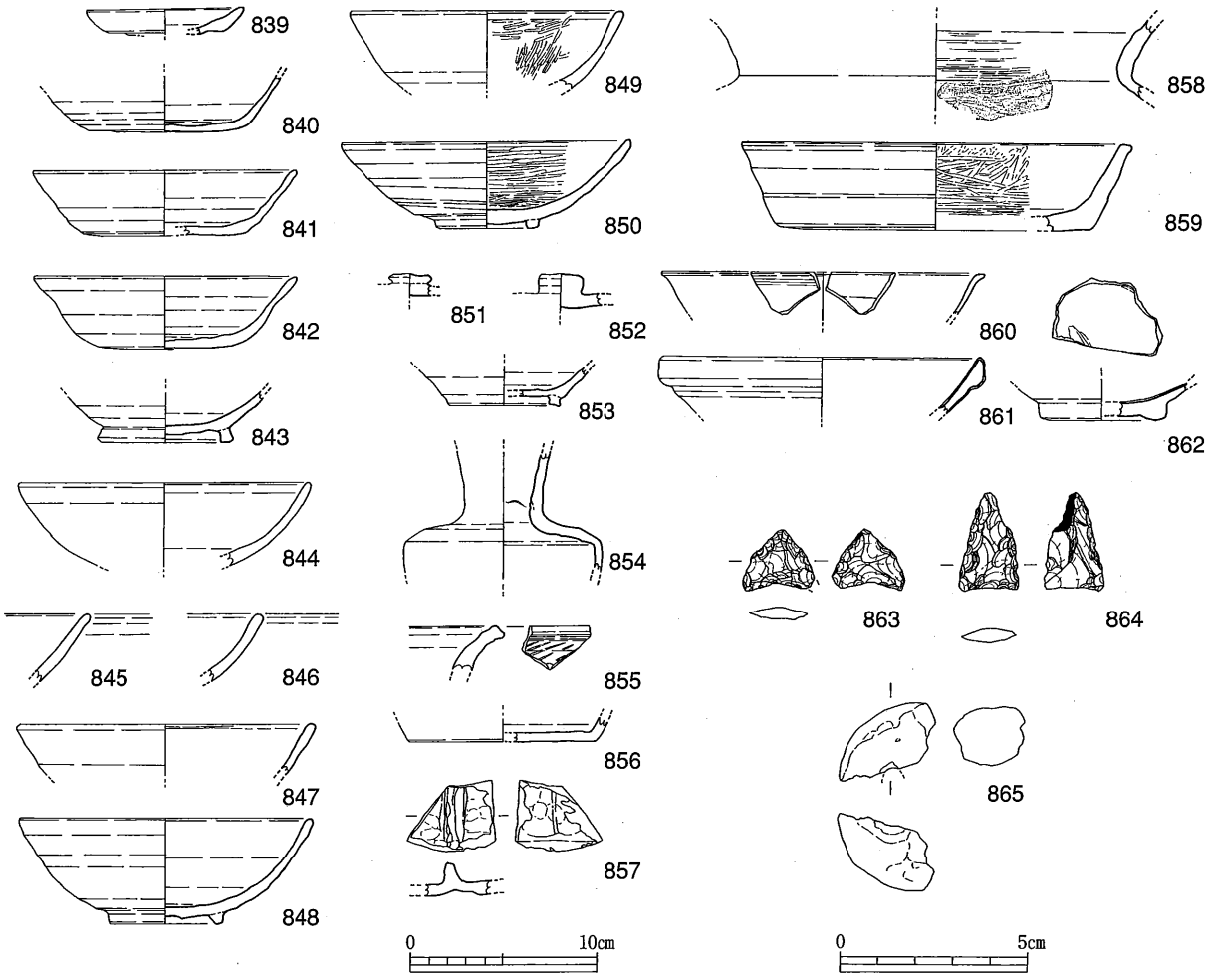
第300図 SXf09平・断面図(1/20)

第７節　包含層出土の遺物ほか

ここではＩ地区とＫ地区の遺構以外の包含層から出土した遺物を紹介する。

・Ｉ地区包含層出土遺物（第302図）

839は土師器の小皿である。840～842は土師器の杯である。843～845は土師器の椀である。846～848は黒色土器の椀である。内外面ともに黒色を呈するＢ類に属する。849・850は瓦質土器の椀である。851・852は須恵器の杯蓋のつまみ部分である。853は須恵器の高台付の杯である。854は須恵器の壺もしくは　である。体部から頸部にかけての部分が大きく屈曲し、体部がほぼ平らになっている。855・856は須恵器の壺の底部である。857は須恵器の風字硯と考えられるものである。陸部の中央の仕切り部分であると考えられる。858は須恵器の甕の頸部である。859は須恵器の鉢である。浅いもので底部は平らで脚部は付かない。860・861は白磁の碗である。862は青磁の碗である。863・864はサヌカイト製の打製石族である。863は凹基式、864は平基式のものである。865は金属滓と考えられ、その形状からみて碗状滓であると考えられる。



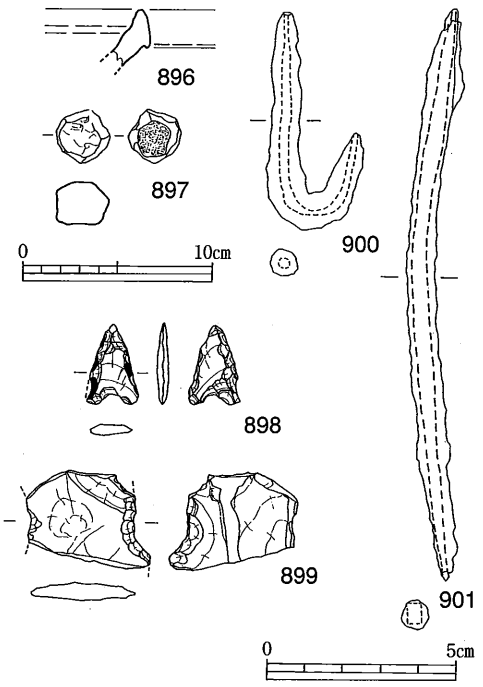
第302図 Ｉ地区包含層出土遺物実測図

・K地区包含層出土遺物（第304図）

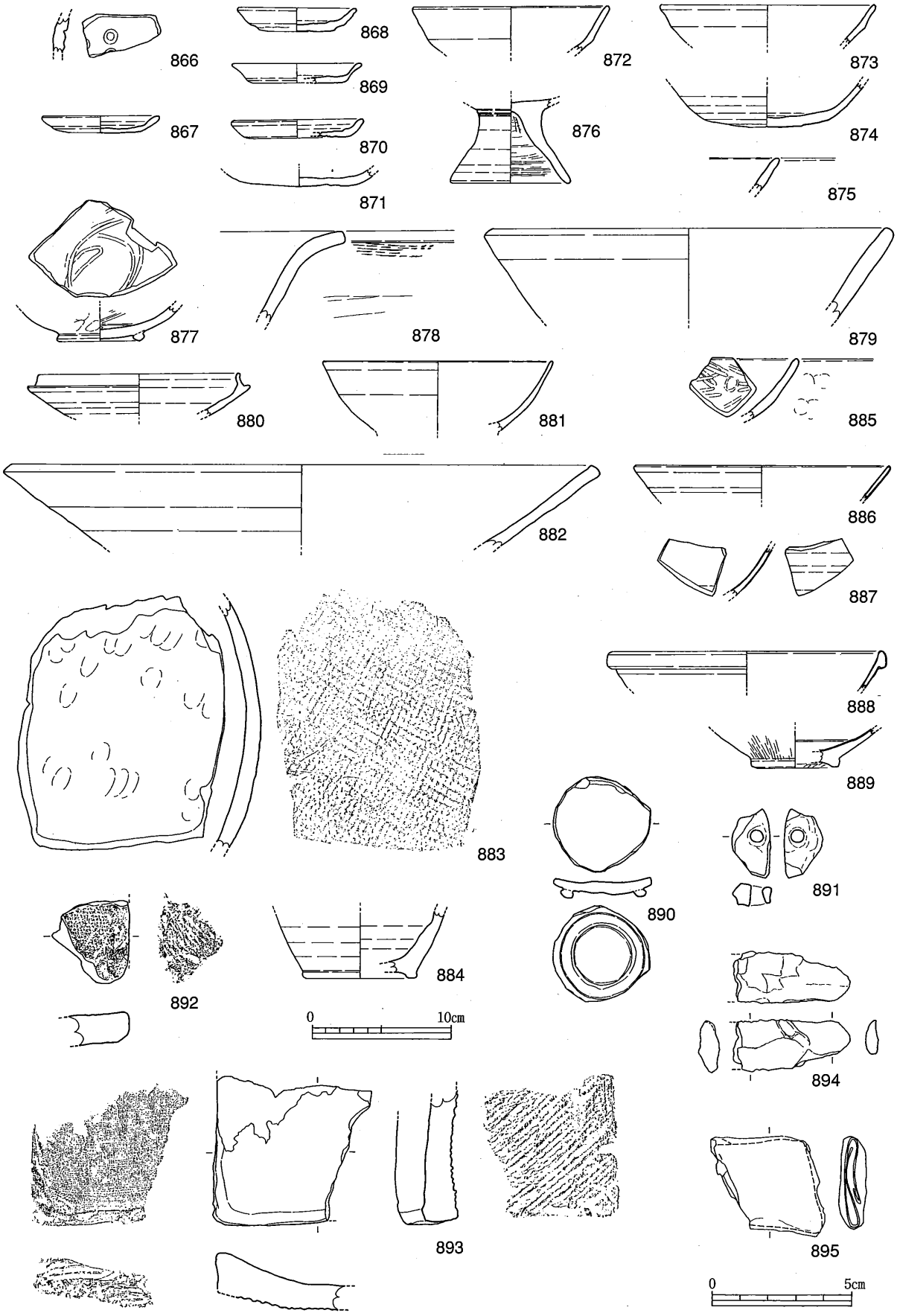
866は弥生土器の壺である。867～870は土師器の小皿である。871～874は土師器の杯、875は土師質土器の杯の可能性がある。876は土師器の高台付の杯である。877は土師器の椀、878は土師質土器の土鍋、879は土師質土器の鉢である。880は須恵器の杯身である。881は須恵器の椀、882は須恵器の鉢である。883は須恵器の甕、884は須恵器の壺である。885は黒色土器の碗である。内面のみ黒色を呈するA類に属する。886～888は白磁の碗、889は青磁の碗である。白磁は体部が薄く、そのまま端部を丸くおさめるタイプのものである。888は口縁端部が玉縁状を呈するものである。890は土師器の椀の転用品である。892・893は平瓦である。894・895は鉄器である。894は刀子の茎の部分であると考えられる。895は板状の鉄器が折り曲げられているもので刀装具の一種ではないかと考えられる。

・予備調査出土遺物（第303図）

第303図は、K地区の西側の予備調査において出土した遺物である。遺構はK地区から延びる溝状遺構や自然河川のほかには検出されなかったため、調査対象からは除外した。896は須恵器の鉢である。口縁端部が玉縁状を呈する。897は平瓦の転用品である。丸く打ち欠いている。898はサヌカイト製の凹基式打製石族である。899はサヌカイト製の打製石斧と考えられる石器である。900・901は鉄製品である。900はその形状からみて釣り針であると考えられる。901は両端が鋭くとがるもので針状の鉄製品である。



第303図 予備調査出土遺物実測図



第304図　K地区包含層出土遺物実測図

第3章　まとめ

f地区の歴史的変遷

・Ⅰ期　弥生時代～古墳時代　（第305図）

この時期には、主な遺構は自然河川である。第2章でも述べたが、一部人為的な開削が認められるものの基本的には綾川の氾濫源から派生する自然河川のほかには数基の土坑程度の遺構が散見されるのみである。この時期の集落は西末則遺跡の東側の丘陵部およびその裾に広がっており、f地区周辺は主に自然河川に灌漑された耕作地であった可能性が高い。後世の削平によって当時の水田面はすでに削平されていると思われる。この時期にはまだ、遺跡南側に現在、認められる段丘崖は成立しておらず、綾川の氾濫源が広く広がっていたものと考えられる。

その後、この地域に集落が形成されるのは古代末期であり、その時期まで遺構らしい遺構は形成されない。

・Ⅱ期　古代末期～中世前半＜Ⅰ＞　（第306図）

奈良時代から平安時代前半まではA～E地区と呼称している、現在の末則用水および北村用水の周辺で多くの遺構が検出されている。この時期には、掘立柱建物跡のほか、土坑墓なども検出されており、蔵骨器や水滴などが出土している。また、E地区の包含層からは平安時代前期のものと考えられる須恵器製の陶印（「本」の刻印が認められる）も出土している。

その後、平安時代の終わりごろになると、集落の中心は、f地区へと移動するようである。この時期はちょうど、綾川の氾濫がピークとなり、その結果、大規模な段丘崖が形成される時期にあたる。段丘崖が形成されると、水田への水の供給が困難となり、綾川からの水を引くための用水路が各地に整備されることとなる。末則用水はこのころに起源を持つ古い用水である。また、後に末則用水と平行するように、より大規模な北村用水も設置され、周辺の水田への水の供給システムができあがったと考えられている。このような地形の変化に応じた土地開発は10世紀から12世紀前半ごろに日本列島各地で認められている。

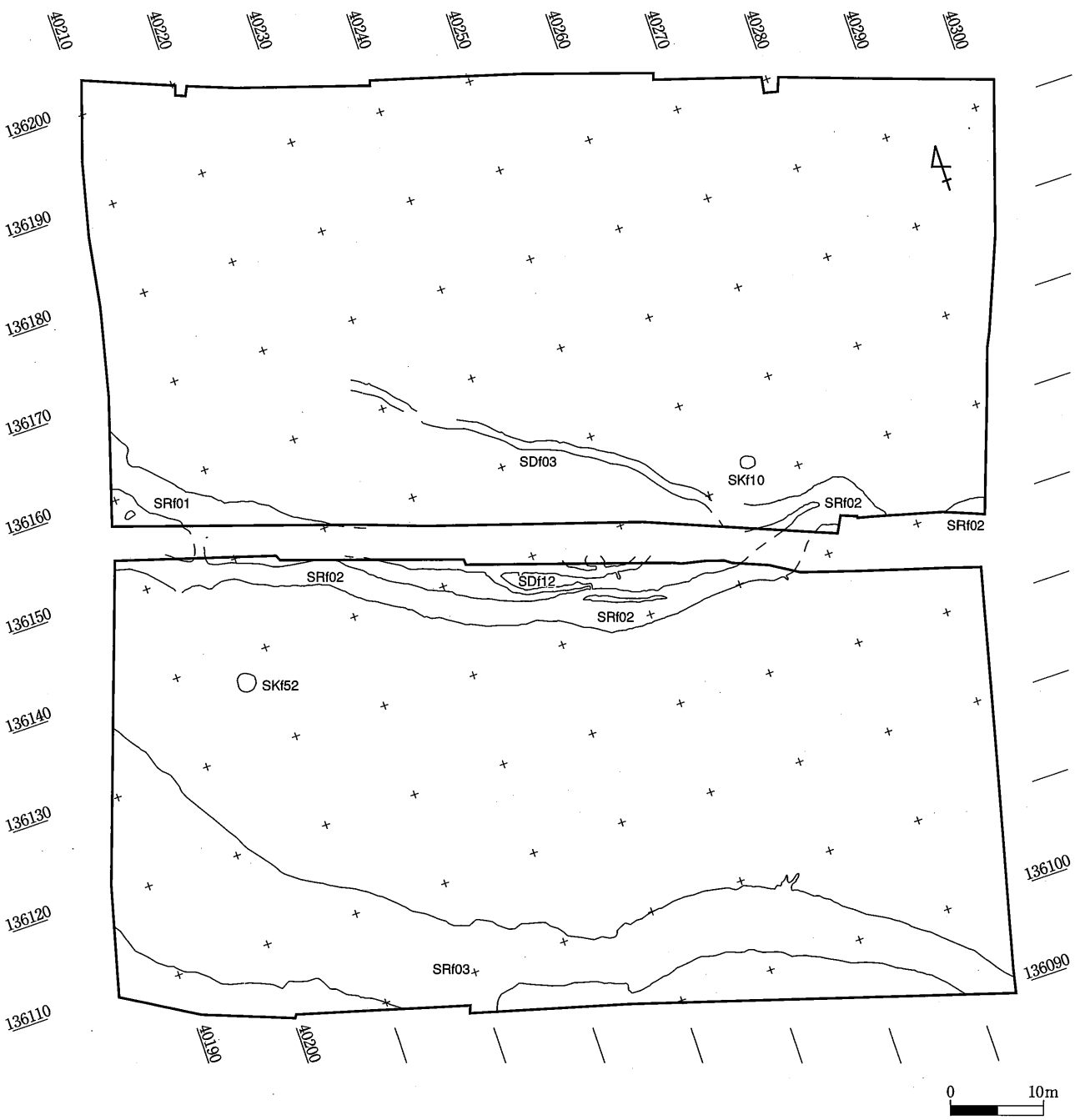
この時期の遺構は掘立柱建物と井戸、土坑などで構成される。建物の方位は条里地割よりもわずかに西を向き、建物はK地区の東側に多く見られ、その他にはK地区中央北よりの部分にいくつか散見できる程度である。

・Ⅲ期　古代末期～中世前半＜Ⅱ＞　（第307図）

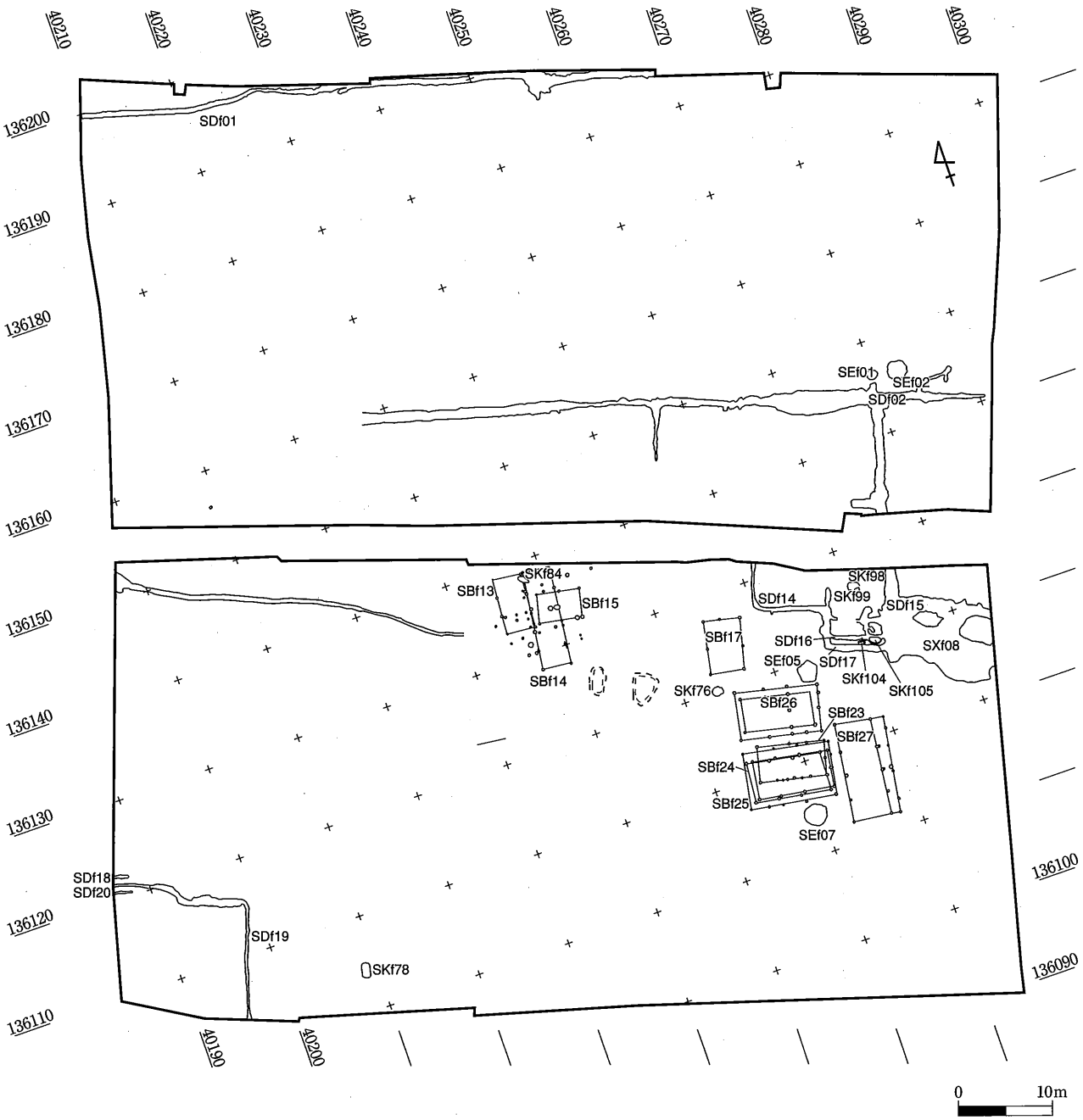
この時期はⅡ期とほとんど時間差はないが、建物の方位が条里地割と一致するものが多いため、Ⅱ期とあえて分けることとした。時代的な背景は前述のとおりであり、この時期の建物の方位はほとんどが条里地割と一致する。また、土地を区画するための溝状遺構を開削し、Ⅱ期よりも密度の濃い土地利用を行っていたことがわかる。建物は主にK地区に集中するが、拠点的な建物はむしろ西側に存在する。SBf09・10がそれである。規模もさることながら、柱穴のほとんどに完形に近い遺物が残っていたことは注目される。おそらくは建物を廃棄する際の祭祀に使用したものと考えられ、その他の建物跡との違いが明瞭である。また、東側の掘立柱建物跡が集中する集落では小規模な鍛冶作業を行っていた建物のほかに共同の祠を持ち、日常雑器の底部に「九字」の刻んだものの出土などから密教系の呪（まじな）いも日常的に行っていたことがわかる。

・Ⅳ期　近世（江戸時代）　（第308図）

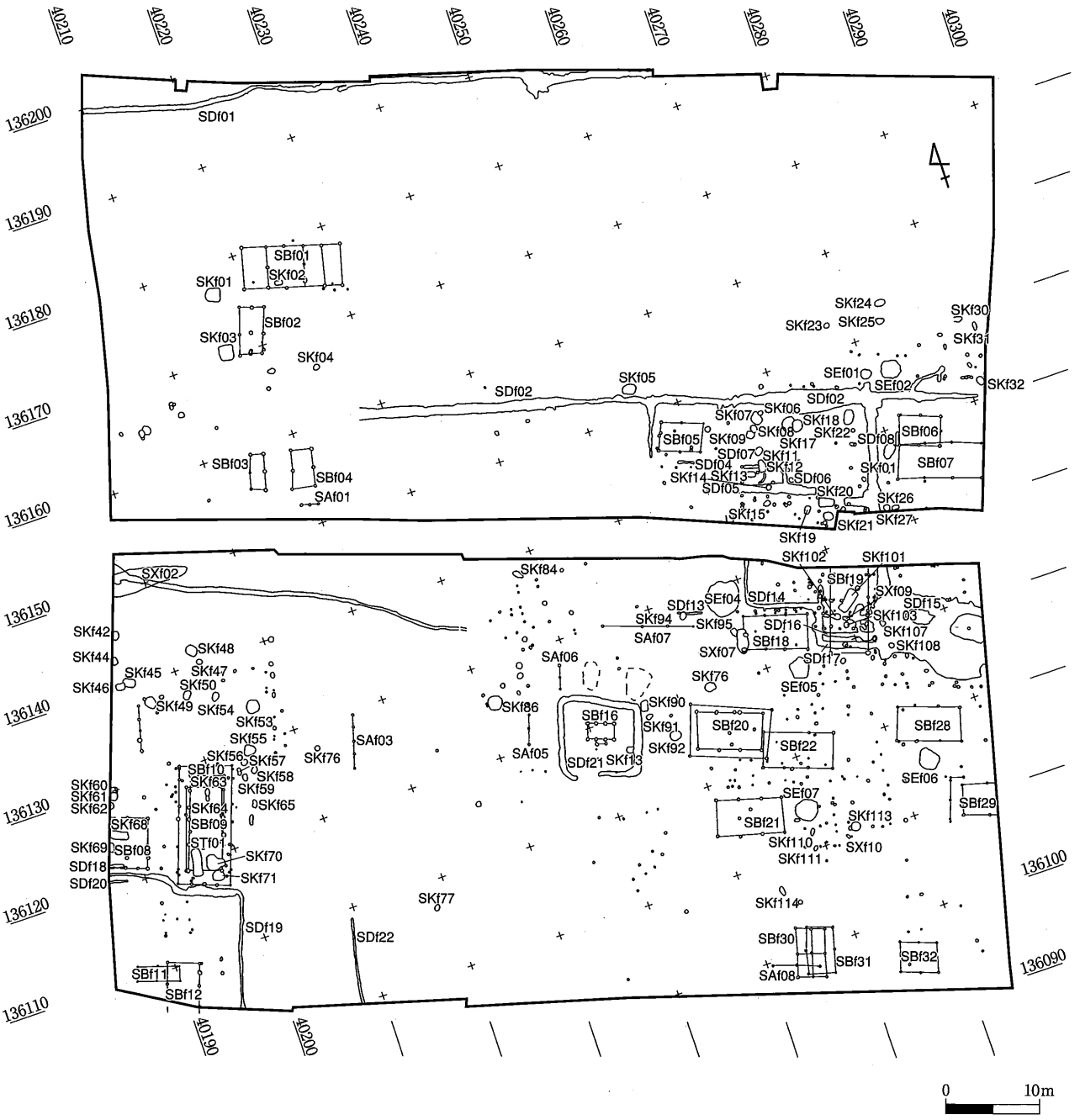
この時期の主な遺構は掘立柱建物跡と井戸跡である。掘立柱建物跡はそれまでの時期と大きく異なり、方位が真北を向くのが最大の特徴である。周囲には条里地割による街路や用水路が存在しているにもかかわらず、建物の方位のみ真北を向いている。その理由は定かではないが、この時代、建物を建てる際には藩に届出が必要であり、その際、方位についての何らかの規定があった可能性も否定できないが、これを証明する史料は確認できなかった。



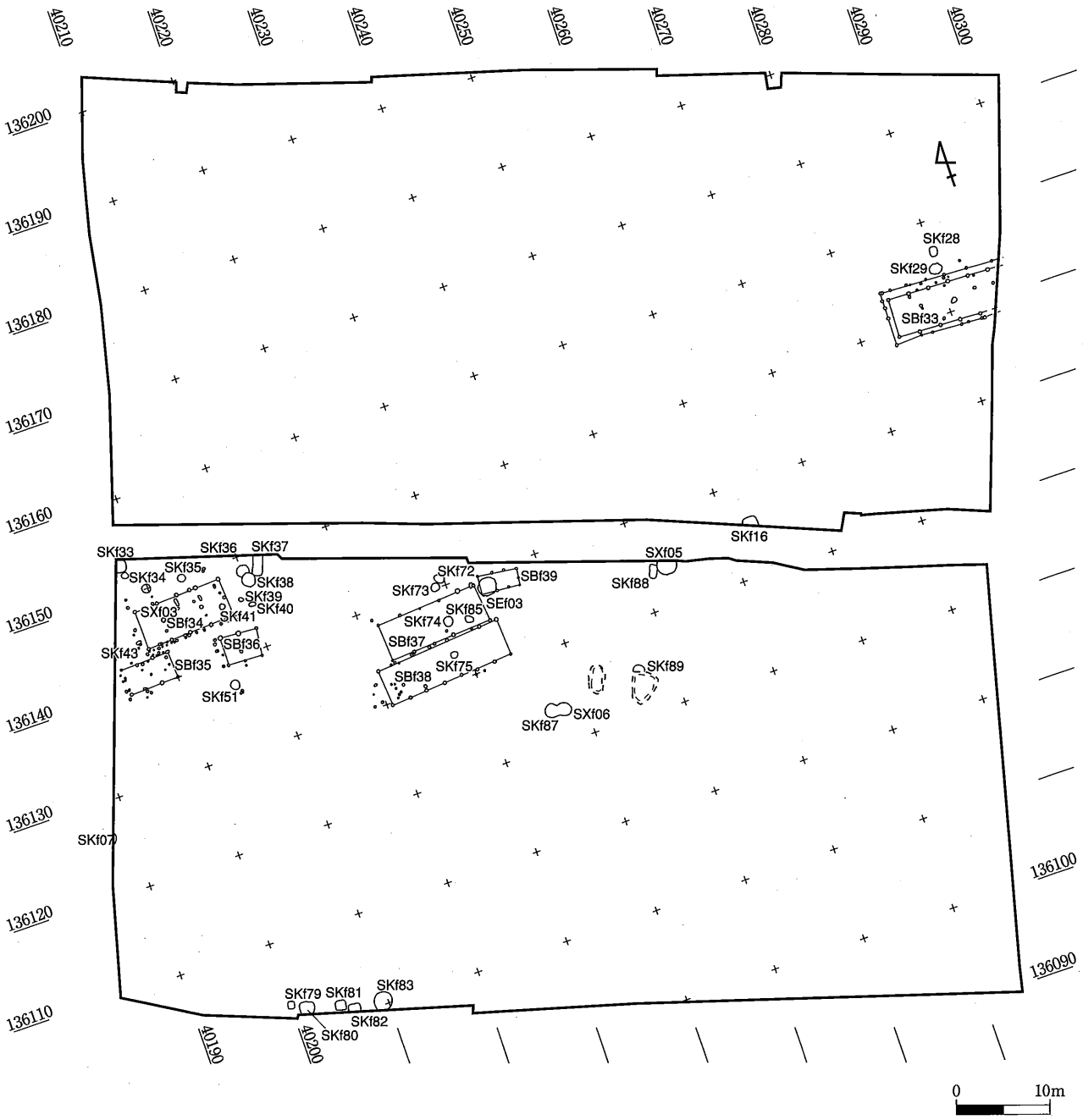
第305図　第Ⅰ期遺構配置図



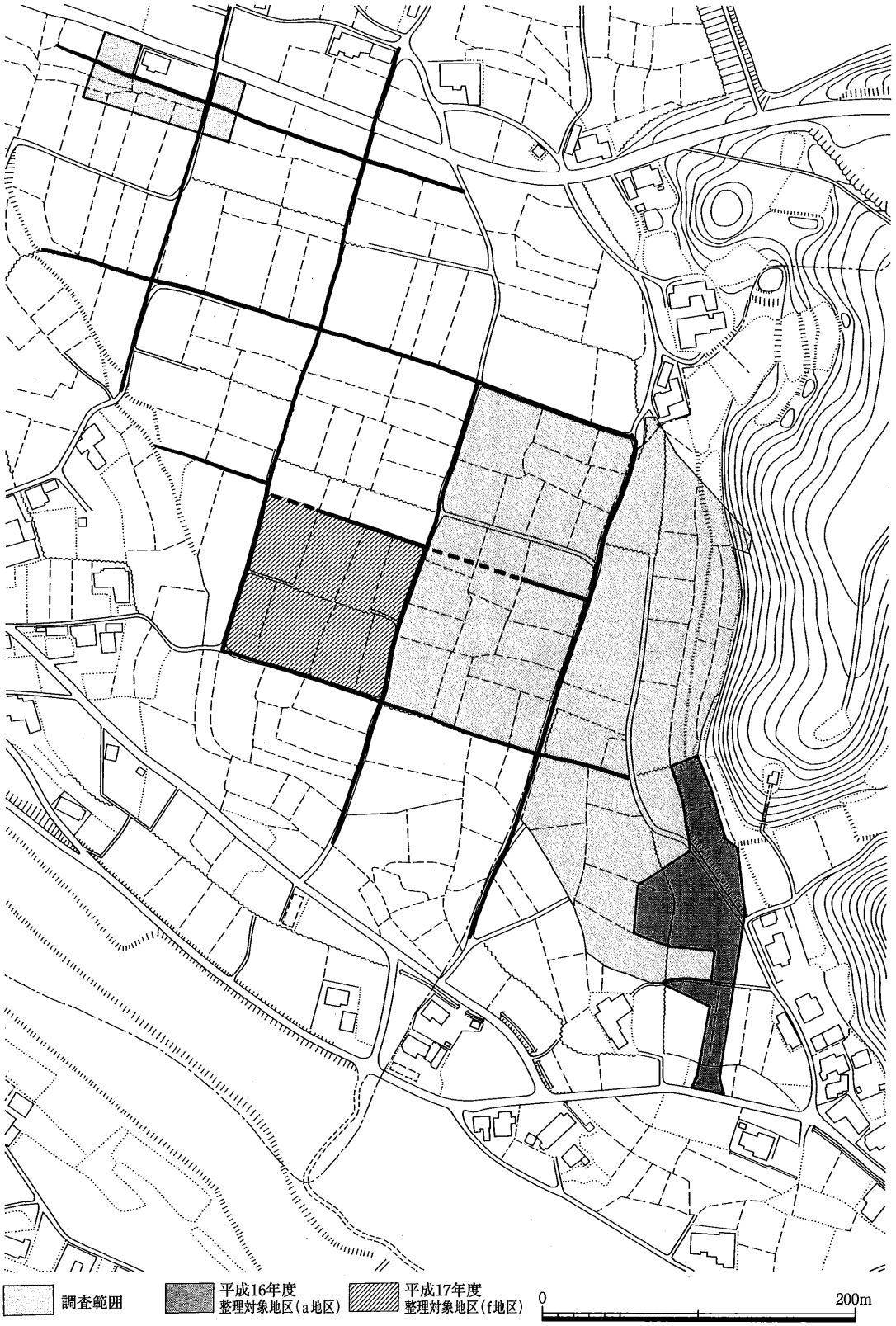
第306図　第Ⅱ期遺構配置図



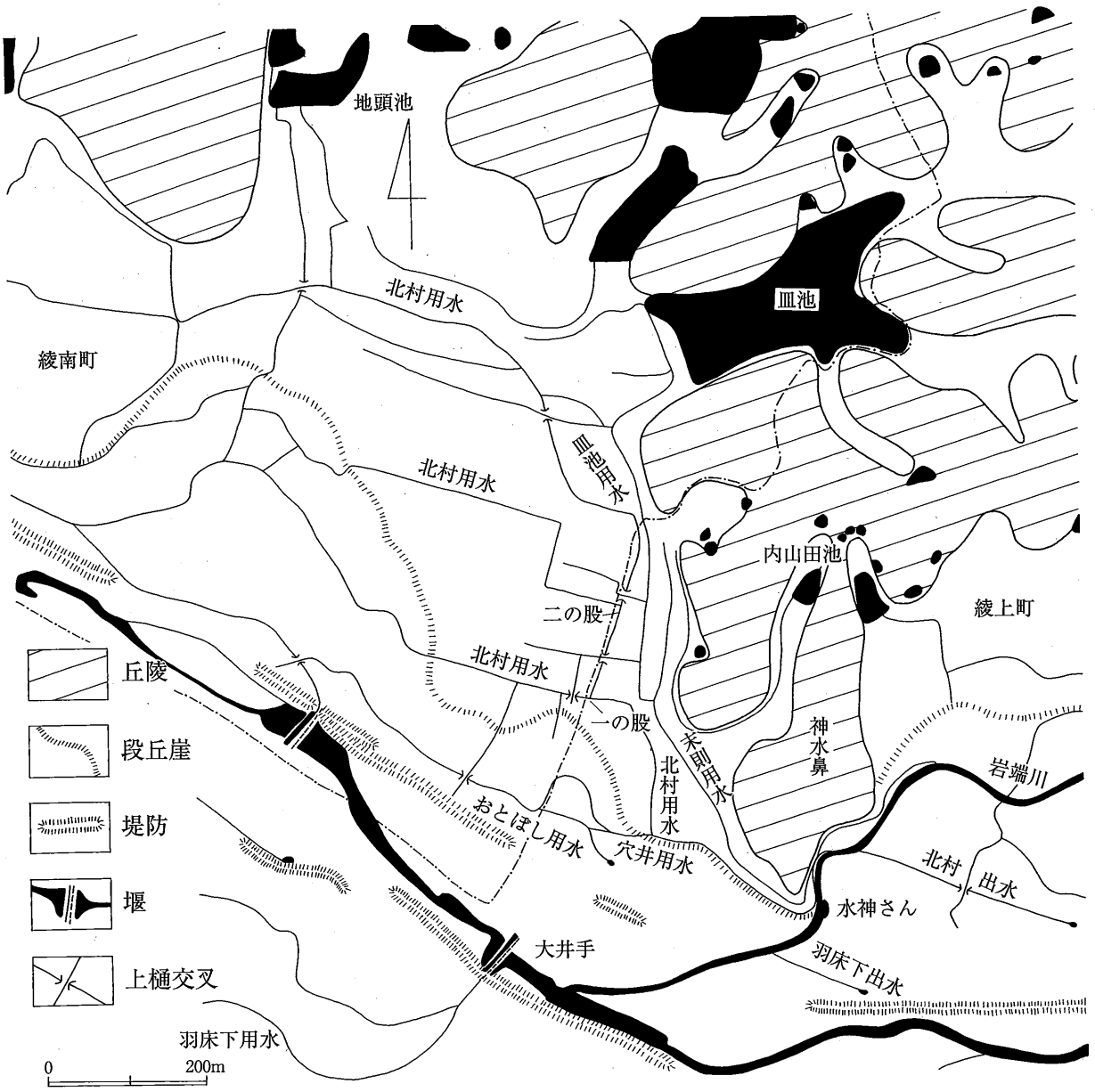
第307図　第Ⅲ期遺構配置図



第308図　第Ⅳ期遺構配置図

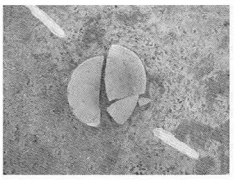


第309図　西末則遺跡周辺条里型地割復元図

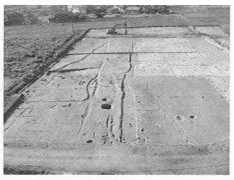


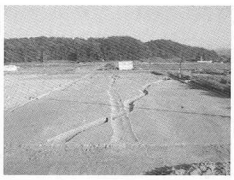
第310図　周辺の水利図

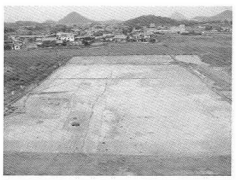
註「Ⅴ．周辺の水利調査」『香川県農業試験場移転に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　西末則遺跡』
2002　香川県教育委員会


Ⅰ地区SDf02遺物出土状況

Ⅰ地区SDf02土層断面


Ⅰ地区全景①


Ⅰ地区全景②


Ⅰ地区全景③

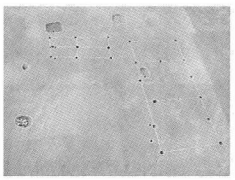
Ⅰ地区南半部SRf02
土層断面（東）

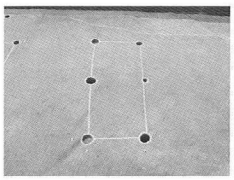
Ⅰ地区南半部下層遺構（東）

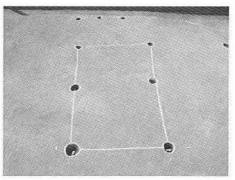
Ⅰ地区南半部全景（東）

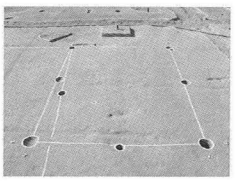
Ⅰ地区包含層出土石鏃①

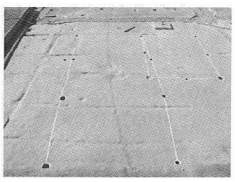
Ⅰ地区包含層出土石鏃②

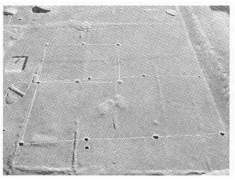

SBf01・02（東）

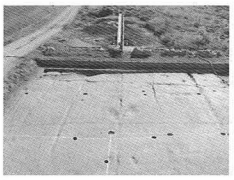

SBf03（北）

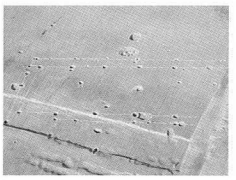

SBf04（北）

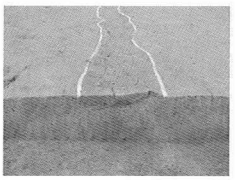

SBf06（東）

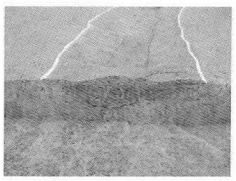

SBf06・07（東）


SBf06・07（南）

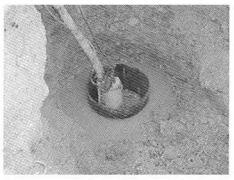

SBf07（北）

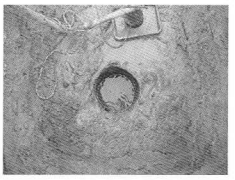

SBf33（南東）

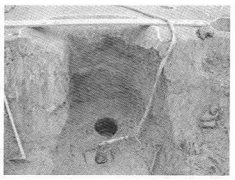

SDf02土層断面（西）

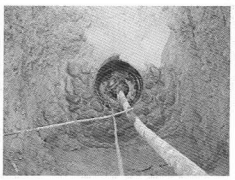

SDf03土層断面（西）

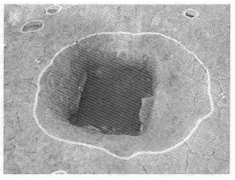
SEf02完掘

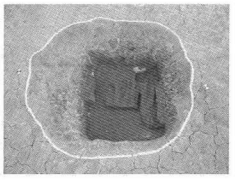

SEf02曲物（下段）

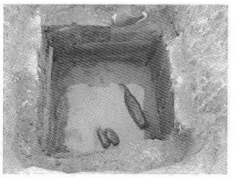

SEf02曲物検出①

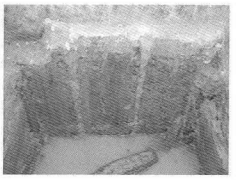

SEf02曲物検出②

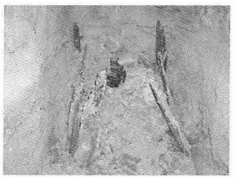

SEf02曲物検出③

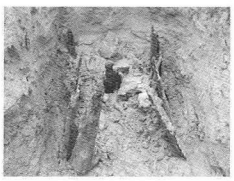

SEf02掘削状況①

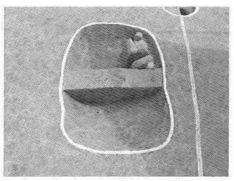

SEf02掘削状況②

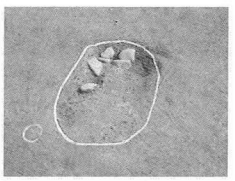

SEf02側板

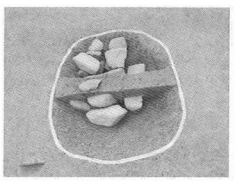

SEf02側板拡大

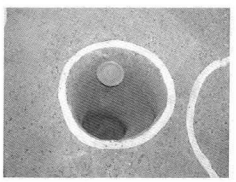

SEf02柱材


SEf02柱材拡大

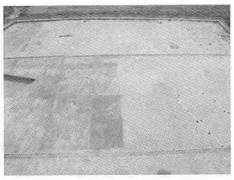

SKf02土層断面（西）

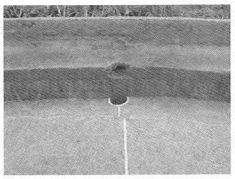

SKf04検出状況

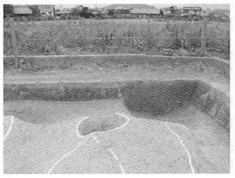

SKf04礫検出状況

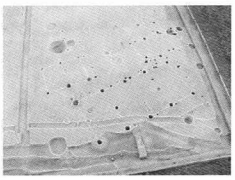

SPf73遺物出土状況

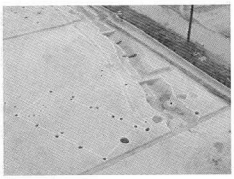
K1区SB群検出状況（東）

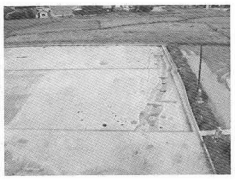

K1区全景（東）

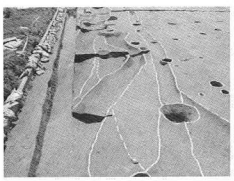

K1区南壁土層断面（北）


K1区北西隅土層断面（東）


K1区北西部


K1区北東部

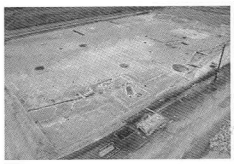

K1区北東部全景（東）


K1区北部全景（西）

K1区北部全景（東）

K2・3区全景（南東）①

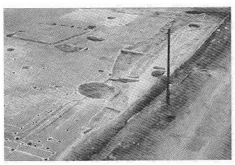
K2・3区全景（南東）②


K2・3区全景（北東）①

K2・3区全景（北東）②

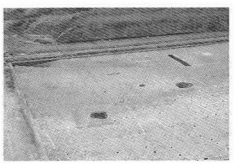
K2・3区全景（北東）③

K2・3区全景（北東）④


K2・3区全景（北東）⑤

K2・3区全景（北東）⑥

K2・3区全景（北東）⑦


K2・3区南東部全景（北東）

K2・3区北東部全景（北東）①

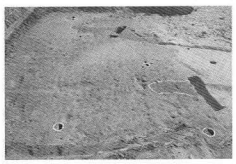
K2・3区北東部全景（北東）②

K2・3区北東部全景（北東）③

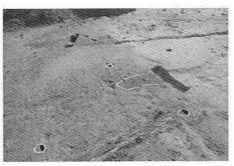
K2・3区北東部全景（北東）④

K2・3区北東部全景（北東）⑤

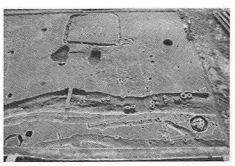
K2区ピット群（北西）

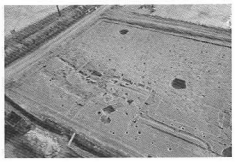

K2区仮設道部全景①

K2区仮設道部全景②

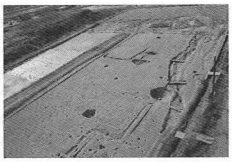

K2区仮設道部全景③

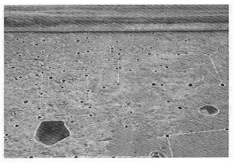
K2区西半部全景（南東）

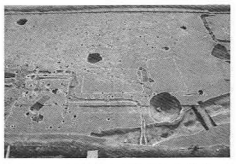

K2区西半部全景（北）


K2区西半部全景（北西）

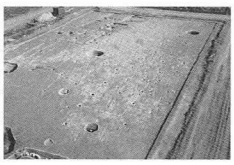
K2区全景（東）


K2区全景（北東）

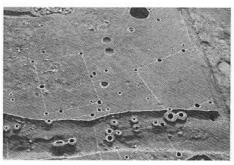

K2区中央部SBf20・SEf05等全景（北）

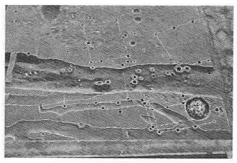

K2区中央部全景（北）

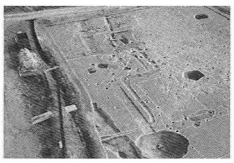
K2 区東半部SDf15全景（北）

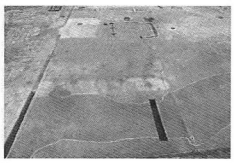

K2 区東半部全景（南西）

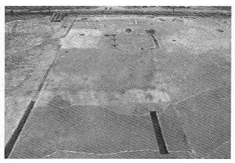
K2 区東半部全景（北西）

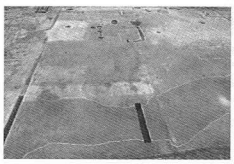

K2 区北西部堀立柱建物跡等（北）

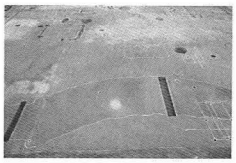

K2 区北西部全景（北）

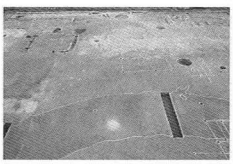

K2 地区東半部全景（北西）


K3 区全景（南）①

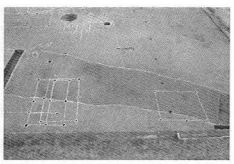

K3 区全景（南）②


K3 区全景（南）③


K3 区全景（南）④

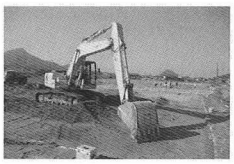

K3 区全景（南）⑤

K3 区全景（南）⑥


K3 区全景（南）⑦

K3 区全景（南）⑧

K 地区機械掘削


K 地区北東部機械掘削（東）

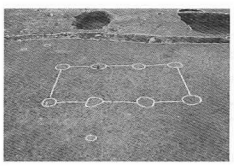
K 地区北東部全景（南）①

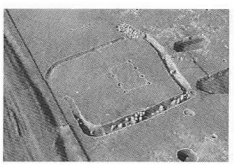
K 地区北東部全景（南）②

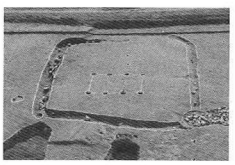
K 地区北東部全景（南）③

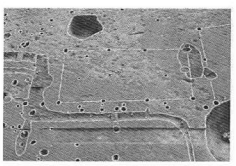
K 地区北東部全景（南）④

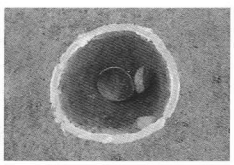
SBf16検出状況①（南）

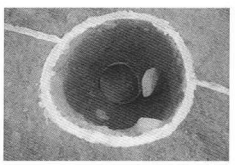

SBf16検出状況②（南）

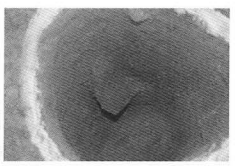

SBf16全景（南東）

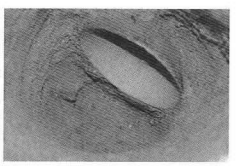

SBf16全景（北）

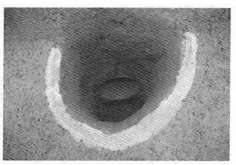

SBf18全景（北）

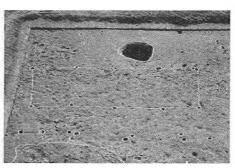

SBf20P07遺物出土状況

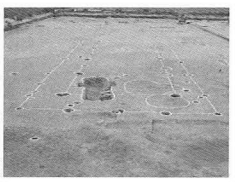

SBf20P07遺物出土状況（北）

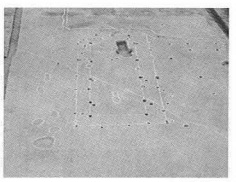

SBf22P01遺物出土状況

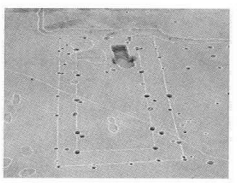

SBf25P01遺物出土状況拡大

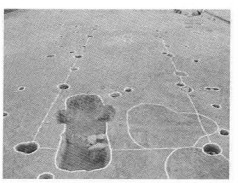

SBf25P20遺物出土状況（北）

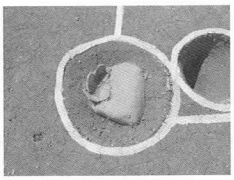

SBf28全景（北）


SBf09・10全景（南）

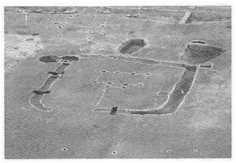

SBf09・10全景（北）①

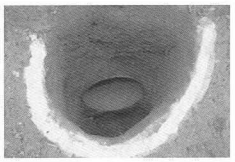

SBf09・10全景（北）②

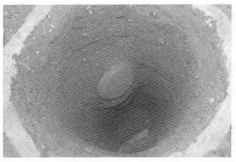

SBf09・10全景拡大（南）

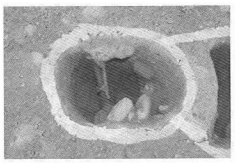

SBf10－P28遺物出土状況

SBf16遠景（南東）

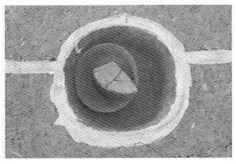

SBf16全景（南）

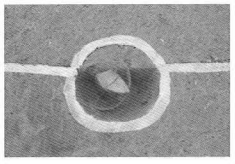

SBf25－P20遺物出土状況

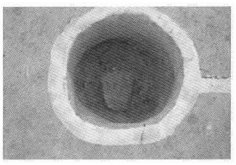

SBf25－P21遺物出土状況

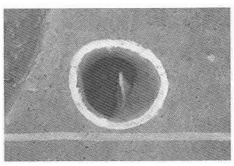

SBf27－P13遺物出土状況①

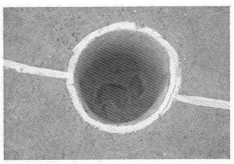
SBf27－P13遺物出土状況②

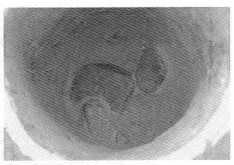

SBf31－P03遺物出土状況

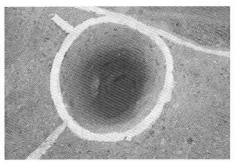

SBf31－P03土層

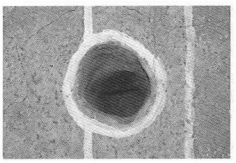

SBf31－P04遺物出土状況

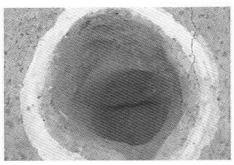

SBf37－P08遺物出土状況

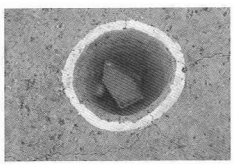

SBf38－P10遺物出土状況

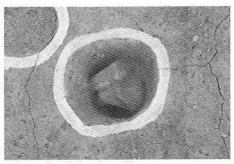

SBf38－P10遺物出土状況
（拡大）

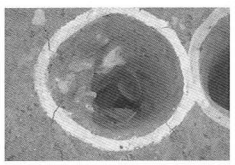

SBf17－P03遺物出土状況

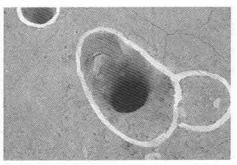

SBf17－P04遺物出土状況

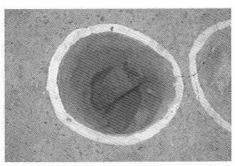

SBf17－P04遺物出土状況
（拡大）

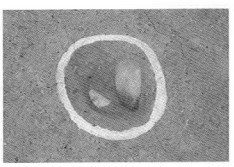

SBf19－P01遺物出土状況

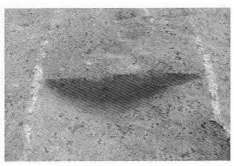

SBf19－P02遺物出土状況


SBf19－P04遺物出土状況

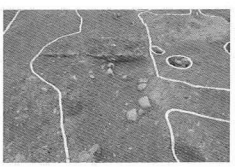

SBf19－P11遺物出土状況

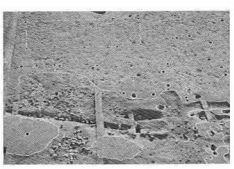

SBf19－P12遺物出土状況

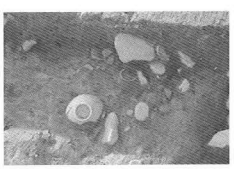

SBf19－P13遺物出土状況

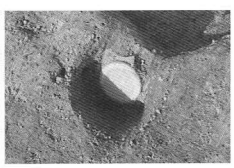

SDf11土層断面（西）

SDf14遺物出土状況


SDf14土層断面（南）

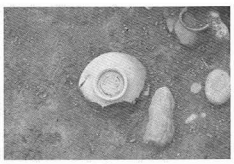

SDf15・SBf28全景（北）


SDf15遺物出土状況①

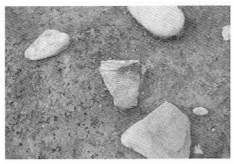

SDf15遺物出土状況②

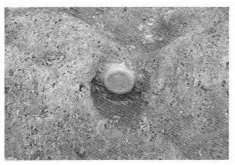
SDf15遺物出土状況③

SDf15遺物出土状況④


SDf15遺物出土状況⑤

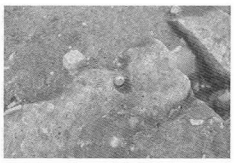
SDf15遺物出土状況⑥


SDf15遺物出土状況⑦

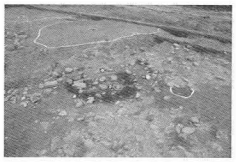

SDf15遺物出土状況⑧

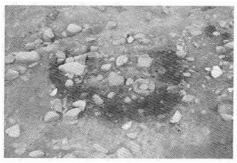
SDf15遺物出土状況⑨

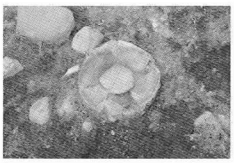
SDf15遺物出土状況⑩


SDf15下層遺物出土状況

SDf15全景（東南）

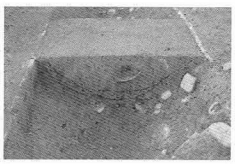

SDf15炭化層出土状況（南西）


SDf15炭化層出土状況拡大（南）

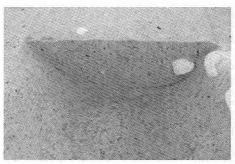

SDf15炭化層内遺物出土状況（南）

SDf15礫・遺物出土状況（西）

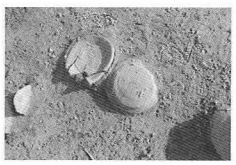
SDf15礫・遺物出土状況（東）


SDf21土層断面（東）

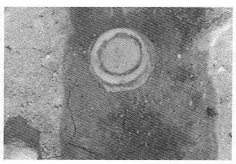
SDf21土層断面（南）

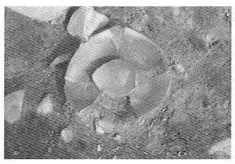

SDf21土層断面（北）

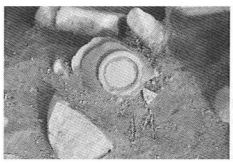
SDf14遺物出土状況①

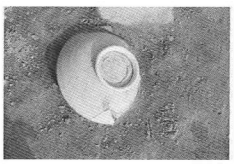

SDf14遺物出土状況②

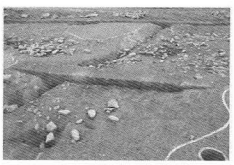
SDf14土層断面（北）


SDf15遺物出土状況①


SDf15遺物出土状況②


SDf15遺物出土状況③

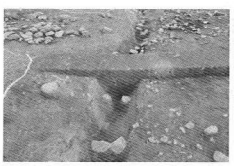

SDf15遺物出土状況④

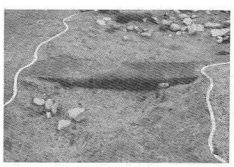

SDf15土層断面（西）

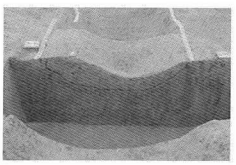
SDf15土層断面（東）①

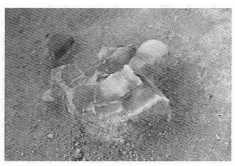
SDf15土層断面（東）②

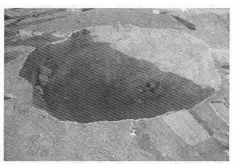
SDf15土層断面（北）

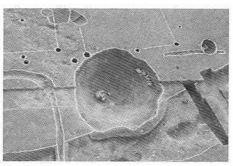

SDf15土層断面拡大（西）

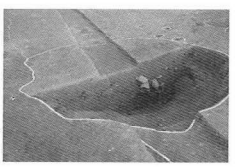

SDf15土層断面拡大（東）


SDf21土層断面（北）

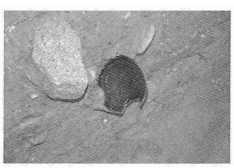

SEf04遺物出土状況

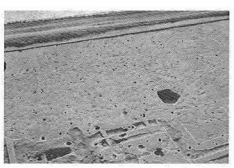

SEf04完掘状況（北）

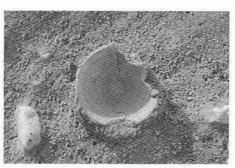

SEf04全景（北）

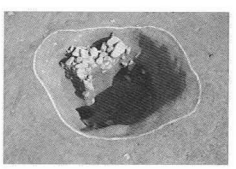

SEf04土層断面（西）

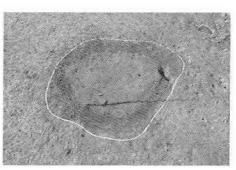
SEf04土層断面遺物出土状況（西）

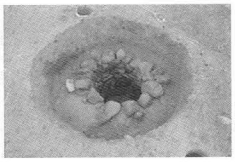

SEf04土層断面遺物出土状況拡大（西）

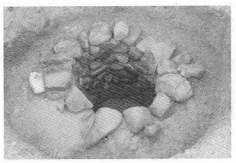

SEf05・ピット群全景（北東）

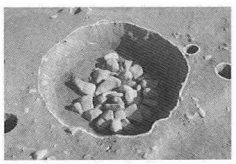

SEf05遺物出土状況（北）

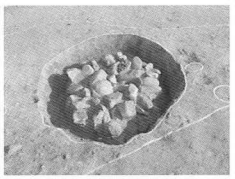

SEf06掘削状況（南）


SEf06検出状況（東）


SEf03完掘状況


SEf03完掘状況拡大


SEf03検出状況

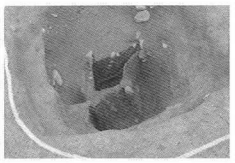

SEf03検出状況②

SEf03検出状況拡大

SEf03断割状況①

SEf03断割状況②

SEf03断割状況③

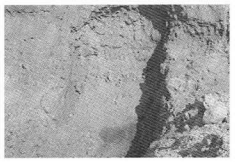

SEf06井戸枠検出状況①

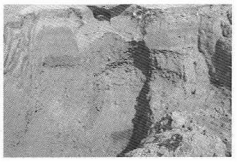
SEf06井戸枠検出状況②

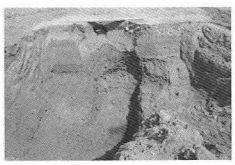
SEf06井戸枠検出状況③

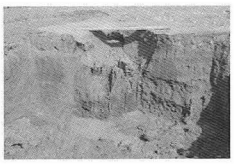
SEf06井戸枠検出状況④

SEf06完掘状況①

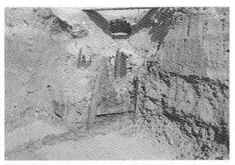

SEf06完掘状況②


SEf06完掘状況③


SEf06完掘状況④


SEf06断割①

SEf06断割②

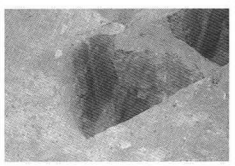

SEf06断割③

SEf06断割④

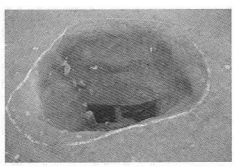
SEf06断割⑤

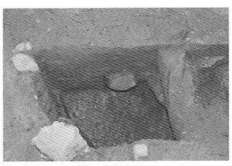
SEf06断割⑥

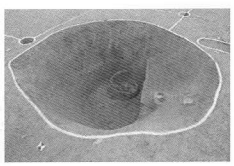
SEf06断割⑦


SEf06柱材出土状況①

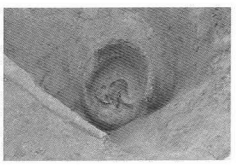
SEf06柱材出土状況②

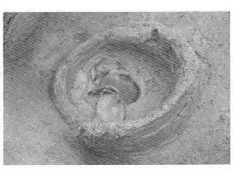

SEf06土層断面（西）

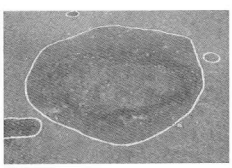

SEf06土層断面拡大（西）

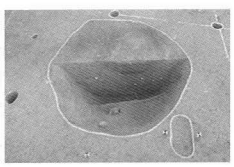

SEf07遺物出土状況①

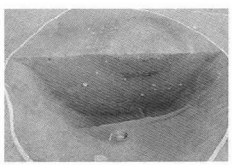
SEf07遺物出土状況②

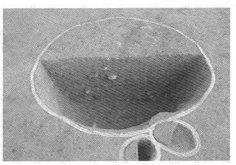

SEf07遺物出土状況③

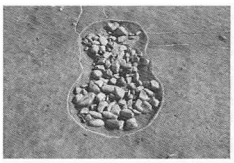

SEf07遺物出土状況④


SEf07検出状況（南）


SEf07土層断面（西）


SEf07土層断面拡大（西）

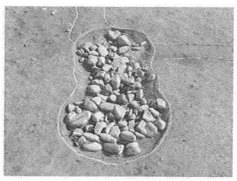

SKf86土層断面（西）

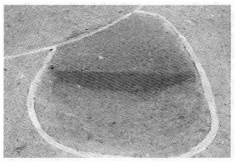

SKf87・SXf06検出状況（西）

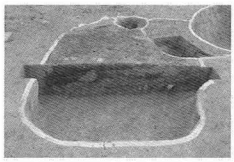
SKf105遺物出土状況①（南西）

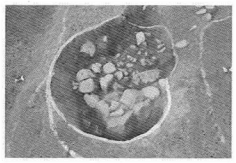
SKf105遺物出土状況②（南西）

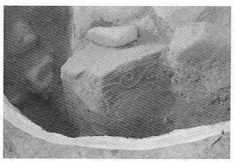
SKf105遺物出土状況③（拡大）


SKf87・SXf04検出状況

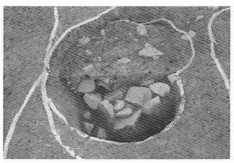

SKf95土層断面（北）

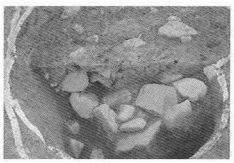

SKf98土層断面（西）

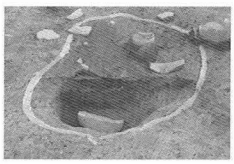

SKf105遺物出土状況①

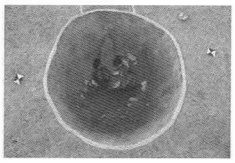

SKf105遺物出土状況②

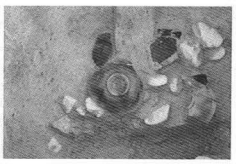
SKf105遺物出土状況③

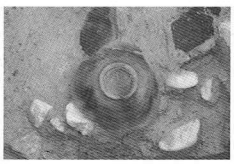

SKf105土層断面（東）

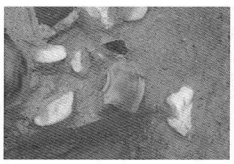

SKf105土層断面拡大（東）

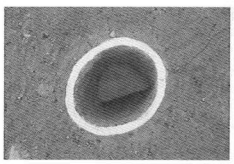

SKf107土層断面（西）

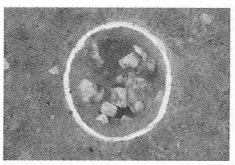

SKf113遺物出土状況（東）

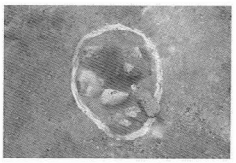

SKf113遺物出土状況拡大①

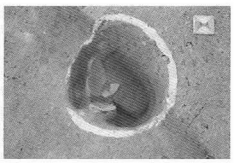

SKf113遺物出土状況拡大②

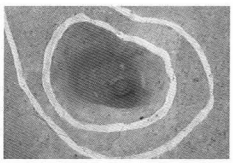

SKf113遺物出土状況拡大③

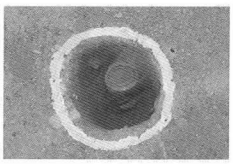

SPf303遺物出土状況

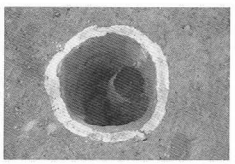

SPf316遺物出土状況

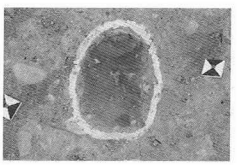

SPf319遺物出土状況

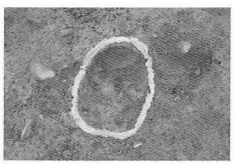

SPf339遺物出土状況

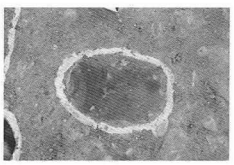

SPf393遺物出土状況

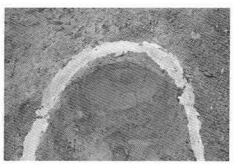

SPf420遺物出土状況

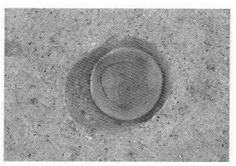

SPf437遺物出土状況

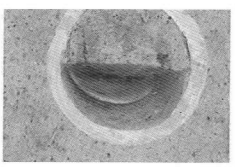

SPf445遺物出土状況（東）


SPf445遺物出土状況（東より）

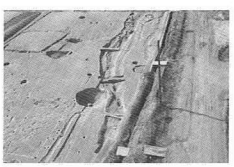

SPf445遺物出土状況（南）

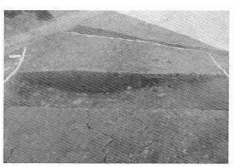

SPf445遺物出土状況拡大（東より）

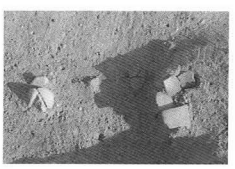

SPf496遺物出土状況

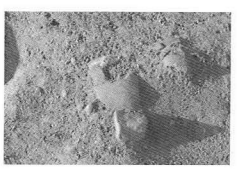

SPf496土層

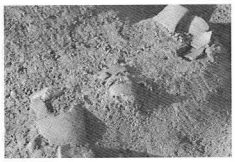
SPf284遺物出土状況


SRf01・02全景（東）


SRf02土層断面（西より）

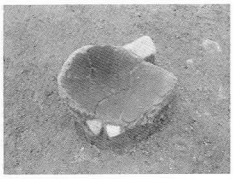

SRf02遺物出土状況①


SRf02遺物出土状況②

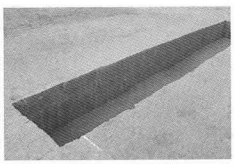

SRf02遺物出土状況③

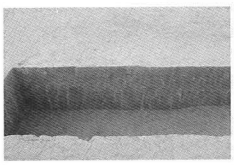
SRf02遺物出土状況④

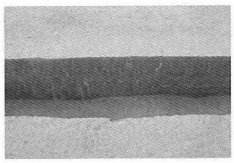
SRf02遺物出土状況⑤

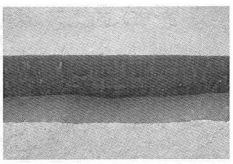

SRf02遺物出土状況⑥

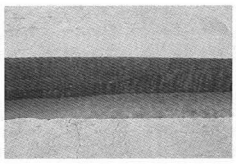
SRf02土層断面（西）

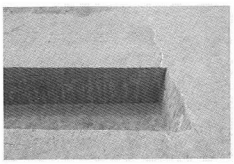

SRf03中央トレンチ土層断面（東）①

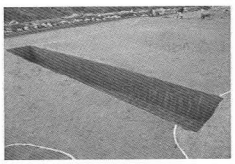

SRf03中央トレンチ土層断面（東）②

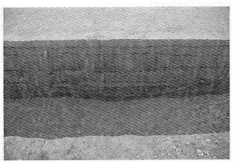

SRf03中央トレンチ土層断面（東）③

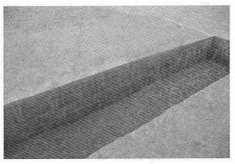

SRf03中央トレンチ土層断面（東）④

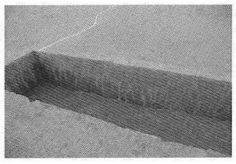

SRf03中央トレンチ土層断面（東）⑤

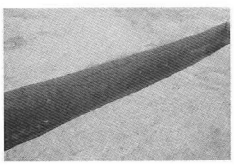

SRf03中央トレンチ土層断面（東）⑥

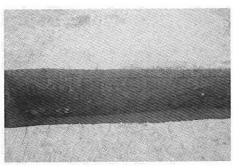

SRf03土層断面①

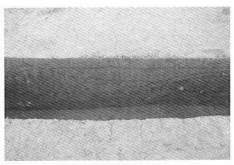

SRf03土層断面②

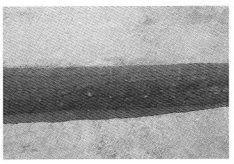

SRf03土層断面③

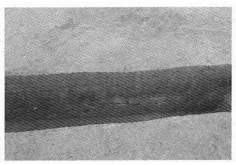

SRf03土層断面④

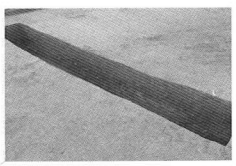

SRf03東トレンチ土層断面（東）①

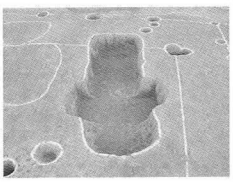

SRf03東トレンチ土層断面（東）②

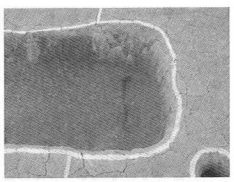

SRf03東トレンチ土層断面（東）③

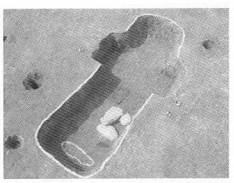

SRf03東トレンチ土層断面（東）④

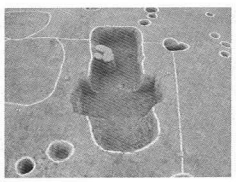

SRf03東トレンチ土層断面（東）⑤

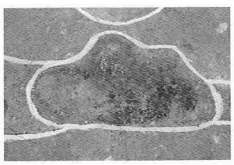

SRf03東トレンチ土層断面（東）⑥

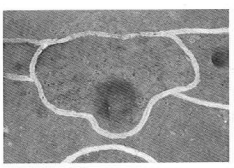

STf01完掘状況

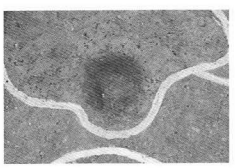

STf01棺痕跡（西）


STf01全景


STf01全景（北）

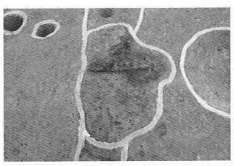

SXf09鍛冶遺構検出状況（北より）


SXf09完掘状況①


SXf09完掘状況②

SXf09完掘状況③

SXf09土層断面①


SXf09土層断面②

報告書抄録

ふりながな	にしすえのりいせき　に
書名	西末則遺跡　Ⅱ
副書名	香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	第2冊
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	北山健一郎
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷5001－4　TEL 0877－48－2191
発行機関	香川県教育委員会
発行年月日	2007年3月31日

総ページ数	目次等	本文	図版	挿図枚数	写真枚数
164	19	137	8	310	276

CD－ROM	枚数	観察表	遺構配置図	遺構写真	遺物写真
	1	5	1	395	872

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町名	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしすえのりいせき 西末則遺跡	かがわけんあやうたぐんあやかわちょう 香川県綾歌郡綾川町 やまだしも　きた 山田下・北	37381		34° 13′ 35″	133° 56′ 15″	平13.10 ～ 平17.6	75,857	香川県農業試験場移転事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西末則遺跡	集落跡	弥生時代	自然河川 溝状 遺構 土坑	弥生土器 石器（石鏃等）	
		古代・中世	堀立柱建物跡 溝状遺構 土坑 柱穴跡 井戸跡 鍛冶遺構	土師器 土師質土器 須恵器 瓦質土器 陶器 瓦類 輸入陶磁器 石器 鉄製品 木製品	須恵器には硯を含む 木製品には井戸跡の側板・曲物を含む
		近世	堀立柱建物跡 柱穴跡 井戸跡	陶磁器	

CD－ROMについて

添付されているCD－ROMには以下の内容が収録されています。

●遺物観察表

1．土器・陶磁器観察表
2．丸瓦観察表
3．平瓦観察表
4．石器観察表
5．金属製品観察表

●遺構写真

1．Ⅰ地区遺構写真（平成15年度調査）
2．K地区遺構写真（平成16年度調査）
3．現地見学会等
4．モノクロ遺構写真

●遺物写真

1．柵列跡・堀立柱建物跡・柱穴跡出土遺物（スケール無）
2．同上（スケール有）
3．土坑・井戸跡出土遺物（スケール無）
4．同上（スケール有）
5．溝状遺構・自然河川・その他の遺構・包含層出土遺物（スケール無）
6．同上（スケール有）

※写真、図版のビューワーは、株式会社トリワークス（http://kuraemon.com/）の「蔵衛門2005 Professional」を使用した。

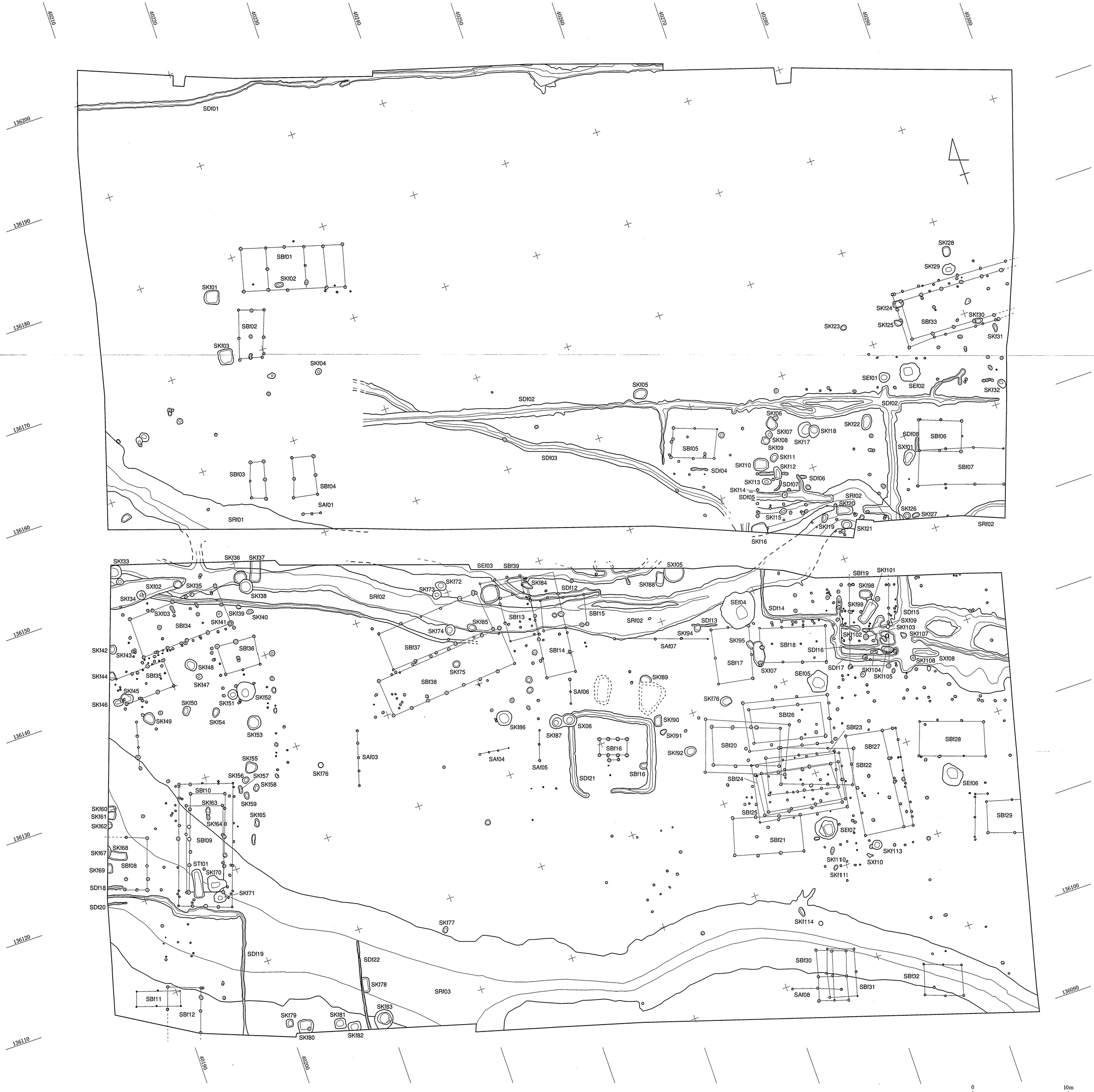
● f 地区遺構配置図

「zentaizu.pdf」というpafファイルを収録している。

香川県農業試験場移転事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第２冊

西末則遺跡Ⅱ

2007年３月31日発行
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷 5001－4
発行　香川県教育委員会
印刷　西尾総合印刷株式会社



付図　西末則遺跡ｆ地区遺構配置図（1/200）